鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（201）

県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書（3）

出水貝塚（いずみ）

（出水市中央町）

2020年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

巻頭図版　出水貝塚出土人骨（昭和28年）

序　　文

この報告書は文化庁の補助金を受け実施した県内遺跡発掘調査等事業のうち，本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴い，平成30年度から令和元年度にかけて実施した出水貝塚の整理作業の記録です。

故河口貞徳氏は，昭和20年代から半世紀以上の長きにわたり，鹿児島県本土はもとより南西諸島をはじめとする県内の島々各地の考古学的調査を行うと共に，鹿児島県考古学会会長や鹿児島県文化財保護審議委員として本県文化財の保護に尽力されました。河口氏が発掘・収蔵・保管された多くの資料は，平成24年12月に遺族の方々の御厚意により鹿児島県立埋蔵文化財センターへ一括寄贈されました。これらのうち学史的に著名で全国的に知られている遺跡に関係する資料について，当センターで改めて整理を行い全国に情報発信して活用を図ることを目的として，寄贈された資料の整理作業を計画的に進めながら，学術的な再評価を行っております。

今回報告する出水貝塚は縄文時代早期～後期の遺跡で，その存在や人骨・土器などの出土遺物が古くから学界に知られていた貝塚です。本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後になりますが，本報告書の刊行に当たり御協力をいただきました関係市町村教育委員会・各機関に厚くお礼を申し上げます。

令和２年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　前　迫　亮　一

報　告　書　抄　録

ふりがな	いずみ　かいづか
書名	出水貝塚
副書名	県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書（３）
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第201集
編集者名	松山初音・大保秀樹
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-48-5811
発行年月	西暦2020年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査起因
出水貝塚（いずみかいづか）	鹿児島県（かごしまけん）出水市（いずみし）中央町（ちゅうおうちょう）	46208	208-1	32°5’10”	130°20’44”	1953.12.20～1953.12.21	6	試掘調査
						1954.7.21～1954.8.6	100	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
出水貝塚	貝塚	縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代後期		押型文土器 人骨・並木式・阿高式 人骨・南福寺式・出水式・市来式・磨消縄文 剥片石器・石斧・磨石石製品 貝類・貝輪・骨製品	出水式土器の標式遺跡

遺跡の概要	出水貝塚は，鹿児島県出水市の出水扇状地端部に位置する，縄文時代早期から後期の遺跡である。出水市教育委員会の調査時には中世山城遺構も確認されている。 本貝塚は，1920年に初めて存在が認知され，1950年代に故河口貞徳氏を中心として試掘調査及び発掘調査が行われている。本貝塚が標式遺跡となる出水式土器は，縄文時代後期初頭に位置づけられている。貝層の上層から市来式土器・出水式土器等の縄文後期土器，下層から南福寺式土器・阿高式土器等の縄文中期土器，下層の黒色土層からは縄文早期の押型文土器が出土しており，縄文早期から後期土器の層位的な出土状況及び相対関係が把握できる重要な遺跡である。また，保存状態が良好な仰臥屈葬の人骨も出土している。河口氏の調査では阿高式を伴っていることから縄文中期、平成の調査では南福寺式土器を伴っていることから縄文後期初頭の埋葬人骨と考えられる。南部九州の縄文人の形質を明らかにするうえで貴重な資料である。

出水貝塚位置図（1 : 25,000）

例　言

1　本書は鹿児島県が文化庁の補助を受け，本県で「河口コレクション整理活用事業」と呼称する事業に伴う発掘調査報告書である。
2　出水貝塚は鹿児島県出水市中央町に所在する。
3　報告書作成（整理作業）は鹿児島県教育委員会が調査主体者となり，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，全章にわたって「埋文センター」という。）が担当し実施した。
4　本書での敬称は，河口貞徳氏も含め省略する。
5　出水貝塚の発掘調査は河口貞徳が発掘調査責任者となり，1953（昭和28）年から1954（昭和29）年の間に実施した。
6　整理作業において，新たな遺物注記は行っていない。
7　掲載遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，表，図版の番号は一致する。
8　挿図の縮尺は，挿図毎に示した。
9　出土遺物の実測・トレースは，各章の担当が埋文センターの作業員の協力を得て行った。
10　自然科学分析は、埋文センター南の縄文調査室の中村幸一郎が担当した。
11　出土遺物の写真撮影は，西園勝彦が行った。
12　本書の編集は，松山・大保が行った。
13　本書の執筆分担は，次のとおりである。

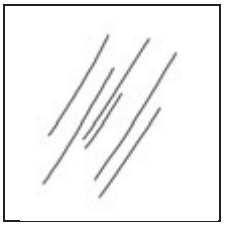
第Ⅰ章　……大保
第Ⅱ章　第１節……大保
　　第２節……松山
第Ⅲ章　第１節・第２節……大保
　　第３節……松山
第Ⅳ章　……中村幸一郎
第Ⅴ章　第１節……大保
　　第２節・第３節……松山

14　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示活用を図る予定である。
15　本書掲載の遺物の縮尺は，以下のとおりである。ただし，縮尺が異なる場合もあるので，各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。

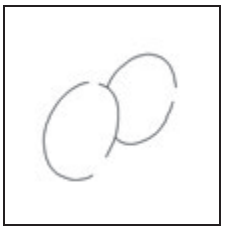
土　　器　　：１／３
石　　器（剥片、石核等）　：原寸
石　　器（石斧、磨・敲石等）：１／３
貝 製 品　　：１／２
垂飾品・骨角器　　：２／３

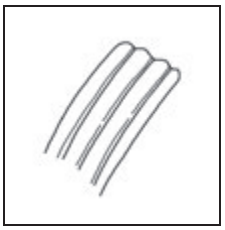
16　土器の色調は，日本標準土色帖に拠る。
17　抄録は，河口の調査成果に基づいて作成した。
18　出水市調査時に作成した図面や遺物等の資料の一部は，出水市教育委員会により提供していただいた。
19　遺物の実測図で用いた表現は以下のとおりである。

【土器等】

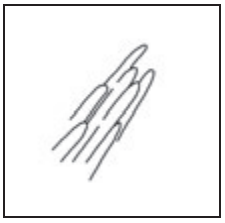
ナデ


強い指ナデ

指オサエ


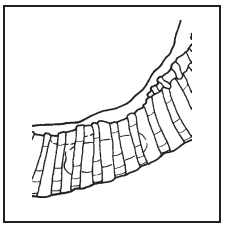
貝殻条痕


ケズリ

ミガキ


【石器・貝製品等】

敲打痕

磨面（貝）


本　文　目　次

巻頭図版
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次

第Ⅰ章　事業の経緯と経過 …… 1
　第１節　事業の経緯と内容 …… 1
　第２節　整理・報告書作成業務 …… 1
　第３節　再整理の方法及び報告書の構成 …… 2

第Ⅱ章　出水貝塚に関する調査・研究の経緯 …… 3
　第１節　出水貝塚の調査史 …… 3
　第２節　出水式土器研究史 …… 9

第Ⅲ章　出水貝塚に関する追加資料及び再検討 …… 15
　第１節　遺跡の位置と環境 …… 15
　第２節　出土人骨及び埋葬に関する再検討 …… 15
　第３節　遺物に関する追加資料及び再検討 …… 20
　第４節　遺物出土状況図 …… 61

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 74
　第１節　試料 …… 74
　第２節　観察・分析方法 …… 74
　第３節　結果 …… 74
　第４節　考察 …… 74

第Ⅴ章　総括 …… 76
　第１節　埋葬について …… 76
　第２節　土器について …… 78
　第３節　出水貝塚の再評価 …… 82

資料 …… 83

写真図版 …… 105

挿　図　目　次

第１図　出水貝塚トレンチ配置図①・・・・・・・・・・・5
第２図　出水貝塚トレンチ配置図②・・・・・・・・・・・6
第３図　トレンチ断面図①・・・・・・・・・・・・・・・・7
第４図　トレンチ断面図②・・・・・・・・・・・・・・・・8
第５図　出水貝塚出土人骨位置図・・・・・・・・・・・・17
第６図　1954年人骨出土状況写真・・・・・・・・・・・・18
第７図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第８図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第９図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第10図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第11図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第12図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第13図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第14図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第15図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
第16図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第17図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第18図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第19図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第20図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第21図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第22図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
第23図　『出水郷土誌』掲載土器・・・・・・・・・・・・・39
第24図　未報告分土器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第25図　未報告分土器②・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第26図　未報告分土器③・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第27図　未報告分土器④・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
第28図　未報告分土器⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
第29図　未報告分土器⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
第30図　未報告分土器⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第31図　未報告分土器⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
第32図　未報告分土器⑨・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第33図　未報告分土器⑩・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
第34図　未報告分土器⑪・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第35図　石器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第36図　石器②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第37図　石器③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第38図　石器④・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第39図　石製垂飾品及び転用模式図・・・・・・・・・・・58
第40図　貝製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第41図　骨角器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第42図　南西諸島産貝類写真・・・・・・・・・・・・・・・60
第43図　1954年調査時遺物出土状況図（Ⅰトレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第44図　1954年調査時遺物出土状況図（Ⅲトレンチ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第45図　縄文人骨出土遺跡位置図・・・・・・・・・・・・77

表　目　次

第１表　整理作業状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第２表　出水貝塚調査史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第３表　出水貝塚出土土器観察表①・・・・・・・・・・・64

第４表　出水貝塚出土土器観察表②・・・・・・・・・・・65

第５表　出水貝塚出土土器観察表③・・・・・・・・・・・66

第６表　出水貝塚出土土器観察表④・・・・・・・・・・・67

第７表　出水貝塚出土土器観察表⑤・・・・・・・・・・・68

第８表　出水貝塚出土土器観察表⑥・・・・・・・・・・・69

第９表　出水貝塚出土土器観察表⑦・・・・・・・・・・・70

第10表　出水貝塚出土土器観察表⑧・・・・・・・・・・・71

第11表　出水貝塚出土土器観察表⑨・・・・・・・・・・・72

第12表　出水貝塚出土石器・石製品観察表・・・・・・73

第13表　出水貝塚出土貝製品・骨角器観察表・・・・73

第14表　九州中南部における縄文時代の人骨出土遺跡と埋葬の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76

第15表　土器の型式別出土状況（河口1958より転載）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

第16表　トレンチ毎の取り上げ順と該当層（1954年調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

第17表　注記使用アルファベットとその定義（1954年調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80

資　料　目　次

資料１　河口調査時野帳①・・・・・・・・・・・・・・・・・83

資料２　河口調査時野帳②・・・・・・・・・・・・・・・・・84

資料３　河口調査時野帳③・・・・・・・・・・・・・・・・・85

資料４　河口調査時野帳④・・・・・・・・・・・・・・・・・86

資料５　河口調査時野帳⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・87

資料６　河口調査時野帳⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・88

資料７　河口調査時野帳⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・89

資料８　人骨検出状況記録野帳・・・・・・・・・・・・・90

資料９　1920年調査報告出水貝塚位置図・・・・・・・91

資料10　1920年調査報告トレンチ配置図・・・・・・・92

資料11　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

資料12　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

資料13　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

資料14　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

資料15　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

資料16　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑥・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98

資料17　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99

資料18　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100

資料19　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101

資料20　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

資料21　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

資料22　京都大学総合博物館蔵資料収納状況・資料調査風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

図　版　目　次

巻頭図版　出水貝塚出土人骨（昭和28年）

図版１　出水貝塚写真（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊より転載）・・・・・・・・・105
図版２　出水貝塚遠景・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
図版３　出水貝塚出土遺物①（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
図版４　出水貝塚出土遺物②（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図版５　出水貝塚出土遺物③（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
図版６　出水貝塚出土遺物④（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
図版７　出水貝塚出土遺物⑤（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
図版８　出水貝塚出土遺物⑥（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
図版９　出水貝塚出土遺物⑦（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
図版10　出水貝塚出土遺物⑧（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
図版11　出水貝塚出土遺物⑨（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
図版12　出水貝塚出土遺物⑩（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
図版13　出水貝塚出土遺物⑪（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
図版14　出水貝塚出土遺物⑫（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
図版15　出水貝塚出土遺物⑬（『鹿児島県文化財調査報告書』）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
図版16　出水貝塚出土遺物⑭（『出水郷土誌』）・・・120
図版17　出水貝塚出土遺物⑮（未報告分）・・・・・・121
図版18　出水貝塚出土遺物⑯（未報告分）・・・・・・122
図版19　出水貝塚出土遺物⑰（未報告分）・・・・・・123
図版20　出水貝塚出土遺物⑱（未報告分）・・・・・・124
図版21　出水貝塚出土遺物⑲（未報告分）・・・・・・125
図版22　出水貝塚出土遺物⑳（未報告分）・・・・・・126
図版23　出水貝塚出土遺物㉑（未報告分）・・・・・・127
図版24　出水貝塚出土遺物㉒（未報告分）・・・・・・128
図版25　出水貝塚出土遺物㉓（未報告分）・・・・・・129
図版26　出水貝塚出土遺物㉔（未報告分）・・・・・・130
図版27　出水貝塚出土遺物㉕（未報告分）・・・・・・131
図版28　出水貝塚出土遺物㉖（未報告分）・・・・・・132
図版29　出水貝塚出土遺物㉗（未報告分）・・・・・・133
図版30　出水貝塚作業風景・現場写真（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊より転載）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
図版31　出水貝塚作業風景①・・・・・・・・・・・・・・135
図版32　出水貝塚作業風景②・・・・・・・・・・・・・・136
図版33　出水貝塚作業風景③・・・・・・・・・・・・・・137
図版34　出水貝塚作業風景④・・・・・・・・・・・・・・138

第Ⅰ章　事業の経緯と経過

第１節　事業の経緯と内容

故河口貞徳は，昭和46年から平成23年まで長年にわたり鹿児島県考古学会の会長として本県考古学の発展に寄与，さらに，昭和28年から平成7年まで本県文化財保護審議会委員として本県文化財の保護に尽力された人物である。

河口は，本県の埋蔵文化財保護行政が整備される以前の昭和20年代から，県内に所在する遺跡の学術的調査や開発に伴う緊急調査を精力的に行ってきた。その資料は，本県の歴史を語る上で欠かせない貴重なものである。その一部は河口が保管・収蔵していた（以下，「河口コレクション」という。）が，逝去後の平成24年12月，御遺族から鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「埋文センター」という。）へ寄贈されることとなった。

河口コレクションが埋文センターに寄贈された後の作業内容は第１表に示すとおりである。まず，平成24年度から26年度にかけて緊急雇用創出事業臨時特例基金事業を活用し，河口コレクションとして寄贈された資料の受け入れ，収蔵された資料の整理や基礎データの作成，展示・公開を実施した。さらに，平成29年度以降に報告書刊行が予定がされている遺跡の整理作業の一部も併行して行った。

平成27年度は国庫補助事業「県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」を活用し，河口コレクションの台帳整理や関連文献の収集のほか，「かごしま遺跡フォーラム2015」を実施し，河口コレクションの一部成果を展示した。平成28年度から国庫補助事業「県内遺跡事前調査等事業」の中で「河口コレクション整理作業事業」と称して台帳等の基礎整理作業に加え，総合的な整理・報告がなされていない重要遺跡について将来的にわたって保存・活用を図るために，順次今日的視点で整理作業を行っている。平成29年度は，昭和30年代に発掘調査が行われた「山ノ口遺跡」の報告書を刊行した。平成30年度は河口コレクションの中から浜坂貝塚（鹿児島郡十島村）・宇宿貝塚（奄美市）・朝仁貝塚（奄美市）・嘉徳遺跡（大島郡瀬戸内町）・喜念貝塚（大島郡伊仙町）・面縄貝塚（大島郡伊仙町）・住吉貝塚（大島郡知名町）・中甫洞穴（大島郡知名町）の８遺跡の整理作業を行い，「吐噶喇・奄美の遺跡」という名称で報告書を刊行した。

そして，令和元年度は1953（昭和28）年と1954（昭和29）年に河口が調査に関わった「出水貝塚」の報告書を刊行することとなった。

第２節　整理・報告書作成業務

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，主に平成31年４月から令和２年３月にかけて埋文センターで行った。平成30年度は「吐噶喇・奄美の遺跡」の報告書作成作業と共に，本年度刊行する「出水貝塚」に関する基礎整理作業として，寄贈された資料と既報告分の資料との照合作業等を行った。令和元年度は遺物の再実測・トレース，未報告の現場図面のトレースや図版のレイアウト等の編集作業と同時に，今後刊行予定の遺跡の基礎整理作業を実施した。

整理・報告書作成業務に関する調査体制は，以下のとおりである。

平成30年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	髙田　浩
	調査課第二調査係長	宗岡　克英
調査担当	文化財主事	倉元　良文
	文化財研究員	松山　初音
事務担当	主査	新穂　秀貴
調査指導	鹿児島県考古学会	
	会長	本田　道輝
	国立大学法人鹿児島大学	
	埋蔵文化財調査センター	
	助教	新里　貴之
	文化庁文化財部記念物課	
	技官	森先　一貴

令和元年度調査体制（整理作業）

事業主体	鹿児島県	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	前迫　亮一
調査企画	調査課長	中村　和美
	次長兼総務課長	野間口　誠
	調査課第一調査係長	宗岡　克英
調査担当	文化財主事	大保　秀樹
	文化財研究員	松山　初音
事務担当	主事	新穂　秀貴
調査指導	鹿児島県考古学会	
	会長	本田　道輝
	同志社大学	
	教授	水ノ江和同
	文化庁文化財部文化財第二課	
	文化財調査官	藤井　幸司

報告書作成指導委員会　令和元年11月26日ほか４回
中村課長他６名
報告書作成検討委員会　令和元年11月27日
前迫所長他６名

第３節　再整理の方法及び報告書の構成

本報告書では出水貝塚の再報告を行うが，その包括的な再整理の方法及び報告書の構成に関して説明する。

まずは，本報告書で取り扱う現場図面等の発掘調査記録や発掘調査日誌等の所在確認と関係する報告書との内容確認，出土遺物の内容と報告書等で資料化されているか否かの確認を行った。その後，未報告の発掘調査記録や遺物の掲載・資料化を検討し，必要に応じて既報告の遺物も含めて掲載することとした。

各遺跡の出土遺物の抽出にあたっては，注記や遺物カード（荷札）の確認をしながら既報告の遺物実測図や掲載写真との照合，現場図面・写真との照合等を行った。遺物の実測等は埋文センターが管理している河口コレクションのみでなく，関係機関所蔵の出土品や資料も必要に応じて対象とした。なお，遺物への注記は行わず整理作業を行った。

本書では，遺跡に関する調査史や出土遺物等の研究史について概観し，調査当時の野帳や実測図及び資料化した遺物を掲載する。その上で，遺跡の特徴や今日的評価について述べる。図版は再撮影した遺物写真，当時の発掘調査の状況や雰囲気を伝える未報告の現場写真等を抽出して掲載する。

なお，河口の業績や調査歴等をまとめた「河口コレクションの概要」の詳細については，平成29年度に刊行した『山ノ口遺跡』（埋文センター2018）を参照頂きたい。本報告書では河口が関わった出水貝塚関係の発掘調査を主とするが，それ以外の調査についても必要に応じて取り扱う。

第１表　整理作業状況

種別			作業内容等	H24年度～H27年度				H28年度	H29年度	H30年度	令和元年度	備考
寄贈資料の受入作業			内容の確認と分類及び埋文センターへの搬入									終了（H24年12月寄贈。その後,数回に分けて搬入作業実施）
寄贈資料の受入作業			内容ごとの収蔵・保管									
寄贈資料	考古（調査）資料	遺物	水洗									脆弱な遺物が若干残る
寄贈資料	考古（調査）資料	遺物	注記・接合・復元									
寄贈資料	考古（調査）資料	遺物	実測図作成									
寄贈資料	考古（調査）資料	遺物	写真撮影	主要遺物のみ				報告書刊行遺跡の遺物撮影				
寄贈資料	考古（調査）資料	図面類	発掘調査記録（現場図面等）の点検・修復									基礎作業終了
寄贈資料	考古（調査）資料	図面類	発掘調査日誌類（調査の基礎情報）の整理									
寄贈資料	考古（調査）資料	写真	クリーニング・修復									写真のデジタル化作業中
寄贈資料	考古（調査）資料	写真	遺跡ごとのファイリング									
寄贈資料	考古（調査）資料	写真	公開用写真のデータベース化									
寄贈資料	考古（調査）資料	写真	フィルム写真のデジタル化									
寄贈資料	考古（調査）資料	書籍	分類・選別									
寄贈資料	考古（調査）資料	書籍	河口文庫（重要書籍）設置									図書室に「河口文庫」コーナー設置
寄贈資料	考古（調査）資料	書籍	考古関係論文（抜刷）資料の整理									
寄贈資料	考古（調査）資料	地形図類	分類・修復・リスト作成									寄贈地形図類の整理ほぼ終了
発掘調査報告（原稿）作成									山ノ口遺跡	吐噶喇・奄美の遺跡	本報告書	平成29年度から報告書刊行
公開活用			展示公開（縄文の森企画展・外部への貸出等）									講演会・シンポ等の開催も含む
公開活用			重要遺物のレプリカ作成									重要遺物の保護
事業名等			緊急雇用:埋蔵文化財活用整理等事業									
事業名等			緊急雇用:重要遺物等選択・公開事業									
事業名等			緊急雇用:重要遺跡調査整理事業									
事業名等			国庫補助:県内埋蔵文化財地域の特色ある埋蔵文化財活用事業									
事業名等			国庫補助:県内遺跡事前調査等事業									

第Ⅱ章　出水貝塚に関する調査・研究の経緯

第１節　出水貝塚の調査史

出水貝塚ではこれまで６回の発掘調査が行われている（第２表）。以下，河口以外の行った調査も含め，これまで行われた調査毎の概要について記述する。

第１図は出水貝塚のトレンチ配置図であり，左は河口の1953年・1954年調査時，右は1996年～1998年の出水市調査時のものである。第２図は河口調査時トレンチと，出水市調査時の人骨が検出された22トレンチを合わせて図化したものである。

１　1920（大正９）年７月　山崎五十麿

（１）調査の概要

この当時，鹿児島県内では柊原貝塚（現垂水市）以外の貝塚は知られておらず，山崎五十麿（鹿児島県史蹟調査委員）は報告書で「県内希有の大貝塚を発見したるを似て之を報告せむとす」「本貝塚を出水貝塚と命名し学会に発表せん」と高揚感が伝わる様な書きぶりである。貝塚の規模については東西約400m，南北約240m，面積約２町歩とし，相当に広い範囲を遺跡として想定していたと考えられる。

調査は遺跡の東北端に２か所（約１尺四方）と中央部分に１か所（約２尺四方）のトレンチを設定し，遺物の有無の確認を主な目的として進められた。ただし，調査箇所については，トレンチ位置図等がないことから不明である。

（２）層序

報告書には地下２尺の所に貝層があるが，場所によっては６～７尺に及び，貝層の厚さは２尺～３尺余りとしている。

（３）調査の成果

遺構は検出されていない。

土器は小片が多数出土し，そのほとんどが有紋で，無紋は少量でアイヌ式土器とした。

石器は石斧（磨製・打製），石鎚，凹石，石錘，石鏃，黒曜石片が出土している。

その他として，骨針や骨銛の破片，獣骨類が確認されている。

２　1920（大正９）年８月　山崎五十麿

（１）調査の概要

1920（大正９）年７月に実施した調査の成果をもって，喜田貞吉・濱田耕作・長谷部言人に対して調査の要請を行うが，都合により実現しなかった。さらに，前回の調査が短時間であったことから，山崎は約１か月後の８月下旬に再度調査を行うこととなる。

調査はＡ（東西６尺，南北５尺）・Ｂ（東西２尺，南北４尺）・Ｃ（東西９尺，南北６尺）地点の３か所を選定し進めるが，その位置については報告書に示してある。しかし，当時と比較して地形や道路事情も大きく変化していることから，その場所を特定できない。ただ，河口は「出水貝塚あれこれ」（河口1986）で３地点を地図上に示しているが，その出典等については不明である。

（２）層序

Ａ地点の層序については，次の様な記述がある。「土壌１尺９寸にして貝層に達し，約５寸の間は貝殻及腐食質壌土と混入し，以下１尺８寸は貝殻のみにして，５寸は貝殻中に砂礫を混在し，２尺８寸にして貝層盡く…」

Ａ・Ｂ・Ｃ地点とも貝層迄の調査であった。

（３）調査の成果

遺構検出の記録はない。

遺物は貝層の上部に確認され，下部にいくに従って希薄となり，砂礫の混在する貝層最下部では絶無となる。

土器は多量に出土するが，小片が多く，「アイヌ」式

第２表　出水貝塚調査史

調査期間等	調査者（主体者）	調査の種類	報告書等
1920（大正９）年７月下旬	山崎五十麿	試掘	山崎1920
1920（大正９）年８月23日	山崎五十麿	試掘	山崎1921
1920（大正９）年12月20日～25日	長谷部言人 濱田耕作・島田貞彦	発掘調査	濱田他1921 長谷部1921
1953（昭和28）年12月20・21日	河口貞徳	試掘	河口1963
1954（昭和29）年７月21日～８月６日	出水市（企画） 山内清男・河口貞徳	発掘調査	河口1958a 河口1958b
1996（平成８）年６月24日～７月23日	出水市教育委員会	範囲確認	出水市 教育委員会 2000
1997（平成９）年６月９日～７月17日			
1998（平成10）年９月16日～10月13日			

土器で弥生式土器の混入はないとしている。

また，石錘を含む石器や黒曜石片，動物の歯牙，魚骨等も確認されている。

さらに，Ａ・Ｃ地点から人骨及び人骨片が出土し，切断されたものが数十点あったことから，「貝塚を構成したる民族は食人人種なることなり」とした。

３　1920（大正９）年12月　濱田耕作他

（１）調査の概要

山崎五十麿の再度の要請に応え，長谷部言人（東北帝國大学教授医学博士医学士）は発掘調査を企画し，濱田耕作（京都帝國大学教授文学博士文学士）・島田貞彦（京都帝國大学助手）とともに調査を実施した（以下，この調査に限り1920年調査という）。この調査に係る経費については，長谷部言人が全てを負担した。

当時の遺跡位置図とトレンチ配置図はそれぞれ資料９，資料10を参照していただきたい。調査は尾上邸の背後にある菜園を調査地点とし，約50坪を12の区画に分け，６日間行われた。なお，12区画以外に貝層の有無を確認するため，貝塚及び周辺で26か所で試掘を行ったとしている（濱田・島田1921）。

（２）層序

表土層が７寸～１尺３寸，貝層が９寸～１尺７寸，貝層の下に自然の粘土層と続く。この粘土層以下には何等遺物なしとある。

（３）調査の成果

調査の結果，貝層に層堆積が見られず，ほぼ一時期の貝塚とされた。遺構が検出された記録はない。

土器は直線式模様と曲線式模様の第一類土器と縄席文の第二類土器が確認された。

石器は石斧・石鑿・石錘・敲石等が出土した。その他，骨角器６点，貝殻製品３点が出土している。

Ⅱ区とⅧ区から人骨片，Ⅳ区から馬歯が出土した。報告書では長谷部が「出水貝塚の貝殻獣骨及び人骨」を執筆し，その序言の中で，山崎の1920年８月の調査において出土した人骨４片と馬歯（山崎1921の「動物の歯牙」と思われる）に関する分析も行っている。山崎の調査及び当該調査の馬歯は貝層からの発見で，「石器時代に馬の棲息せるを確認せり」（長谷部1921）と述べている。

４　1953（昭和28）年　河口貞徳他

（１）調査の概要

調査の契機について「出水貝塚あれこれ」（河口1986）には，「出水貝塚出土の馬歯は馬の研究をしていた林田重幸の注意をひいた」とある。この時の調査についての詳細な報告はなされていないが，前述の日本考古学年報と鹿児島考古及び埋文センターが保管している河口コレクションにある河口の記した野帳（資料１上段，資料８上段）をもとに調査の概略を記述する。なお，河口の記した野帳には２ページ分の出水貝塚に関する調査記録が残り，これは，現場で書き留めたものと考えられる。さらに，翌年の出水貝塚発掘調査当時に書き留めた野帳にも1953年の調査に関する記述があった。調査は12月20日～21日に行われたが，直前の11月30日～12月6日の間に春日町遺跡の発掘調査を行っている。

調査では，１本のトレンチを母屋に沿って設定し，その位置が「出水貝塚平面図」に示してある（河口1958a）。

しかし，河口の記した野帳（28.12.20付）には，下記の通り土層に関する記述が２つある（資料１上段）。

記述１

表層	20　黒土
貝層Ⅰ	20－50㎝　（混土）
	土器多数　カキ多し
貝層Ⅱ	二枚貝　川ニナ？
貝層Ⅲ	65－75㎝迄
貝層Ⅳ	75－　　㎝

記述２

Ｂトレンチ
表層
混土貝層
貝層
赤土層・・・・人骨

記述２には「Ｂトレンチ」と明示してあることから，記述１はＡトレンチのことと推測できる。人骨が確認されたＢトレンチが「出水貝塚」（河口1958a）に示してあるトレンチと考えられる。埋文センター保管分の1953年度調査分の遺物カードに「ＩＡ」「ＩＢ」と２パターンの記述があるものが確認できたため，ＡトレンチとＢトレンチが存在したことは間違いない。つまり，２本のトレンチを設定したが何らかの理由で１本のトレンチの成果しか報告されなかったか，隣接して設定した２つのトレンチを繋げた可能性が考えられる。

（２）層序

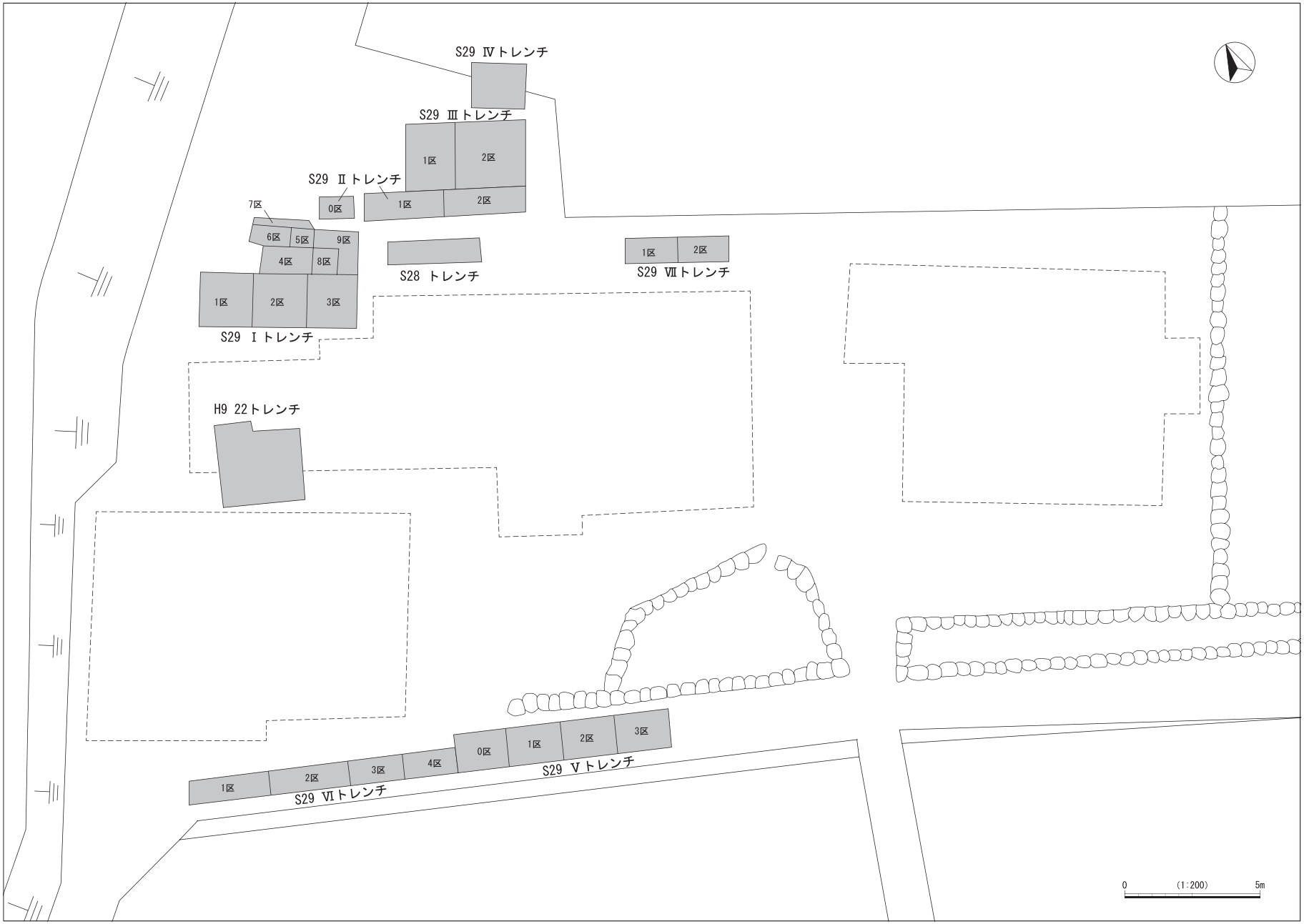
『日本考古学年報』６（河口1963）では「表土はきわめて薄く，直ちに貝層となり，約50㎝，貝層下は赤土層となっている」とある。「出水貝塚あれこれ」（河口1986）では「貝層下のアカホヤ層・・・」とある。先の記述２では表層下は混土貝層，貝層，赤土層となっている。いずれにせよ表層は薄く，貝層（混土貝層），赤土層（アカホヤ層）という層序である。ただ，野帳（資料１上段右）のＢトレンチ断面略図には，赤土層の上部は黒味を帯びるとの記載がある。

（３）調査の成果

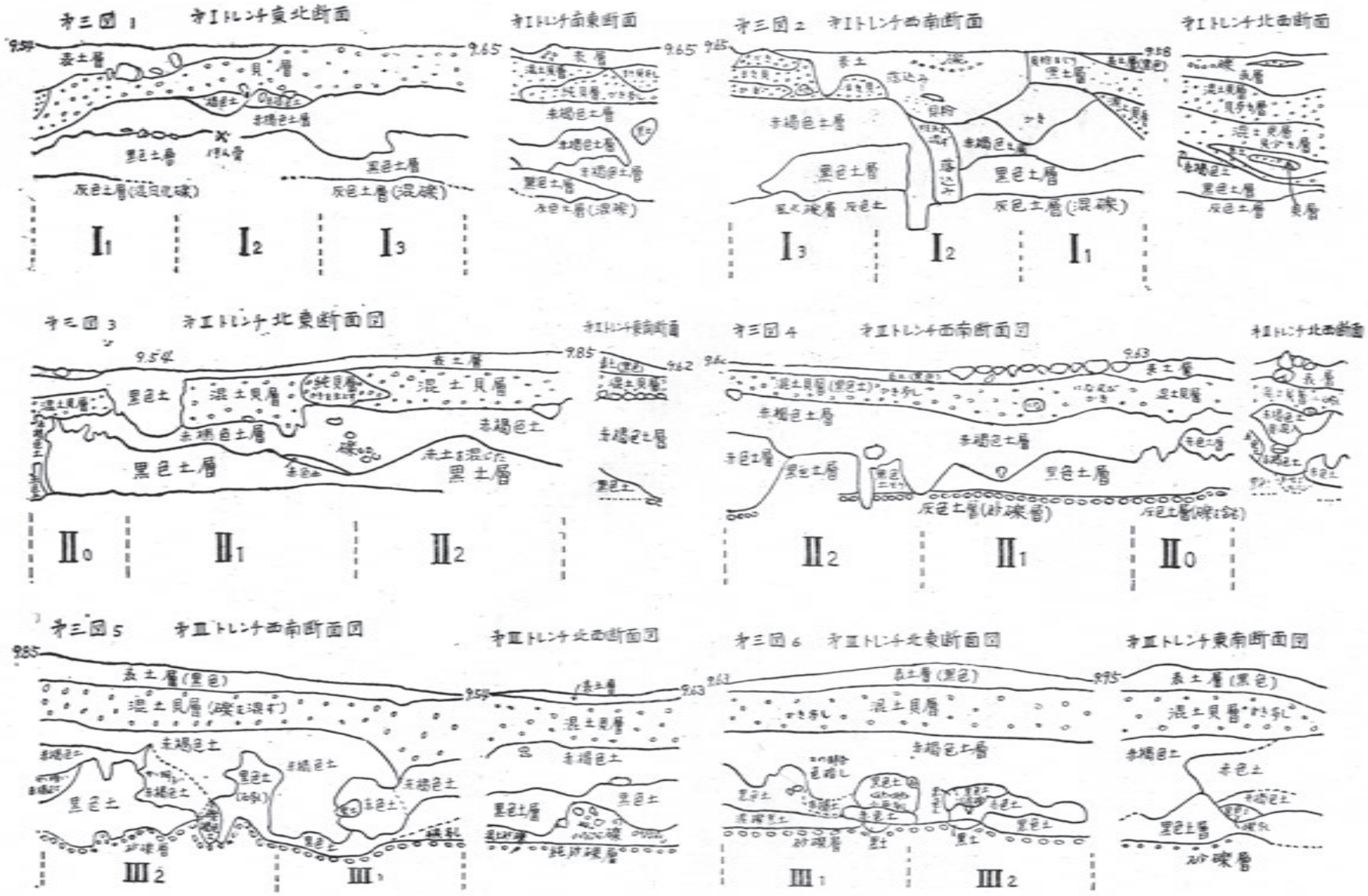
『日本考古学年報』６（河口1963）には次のように記載してある。貝層下の赤土を彫り込んで埋葬された人骨が１体検出された。人骨の両側には４個の礫が配してあった。時期は阿高式に属するとした。

遺物は多量の阿高式土器，赤土層上部に少量の並木式

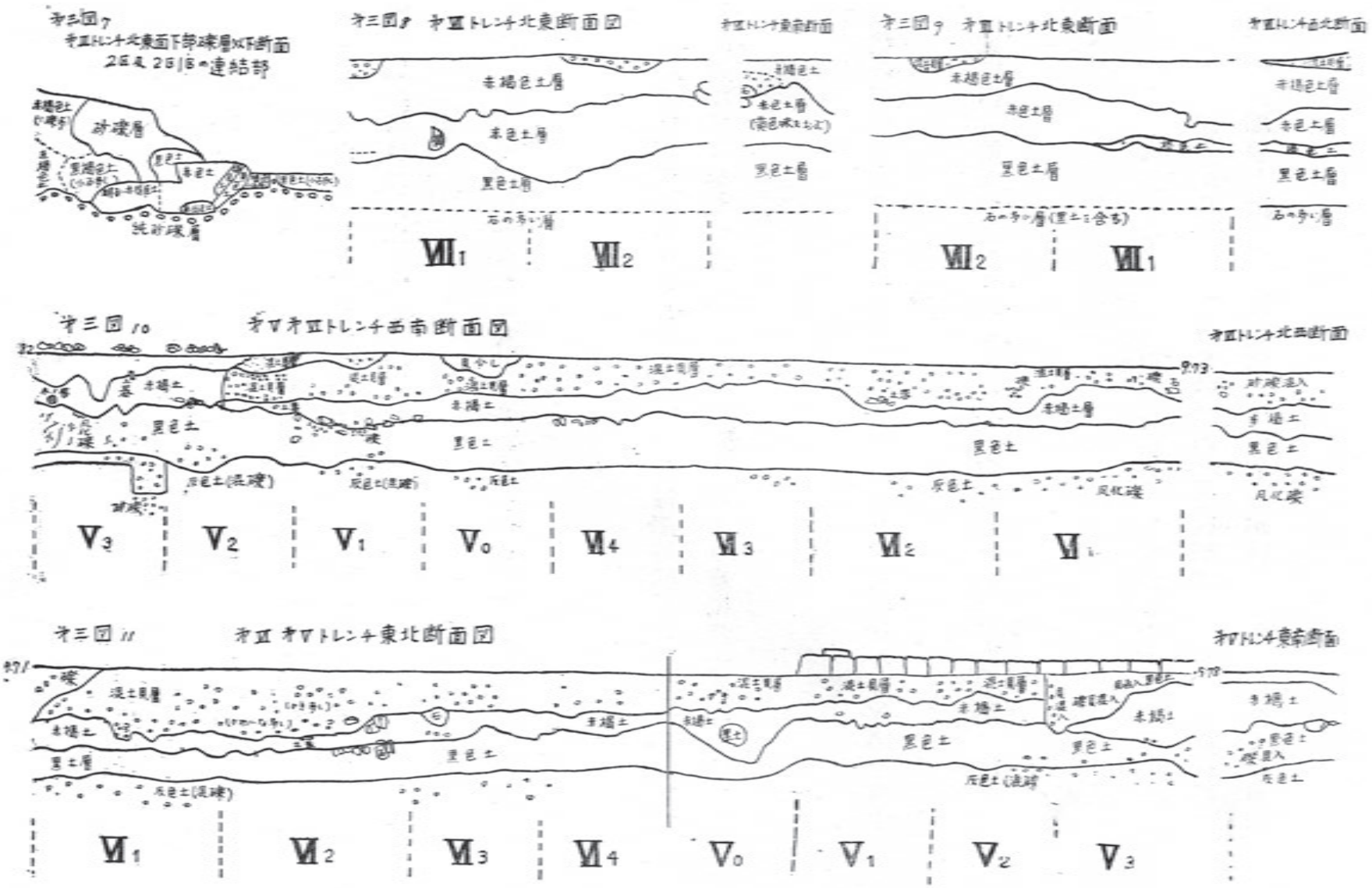
第１図　出水貝塚トレンチ配置図①
（左：河口1986より転載　右：出水市教育委員会2000より転載）



第２図　出水貝塚トレンチ配置図②
（河口1958a，出水市教育委員会2000より作成）



第３図　トレンチ断面図①（河口1958a より転載）



第４図　トレンチ断面図②（河口1958a より転載）

土器が出土した。河口の記した野帳には「押捺文」も出土した記載も残る。

５　1954（昭和29）年　山内清男　河口貞徳他

（１）調査の概要

前年，河口が調査を行った後，長谷部言人が出水貝塚を訪れ再調査を勧めたことから，出水市が主体となり調査が計画された。調査は山内清男（東京大学）の指導の下，河口によって進められた。この時の調査経過が河口の記した野帳に残っており，その一部を調査の経過として掲載した（資料１下段～資料７）。

調査は民家の北側と南側に大きく４地点に７つのトレンチを設定し，必要に応じて拡張しながら進められた。調査面積は，最終的に100㎡（河口1986）であった。

（２）層序（第３図・第４図）

基本的に表層・貝層・アカホヤ（２次）・黒色土・砂礫層となる。

（３）調査の経過

発掘調査の経過や当時の状況は，河口の野帳に詳細に記されている（資料１下段～資料７，資料８下段）。1954年の調査は，玉竜高校生とともに７月21日から８月６日までの15日間にわたり実施された。

（４）調査の成果

土器は，押型文土器・並木式土器・阿高式土器・南福寺式土器・出水式土器・市来式土器等が出土した。河口は各型式の土器と出土層の関係を表にまとめ報告書に示した。

石器は出土量が少なく，石斧破片とたたき石のみで，表採品も少ない。その他，貝輪・骨製品・玉類似の遺物があるが，出土量は少ない。

人骨は４体検出された。掘り込みをもって埋葬されたものが２体あった。仰臥屈葬が２体，仰臥伸葬１体，もう１体は残存状況が悪く不明であった。また，人骨の周囲もしくは上部に大きめの礫が配置しているという共通点がある。

河口は下層から押型文が出土したこと，縄文時代中期の人骨を検出したことを最大の成果としている。

６　1996（平成８）～1998（平成10）年　出水市教育委員会

（１）調査の概要

九州の貝塚研究の上で貴重な出水貝塚の保護対策の資料とするため，出水市教育委員会は貝塚及び遺跡の範囲確認等を目的とした重要遺跡確認発掘調査事業を計画し，国及び県の助成を得て1996～1998年の間，確認調査を実施した。

調査は，過去に調査が実施された箇所を中心に35か所にトレンチを設定して進めた。

（２）層序

報告書には基本層序が示されていないことから，比較的安定した堆積を示していると考えられる４トレンチの層序を記す。

表土－混土貝層－アカホヤ二次－黒灰色砂質土層－灰黒褐色砂質土層

（３）調査の成果

調査の結果，以下の遺構・遺物が確認された。

・遺構

集石遺構４基：縄文早期３，縄文中期１
埋葬人骨１体：縄文中期末
石錘デポ１
山城遺構：敷石，石列，土塁

・土器

縄文早期・中期・後期
押型文土器，手向山式土器，阿高式土器，南福寺式土器，出水式土器
中世
土師器，須恵器，カムィヤキ

・石器

石錘，磨石等

・その他

貝類，獣骨，食物残滓等

また，以下の事項について明らかになった。

①貝塚・埋葬地・遺跡（縄文早期・中世）の範囲
②縄文時代中期末から後期前葉の台地縁辺に形成された貝塚であり，住居跡は中世山城の造成で削平された可能性が高い。
③様々な押型文土器が出土しており，時期差がある。
④南福寺式土器から出水式土器への流れを層位的に確認した。また，出水式土器をａ～ｄの４分類し，ａ類がｂ類とｃ類に２分した可能性を示した。
⑤ウマの歯は中世に比定することが妥当である。
⑥マガキのブロック，マガキと別種の貝のブロックが循環的に堆積している状況から季節性との関連を指摘した。

第２節　出水式土器研究史

出水式土器は当貝塚を標式遺跡とする土器型式であり，縄文時代後期前葉に位置づけられている。南福寺式も含め「中期阿高式系」の伝統を継承する土器として，「後期阿高式系」と総称される（水ノ江1993）。

１　1920年代

出水貝塚が学界に初めて発表されたのは1920（大正９）年の『考古学雑誌』で，同年７月に行われた山崎五十麿の出水貝塚発掘調査結果の報告であった（山崎1920）。石器・土器（「アイヌ」式土器）・骨器・貝類の報告，垂水貝塚（柊原貝塚）との貝層の堆積状況・貝類の比較をおこなっている。翌年の1921（大正10）年，山崎は再び『考古学雑誌』にて出水貝塚の発掘調査結果を報告したが，ここでは主に「アイヌ」式土器と人骨の報

告及び早急な調査の必要性を説いた（山崎1921）。山崎の要望に応えた濱田耕作・島田貞彦は，同年『京都帝國大學文學部考古學研究所報告』にて発掘調査成果を報告しており，土器・石器・骨製品について報告した（濱田・島田1921）。このとき，土器を一類（「直線式模様」・「曲線的模様」），二類（「縄席紋を有する一類」）に分類している。「大多数は黒褐色粗製の直線式模様を附せるもの」とし，類似した模様の土器が轟貝塚・阿高貝塚・琉球荻堂貝塚で出土していることを指摘した。また，曲線式模様が直線式模様に先行するとし，文様の簡略化という変遷を提示した。

２　1930年～1940年代

1930年代初頭に，山崎五十麿，大山柏・小原一夫により徳之島伊仙町に所在する面縄貝塚の出土土器が出水貝塚出土土器に類似すると指摘されている（山崎1930，大山・小原1933）。1921年の島田・濱田による指摘に引き続き，南西諸島と出水貝塚出土土器との関連性を述べた事例である。

1936（昭和11）年，寺師見國が伊佐郡の縄文土器について，阿高式を中心とした編年及び土器型式の相違を記述している（寺師1936）。文様が曲線から直線へ移行する可能性等，阿高式の文様の時間的変化を検討している。「出水貝塚の阿高式土器は，曲線的文様よりも，斜平行線，直線模様の所謂阿高式下期の紋様が多く，…」と述べており，出水貝塚出土土器を阿高式土器の系統として捉えている。また，三森定男は阿高式土器について「（太形凹文が）細くなつたものは薩摩出水貝塚出土のものに代表せられる」としているほか，曲線文様が直線文様に先行する考えも示す（三森1938）。寺師・三森による出水貝塚出土土器についての指摘は，出水式土器の定義に繋がるものである。

1939（昭和14）年，木村幹夫により初めて「出水式土器」の名称が使用される。鹿児島県における縄文式土器の遺跡分布とその遺物を表に示し，出水式も含めて前期～後期の土器編年表を作成している。出水貝塚について「基調として出水式を出し，次いで阿高式市来式等を伴出し，出水平野が肥後文化圏に属すると仝時に南薩とも深い関係のあつたことを示してゐる」と述べている。また，出水式土器・市来式土器を阿高式土器からの系譜とみて編年を行い，出水式土器を中期に位置づけている（木村1939）。同年，寺師が南福寺貝塚の出土土器を第一類～第三類に分類している。「阿高式の太形凹線紋土器，及び之に類する此の系統の物」である第一類土器をさらに４つに細分し，その中に「直線式太形凹線紋土器（出水式）」を設定している。直線式より曲線式，胴部まで文様を施す物より口縁部のみに施す物が古いと述べているほか，阿高式，出水式，市来式，南福寺式を同一系統の土器としている（寺師1939）。また，小林久雄も九州の縄文土器について編年を行っており，出水貝塚出土土器が南福寺式土器と密接な関係があること，両型式ともに阿高式に後続することを主張している（小林1939）。ただし，寺師と小林がそれぞれの論文で使用している「南福寺式」は異なるものである。寺師は，模様や口縁の文様帯等は市来式土器と共通しているが口縁が四方に突出せず平坦なものを区別して「南福寺式」と仮称している一方，小林は「阿高式より推移した直線的又はＳ字狀文に固定せられたる土器の一群」を南福寺式とし，寺師の「南福寺式」は市来式土器として扱っている。のちに，寺師自身も市来式系統の中で南福寺式を捉え，南福寺式を「市来式（B）」としている（寺師1954）。

これらの研究を踏まえ，寺師は『鹿児島縣下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』で九州の縄文土器を22分類している。阿高式土器の項で従来の「阿高式」の中で本来の「阿高式」と「出水式」の二つに区別されることを主張したほか，出水式土器の項では阿高式土器との違いを列記している（以下抜粋）。

一．阿高式は頸部も胴部も大体に粘土の厚さは同様であるものが多いが，出水式は頸部より口縁部にかけて粘土を厚くした物が多い。

二．阿高式の文様は指で押したやうな太形の凹文で，曲線的の圖文が主であるが，出水式は凹文の太さが狭くなつて篦で描いたやうな，直線的の圖様が主である。

三．阿高式では文様を頸部に限局した物もあるが，主として頸部より胴部にかけて描いた物が多いのに對し，出水式では頸部を文様帯として，こゝに主として，直線文様を描いて居る。

四．底部も阿高式では平底が主であるが，出水式では上げ底の物もある。

五．口縁の鋸歯状の凹凸と，四ヶ所の口縁突起は，兩式とも存するが，出水式では突起のある物が多い。

これらのことから，阿高式が出水式の祖型的性質を有していることを述べた上で，阿高式全てが出水式に変化したのではなく，阿高式がある時期に出水式を一分派したと考えることを示した（寺師1943）。

３　1950年～1960年代

1954（昭和29）年，寺師は鹿児島県考古学研究会で「南九州の縄文土器」という題目の論文を発表し，南九州の縄文土器研究の入門書として高い評価を受けた。この中で，南九州の縄文土器を14型式に分け説明している。出水式土器について「頸部に平たい幅広い粘土を以ってめぐらし，頸部を厚くして，この頸部に平行線，斜線をめぐらし，一部に結び目を表したような点線，垂直平行線，曲線を附し，或る場合にはこれが二個或は四個の突起となっている。」と述べている。寺師は，前述した1943年の報告では阿高式土器の系譜で出水式土器を説明していたが，この論文では市来式・南福寺式・出水式を同一文

化系のものと捉え，市来式を市来式（A），南福寺式を市来式（B），出水式を市来式（C）とする考えを示している（寺師1954）。

寺師の考え方を踏襲し，賀川光夫は市来式土器・南福寺式土器・出水式土器を一括してそれぞれ市来A・B・C式土器とする考えを示した。一括の理由として「市来A式土器を基調として微細な変化をなしながら南福寺－出水と移行している点，施文工具に貝殻縁を主とする点，さらにこれが形の上から黒川（鹿児島県）式，東昌寺（鹿児島県）式土器に自然に移行する一連の系統が存することなどである」としている。このとき賀川の編年は市来A（市来）式→市来B（南福寺）式→市来C（出水）式であり，いずれも後期に位置づけている（賀川1956）。

寺師・賀川の主張に対し河口は，両者が設定した市来式Cについて「出水式として市来式より分離して独立の一形式と見るべきものと思う」と述べた。両型式が独立する根拠として「出水式は貝殻条痕を有していないが，市来式にはそれが，盛行しており，出水貝塚においては両者の移行形式と見られるものも見あたらない」ことを挙げた。また，市来式を中心に伴出土器，層位と型式等を検討したうえで九州の縄文土器編年を行い，南福寺式までを中期に，出水式土器を後期初頭に位置づけている（河口1957）。

1953（昭和28）年と1954（昭和29）年には河口による出水貝塚の発掘調査が行われ，その調査結果が報告されている（河口1958a・1958b・1963）。詳しくは調査史を参照していただきたいが，特に1954年の調査により，押型文土器が最下層の黒色土層から出土し，その上部の赤褐色土から並木式・阿高式，赤褐色土とその上部の貝層の境界に南福寺式，貝層中に出水式・市来式が出土するという，縄文中・後期土器の層位的な上下関係が明らかになったとした。河口は出水式土器について，「平縁で直口の胴部の稍々張った鉢型土器で，底部に上げ底があるようである。上げ底の場合底部に斜線な等を施し，又すかしを有するものもある。口縁部の文様帯は稍々肥厚し，この部分に口唇部に平行な沈線をめぐらし，之を縦に並ぶ点又はS字状の線で区劃するもの，文様帯に点を連続して施すもの，文様帯下に斜線を付けたものなどがあるが，一般に文様が細線となり直線を利用しているのが特徴である。」と定義している（河口1958）。

河口の調査も踏まえ，賀川は『日本の考古学』の「九州東南部」の項で縄文早期～晩期土器について再び編年を行っている（賀川1965）。出水貝塚出土土器について「阿高式土器の凹線文を口の部分に施文した土器が多量に出土」しているとし，「出水の凹線文－指宿の細線文に移行する」と述べており，これまで論じられていた出水式土器の細線化した文様とはやや異なる捉え方をしている。指宿式・綾式土器につながる要素が多いことから，出水式を後期初頭に編年している。同書の「九州西北部」の項を乙益が執筆しており，後期の項で出水式土器を紹介している。「その源流は南福寺式土器を介して阿高式土器にもとめられ，後裔は市来式におよぶ」とし，有明・八代海沿岸に顕著に分布することや人吉盆地分布の出水式は単独の発達（逆S字状の貼付文，底部脚台にすかし彫りや渦巻文，貝圧文などを描く）が認められるとした。また，南福寺式までを中期に，出水式土器からを後期に位置づけ，阿高式→南福寺式→出水式の変遷を示した（乙益1965）。乙益はその後，前川威洋とともに九州の縄文後期土器の型式ごとの説明や後期の文化・生活について土器以外の遺物や墓制に触れながら論じている。そのなかで土器を鐘崎式系・貝殻文系・阿高式系・西平式系・黒色磨研土器に分類し，阿高式系のなかに出水式土器を位置づけ以下のように述べている。

・南福寺式土器の退化形式
・器形文様ともに南福寺式を踏襲し，口縁部を粘土帯の貼付手法によって突帯状に肥厚させたもの
・南福寺式に比べ文様が細く，直線化したものが多い
・土器底部に鯨の脊椎骨をスタンプする阿高式特有な土器製作技法が出水式まで踏襲される
・武貝塚，春日町遺跡，市来貝塚で指宿式土器に共伴する

また，御手洗A式土器が出水式土器と系譜関係があることも述べている（乙益・前川1969）。

4　1970年～1980年代

前川威洋は，河口の報告（1958　鹿児島県文化財調査報告）に基づき，出水貝塚の調査で並木式→阿高式→南福寺式→出水式→市来式の編年が確立されたことを記述している。また，九州の後期土器の編年及び土器ごとの分布圏を示し土器の地域的・時間的変遷を説明し，その中で出水式は阿高式・南福寺式と分布圏が変わらないことを述べた（前川1979）。

また，当該期には田中良之により阿高式系土器の精力的な研究が行われた（田中1979・1982・1988）。1982年の論文では，後期阿高式系土器を口縁形態・口唇部文様・文様帯・単位文様で分類し編年を行った。また，磨消縄文土器の変遷や両系統の複合状況等から，土器様式の構造や伝播のプロセスをあきらかにしようとした。出水式土器について，南福寺式における凹線文が沈線文へと変化し新出の突帯文土器が一定量を占めること，口縁帯下施文・内面施文のタイプが増加すること，南福寺式と同様もしくは南に後退した分布圏であることなどを述べた。新出の突帯文土器は有明海沿岸，口縁帯下施文のタイプは熊本以南とりわけ南西九州に多く分布しており，出水式期前後のコミュニケーションが文化圏全体を貫徹していなかった可能性を指摘した（田中1982）。

また，高宮廣衛は沖縄県室川貝塚で出土した出水系統の土器を紹介しており，荻堂式期に出水式系土器が移入され，その受容形体の土器であるとし，九州と南島との関係を考える上での新たな追加資料とした（高宮1978）。

５　1990年代

当該期初めに前迫亮一により出水式土器の研究史が詳細に整理された（前迫1990a・1990b・1992）。研究の流れを４期に分け，第Ⅲ期（1950～60年代）までが報告されている。

1990（平成２）年に長崎県多良見町の伊木力遺跡の報告書が刊行され，その中で川崎保・西脇対名夫が伊木力遺跡出土土器の分類を行った。川崎は伊木力遺跡の土器の位置づけを行う上で中期・後期の阿高式系土器の問題点の指摘及び編年案を提示した。「後期阿高式系土器」を「中期の阿高式系の伝統を継承し，磨消縄文系土器とは異なった原理のもとで作られた土器」と定義し，南福寺式・坂の下式・出水式の問題点を挙げた。出水式土器について，南福寺式も含めた型式設定の曖昧さから呼称や定義に混乱が生じていること，出水貝塚出土資料の検討が不十分であることを挙げている。その上で，京都大学所蔵の有喜貝塚・出水貝塚の出土土器をもとに後期阿高式系土器の編年案を提示し，出水式土器を

第１群土器：南福寺２式に比べやや幅広の口縁部文様帯，内面に稜を有する。４単位（もしくは２単位か）の単位文様が横位に展開する沈線を区切っている。

第２群土器：口縁部文様帯に斜位または縦位の沈線を施しているもの。

第３群土器：単位文様間を縦位の沈線でいくつかに区切り，さらにその間を斜位と横位の沈線で充填している。

第４群土器：口縁部直下に肥厚した幅狭の文様帯を有し文様は第１群と類似する。頸部に斜位の沈線が施されるものもある。

に分類した。出水式土器を一括する上で「施文具が南福寺式とは違い，箆もしくは半截竹管状施文具によって幅狭の沈線が施されている。器形でも屈曲したりわずかに肥厚したりするものもあるが，南福寺２式の肥厚した口縁部文様帯とはかなり異なっている」という根拠を挙げている。また，出水式を阿高式系土器の範疇に入れることも問題ないとしているが，文様の中に南福寺式に祖源を求められないものがあるとし，「出水式土器のすべての要素が阿高式や南福寺式土器の伝統を引くものとして片づけることはできない」「阿高式系土器の延長上にあるものではなく，磨消縄文系土器の影響を考えなくてはならないのかもしれない」と述べた。加えて出水式が福田ＫⅡ式土器に並行することも述べている（川崎1990）。同報告書で，西脇は主に御手洗Ａ式・御手洗Ｃ式，鐘崎式（縁帯文土器）に焦点を当て，それぞれの系譜関係や他型式との併行関係などを考察している。その中で，御手洗Ａ式・御手洗Ｃ式の系譜関係を論じるうえで出水式の浮線に注目している。刻目浮線は出水式にみられる新しい要素であること，出水式の浮線は福田ＫⅡ式土器のそれと一致した変化をすることから，刻目浮線の系譜を福田ＫⅡ式に求められることを主張した（西脇1990）。

翌年，川崎は阿高式系土器の編年を試みる中で出水式土器についても検討している。出水式の文様や器種構成に南福寺式には見られない要素があり福田ＫⅡ式土器の影響を強調しているが，有文深鉢土器を重視する立場から出水式土器は阿高式系土器とするべきであると述べている（川崎1991）。

水ノ江和同は縁帯文土器（東海西部・近畿・中国・四国地域に類似した特徴を有しながら広く分布する縄文後期前・中葉の土器群の総称）について，各土器型式を概観しながらその成立と展開について論じている。出水式土器について項を設けており，出水式と併行関係にあるのは福田ＫⅡ式から小池原下層Ⅰ式までのいずれかであること，出水式は相当のバリエーションがあり細分が可能であることを主張している。課題として「出水式の細分とその周辺に存在する土器群との関係の解明」を挙げている（水ノ江1993）。

三輪晃三は中期～後期の九州における阿高式系土器群・市来式系土器群について土器組成及び器種構成を検討し，編年案を提示した（三輪1996）。出水式と南福寺式の相違点について，南福寺式で見られるＳ字状文が出水式では列点文や短沈線文で表現されることや，南福寺式では「器面調整で生じた屈曲ないしは肥厚する（Ａ手法）面」をⅠ文様帯としているのに対し，出水式は「主に口縁部に粘土紐を添付して生じた（Ｂ・Ｃ手法）外面」をⅠ文様帯とすることを挙げた。また出水貝塚出土の出水式土器についても分析を行い，「口縁部の斜外方に粘土紐を貼付して口縁部を形成させ土器内面に凸稜線を成す（Ｂ手法）もの」と「Ｂ手法の外側にさらに粘土紐を付加して口縁部を形成するため土器内外面の稜線のずれが生じる（Ｃ手法）もの」に分けられるとし，両者を時間差とみて「前者を出水式１段階，後者を出水式２段階」とした。出水式２段階は指宿式１段階と同時期であるとしており，その後の松山式土器の成立の要因の一つに出水式の流入を挙げている。

この論文の分類方法を踏襲し，三輪は鹿児島郡桜島町武貝塚出土の中期末～後期中葉の土器の分析を行っている。有文深鉢形土器を型式学的見地から第Ⅰ群～第Ⅷ群に大別しており，第Ⅲ群１類（Ⅰ文様帯にヘラ状工具による沈線文を描くもの）を出水式系としている。口縁部形成法は1996年の論文での分類をさらに細分し，Ｂ１手法（「端部外側に粘土帯を貼付して口縁部を作り土器内

面に凸稜線を成す」）・Ｂ２手法（「Ｂ１手法と同様に口縁部を作るが，肥厚して突帯の形状となる」）・Ｃ手法（「Ｂ１手法の外側にさらに粘土紐を付加して狭い口縁部を作る」）が出水式に特有であるとしている。武貝塚での出水式系の出土は少量であるが，土器の出土状況や共伴関係及び他遺跡の出土状況との比較から，第Ⅱ群（指宿式）・第Ⅲ群（出水式系・御手洗Ａ式類似土器・御手洗Ｃ式類似土器）・第Ⅳ群（寺師のいう南福寺式である南福寺上層式・下弓田式・松山式など）がほぼ同時期に共存することを主張している（三輪1998）。

以上のように九州の縄文土器研究において瀬戸内地方の土器との関係性が積極的に論じられるなか，幸泉満夫は西部瀬戸内における刻目隆帯文土器の起源について，瀬戸内地方ではなく出水式土器の中に求められる可能性が高いことを主張している（幸泉1999）。

これら諸研究のほか，1996（平成８）年～1998（平成10）年にかけて出水市教育委員会による出水貝塚の発掘調査が行われた。発掘調査報告に関しては次項で記述する。また，出水貝塚の他にも各遺跡の発掘調査で出水式土器やその前後の土器型式の出土例が増加し，遺跡毎の土器分類や編年が活発に行われた。熊本県城南町の黒橋貝塚の報告書では，出土土器を黒橋Ⅰ期（並木式）～黒橋Ⅸ期（南福寺式の新しい時期・出水式）の９期に分類している（高木1998）。長野眞一は柿内遺跡の出土土器の分類を高木の黒橋貝塚出土土器の分類と対比し，遺跡の年代的位置づけを行っている。このなかで，出水式を想定して分類した10類土器について「施文が口縁部付近に限られることやヘラ状工具を用いた直線的文様が主体的傾向として認められる」と述べている（埋文センター1999）。

６　2000（平成12）年以降

2000（平成12）年，出水市教育委員会による出水貝塚の発掘調査報告書が刊行された。貝塚が南福寺式の時期に形成され出水式まで続くことや，出水式が南福寺式の次の土器型式であることが層位的に確かめられたことを述べている。また，出水式土器を

ａ類：口縁部外面端部に刻目をもち，文様帯を縦位の沈線で区切るもの

ｂ類：刻目がなく斜行もしくは縦位沈線のもの

ｃ類：刻目隆帯文土器

ｄ類：口縁直下に肥厚した幅狭の文様帯をもつもの

の４つに分類し，出土状況からａ類がｂ類・ｃ類に２分した可能性があることや，ｄ類は南福寺式に近くｃ類へ繋がる可能性を示した（出水市教育委員会2000）。また，堂込は南島と出水式土器の関係についても触れ，仲泊式土器と出水式が並行関係にあること，出水式土器文化の影響で嘉徳Ⅱ式が成立する考えを示した（堂込2004）。

2010（平成22）年，前迫・水ノ江により，九州の縄文土器について型式ごとの研究の経緯や概要がまとめられた。「阿高式系土器群と磨消縄文土器群」の項で出水式を紹介しており，特徴として「口縁部のさらなる肥厚，太い刻目突帯文で口縁部と胴部の境界を明確にする，口縁部文様の細線化と単純化」を挙げている。南福寺式の型式変遷上に位置づけられるとしつつも，「粘土紐による施文や胴部上半への施文といった新たな特徴」が見られ，時間的な細分が可能であることを主張している（水ノ江・前迫2010）。

2011（平成23）年，九州における縄文時代後期前葉土器を題目に九州縄文研究会が開催され，鹿児島県の後期前葉の土器の様相を真邊彩がまとめている。県西北部において南福寺式土器の文様が細線化し出水式土器へと移行すること，出水式土器は東シナ海沿岸部，特に出水・川薩地方での出土が多いことを述べている。また，課題として南福寺式・出水式土器，宮之迫式・指宿式土器，磨消縄文土器の３者の関係を把握することの必要性を挙げている（真邊2011）。

2019年には『熊本大学構内遺跡発掘調査報告14』が刊行され，2013・2014年度に調査された黒髪南地区の縄文時代遺構・遺物が報告された。出水式及び御手洗Ａ式古段階が主体であり南福寺式土器が混在していないことから，出水式の定義を明確にする上で重要な資料が得られたとしている（熊本大学埋蔵文化財調査センター2019）。

【引用・参考文献】

出水郷土誌編集委員会　1968「第２節 遺跡」『出水郷土誌』

出水市教育委員会　2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

大山柏・小原一夫　1933「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物（第一回）＝面縄第二貝塚＝伊波式土器の研究＝」『史前學雜誌』第五巻第五號　史前學會

乙益重隆　1965「縄文文化の発展と地域性　10 九州西北部」『日本の考古学 Ⅱ 縄文時代』河出書房新社

乙益重隆・前川威洋　1969「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座 第３巻 先史文化』雄山閣

賀川光夫　1956「Ⅲ．各地域の縄文式土器　九州」『日本考古学講座 第三巻 縄文文化』河出書房

賀川光夫　1965「縄文文化の発展と地域性　10 九州東南部」『日本の考古学 Ⅱ 縄文時代』河出書房新社

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1999「柿内遺跡」『柿内遺跡 大園遺跡 西俣遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告（24）

河口貞徳　1957「南九州後期の縄文式土器―市来式土器―」『考古學雜誌』第四十二巻第二号 日本考古學會

河口貞徳　1958a「出水貝塚」『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯 鹿児島県教育委員会

1981『河口貞徳先生―古稀記念著作集 上巻―』所収

河口貞徳　1958b「鹿児島県出水市出水貝塚」『日本考古学年報』７　日本考古学協会
河口貞徳　1963「鹿児島県出水市出水貝塚」『日本考古学年報』６　日本考古学協会
河口貞徳　1986「出水貝塚あれこれ」『鹿児島考古』第20号　鹿児島県考古学会
河口貞徳　2005「出水貝塚」『先史古代の鹿児島』鹿児島県教育委員会
川崎保　1990「７ 阿高式系土器の編年と伊木力遺跡第９群土器の評価」松藤和人編『伊木力遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第７冊　同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
川崎保　1991「九州縄文時代中期から後期の土器編年―「阿高式系土器」研究の方向性―」『信濃』第43巻第４号　信濃史学会
木村幹夫　1939「鹿児島県先史時代の研究」
1980『木村幹夫考古学論文集』収載
熊本大学埋蔵文化財調査センター　2019『熊本大学構内遺跡発掘調査報告14』熊本大学埋蔵文化財調査報告書14
小林久雄　1939「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座』第十一巻　雄山閣
高木正文　1998「第Ⅲ章 遺物 第Ⅰ節 土器・土製品」『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集　熊本県教育委員会
高宮廣衛　1978「室川貝塚発見の出水式系土器」『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』６　沖縄国際大学
田中良之　1979「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第６集　九州古文化研究会
田中良之　1982「磨消縄文土器伝播のプロセス―中九州を中心として―」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
田中良之　1988「阿高式土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅲ』小学館
寺師見國　1936「北薩（伊佐郡）地方の縄紋土器」『史前學雑誌』第八巻第六号　史前學會
寺師見國　1939「肥後水俣南福寺貝塚―南福寺式土器―」『考古学』第10巻第７号　東京考古学会
寺師見國　1943『鹿児島縣下の縄文式土器分類及び出土遺蹟表』
寺師見國　1954「南九州の縄文土器」
1978『大口市郷土誌資料 第六集』収載
堂込秀人　2004「琉球列島の縄文時代後期土器の系譜―古我地原式土器の認定と細分から―」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集　河瀬正利先生退官記念論文集刊行会
濱田耕作・島田貞彦　1921「薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚調査報告」『京都帝國大學文學部考古學研究所報告』第六冊
西脇対名夫　1990「８ 伊木力遺跡出土縄文時代後期土器の検討」『伊木力遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第７冊　同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
長谷部言人　1921「出水貝塚の貝殻獣骨及び人骨」『京都帝國大學文學部考古學研究所報告』第六冊
前川威洋　1979「九州後期縄文土器の諸問題」『九州縄文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会
前迫亮一　1990a「出水式土器研究史Ⅰ」『阿中考古』創刊号　阿中考古同人
前迫亮一　1990b「出水式土器研究史Ⅱ」『阿中考古』第２号　阿中考古同人
前迫亮一　1992「出水式土器研究史Ⅲ」『阿中考古』第３号　阿中考古同人
真邊彩　2011「鹿児島県における縄文時代後期前葉の様相」『九州における縄文時代後期前葉の土器―中津式・福田ＫⅡ式併行期を中心として―発表要旨・資料集』九州縄文研究会宮崎大会事務局
水ノ江和同　1993「九州の縁帯文土器―九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題―」『古文化談叢』30　九州古文化研究会
水ノ江和同・前迫亮一　2010「1. 九州」『西日本の縄文土器後期』有限会社真陽社
三森定男　1938「先史時代の西部日本（上）」『人類学・先史学講座』第一巻
三輪晃三　1996「九州阿高系・縁帯文土器群の研究―縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景―」『奈良大学大学院年報』創刊号
三輪晃三　1998「南九州縄文後期再考―武貝塚出土土器の位置づけ―」『武貝塚』奈良大学文学部考古学研究室
山崎五十麿　1920「薩摩國出水貝塚に就て」『考古學雑誌』第11巻第１号
山崎五十麿　1921「再び薩摩國出水貝塚に就て」『考古學雑誌』第11巻第５号
山崎五十麿　1929「出水貝塚」『鹿児島縣史蹟名勝天然記念物』史蹟之部 第二輯　鹿児島県
山崎五十麿　1930「鹿児島縣大島郡德之島面縄貝塚に就て」『考古學雑誌』第二十巻第十號
幸泉満夫　1999「西瀬戸内における九州系縄文土器」『真朱』第３号 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要　財団法人徳島県埋蔵文化財センター

第Ⅲ章　出水貝塚に関する追加資料及び再検討

本章では，河口の1953年・1954年調査の成果を対象に，出土人骨及び埋葬と出土遺物についてそれぞれ既報告及び未報告資料の図化・再検討を行う。出土人骨及び埋葬については，これまで人骨が出土した調査全てをまとめ，検討可能な資料で再検討を行う。

第１節　遺跡の位置と環境

本貝塚は，鹿児島県出水市中央町尾崎に所在する。字名が「尾崎」であることから京都帝國大学の報告書では「尾崎貝塚」として取り扱っている（濱田・島田1921）。

出水市の北東部には矢筈岳を中心とする肥薩山塊があり，熊本県水俣市に接する。南部には北薩一の紫尾山を中心とする紫尾山地が横たわり薩摩川内市，さつま町と接する。西には阿久根市と接し，北西側には八代海が広がる。1954（昭和29）年に出水町と米ノ津町が合併し出水市が誕生した。その後，2006（平成18）年には出水市と野田町・高尾野町が合併し，現在の出水市となった。市域は東西約27㎞，南北約23㎞で面積は329.98㎢を測る。

2015（平成27）年時点で世帯数22,508世帯，人口53,758人を数える。

出水貝塚は米ノ津川の左岸に位置し，その米ノ津川の大半は山地部を流れ，下流部は扇状地の出水平野となる。米ノ津川とその支流である平良川左岸には知識面と呼ばれる河岸段丘が扇状地を取り巻くように細長く形成され，中流域では米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達する。下流域は三角州や海岸平野となり，八代海へと続く。

出水貝塚は大野原洪積台地がほぼ北側へ舌状に飛び出した部分に形成された貝塚である。その先端部の標高は，22～23m 程度である。貝塚の北側は，米ノ津川の氾濫原であったが，現在は埋め立てられて出水市総合運動公園となっている。

出水市の東部，標高約500m の上場高原一帯は旧石器時代の遺跡が集中する。上場遺跡では爪形文土器と細石器の共伴やナイフ形石器，台形石器等を包含する７時期の文化層の存在が明らかになった。大久保遺跡では，細石器時代の逆茂木痕をもつ落とし穴が検出された。

出水平野での遺跡の立地は，主に河岸段丘や山麓縁辺・裾部に集中し，縄文時代早期・前期・後期の牟田尻遺跡やカラン迫遺跡，前期の荘貝塚，中期の柿内遺跡や江内貝塚が知られている。縄文時代後期末から晩期にかけての遺跡としては，数多くの埋設土器が検出され，玉類の製作地であることが明らかになった大坪遺跡が著名である。

その他，沖田岩戸遺跡，中里遺跡，下柊迫遺跡が知られている。

弥生時代の遺跡としては，中期の覆石墓から後期の葺石土壙，古墳時代の地下式板石積石室へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる堂前遺跡や下高尾野遺跡がある。

古墳時代では洪積台地縁辺に位置し短甲が出土した溝下古墳群，海岸沿いに位置する箱式石棺の切通古墳が知られている。また，出水市の西方に海を隔てて位置する長島では，５世紀から７世紀にかけ高塚古墳が出現する。

出水の地名が文献資料にあらわれるのは奈良時代後期の続日本紀宝亀９（778）年11月の条に遣唐船が出水海岸に漂着，その後和名抄に「伊豆美」とあり，建久図田帳に「和泉郡」として登場する。平安時代には「院」が成立し山門院となり和泉郡から荘園化し，島津荘の成立とともに吸収される。その後，守護被官本田氏一族の所領に組み込まれ，やがて島津用久が薩州家を興すとともに荘園は崩壊する。また，島津忠久が元暦２（1185）年に島津荘下司職に補任され，忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させ，木牟礼城には五代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。

藩政期になると島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め，藩内外から派遣された郷士が居を構える県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至った。

第２節　出土人骨及び埋葬に関する再検討

１　調査の経緯

人骨が出土したこれまでの調査は，以下の通りである。

1920（大正９）年8月，山崎五十麿の行った調査で人骨破片が４点確認され，長谷部言人が分析を行っている（長谷部1921）。同年12月，長谷部言人が企画した調査でも人骨破片７点が確認され，報告されている（長谷部1921）。この時の人骨は詳しい出土状況は不明である。

1953（昭和28）年に河口他が実施した調査では，人骨が１体確認されている。調査の概要は『日本考古学年報』６（河口1963）に報告されているが，時期について河口は「阿高式に属するもの」とした。写真が掲載されているのみで実測図等の掲載はない。埋文センターが管理している河口コレクションの中に人骨の出土状況を撮影した写真が数枚あったが，実測図等は確認できなかった。ただ，河口が調査時に記したと考えられる野帳の記録があり，これについては資料として掲載した（資料８上段）。

翌年の調査は山内清男の指導の下実施され，１号から４号までの人骨が４体確認された。調査成果については，河口により『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯（河口1958a）と『日本考古学年報』７（河口1958b）で報

告されている。４体の人骨について河口は，『日本考古学年報』７において「いづれも阿高式土器を伴うので同一時期に属し，縄文時代中期のものと考えられる」とした。埋文センターが保管している人骨関係の図面は，人骨被覆礫の実測図の一部と１号人骨のトレース図の一部が残されていたのみであった。

1996（平成８）年から開始された出水市教育委員会による調査で，腰骨以下の下肢骨が出土した。人骨の近くから土器片が出土しているが，土器型式について報告書内の記述で齟齬が見られる。これに関しては後述する。

２　人骨の出土状況

まず，主に河口の野帳の記録（資料１～資料８）を基に人骨毎の出土状況を整理する。人骨については，６体を区別するために，以後1953年出土の人骨を1953人骨，1954年の４体の人骨を1954-1号から1954-4号，1997年出土の人骨を1997人骨と呼ぶ。また，層位については第Ⅱ章を参照していただきたい。

（１）1953人骨

1953年の調査で，Ⅰトレンチの貝層直下の赤土層より出土した。河口の野帳（資料１上段，資料８上段）から，頭部を北西に向けた仰臥屈葬で，頭部付近に土器底部が，腰部付近から阿高式土器片が出土したことが分かった。四隅には自然礫が配置されていた。メモからは赤土層まで掘り込まれている状況が分かる。膝を立てた状態で埋葬された後，土圧で膝が右方向に倒れたと考えられる。

なお，野帳の日付は28年12月20日になっているが，1954（昭和29）年出土の人骨も一部メモしてあるため，後日野帳にまとめ直したものと考えられる。

（２）1954-1号人骨

Ⅰトレンチ２区で，黒土層表面まで掘り込まれ赤土を被った状態で埋葬されていた（資料５上段右）。仰臥し下肢は折り曲げて立てた仰臥屈葬であった。頭部はS10°W を向いている。実測図（メモ程度）では腰部の右側に人頭大ないしそれより大きな石が置かれている。

（３）1954-2号人骨

1954-1号人骨を出土したⅠトレンチ２’区を広げ３’区とした所から出土した。（野帳では２’，３’となっているが，『鹿児島県文化財調査報告書』（河口1958）では４，８と通し番号に訂正されている。以後通し番号を使用する。）

石に覆われ，赤土層に上の貝層から掘り込まれ，仰臥伸展姿勢で埋葬されていた（資料８下段左）。残存状況はあまり良くない。頭部はS24°E を向き，人骨上部及び周辺には石塊が多数あり，被覆するような状況であった。

（４）1954-3号人骨

Ⅰトレンチ７区で出土した。貝層下の赤土層に掘り込まれて埋葬されていた。1954-2号人骨と同層位で，周囲及び上部に礫を置いて全体を覆った状態であった（資料８下段右）。頭部はE30°S を向いているが，頭骨以外残存状態が良くないため，埋葬形態は不明である。

（５）1954-4号人骨

Ⅰトレンチ６区で出土し，黒色土層を若干掘り下げて埋葬されていた。頭部はW10°S を向き，大腿骨は肩の方向へ，膝は反対方向へ強く折り曲げられた仰臥屈葬である。頭骨の周囲に人頭大の礫が若干ある。写真では大きな礫でしっかり被覆されている状況が分かる。

（６）1997人骨

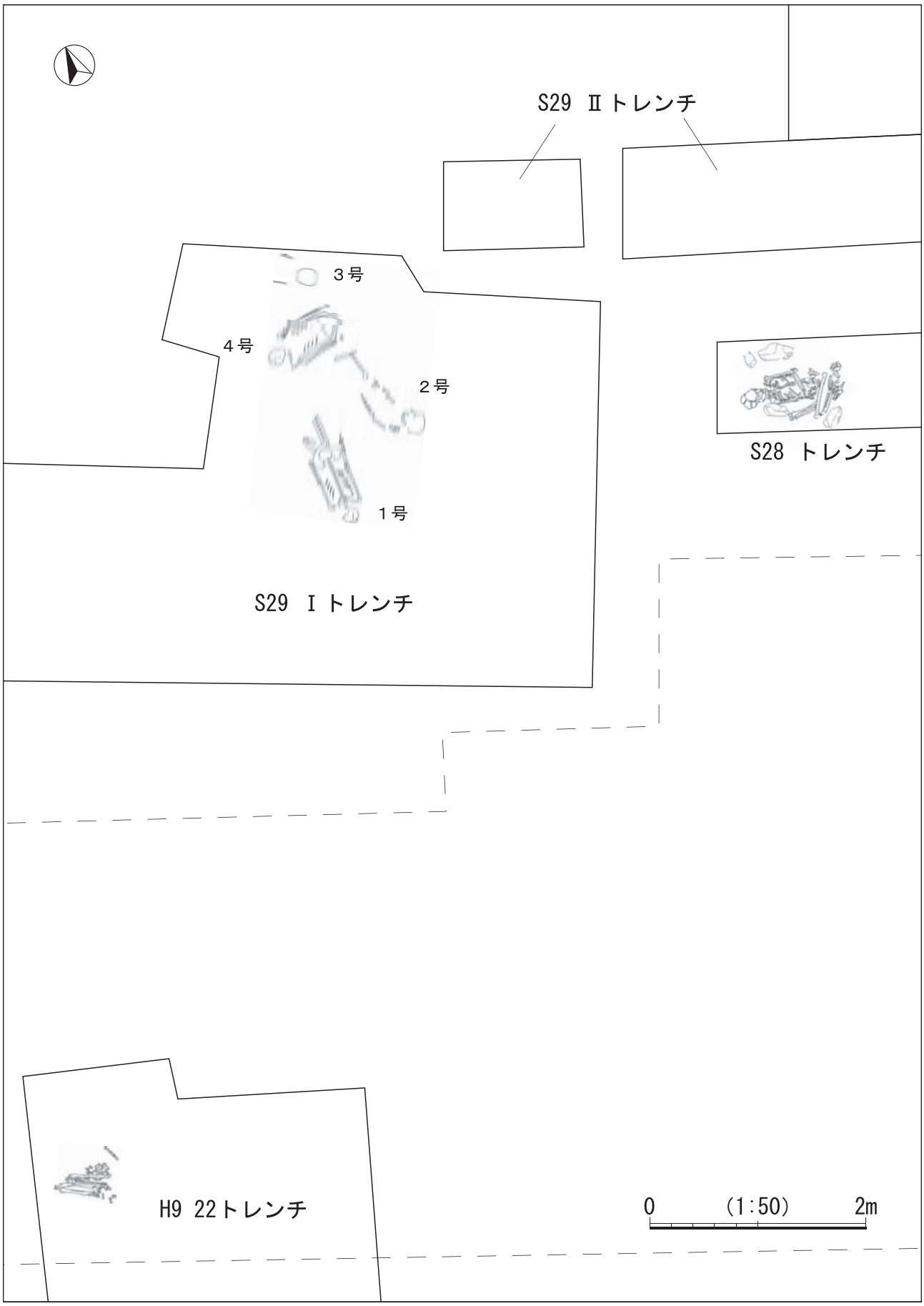
1996･1997（平成８・９）年にかけて出水市教育委員会が調査したもので，1997年に22トレンチで出土した。攪乱土抗により上半身部分は失われ，腰骨以下の下肢骨が残存していた。大腿骨は肩の方向へ，膝は反対方向へ折り曲げられていることから仰臥屈葬と推定される。実測図を確認したところ出水市調査時報告書（出水市教育委員会2000）の報告書の方位に誤りがあり，実際の頭部は第５図の通り北を向いていたと考えられる。掘り込みや被覆礫については不明である。同報告書第Ⅲ章第２節では，人骨近くから南福寺式土器が出土したと記述されているが，第Ⅴ章のまとめでは阿高式土器と説明している。

３　埋葬形態の検討

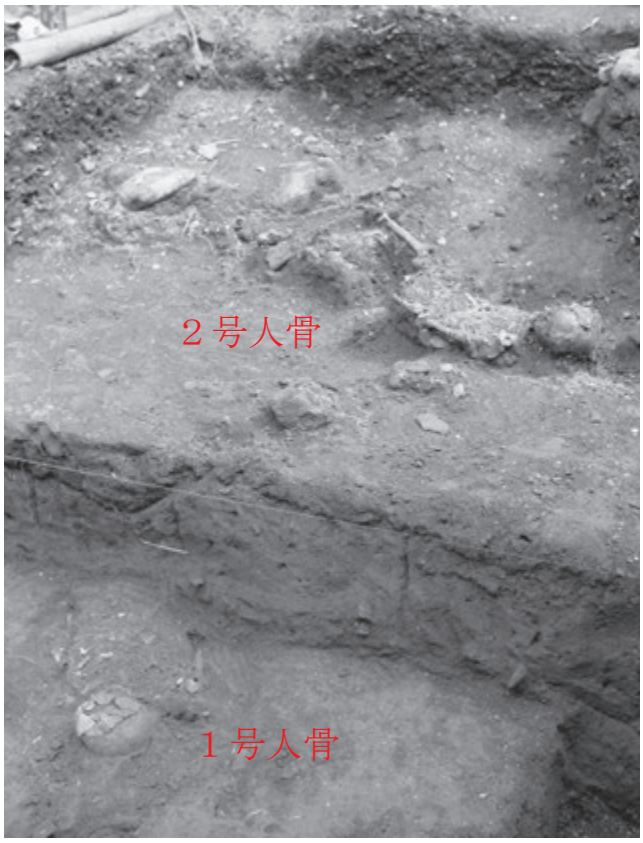
次に，これまで確認された人骨６体の位置関係を明らかにしたい。その上で被覆礫と掘り込みの関する検証を行い，埋葬形態について検討を加えたい。

まず，６体の人骨はそれぞれが写真もしくは実測図で報告されているが，６体の人骨の位置関係を示す図面はなかったことから，これを作成することから始めた。

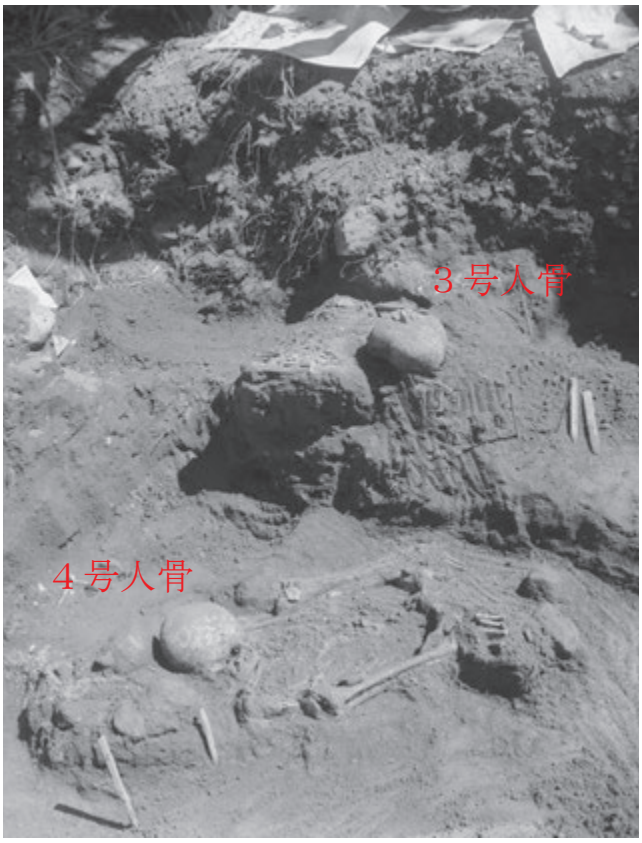
1953（昭和28）年の調査で出土した人骨は『日本考古学年報』６（河口1963）に写真で紹介されているが，埋文センターが保管している河口コレクションの中に実測図は確認できなかった。そこで，数枚残っていた人骨の出土状況の写真の中で，最も真上から撮影したと考えられる写真をトレースし，実測図の代用とした。トレンチ位置図も確認できなかったことから「出水貝塚あれこれ」（河口1986）に掲載されている位置図を参考にした。人骨のスケールについてもトレンチ内に当てはまるように任意の大きさに縮小した。1954（昭和29）年の調査で出土した４体の人骨については，河口により報告されている（河口1958a）。しかし，トレンチ内での位置もしくは遺跡内における地点を示す図面は報告書に示されていない。前述の通り，人骨のトレンチ内での位置を示す図面は残されていなかったことから，報告書の記述や調査時の写真と方位から妥当と考えられる位置に当てはめた。1996（平成８）年の調査で出土した人骨については，その報告書に実測図が示されている。出土位置の不明な点については，出水市教育委員会から情報を得た。以上のような手順で作成した人骨６体の位置図を第５図に示



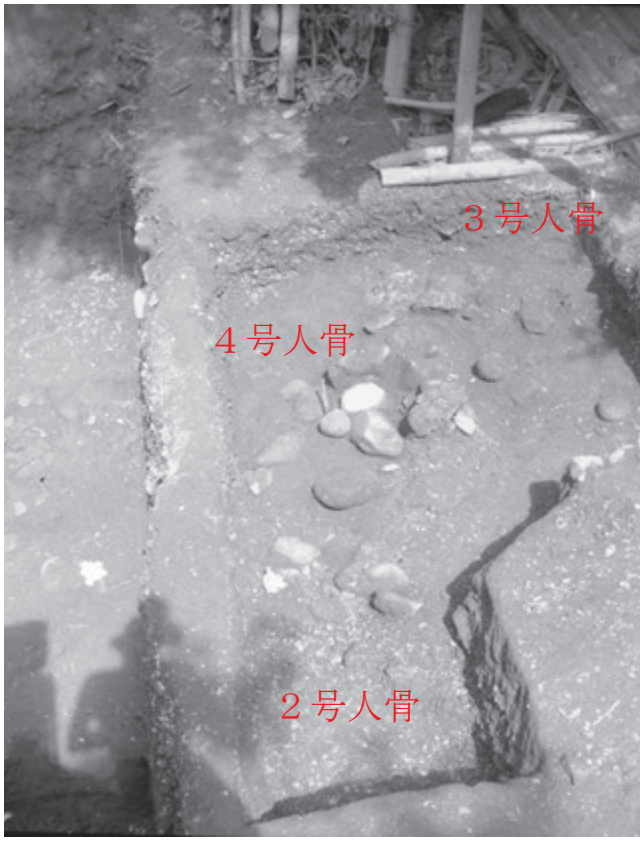
第５図　出水貝塚出土人骨位置図



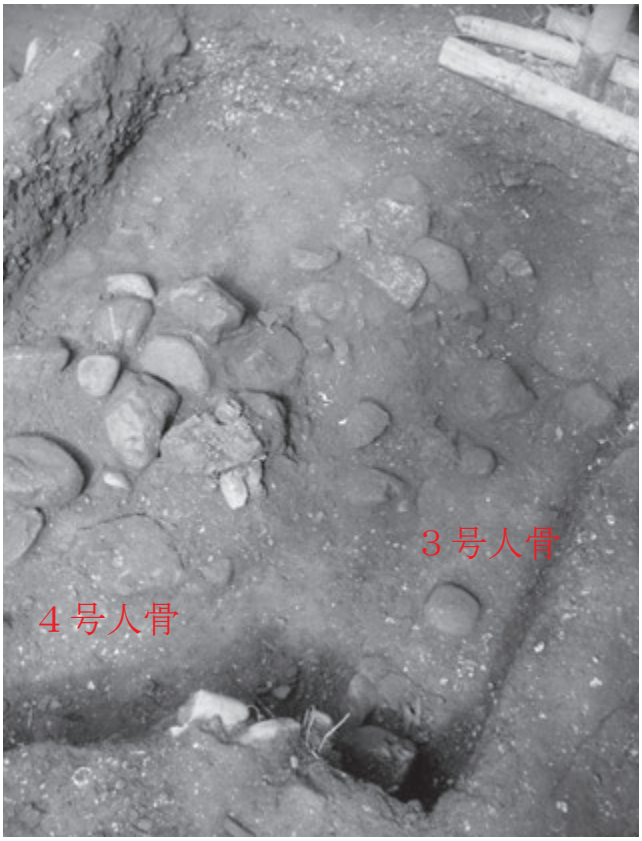
①



②



③



④

第６図　1954年人骨出土状況写真

した。当時の実測図や位置図がなかったことから正確性には欠けるが，大まかな位置関係は理解していただけると考える。人骨の頭部の方向は次のとおりである。1996（平成８）年の調査で出土した人骨の上半身はないが，調査担当者からの情報をもとに頭部の方向は推測した。

調査年	頭部の略方向	埋葬体勢
1953年	北西	仰臥屈葬
1954年１号人骨	南	仰臥屈葬
1954年２号人骨	南	仰臥伸展葬
1954年３号人骨	南東	不明
1954年４号人骨	西	仰臥屈葬
1997年	北	仰臥屈葬

次に人骨の出土層と被覆礫について検討を行う。

1954（昭和29）年の調査で４体の人骨が確認されている。出水市教育委員会の報告（2000）のまとめで「昭和29年次の発掘調査では人骨出土が層位を異にしており（高低差がある），これは時期差の可能性が高く…」と人骨の時期について問題提起を行っている。当時の人骨出土状況（第６図－①）を見ても１号人骨と２号人骨の出土レベルにはかなりの差があるように見える。さらに，３号人骨と４号人骨にも高低差がある。（第６図－②）ただ，１号人骨と３・４号人骨との高低差，２号人骨と３・４号人骨との高低差については写真からは判断できない。この点について，報告書の記述，当時の記録写真・調査日誌等の資料を基に検討を行いたい。

最初に，人骨の上位に出土した被覆礫について検討を行う。報告書（河口1958a）では１号人骨は覆礫についての記述はない。２号人骨については「特にこの人骨上及び周囲には石塊が多数あって，被覆するような状況に置かれていた。」，３号人骨については「体上には石塊が被って居り…」，４号人骨については「頭骨の周りその他に若干の石がある」との記述がある。同報告書には，人骨と人骨を被覆した礫群の平面図が示してある。しかし，断面図やレベル等に関する記載がなく，人骨と礫との高低差を確認できないことから被覆礫かどうかの判断ができない。

そこで，被覆礫について当時の記録写真で検討を行う。第６図－③，④は貝層を取り除いた段階で礫が検出された状況と考えられる。ただし，１号人骨は，貝層以下もかなり掘り下げられた状況である。２号・３号・４号人骨を出土した付近には大きめの礫が出土している。この状況は，報告書（河口1958a）の第４図に示してある平面図と同じ状況である。つまり，２号・３号・４号人骨の上位には被覆礫が置かれていたと考えられる。１号人骨については，報告書（河口1958a）の各トレンチ及び人骨の項でも被覆礫に関しての記述はない。記録写真にも１号人骨の出土前の状況と判断できるものはなかった。後の河口の報告（河口2005）では１号人骨について何等施設は伴わないとしているが，河口が記した調査日誌（資料３上段右）に「Ⅰ．２区．２回目．石群」の記載もある。（Ⅰ．２区はⅠトレンチ２区と考えられる。１号人骨はⅠトレンチ２区から出土している。）「石群」は１号人骨の上位にあった可能性もある。つまり，１～４号人骨は全て被覆礫を伴う可能性がある。

次に人骨の出土層位と掘り込みについて検討を行う。

「出水貝塚」（河口1958a）によると１号人骨は黒土層表面まで掘り下げて埋葬してある。２号人骨は赤褐色土層の直上，３号人骨も貝層下の赤褐色土層直上，４号人骨は黒色土層も若干掘りさげて埋葬とある。つまり，１号・４号人骨は掘り込みに関する記述があるが，２号・３号人骨にはない。出水貝塚の基本層序は１層表土，２層貝層，３層赤褐色土，４層黒色土であることから，１号・４号人骨は４層上面もしくは若干掘り下げて，２号・３号人骨は３層上面で出土している。

そこで，写真や日誌から人骨の出土状況を検討する。第６図－③・④は人骨が出土した付近で，その人骨より上位で確認された礫が撮影されたものである。貝層を除去した赤褐色土層直上に礫があると考えられる。第６図で礫の検出面に人骨は確認できないことから，人骨は礫の下位で赤褐色土層中に位置していると考えられる。つまり，２号・３号人骨が掘り込みをもつ可能性も否定できない。さらに，河口が記した調査日誌に，２号人骨について「こんどの人骨は石におゝはれて居り赤土層に上の貝層から掘り込まれたものである」（資料８下段左）とある。８月３日の調査日誌には「３号人骨は赤土層に掘り込まれたもので２号人骨と同位層であり」（資料８下段右）との記述が残る。つまり，２号・３号人骨が掘り込みをもっているとすれば，出土した４体の人骨は全て掘り込みを持つ可能性があると考えられる。

以上のことから，１号人骨と４号人骨はⅢ層の赤褐色土を深く掘り込み，２号人骨と３号人骨はⅢ層の赤褐色土を浅く掘り込んで埋葬したと考えられる。第６図－③の状況から礫の検出面は同じでも人骨により掘り込みの深さが異なる。４体の人骨は阿高式土器の時期であることから，人骨の出土レベルの違いは時期差ではなく掘り込みの深さの違いの可能性がある。１号人骨については，河口が当時記した野帳から被覆礫のあった可能性があり，４号人骨とほぼ同じ深さの掘り込みをもっていることから４号人骨と同じ埋葬方法であった可能性がある。

さらに1953人骨及び1997人骨についても検討を行う。

河口は，1953人骨について『日本考古学年報』６（河口1963）で「人骨は貝層下の赤土層を掘りこんで埋葬され，体の両側に礫４個を配し，頭部に土器の庭部が出土した。不完全な屈葬で，下肢を曲げ，右上肢は展し，左上肢は曲げて右腕の上に掌をのせた状態であった。時期

は阿高式に属するものである」と述べている。また,「出水貝塚あれこれ」(河口1986)では「…貝層下のアカホヤ層に掘り込まれた土壙から，極めて保存状況のいい仰臥屈葬の人骨一体が出土した。西向きに埋葬され，頭部に接して深鉢の下部，四隅に自然礫を配したもので，腰部付近から阿高式土器片が出土した」と述べている。

さらに，資料１上段に示した河口の野帳からもアカホヤ層（野帳では純赤土層と表記）から出土したことが読み取れる。また，礫も人骨のレベルより幾分高いことが伺える。これらのことから，1953人骨は貝層下のアカホヤ層に掘り込まれた土坑に仰臥屈葬で埋葬され，被覆礫をもつ可能性のある人骨と言える。つまり，1954-2号人骨の埋葬方法と類似している。

1997人骨について報告書（出水市教育委員会2000）では「後代の掘り込みによって調査時には既に上半身を欠失していた。…下肢の配置は昭和28年出土の１体に似ており，仰臥で上半身を伸ばした半屈葬であった可能性が高い。」としている。後代の撹乱のため,人骨に掘り込み等が伴うか否かについて報告書に記述はないが，貝層下に出土していることだけは報告書で確認できる。以上のことから，1997人骨については比較検討できない状況である。

４　時期について

河口は，1953・1954調査で出土した人骨５体について人骨の周辺から阿高式土器が出土していることから，その時期の人骨と判断した。1997年に出土した人骨の時期については，報告書（出水市教育委員会2000）では若干の混乱が見られる。人骨が出土した22トレンチの項では共伴関係から南福寺式土器の時期としているが,「第Ⅴ章　まとめ」では人骨を阿高式の時期としている。当時の調査担当者によると，人骨と共伴した土器は報告書第53図遺物№481（出水市教育委員会2000）とのことであった。阿高式土器と南福寺式土器の関係性が揺れ動いていた頃であったことが起因していると考えられる。遺物№481は３字状の凹線などの文様の特徴から初期の南福寺式土器としたい。1953・1954年調査で出土した人骨と共伴する土器については各報告書でも掲載がなく，埋文センターが保管している資料等にも関連する記録は確認できなかった。

なお，人骨の所在について，鹿児島女子短期大学に1954-1号～3号人骨の頭蓋，1954-4号人骨の頭蓋と体肢骨が保管されている[(1)]。また,長崎大学医学部に０号（1953人骨か），２・３・４号（1954年出土人骨か）が保管されているとのことであるが，詳細は今後の課題としたい。

第３節　遺物に関する追加資料及び再検討

河口のこれまでの調査報告について，1953年の調査報告（河口1963，1986など）では文章のみでの遺物紹介であり，1954年の調査報告（河口1958a，1958b など）でも文章のみか，遺物の実測図は全くなく写真の掲載のみであった。そこで，今回は既報告の遺物の図化，未報告の遺物の抽出と図化を行い，掲載する。

土器については，河口が『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯（河口1958a）で報告した土器について，埋文センターが保管している土器（1953・1954年調査）・出水市教育委員会が保管している土器（1954年調査）との照合をとり，所蔵が確認できたものについて実測し掲載する。河口が報告した際の遺物番号は観察表（第３表～第８表）で示す。また，『出水郷土誌』（出水郷土誌編集委員会1968）での掲載土器の中で河口コレクションとして保管されていた土器且つ『鹿児島県文化財調査報告』と重複していないものを再実測し，掲載する。加えて，河口が執筆したどの報告書にも紹介されていない未報告土器に関しても抽出し，実測して掲載する。

石器・石製品，貝製品，骨角器については，河口により写真で報告されたものと，抽出した未報告分を実測し，合わせて掲載する。

１　土器

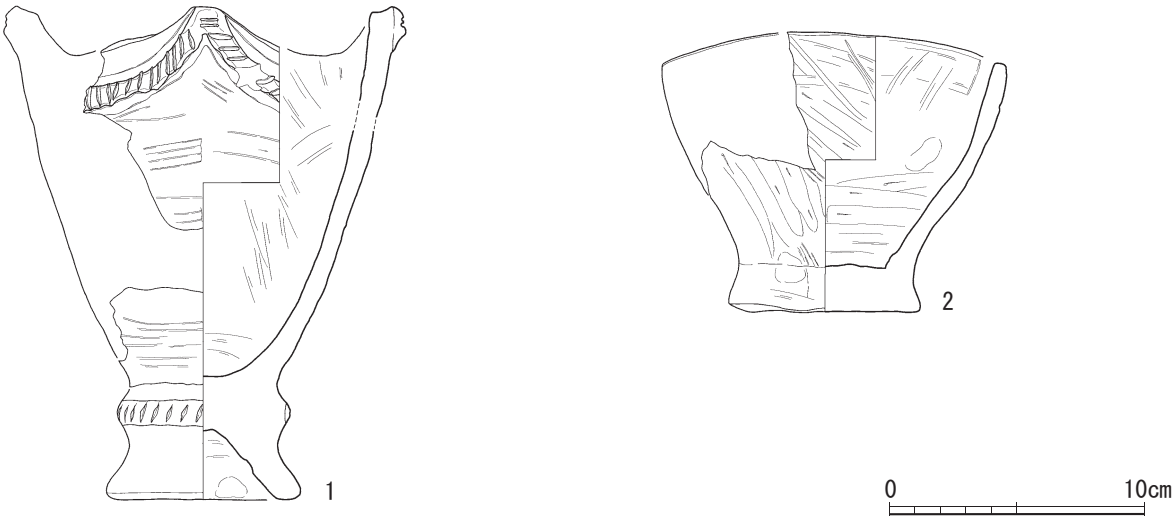
（１）『鹿児島県文化財調査報告書』報告分（第７図～第22図）

河口が『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯において写真で報告した土器を実測して掲載する。以下，河口の分類及び掲載順に従って記述するが，河口報告時の掲載順とは部分的に異なる場合もある。

第７図１は「凸帯文土器」として報告された土器である。山形の口縁部に沿うように刻目突帯を貼り付けており，胴部と脚部の境にも同様の刻目突帯を貼り付けている。外面は貝殻条痕が残り，内面は丁寧なナデにより器面調整されている。２は「無文土器」として報告された粗製の鉢である。胴部から口縁部にかけてやや丸味を帯びながら立ち上がる。口縁部はいびつで大きく歪んでおり，口唇部は平坦面を作っている。残存しているのは胴部の半分ほどと底部であるが，部分的に復元されている。

第８図～第11図は「押型文土器」として報告された土器である。押型文の種類として，河口は「山形押型文，穀粒押型文，格子状押型文の３種類がある」と報告しているが，撚糸文土器や条痕文土器と考えられるものも混ざっていた。また，格子状押型文については「１ケ所出土するのみである」と記述しており河口の写真にも該当する土器が見当たらなかったが,『出水郷土誌』の中で格子状押型文土器が１点紹介されているので，そちらで後述する。

第８図３・４は口縁部が外反し，口唇部及び口縁部付近の内面に横位の楕円押型文を施す。胴部外面には，口

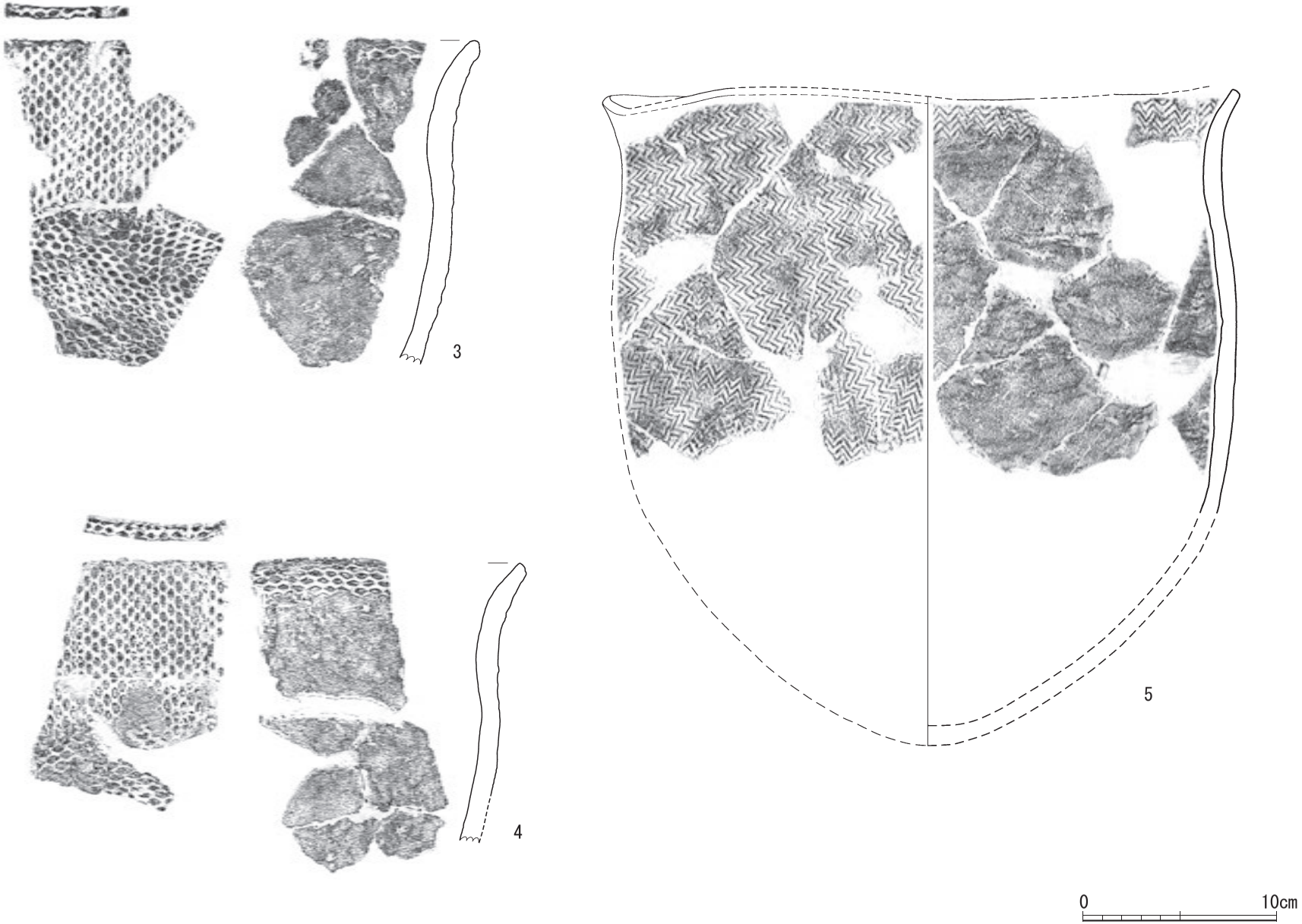


第７図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器①

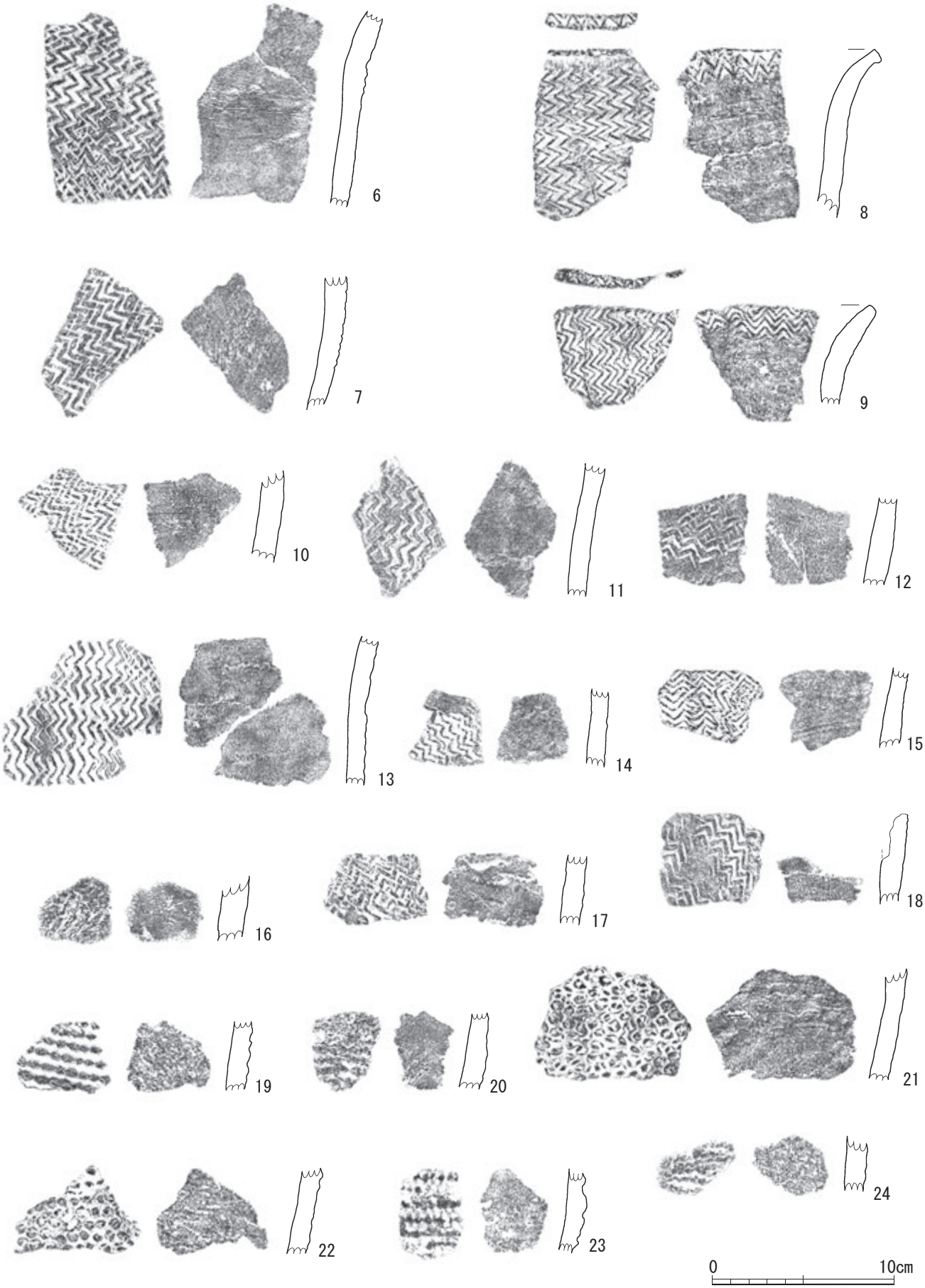
縁部から胴部最大径部分までは縦位に，それ以下には斜位または横位に楕円押型文を施す。器面はナデ調整される。５は完形に復元された押型文土器で，丸みを帯びた尖底をもつ。胴部はわずかに膨らみ，口縁部は外反する。内面の口縁部付近には横位に，外面の口縁部から胴部最大径付近までは縦位に，胴部下部は斜位及び横位に山形押型文を施す。ナデにより器面調整される。胴部下部から底部はほぼ石膏による復元のため，実際の底部形態は不明である。

第９図６はやや外反すると考えられる胴部で，外面の上部は縦位に，下部は横位に山形押型文を施す。７は縦位の山形押型文を施す胴部である。８は口縁部が大きく外反し，口唇部を強調するように口縁部をややくびれさせている。口唇部及び内面の口縁部付近には横位の山形押型文が施される。外面には器面全体に縦位の山形押型文が施される。９は口縁部が大きく外反し，口唇部に山形押型文が見られる。外面には縦位の山形押型文がみられる。10・11は縦位に山形押型文を施す胴部である。12は横位に山形押型文を施すが，器面全体ではなく一部のみの施文である。13は縦位に，14は斜位に，15は横位に山形押型文を施す胴部である。16は摩滅していて観察しにくいが，縦位に山形押型文を施す。17は基本的に縦位の山形押型文だが，部分的に横位に施す。18は斜位の山形押型文であり，部分的に押型文が消えている。19・20は楕円が連なった形の連珠押型文を横位に施す。21・22は横位にやや大粒の楕円押型文を施し，裏面はケズリ調整とナデ調整が施される。23・24は横位の連珠押型文が施される。

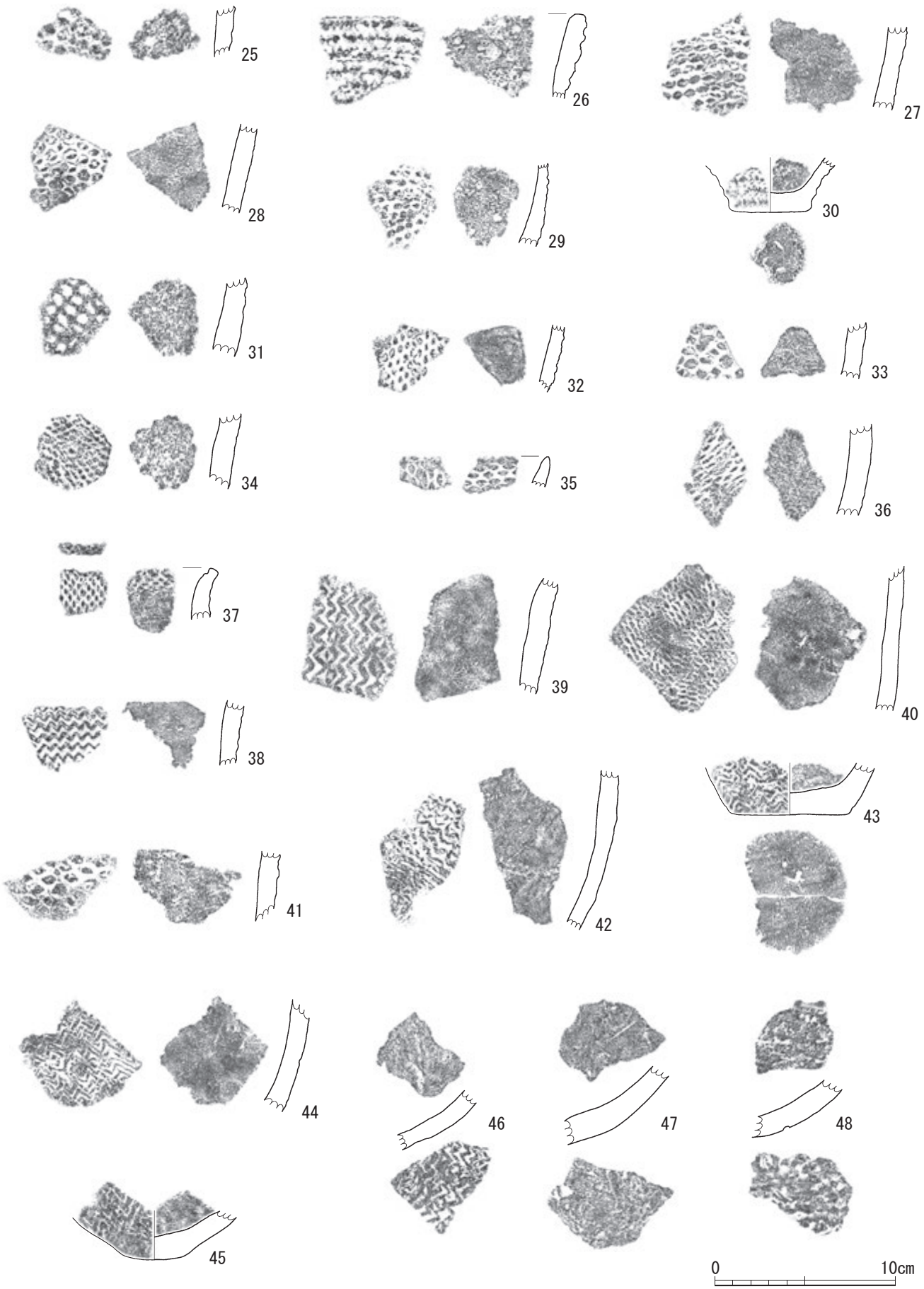
第10図25は連珠押型文が施される。26は口縁部であり，口縁部外端から横位に連珠押型文を施す。内外面ともに摩滅が激しい。27は横位に連珠押型文を施し，白色粒子を多く含む。他の押型文土器に比べて堅緻な仕上がりである。28は斜位にやや大粒の楕円押型文を施し，胎土や押型文の形から21と同一個体の可能性が高い。29は横位の連珠押型文を施す。30は小型で平底の底部であり，胴部に小型の連珠押型文を施す。底部は丁寧にナデ調整される。31はやや大粒の楕円押型文を斜位に施す。一般的な押型文とは凹凸が逆転する，いわゆるネガティブな押型文である。32は小粒の楕円押型文を縦位に施す。33はやや大粒の楕円押型文を施す。34は小粒の楕円押型文を主に横位に施す。35は口縁部で，外面は縦位に，内面は横位に楕円押型文を施す。36は細長い楕円押型文を斜位に施す。37は外反する口縁であり，口唇部は大部分が摩滅しているが小粒の押型文を施すと考えられる。内面の口縁部付近には横位に，外面は縦位に小粒の押型文を施す。他の押型文土器に比べ堅緻な仕上がりである。38は横位に山形押型文を施し，内面は丁寧なナデ調整で堅緻な仕上がりである。39は縦位に山形押型文を施し，内面には荒いナデ調整と指オサエが多く残っている。40は細長い楕円押型文を横位または斜位に施す。内面はナデ調整される。41は大粒の楕円押型文を横位に施す。42は上部に山形押型文，下部に原体を押し引いて施文したと考えられる条痕文が見られる。内面はナデで器面調整される。43は平底の底部で，外面には横位の山形押型文が施される。底面及び内面は丁寧にナデ調整される。44は横位の山形押型文を施し，内面は丁寧なナデ調整である。45は丸みを帯びた平底で，底部付近の胴部には横位に山形押型文を施す。角閃石を多く含む。46は底部の端部から胴部にかけての破片と考えられるが，底部形態は不明である。山形押型文が横位に施される。47は



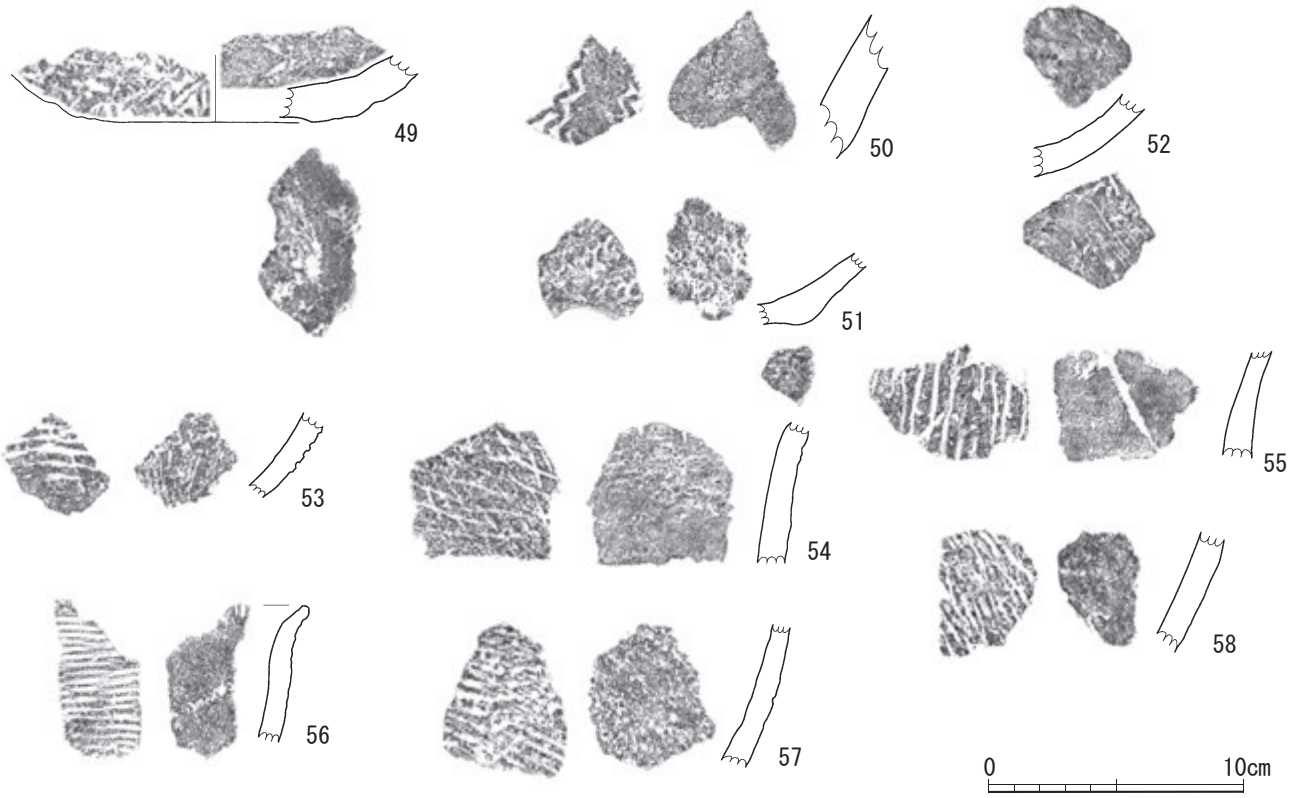
第８図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器②



第９図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器③



第10図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器④



第11図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑤

丸みを帯びた平底である。内面のナデ調整や白色粒子を多く含む胎土から押型文土器期の底部であると考えられるが，文様が観察できない。48は底部の端部から胴部に及ぶと考えられる破片であるが，傾きや上下は不明である。外面に連珠押型文を施すと考えられる。

第11図49は平底の底部で，底部中央がやや上げ底になる。胴部には横位の山形押型文が施される。50は底部付近の胴部であると考えられる。縦位の山形押型文が一定の間を空けて施され，内面は丁寧なナデ調整である。51は平底の底部である。胴部にやや小粒の楕円押型文を縦位に施す。52は底部の端部から胴部に及ぶ破片である。撚糸文と思われる文様がナデ消されているのが観察できる。53は撚糸文を横位に施しているが，下部の撚糸文は施文後にナデ消されていると考えられる。54は撚糸文を格子状に施す。内面はナデ調整され，白色粒子を多く含む。55は縦位に撚糸文を施し，内面は丁寧にナデ調整される。56は外反する口縁部で，外面には横位の条痕文が施される。内面の口縁部付近にはわずかに柵状文が観察でき，器壁はナデ調整される。57は全体的に摩滅していて観察しづらいが，撚糸文が斜位に施される。58は撚糸文を斜位に施し，内面はナデ調整される。

第12図は「並木式土器」として報告された土器である。59は深鉢であり，胴部と口縁部の一部が復元されている。口縁部の断面は四角形を呈し，口唇部及び口縁部に爪形の刻目を施す。口縁の一部を外側に方形に張り出させ，外端に口唇部同様の刻目を密に施し，張り出し部分は口唇から外端にかけて刻目突帯を貼り付けている。胴部には指頭で凹凸をつけ，凸部に爪形の押引文を密に施す。器壁は非常に薄く，胴部から口縁部にかけ緩やかに内湾しつつ立ち上がる。60の押引文は２列～３列の単位がみられるが，二叉の工具を用いていると考えられる。内面に明瞭なケズリがみられる。61は口縁部がやや外反し，口唇部を平坦に作り小型の押引文を施す。胴部は指ナデで浅い凹線を作り，充填するように口唇部と同様の押引文を密に施す。滑石を含み，堅緻な仕上がりである。62，63，64は浅い凹線を指ナデで作り，充填するように連続した深い刺突文を施す。部分的に凹線を深くし文様帯を強調している。裏面はケズリとナデで調整している。この３点は胎土や文様が非常に似ており，同一個体の可能性がある。65は上半分に指ナデで凹線を作り，押引文を施す。滑石を多く含み，内面及び外面下半分にケズリの痕を残す。66は小片かつ大部分が欠損しているが，59とほぼ同じ文様・施文方法・胎土であることから同一個体であると考えられる。67は凹線の間を二叉の工具を用いて連続刺突文を施す。滑石を多く含み，ヌルヌルとした器壁である。68は小片のため傾きが定かでないが，押引文を施す。胎土に滑石を多く含む。

第13図，第14図は「阿高式土器」として報告された土

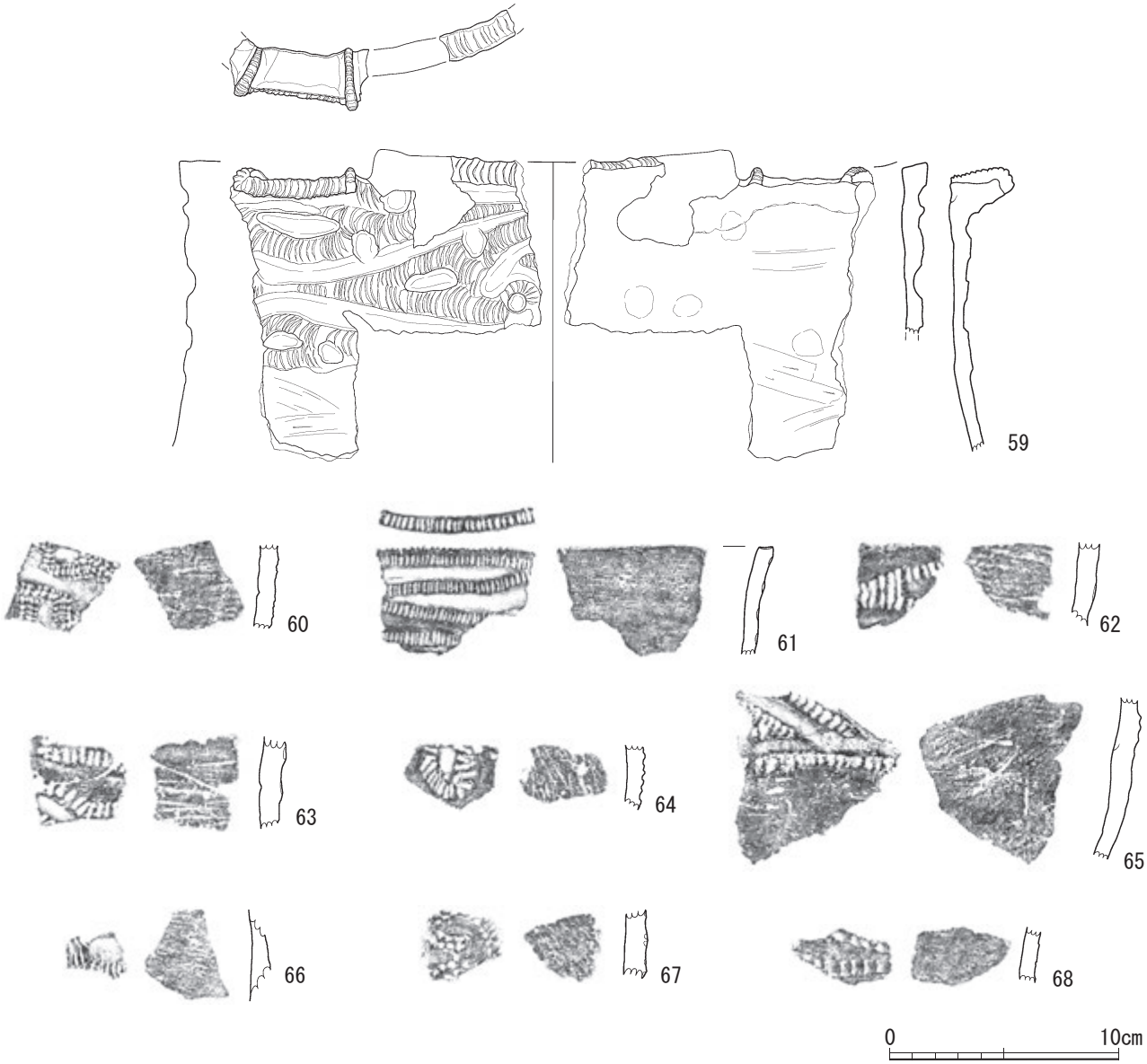
器である。69は胴部がやや膨らみ口縁部に向けて立ち上がり，口縁部から胴部にかけて太い凹線文及び凹点を施す。滑石を多く含み，文様帯の下に穿孔が一か所確認できる。70は胴部がやや膨らみ，口唇部にかけてわずかに外反する。口唇部に深い凹点を施し，波状口縁を作る。文様帯は口縁部付近に限られ，太い凹線で入組文を施す。71は，69と同様に胴部がやや膨らみ口縁部に向けて立ち上がる。口唇部に凹点を施し，緩やかな波状口縁を作る。器面全体に凹線が施され，２条の横線や入組文が見られる。底部付近まで施文されている可能性がある。72は小片で文様帯は不明であるが，口縁部に凹点を施し，凹線で入組文と考えられる文様を施す。73は太い凹線と凹点を施しており，文様帯は口縁部～屈曲部までに限られる。74は鉢形を呈し，口縁部は厚みをもってやや内反する。口縁部から内面に向かってなだらかに傾斜しながら張り出し，張り出し部分の端部に細かい凹点を施す。また，口唇部には一定間隔で細かい凹点を施して口縁部を波状に作りだしており，波状口縁の間には粘土紐を組んだようにして作られた突起がわずかに残存している。この突起部分では口縁部がやや外反し，口唇部の破損部分には同様の突起が付くと考えられる。外面には，ナデ調整された器面全体に凹線で右回りの渦巻き文を施す。75は口唇部に深い凹点を施し，３条の凹線の下に凹点を規則的に施す。76は口唇部に凹点を施して緩やかな波状口縁をつくり，口縁部には波状に対応するように断続的で短い凹線を施す。凹線による入組文を施しているが，文様帯は口縁部付近に限られると考えられる。胎土に滑石を多く含み，器壁がやや薄めである。第14図77は口唇部に凹点を施しているが，一部凹点が無い口唇部も確認できる。小片のため文様帯は不明であるが，渦巻き状・横位の凹線を施す。78は口縁部がやや外反し，広めの平坦部をもった口唇部に深い凹点を施す。凹線で文様帯を区切り，入組文または横位の凹線，凹点を施す。また，口縁部には波状に対応するように凹点を施す。文様帯は凹線で区切られ，口縁部～屈曲部下２㎝程に限られる。

第14図79は，河口により「阿高式土器」として報告されていた口縁部の破片２点（河口1958a P185 a89.a91），「凸帯文土器其の他」として報告されていた口縁部の破片１点（河口1958a P186 b42）の３点を接合したものである。鉢状を呈し，器壁は厚い。部分的な残存のため正確な突起の個数は定かではないが，２つ連ねた台形の突起と橋状の把手を２つずつ貼り付けていると考えられる。口縁部下の内面を張り出させており，第13図74と類似している。粘土を薄く貼り付けて文様帯を作り，そこにヘラ状工具で凹線文を施す。内面，外面ともに丁寧なナデにより器面調整している。

第15図80は「南福寺式土器」として報告された土器である。80は頸部で緩やかに屈曲して外反する口縁部である。口縁部に台形の突起が２つ連なっており，突起下の口縁部には斜位の短い凹線を施す。内側と外側から粘土を貼り付けて口縁部及び突起を成形しており，突起上部には接合痕が残る。81は胴部が膨らみ，頸部で内面に明瞭な稜をもち口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は粘土を貼り付けて肥厚させ，凹点を施す。口縁部は凹線で区切って文様帯を作り，ヘラで削るようにして緩い逆く字状の凹線を施す。82は粘土の貼り付けとケズリによって肥厚させた口縁部で，口唇部に平坦面を持つ。文様帯には凹線を逆く字状に施しており，深く刻むように施文している。83はやや膨らんだ胴部から頸部で屈曲し，やや外反して口縁部へ至る。口唇部に部分的に粘土紐を貼り付けて肥厚させ，肥厚帯には片側から刺突したような凹点を施す。頸部を削り出し段差を付けることで口縁部の文様帯を作っている。文様帯には角のある工具で刻むようにして逆く字状に短い凹線を施す。84は胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり，口唇部に凹点を施し波状口縁を作り出す。胴部はミガキに近い丁寧なナデで器面調整していると思われ，器壁が均一に薄くなっている。口縁部付近を削り出し段差をつけて文様帯とし，非常に浅い凹線で逆Ｓ字状文を施す。

第16図85は「凸帯文土器」として報告された土器である。器壁の厚さから深鉢であると考えられるが，全体の器形は不明である。頸部が緩くくびれて口縁部はわずかに外反して立ち上がり，口縁部は器壁とほぼ変わらない厚さである。台形の突起を持ち，突起の上部は指ナデによりややくぼんでいる。口縁部の大部分が破損しているため，突起の個数は不確かである。口縁部及び胴部に太く短い粘土紐を横位に貼り付けて突帯としているが，こちらも大部分が欠損している。また，条痕が明瞭に残る施文具を用いて浅い凹線を施す。文様形態は不明だが，矩形文に近いと考えられる。内面及び文様帯における器面調整はナデが観察できるが，胴部下は横方向のケズリの痕が明瞭に残る。86は捻った粘土紐で口縁部に突帯を作る。口縁部には器面調整で段を作ることにより文様帯を形成し，文様帯の一部をＸ字状に削る。87は胴部片であるが，小片のため傾きや上下は不明である。ナデにより器面調整された器壁に，凹線で直線・曲線を描く。

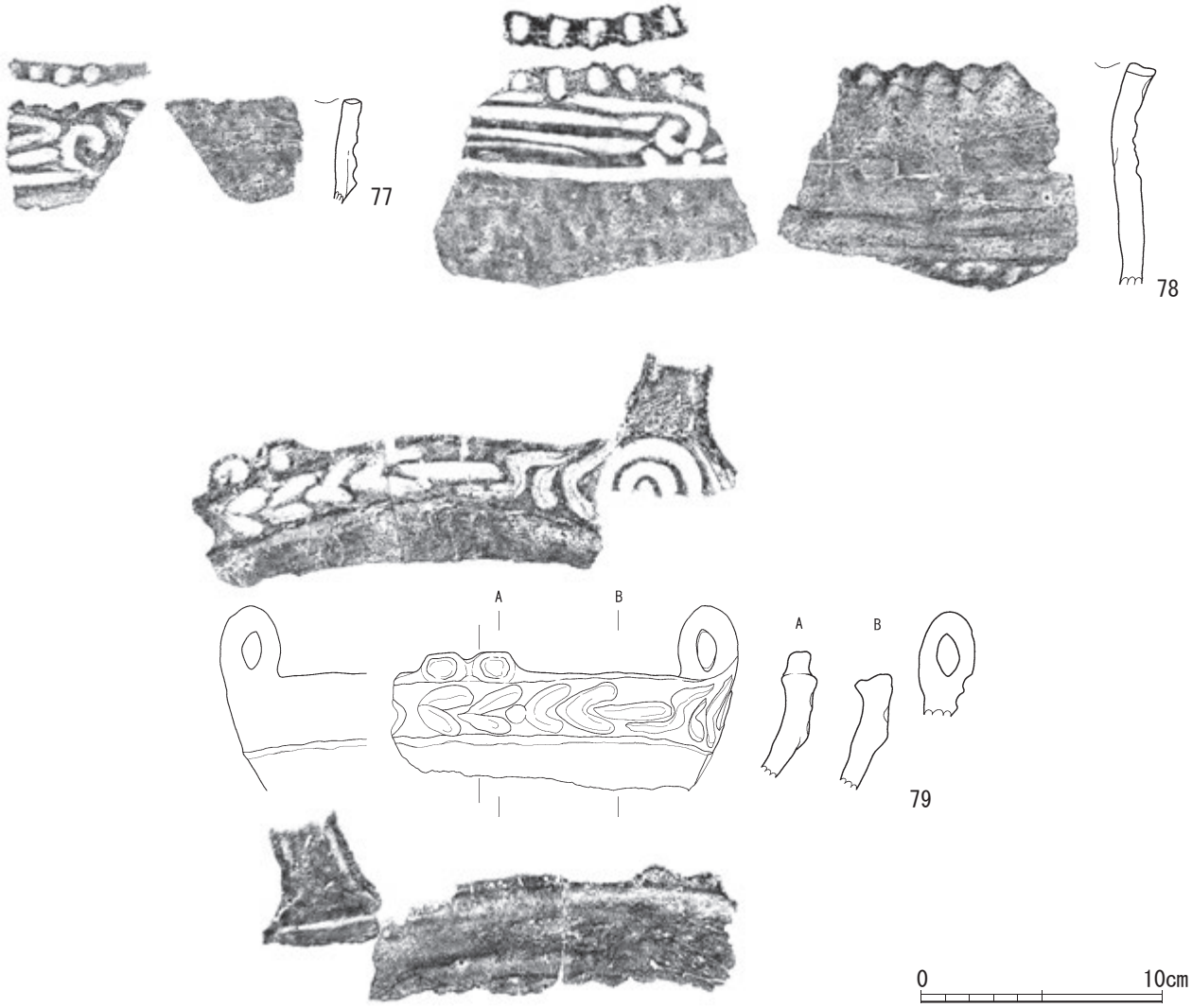
第16図88～96は「凸帯文土器其の他」として報告された土器である。88は，幅２㎝前後の薄い粘土を貼り付けて突帯としており，横位に貼り付けるものと口縁部に向かって立ち上がるように貼り付けるものがある。突帯には２条の沈線を施している。89は小片のため傾きや口縁形態は不明だが，口縁部に沿って貼り付けられた突帯がそのまま口唇部で突起になるような作りになると考えられる。幅２㎝前後の薄い粘土を口縁部からはみ出すように貼り付けており，はみ出した部分は内面と外面の両側



第12図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑥

から粘土を貼り付け肥厚させて突起を作る。突帯には２条の沈線を施す。器壁は薄く堅緻な作りで，外面には条痕が残る。突帯の貼り方や施文方法が88と類似している。90は粘土を捻るようにして形成した口縁部であり，弧を描くように刻目突帯を貼り付けていると考えられる。刻目突帯の中には沈線で曲線を施す。91は口縁部の突起物である。粘土紐が内面から口唇部を跨ぎ外へ張り出すが，内面では幅広の粘土紐だったものが口唇部からは２本の細い粘土紐が合わさる形になっている。この粘土紐に合流するように口縁部から太い粘土紐を２本張り出させ，深い凹線を施す。３本の粘土紐の合流地点の隙間を埋めるように把手を付けていたと考えられるが，大半が欠損している。また，これらの粘土紐の組み合わせでできた口縁部の空間の器壁には，透かし窓のように４つの穿孔が見られる。把手下の外面には横位の凹線を施す。全体的に堅緻で重厚な作りである。92は小片のため傾きは不明であるが，外反する口縁部であり短い凹線を施す。93は橋状の突帯もしくは把手と考えられる。土器のどの部分に付くかは不明であるが，片面が平坦に整形されており内面・外面の差をつけていると考えられる。断面が四角形を呈する厚い粘土紐を橋状に作っている。その形に添うように細い粘土紐を貼り付け，途中でU字に曲げたり短い粘土紐を貼り付けたりして装飾する。94は大きく張った胴部であり，ナデ調整した器面に先端が丸い施文具を用いて深めの沈線を施す。文様下には幅１cm程度の突帯を貼り付け，突帯上に爪形の刻目を施す。95は大きく張る胴部から頸部に向かってすぼまり，外反して口縁部に至る。屈曲部付近に２条の沈線を施し，そ

第13図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑦

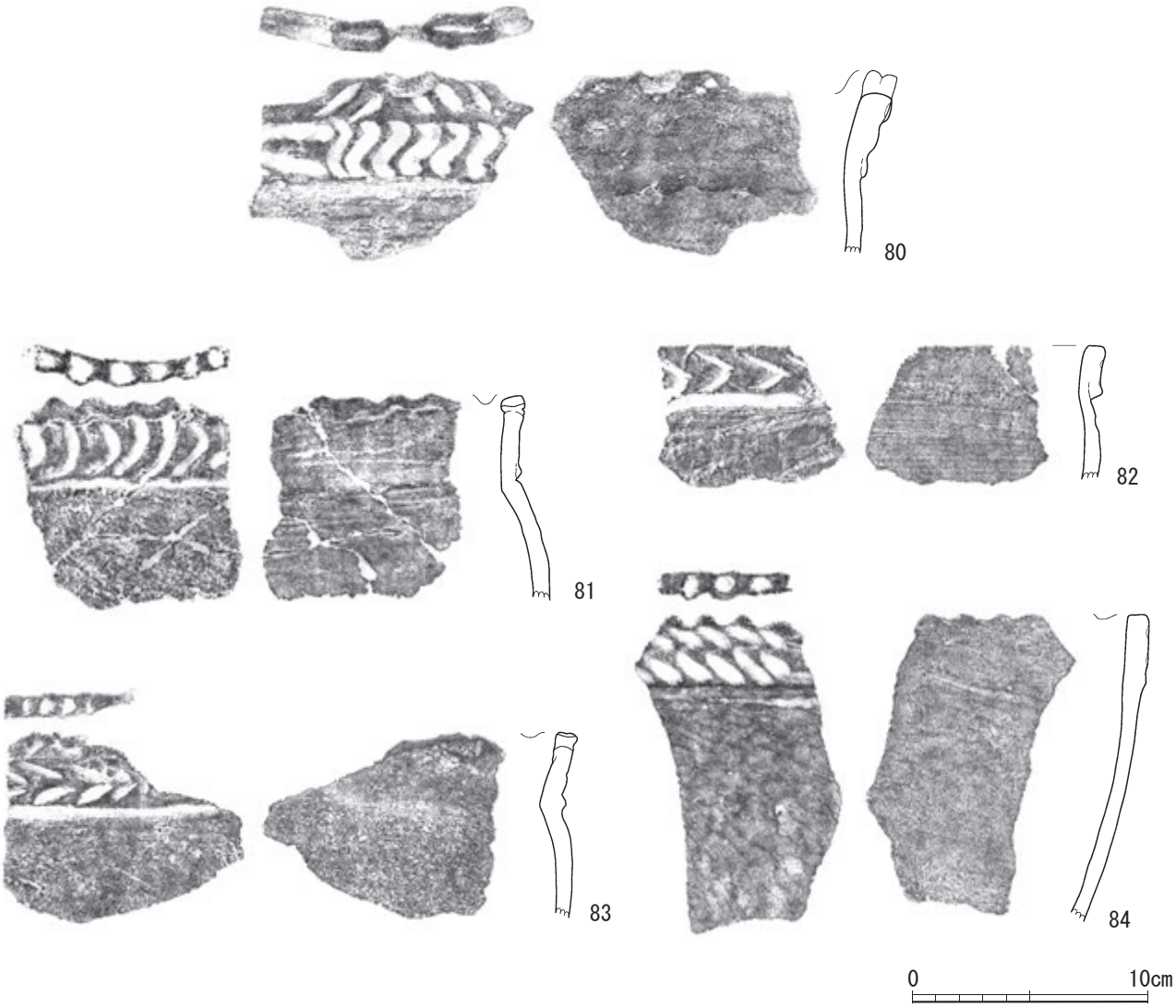


第14図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑧

の下に矩形文に近いと考えられる沈線を施す。96は口縁部がやや外反し，口唇部に凹点を施して緩やかな波状口縁を作る。口唇部及び口縁部に粘土の接合面が残る。口縁部付近の幅２㎝の範囲に凹点を交互に施し，その下に横位の凹線を施文する。

第17図97，98は「波状隆起文土器」として報告されていた土器である。97はやや膨らんだ胴部をもち，頸部の内面に明確な稜をもって屈曲しわずかに内湾しながら口縁部へ至るものである。口縁部は山形を呈し，２つの突出部の間には粘土紐を捻った痕が観察できる。口縁部を文様帯として肥厚させ，３条の深い沈線が施される。この３条の沈線のうち，上２条は横Ｕ字状に繋がっている。98は山形の口縁で，２つの突出部をもつと考えられる部分が破損しており，口縁の形に沿うように３条の沈線を施す。凹んだ口縁部には粘土紐を並べて貼り付け，その下には２条の沈線を弧状に施す。97と非常に類似した口縁形態であると思われる。

第17図99～107は「凸帯文土器」として報告されていた土器である。99は頸部からやや外反する口縁部であり，口唇部の摩滅及び破損により全体的な口縁形態は不明だが残存している口唇部は平坦に作られている。平坦な口縁部には３条の沈線が横位に施されており，破損部分には緩い弧状の沈線２条と刺突連点文が施される。100は1.5㎝前後の薄い粘土紐を貼り付けて突帯とし，突帯には断続的な２条の沈線を施す。突帯下の器壁には浅い沈線を施す。101は口縁部を肥厚させて文様帯とし，４条の横位の沈線と斜位の短沈線を施す。102はほぼまっすぐ立ち上がると考えられる口縁部で，口唇部を平坦に作っている。爪形に深く刻みを入れた刻目突帯を横位に貼り付け，口縁部と刻目突帯の間を文様帯として対照的な斜位の浅い凹線を施す。103は屈曲した頸部から外反して立ち上がる口縁部である。全体の文様は定かでないが文様帯は口縁部から頸部の間に限定しており，縦位の凹線を数条施した後に横位の凹線を３条施している

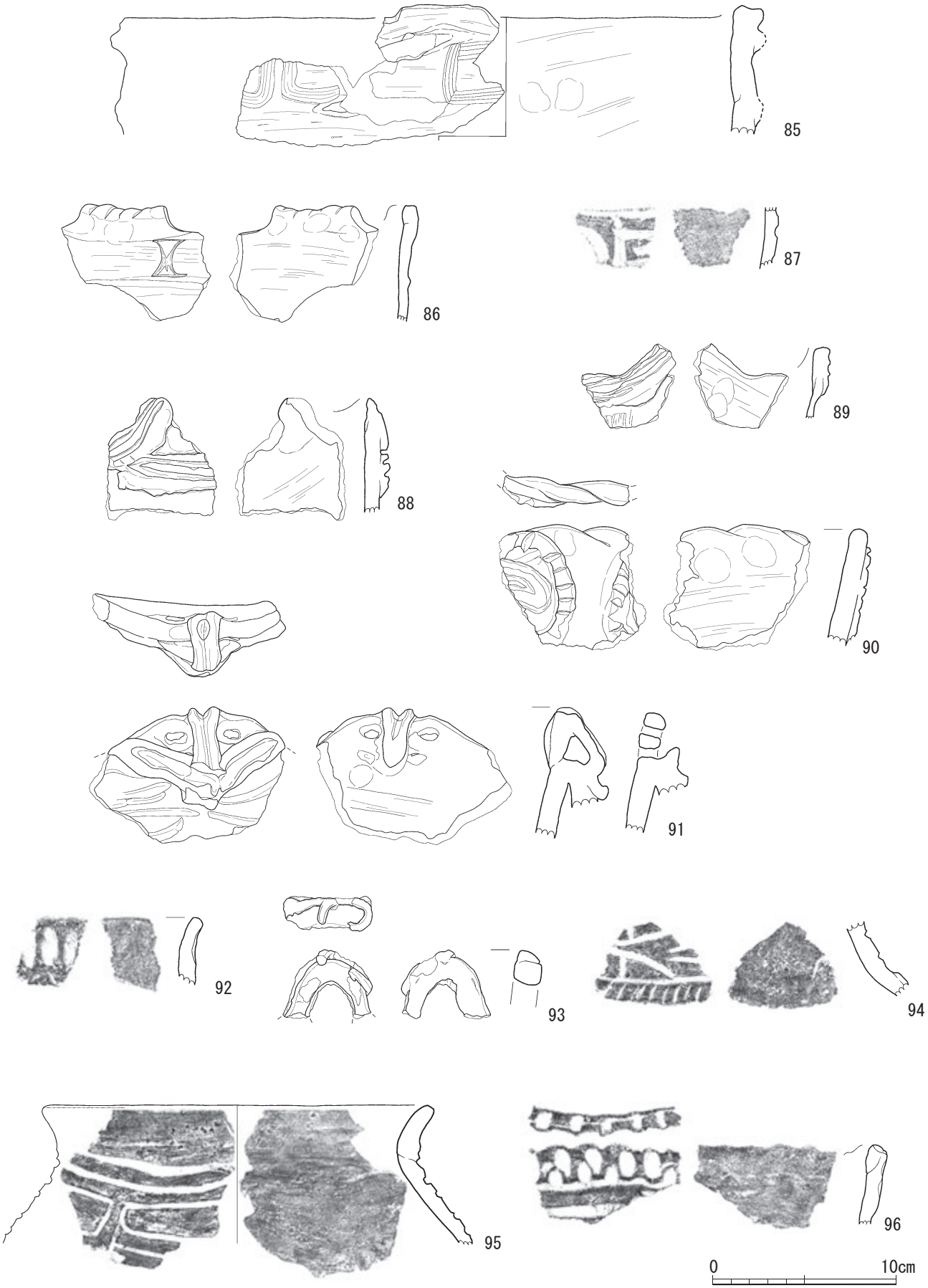


第15図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑨

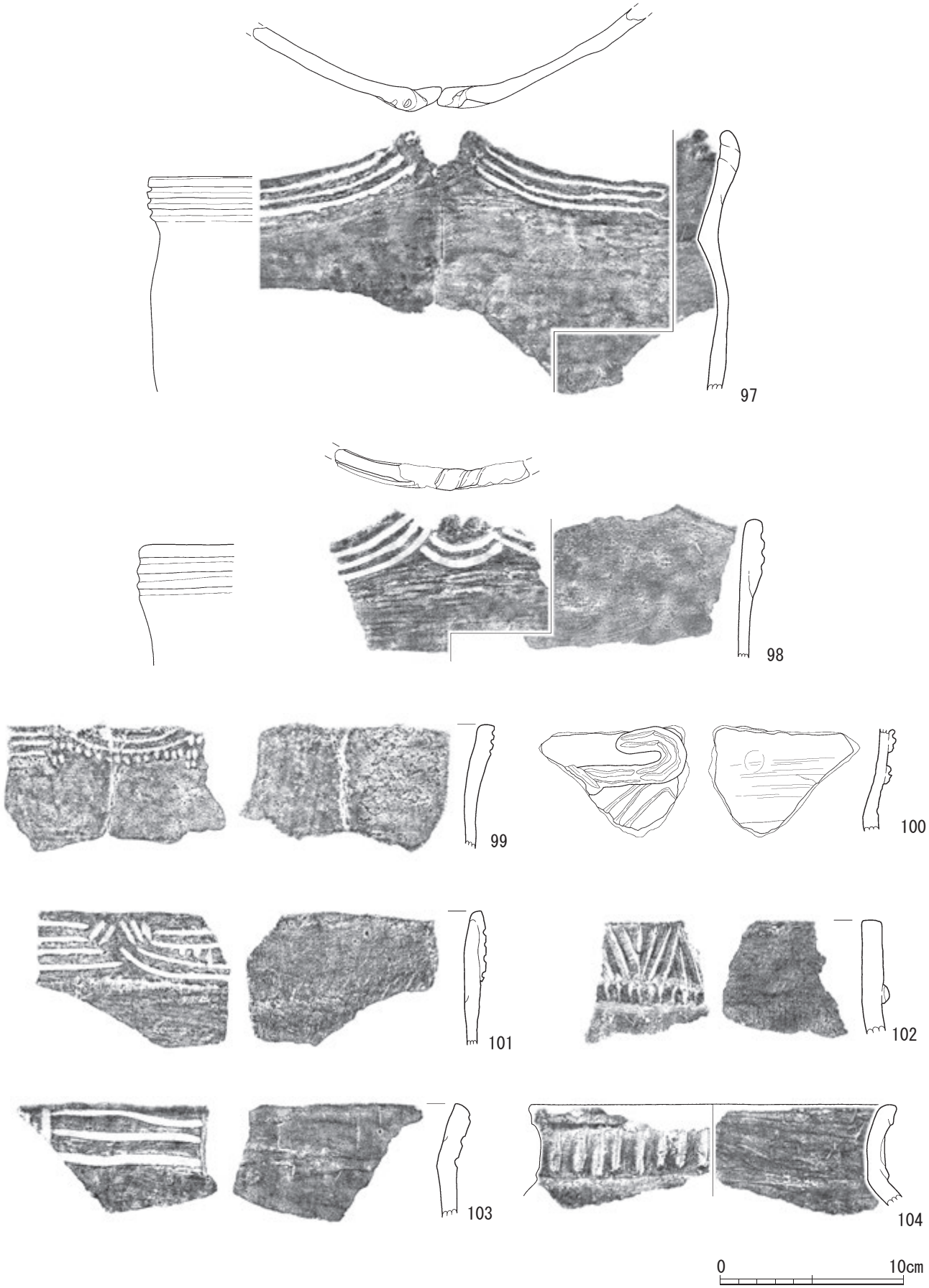
ようである。104は頸部の内面で明瞭な稜を持ち，強く外反して立ち上がる口縁部である。口縁部外端及び頸部をそれぞれ肥厚させ，頸部の肥厚帯を文様帯としている。下から上に削り出すようにして縦位に浅い凹線を施す。外面は丁寧なナデ，内面は工具ナデで器面調整しており，器壁は赤褐色を呈する。

第18図105は脚台であり，胴部との接合部分が強く外反する。端部に粘土を貼り付けることで肥厚させ，深い凹点を施して刻目突帯としている。底には鯨骨と考えられる圧痕が確認できる。106は安定した脚台であり，端部から屈曲部にかけ肥厚させて文様帯とし，逆く字状に沈線を施す。堅く焼き締まっており，底は丁寧に平坦に調整されている。107は３条の沈線を斜位に施した胴部である。外面は丁寧なナデを施してミガキに近い仕上がりとなっており，内面は貝殻条痕を残す。器壁が薄く堅緻な仕上がりである。

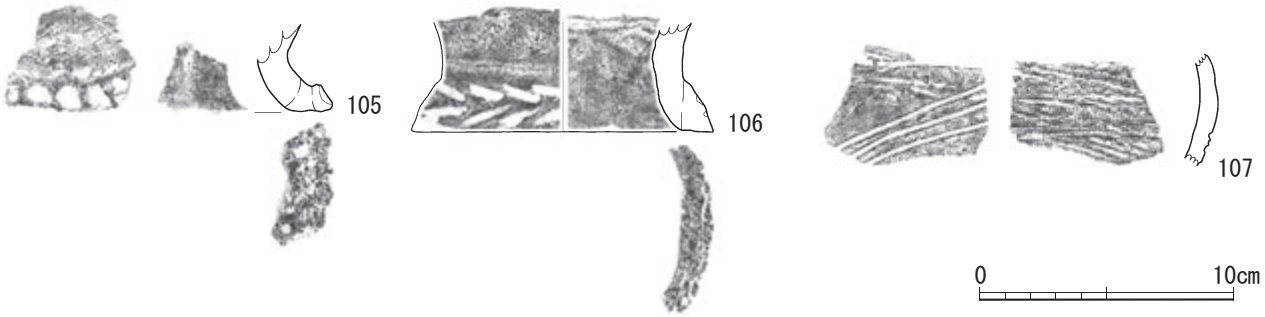
第19図108～124，第20図125～145は「出水式土器」として報告されていた土器である。108は小型の鉢と考えられる。やや張った胴部をもち，頸部の内面で明瞭な稜をもって緩く外反して口縁部に至る。口縁部の文様帯はそれほど肥厚していないが，粘土を貼り付けることと頸部の調整を強めに施すことで文様帯を作り出している。深く刻むように非常に短い沈線を縦位に施しており，沈線は２列に規則正しく並ぶ。外面には工具で器面調整したと考えられる痕跡が残るが，指オサエも残り器壁には凹凸が目立つ。109は口縁部に作られた台形の突起部分で，深く刺突するように縦に２列並べて短い沈線を施す。110は小片のため傾きは不明だが，やや外反すると考えられる口縁部である。粘土を貼り付けて肥厚させ，斜位の短い沈線と刺突文を施す。111は頸部でやや屈曲するがほぼ直立すると考えられる口縁部で，口唇部に平坦面を作る。粘土を貼り付けて肥厚させた口縁部に，逆



第16図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑩



第17図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑪



第18図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑫

く字状もしくは綾杉文に近い短い沈線及び刺突文を施す。器壁の内外面，文様帯ともに明瞭な横位の条痕が観察できる。112はやや外反して立ち上がる口縁部で，口唇部に平坦面を作り，刻目を施す。口縁部には縦位の短い沈線と３条の横位の沈線を施している。113は口縁部の突起部分で，明確な突起の形は不確かである。粘土を貼り付けて口縁部を肥厚させ，深い刺突文と３条の沈線を施す。部分的に肥厚帯をなぞるように沈線を施している。114は頸部で強く屈曲し外反する口縁部である。平坦な口唇部に粘土を貼り付けることで突起を作り，突起の外端は刻目を入れて波状に作っていると考えられる。突起下の口縁部には深くて短い沈線を２列で施し，平坦な口縁部には浅い沈線を斜位に施す。115は胴部から口縁部まで直立すると思われ，文様帯は作っていないが施文部分は口縁部に限られ，２列の刺突文を施す。116は胴部の器面調整によってわずかに口縁部の文様帯を作り出している。口縁部には斜位の沈線が施され，一部の沈線は中央がなでられることにより２列の短い沈線のようになっている。117は胴部から口縁部までが直立し，口唇部を平坦に作り，口縁部に綾杉文のような深い凹線を施す。器面調整により，わずかに口縁部の文様帯を作っている。118は胴部から口縁部にかけて緩く外反し，口唇部に平坦面を作っている。口縁部には４条の深い沈線を施している。119は胴部から丸みを帯びてやや内湾する口縁部で，口縁部に４条の沈線と刺突文を施す。口縁部の破損部分がわずかに持ち上がることから，突起が付いていた可能性がある。外面は荒い条痕が見られる。120は内湾する口縁部で，口唇部外端が丸く調整されている。口縁部に横位と縦位の沈線がそれぞれ３条施される。121は頸部で屈曲して外反し，わずかに内湾するように口縁部に至る。口縁部には逆く字状に深い凹線が施される。122はわずかに外反する口縁部で，口唇部を平坦に作る。口縁部の狭い範囲に，逆く字状に深めの短い沈線を施す。123はわずかに内反する口縁部で，斜位の沈線を施した上に４条の横位の沈線を施す。外面は荒い条痕がみられる。124は口縁部を肥厚させて斜位の沈線を施し，その沈線とは逆方向の斜位の沈線を肥厚帯下に施す。

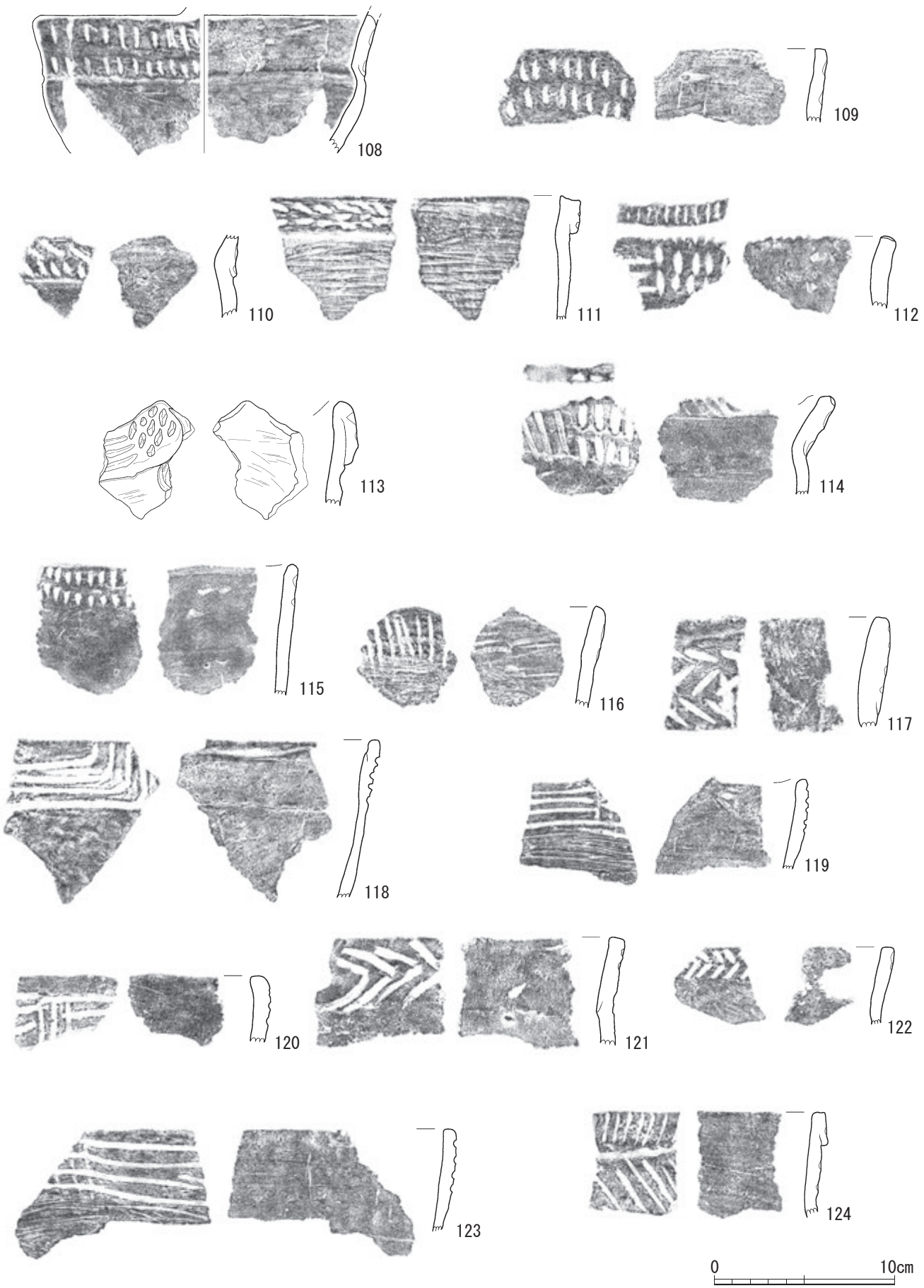
第20図125は頸部で屈曲して外反する口縁部で，肥厚させた口縁部に縦位または斜位の浅い沈線を施す。126は頸部で屈曲し外反する口縁部で，口唇部を平坦に作る。屈曲部を挟むように逆く字状の沈線を施す。127はやや外反した口縁部であり，調整により口縁部を肥厚させて文様帯をつくり，く字状の短い沈線を施す。128は頸部からやや外反する口縁部で，口唇部に平坦面を持つ。口縁部の狭い範囲に３条の横位の沈線と縦位２列の短い沈線，その下に斜位の沈線と細かく丸い刺突文を施す。口縁部が胴部に比べて厚い。129は丸く張った胴部をもち，頸部で緩く屈曲して口縁部に至る。口縁部の肥厚帯に逆Ｓ字状及び４条の横位の沈線を施す。また，肥厚帯の下に斜位の沈線と丸い刺突文を施し，施文部分は胴部にまで達する。130はほぼ垂直に立ち上がる口縁部で，口唇部に平坦面を持つ。口縁部をやや肥厚させて浅い沈線を横位に２条施し，肥厚帯の下には斜位の沈線を施す。内面は丁寧な工具ナデと考えられる。131は斜位の沈線とその下に刺突文を施す胴部である。小片のため傾きは不明である。外面には条痕が残る。132は口縁部を肥厚させて３条の横位の沈線を施す。肥厚帯の下には斜位の沈線を施す。133はやや内湾する口縁部で，口唇部に平坦面を持つ。口縁部に３条の横位の沈線，その下にく字状の短い沈線を施す。134は屈曲した頸部であり，口縁部にかけ大きく外反すると考えられる。先端が尖った施文具を使用していると思われ，深く刻むように斜位の沈線と刺突文を施す。また，屈曲部に穿孔の痕が確認できる。胴部には横位の浅い沈線が確認できるが，器面調整の際に付いた痕の可能性が高い。135は口縁部をやや肥厚させ，縦位の刺突文と２条の横位の沈線を施す。肥厚部の下には格子状に沈線を施しており，右下へ向けて斜位に沈線を施した後左下へ向けた斜位の沈線を二重に施文している。136は頸部からやや膨らみをもって内湾する口縁部であり，口縁部に沿って４条の沈線を施す。その下に八字状に沈線を施文し，沈線の間に３つの刺突文を施す。137は口縁部を肥厚させ，肥厚帯に斜位の沈線と刺突文を交互に施すものである。138は頸部

で内面に稜をもってわずかに外反し口縁部は垂直に立ち上がる。口縁部を肥厚させ，肥厚帯に４点×４点の刺突文を施し，その両端に４条の沈線を横位に施す。器壁が薄く，内面は非常に丁寧なナデで，ミガキに似た光沢がある。139は頸部内面が屈曲し，口縁部にかけてわずかに外反する。口縁部の肥厚帯に短い沈線及び３条の沈線を横位に施す。140は頸部からわずかに外反する口縁部で，器面調整によって外面に稜を作り出し，口縁部の文様帯としている。文様帯には刺突文が施文され，その両端に３条の横位の沈線が施される。141は胴部から口縁部にかけてやや外反する口縁部で，胴部は口縁部に比べ器壁がかなり厚くなる。口縁部を大きく肥厚させ，肥厚帯には口縁部に沿うような３条の沈線と刺突文を施す。破片のため全体の口縁形態は不明だが，口縁部の破損部分がわずかに上向きになっていること，沈線も口縁部に沿うように上向きになることから山形の口縁になる可能性がある。142は頸部内面に明瞭な稜を持ってわずかに外反し，口縁部にむかってほぼ垂直に立ち上がる。口唇部には平坦面を作る。口縁部をわずかに肥厚させ，口縁部外端に刺突文を施し，２条の沈線を施文した後に刺突文の下に縦位の浅い沈線を施す。内面は丁寧なナデにより器面調整される。143はやや張った胴部から頸部で屈曲し外反する口縁部である。口縁部をわずかに肥厚させ，筒状の施文具を用いて４つの刺突文を施す。その両端に対称的な曲線を施し，肥厚帯端部に浅い横位の沈線を施文する。144は内湾する口縁部で，口縁部付近に３条の沈線と刺突文を施す。145は頸部から屈曲して外反する口縁部で，口唇部に平坦面を作る。３㎝近い広めの肥厚部を作り，５条の沈線と刺突文を施す。

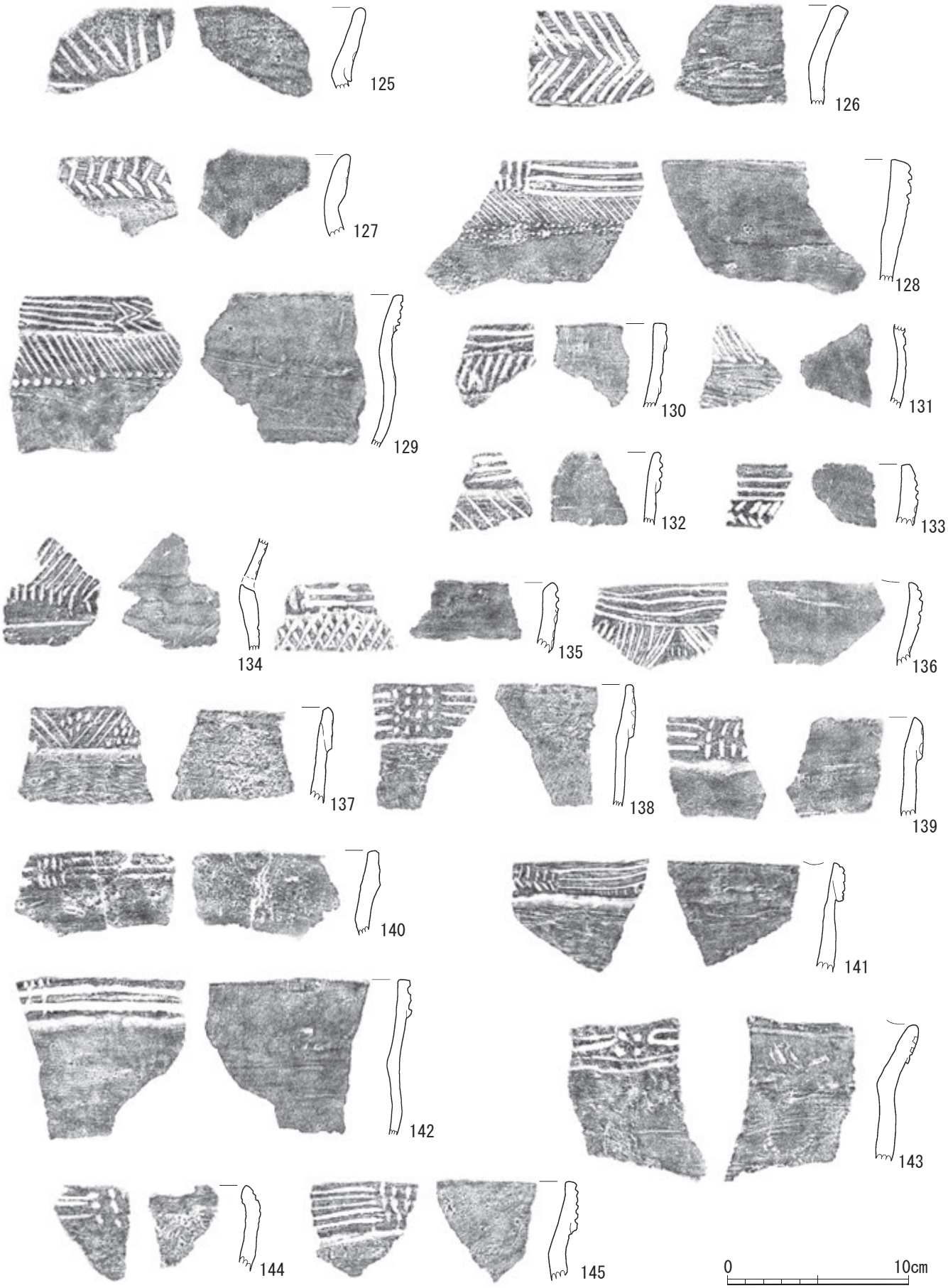
第21図146～158は「市来式土器」として報告されていた土器である。146はやや外反する口縁部で，山形を呈すると考えられる。口縁部から４㎝程下に大きく張り出す突帯をつけ，口縁部外端と突帯に刻目を施す。口縁部と突帯の間には４条の深い沈線を施す。147は断面が三角形を呈する口縁部である。口縁部の外端から三角形に張り出す部分までを文様帯としている。細い曲線の中及び口縁部外端，張り出し部に斜位の刻目を施す。内外面ともに丁寧なナデ調整で，堅緻な作りである。148は外反する口縁部で，屈曲部付近をやや肥厚させて幅広い文様帯としている。口縁部から肥厚部分の範囲に横位の貝殻刺突文を施す。施文帯はナデ調整され，内面には貝殻条痕が残り，一部ミガキのような調整も見られる。149は断面が三角形を呈する口縁部で，口縁端部を肥厚させ文様帯としている。斜位の貝殻刺突文と横位の浅い沈線を施し，沈線の端部は深く刺突している。施文帯はナデにより器面調整されているが，施文帯以下は貝殻条痕が残るがナデ消されている部分もある。150は外反する口縁部で，断面が三角形を呈する。口縁部の肥厚帯に斜位の貝殻刺突文を施す。内外面ともに，木製の工具によるものと考えられる条痕が残る。151は外反する口縁部で，断面が三角形状を呈する。口縁外端を肥厚させて文様帯とし，貝殻刺突文を施す。内外面ともに基本的にナデ調整であるが，外面には部分的に貝殻条痕が残り，内面には口縁部付近に横位の貝殻条痕が明瞭に残る。152はやや外反する口縁部で，口縁部の断面が三角形状を呈する。口縁部に貝殻刺突文を施し，胴部は内外面ともにナデ及びケズリにより器面調整される。153は口縁部付近の破片であると思われ，大きく張り出す突帯をつけ，刻目を施す。突帯の上部には沈線が施されるが，正確な本数は不明である。内外面ともに丁寧なナデによって器面調整され，堅緻な仕上がりである。154は外反する口縁部で，口縁部のやや下の断面が三角形状に肥厚する。肥厚帯に斜位の貝殻刺突文を施し，ナデによって器面調整されている。155は外反する口縁部で，断面が三角形を呈する。口縁部の肥厚帯に斜位の貝殻刺突文を施す。器面は丁寧なナデ調整で，内面には木製の工具と考えられる条痕が斜位方向に残る。156は頸部から外反しつつ立ち上がり，やや内湾して口縁部に至るものである。断面が三角形状に張り出し，口縁部から張り出し部分までの範囲に深い凹線を２～３条施す。157は断面が三角形を呈する口縁部で，山形口縁であると考えられる。口縁部から張り出し部までの範囲に貝殻の押引文を横位に施す。158は脚台で，透かしを有する。断面が三角形を呈し，張り出し部分には刻目を施す。また，脚台全面に横位または斜位の貝殻刺突文を施す。

第21図159～163は「研磨土器」として報告されていた土器である。159は横位の沈線と縄文が見られる胴部である。細かく刺突したように施文されており，疑似縄文の可能性がある。内外面ともにミガキにより器面調整され，光沢がある。160は頸部で屈曲し外反する口縁部である。口縁部の幅１㎝程を肥厚させ，斜位の刻目を施す。文様帯はナデ調整，器壁の内外面・口唇部はミガキ調整される。161は２条の沈線間に斜位の刻目を施す胴部である。外面はミガキ，内面はナデにより器面調整されている。162は沈線間に刻目及び縄文を施す胴部である。横位の沈線間は大きめの斜位の刻目を，渦巻き状に回ると考えられる沈線間には細い横位の刻目を施す。また，胴部の最大径と考えられる部分には沈線間に縄文が施される。外面はミガキ，内面はナデにより器面調整される。163は屈曲した胴部で，わずかに沈線が観察できるが沈線間の文様は不明である。内外面ともにミガキで器面調整されている。

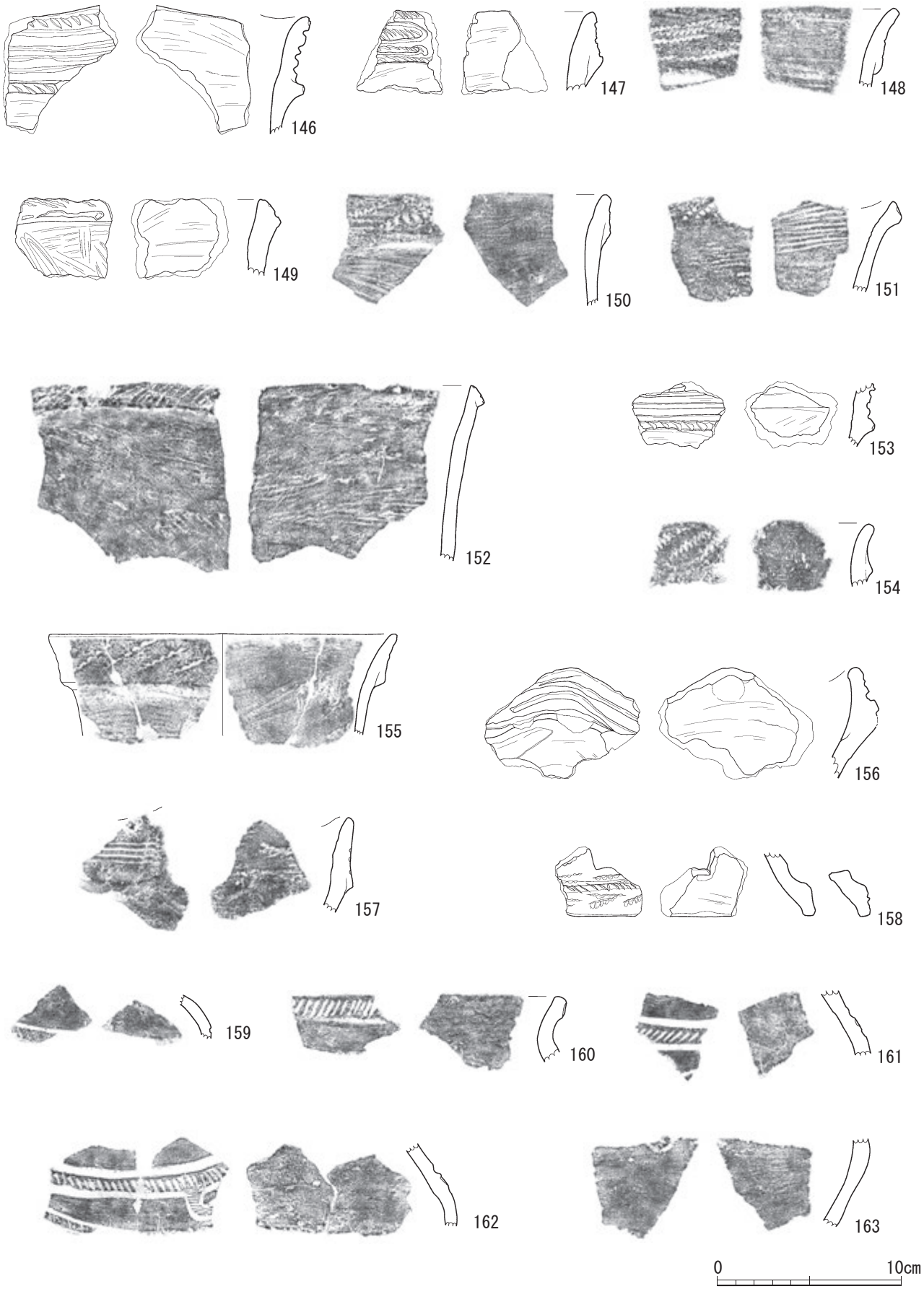
第22図164・165は「彦崎ＫＩ該当土器」として報告されていた土器である。河口の報告では図版のキャプションに「岡崎ＫＩ該当土器」と記されていたが，誤植であると考えられる。164・165ともに，頸部で強く屈曲し外



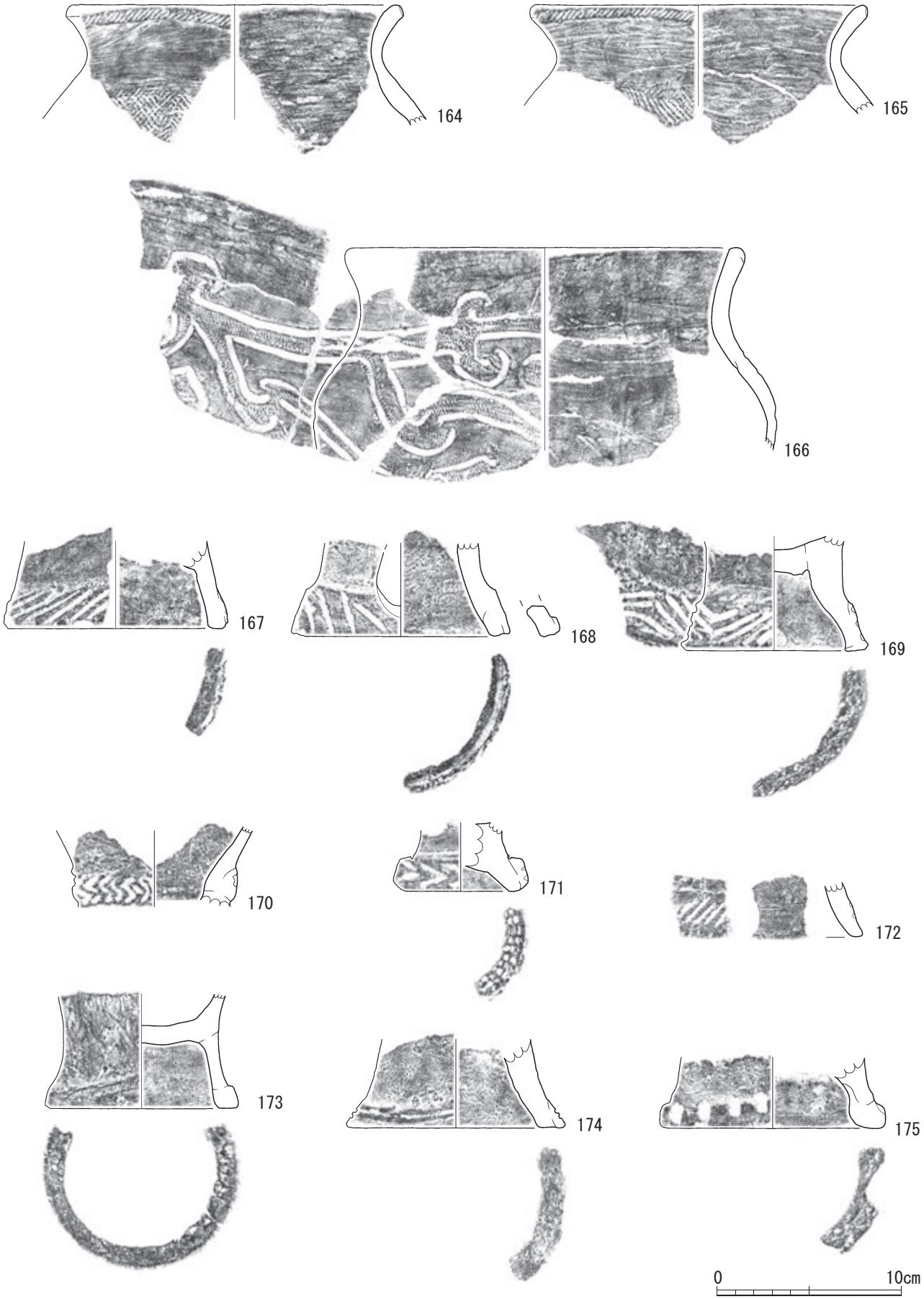
第19図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑬



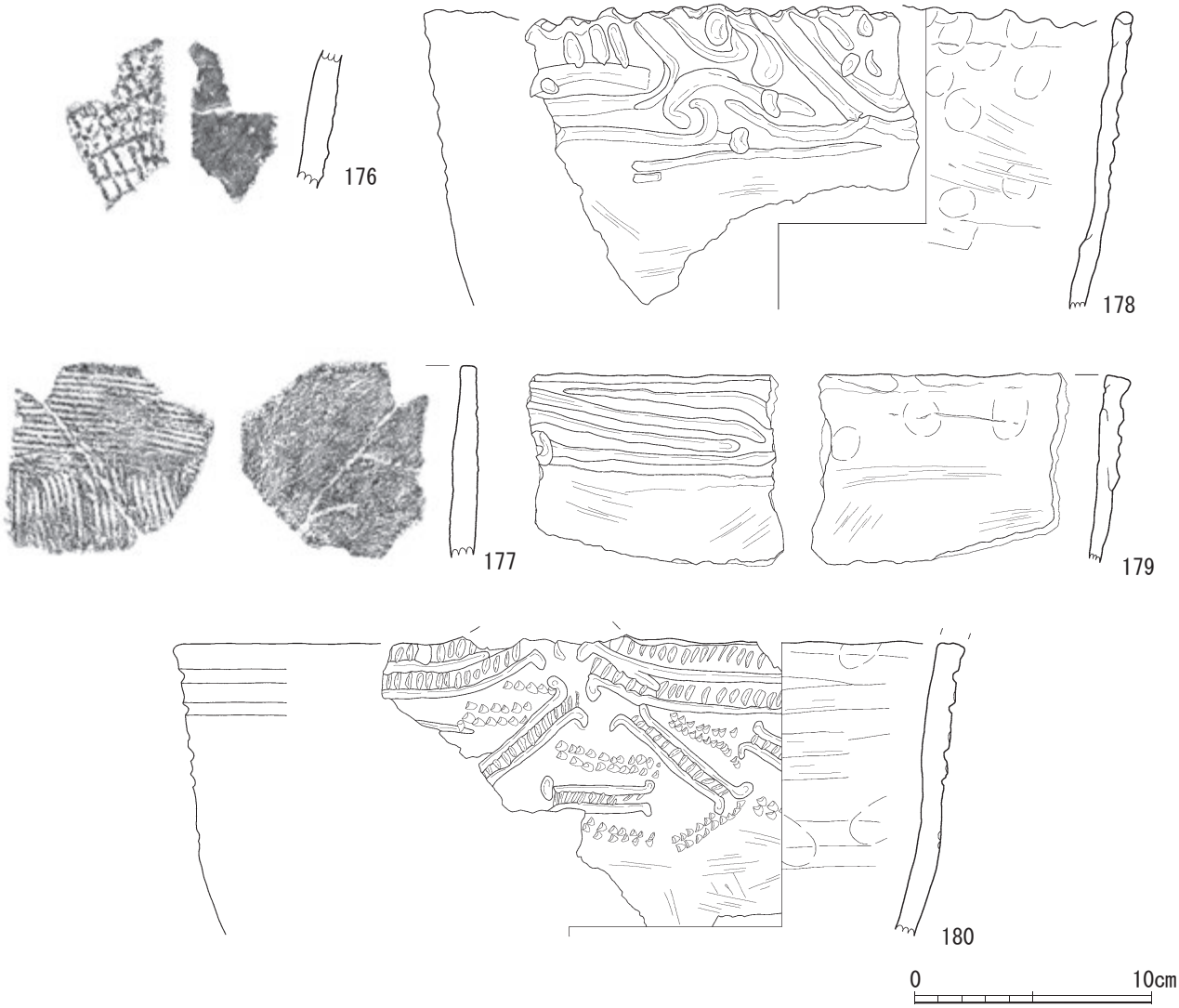
第20図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑭



第21図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑮



第22図　『鹿児島県文化財調査報告書』報告分土器⑯

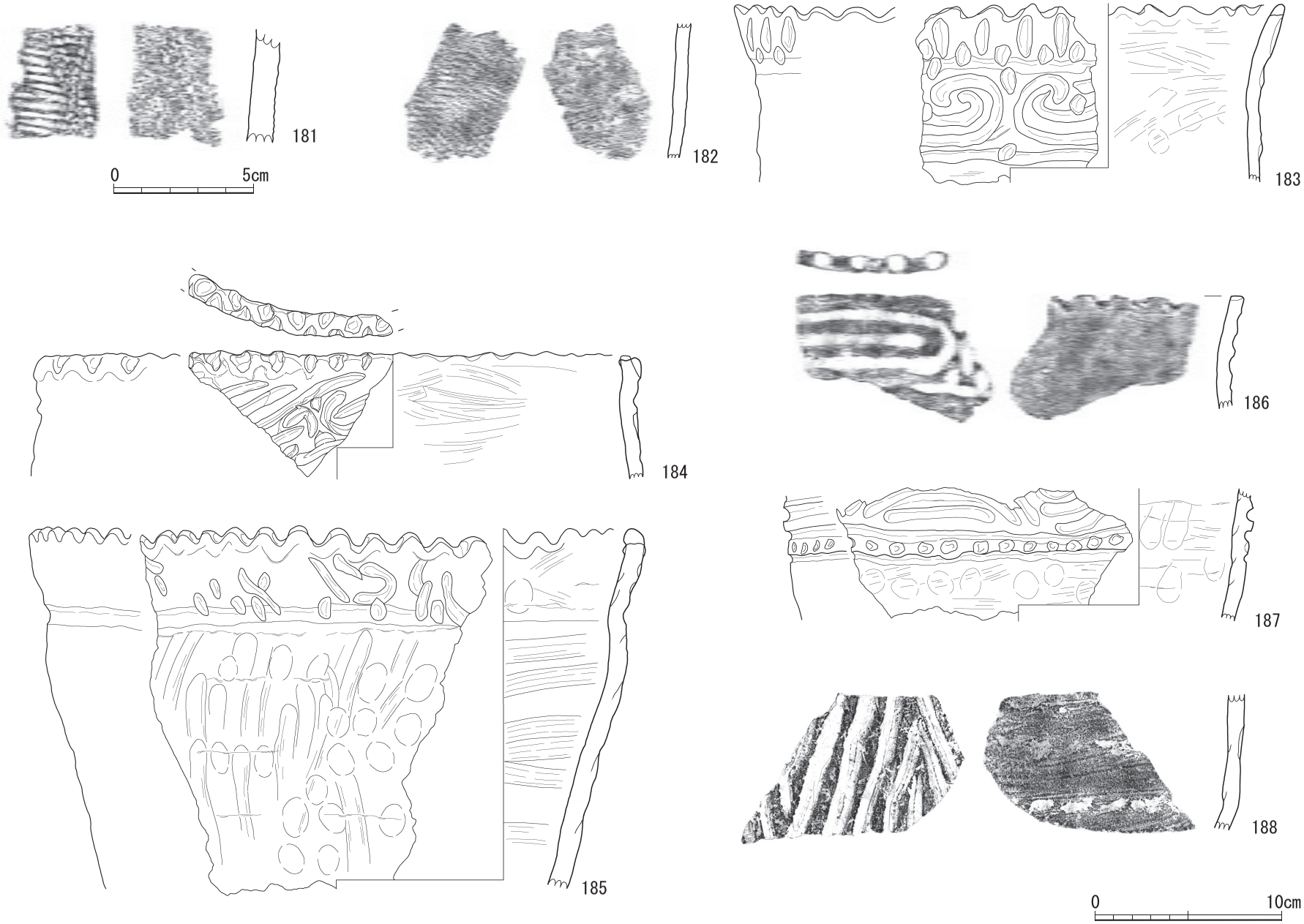


第23図　『出水郷土誌』掲載土器

反する口縁部である。口縁部端部に斜位の縄文を施し，屈曲部下の胴部には，164は格子状に，165は斜位に縄文を施す。内外面ともにミガキにより器面調整される。

第22図166は「研磨土器」として報告されていた土器である。丸く張り出した肩部から内湾して頸部に至り，口縁部はやや外反する。頸部から胴部にかけて施した沈線の間に貝殻を使った疑似縄文を施文する。また，沈線の施文方向によって縄文の施文方向も変えていることから，施文方法は充填縄文と同様であると考えられる。内外面ともにミガキによる器面調整で，口縁部や頸部に比べて胴部最大径部分の器壁が薄い。

第22図167～175は「土器底部」として報告されていた土器で，いずれも中空の脚台である。167は脚台の端部から２㎝程の範囲を肥厚させ，肥厚帯に斜位の沈線を施す。168は透かしを有する脚台である。端部から2.5㎝程の範囲を肥厚させ，肥厚帯に斜位の沈線を施す。169は胴部との接合部が非常に厚く，器壁がやや薄くなりながら底部へ至る。端部から2.5㎝程を肥厚させ，幾何学的な深い沈線を施す。底部に細かい凹凸が見られ，鯨の脊椎骨の圧痕の可能性がある。全体的に器壁が厚く安定感があり，堅緻な仕上がりである。170は脚部と胴部の境目を肥厚させ，Ｓ字状に深い沈線を施す。大部分が欠損しているため，上下が不確かである。171は小型の脚台で，胴部の底と脚部の裏との厚さがおよそ2.5㎝と非常に厚い。脚台端部から２㎝程を肥厚させ，深く刻むようにして逆く字状の短い沈線を施す。また，底部には刺突連点文が確認でき，製作過程でついたものではなく意図的に施文したものであると考えられる。172は小型の脚台と思われ，端部から２㎝の範囲をわずかに肥厚させ斜位の沈線を施す。173は胴部との接合部からやや厚くなりながら底部へ至る脚台である。脚台の端部を断面四角形になるように肥厚させている。外面は縦方向にケズリ



第24図　未報告分土器①

を施した後，ナデによって器面調整していると考えられる。底部もナデ調整されているが，一部鯨の脊椎骨の痕跡が見られる。174はなだらかに開いて底部に至る脚台で，端部から１㎝ほどの範囲を控えめに肥厚させ横位の沈線を施す。175は端部を顕著に張り出すように肥厚させ，刺突文を横位に施す。施文帯はナデ調整されるが，施文帯以外は内外面ともに指オサエが残り粗いナデで器面調整される。

（２）『出水郷土誌』報告分（第23図）

『出水郷土誌』（出水郷土誌編集委員会1968）に掲載されていた出水貝塚の遺物の中で，埋文センターで河口コレクションとして保管されていた土器を再実測して掲載する。ただし，『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯にも重複して掲載されていた土器は（１）の項で掲載している。

176は「押型文」として報告されていた土器で，器面全体に格子状押型文を施す胴部である。177は「貝殻条痕文」と報告されていた土器である。直行する口縁部で，口唇部に平坦面をもつ。口縁部付近に横位の条痕文，その下に縦位の条痕文を施す。178は「阿高式」として報告されていた土器である。口唇部に凹点を施し，緩やかな波状口縁を作る。文様帯は口縁部付近に限られ，浅い凹線で入組文を施す。179は「阿高式」として報告されていた土器である。わずかに外反する口縁部で，口縁部外端をやや肥厚させる。肥厚と器面調整により口縁部に文様帯を作り出し，横位の凹線を施す。180は口縁部でやや外反する口縁部である。口唇部に平坦面を持ち，基本的に平口縁であるが突帯があったと考えられる部分が破損している。口縁部に沿うように刻目を施し，口縁部から胴部にかけては蕨形の沈線を２条一組で施した後その間に充填するように刻目を施す。胴部の最大径部分まで刺突文を施す。外面はケズリ後にナデ調整し，内面はナデ調整により器面調整している。

（３）未報告分（第24図～第34図）

1953年・1954年調査時出土土器について，埋文センターに河口コレクションとして保管してあり報告書に掲載されなかった遺物から抽出し，実測して掲載する。縄文時代早期の土器と中期～後期の土器に分け，後者については土器分類を行った。

ア　縄文時代早期（第24図181・182）

縄文時代早期の土器については押型文が多数確認できたが，主要な押型文土器は河口が既に報告していることから新たな実測は行わなかった。押型文土器以外で早期に該当すると考えられる土器片が確認できたので１点実測し，報告する。

第24図181は小片のため全体の器形や傾き等は不明だが，角筒土器の可能性がある。横位に貝殻条痕を施し，その上から２条１単位でＸ字状に貝殻刺突文を施す二重施文である。内面はナデにより器面調整されている。縄文時代早期の志風頭式に近いと考えられる。182は器面全体に縄文を施す。器壁が薄く，胎土に大きめの白色粒子を含む。内面の上部はナデ，下部はケズリにより器面調整している。早期の可能性が高いが出土層が不明である。

イ　縄文時代中期～後期（第24図183～第34図）

縄文時代中期～後期に該当すると考えられる土器を抽出し，器形，文様を参考に分類を行った。

１類土器（第24図183～188）

口縁部付近または胴部に，太い凹線で入組文や凹点を施す土器群である。口唇部には深く大きめの凹点を施し，波状口縁を作る。胎土に滑石を含むものが多い。阿高式土器に該当する。

２類土器（第25図189～192）

口縁部付近に凹点を施す土器群である。口縁部を凹線で区切って文様帯を作っているものもある。

３類土器（第25図193～195，第26図196）

口縁部付近に文様帯を作り，入組文よりも直線化が進んだ凹線文を施すものである。く字状，逆Ｓ字状等の文様も見られる。主にヘラ状工具で削るようにして施文している。文様帯の作り方は肥厚・凹線による区切り・胴部ケズリによる肥厚帯の作出など様々である。南福寺式土器に該当する。

４類土器（第27図197～205）

３類土器より更に直線化・細線化が進んだ沈線を施す土器群である。胴部がやや張り，頸部で屈曲して口縁部にかけ直行または外反する深鉢が多い。また，口縁部を肥厚させ，文様帯として強調しているものが多い。出水式土器に該当する。

５類土器（第28図206～208）

装飾に沈線や刻目突帯を用いる土器群で，４類土器と同時期の土器である可能性が高い。

６類土器（第29図209～220）

磨消縄文系と考えられる土器を一括した。縄文の他に，貝殻を利用した疑似縄文も見られる。

無文土器（第30図221～226，第31図227～233）

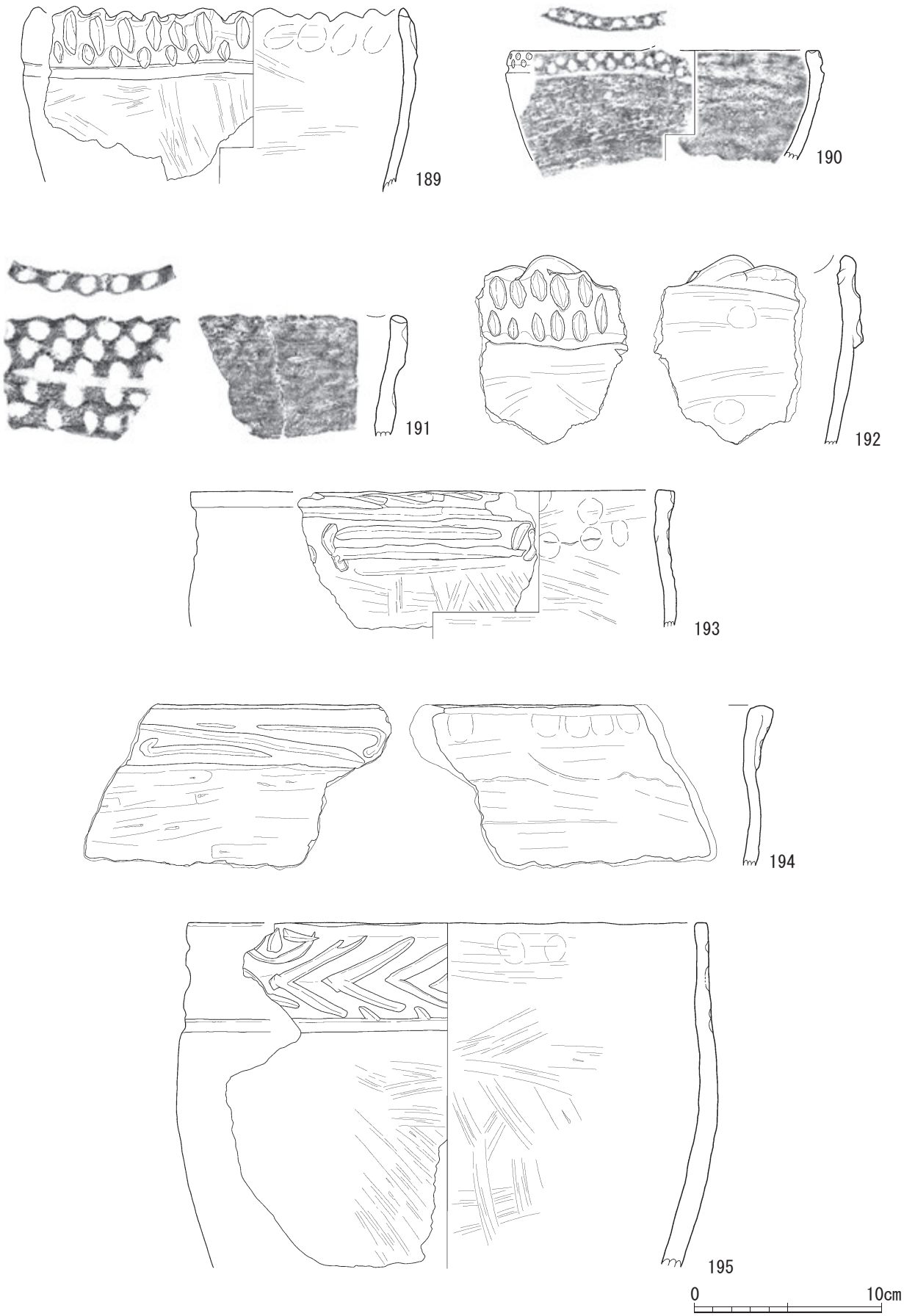
無文の土器を一括した。突起や把手がついたものも含まれ，胎土や器面調整からいずれも南福寺式～出水式の時期に属すると考えられる。

底部・脚台（第32図234～238，第33図239～249）

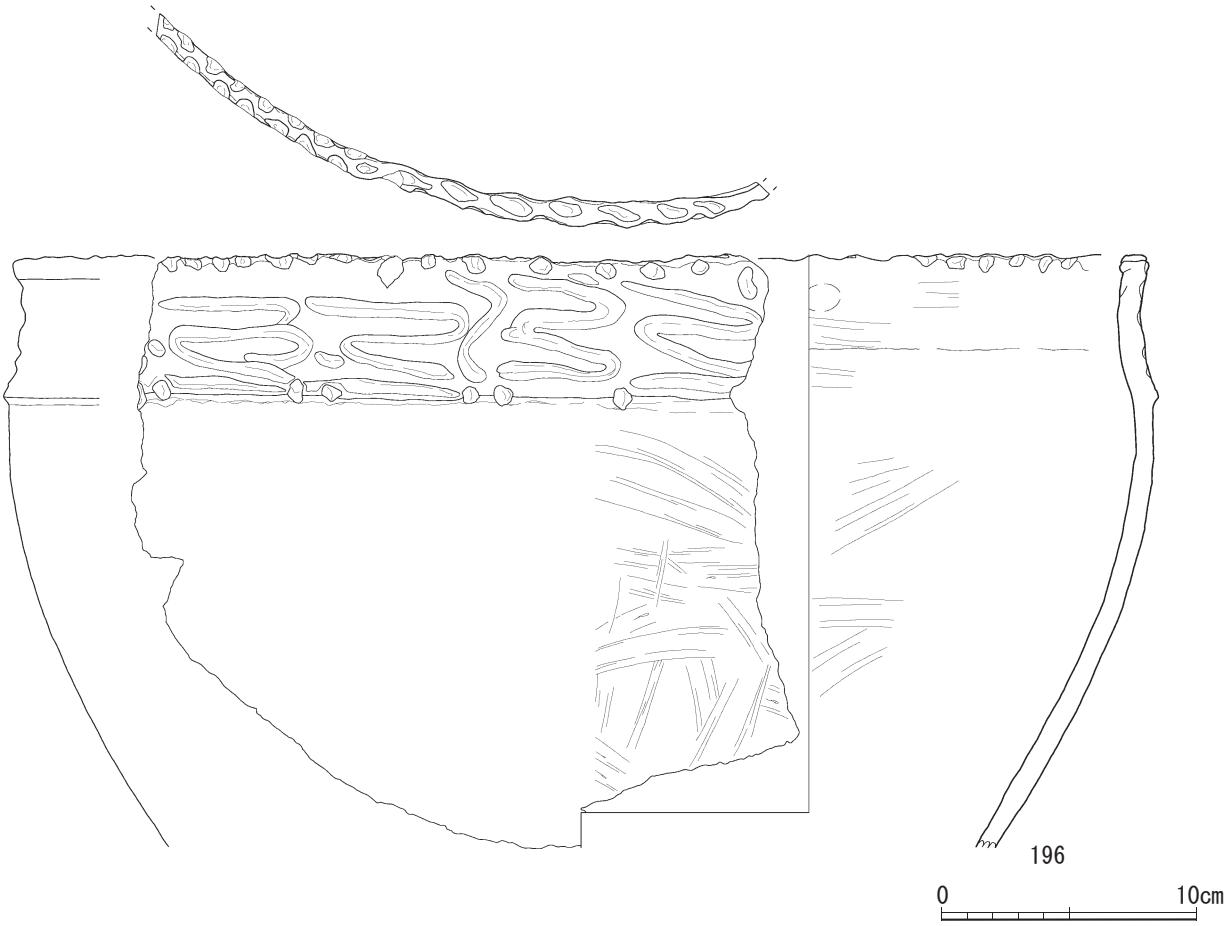
胴部から底部にかけての破片及び脚台を一括した。底部はいずれも中心部がわずかに上がる。胎土，器面調整及び文様から，いずれも南福寺式～出水式の時期に属すると考えられる。

その他の土器（第34図250～254）

１～６類の分類に当てはまらない土器及び所属時期不明の土器をその他の土器としてまとめた。



第25図　未報告分土器②



第26図　未報告分土器③

円盤形土製品（第34図255～266）

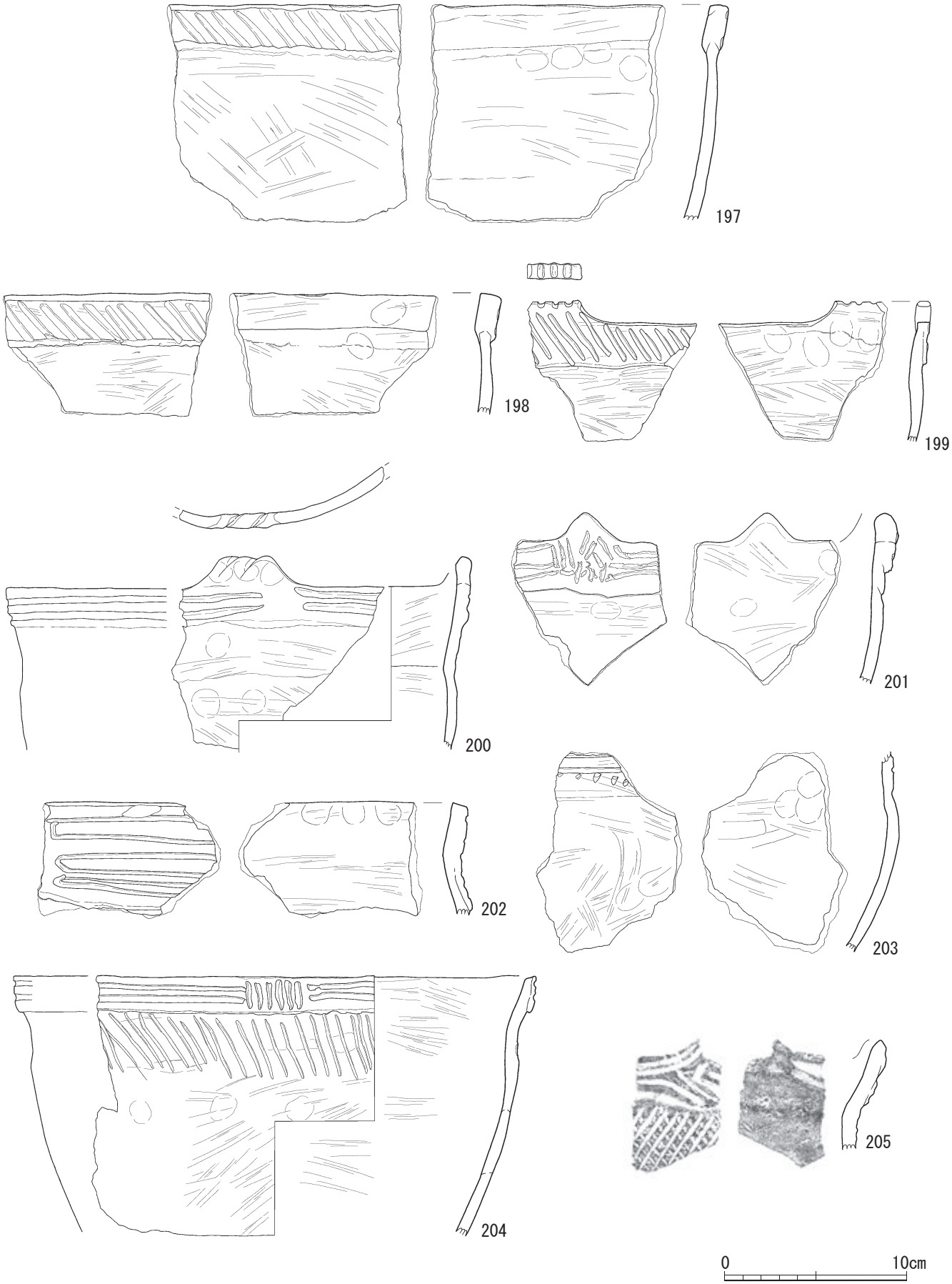
土器片を再利用して円盤状に加工したと考えられるものを抽出した。外面及び裏面は土器本来の状態を維持しており，円盤状に打ち欠いた以外に加工した痕跡は見られない。

①　１類土器

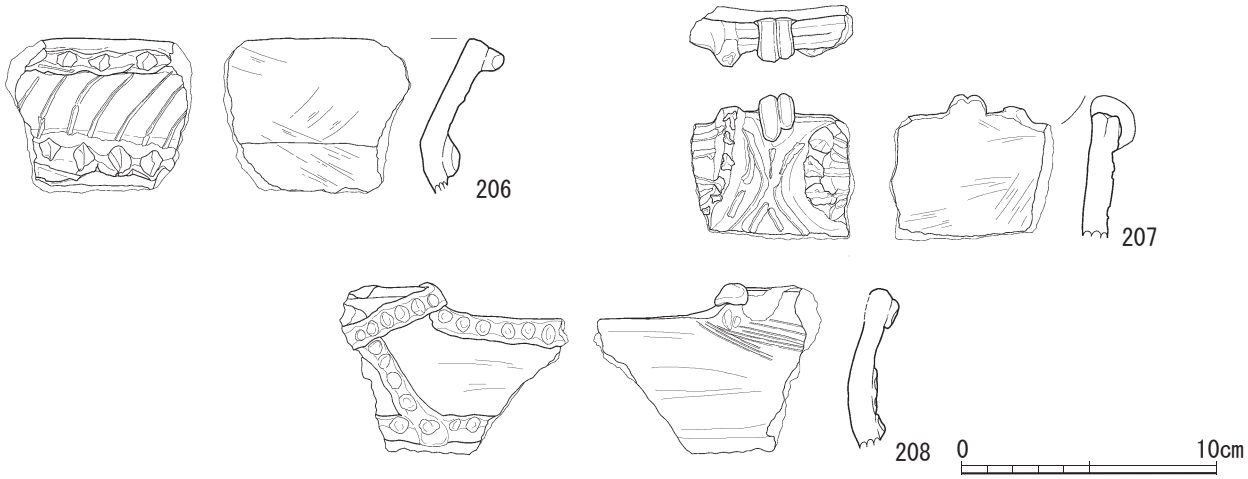
第24図183は外反する口縁部で，口縁部を波状に作る。口縁部に縦位の短い凹線を施し，その下に横位の凹線，凹点及び渦巻き状の凹線を左右対称に施文する。184は口縁部をやや肥厚させ，口唇部及び口縁部外端に交互に凹点を施す。口縁部下には凹点や，太い凹線で横位・斜位の直線や曲線を施す。外面の文様帯はナデにより器面調整され，内面には木製の工具によるものと考えられる条痕が明瞭に残る。185は底部からやや外反しながら立ち上がった胴部をもち，頸部でわずかに屈曲して外反する口縁部である。口縁は波状に作り，口縁部付近に不規則な凹点や凹線を施し，頸部付近に横位の凹線を施文する。外面は，輪積み痕や指オサエ及び縦方向に押さえながらの強いナデが明瞭に残り，内面は木製の工具によるものと考えられる条痕が残る。186はやや外反する口縁部で，口唇部に凹点を施す。口縁部付近には凹点や太い凹線で横位の直線や曲線を施す。胎土はにぶい赤褐色で，内外面ともにナデにより器面調整される。187は胴部であり，深い凹線を横位に２条施した中に凹点を施文する。横位の凹線の上には比較的短い凹線を施す。器面は内外面ともにナデ調整であるが，輪積み痕や指オサエが残る。188は太い凹線を施す胴部であり，滑石も多く含むことから阿高式系の範疇で分類した。内面には条痕と輪積みの痕が残る。

②　２類土器

第25図189は胴部から内湾して口縁部に至る。口縁部は波状に作り，横位の凹線で区切って文様帯とする。文様帯には，波状口縁と対応するように短い凹線と凹点を交互に施す。内外面ともにナデにより器面調整される。190は小型の鉢で，口縁部は内反する。口唇部に平坦面を持ち，小型で円形の刺突文を施す。また，口縁部を沈線で区切って狭い文様帯を作り，口唇部と同様の刺突文を交互に施す。口縁部の一端はやや立ち上がるところで破損しており，刺突文の交互の施文パターンも崩れることから突起があったと思われる。外面には横方向のケズ



第27図　未報告分土器④



第28図　未報告分土器⑤

リが明瞭に残り，内面はナデにより器面調整される。191は口唇部及び口縁部に規則的に凹点を施す。器面は内外面ともにナデ調整され，外面には輪積みの痕が残る。192はやや内湾する口縁部である。口縁部に捻った粘土紐で突起を作り，口縁部を顕著に肥厚させて文様帯とする。肥厚帯には縦位に凹点を施す。外面は丁寧なナデ，内面は丁寧なナデによって器面調整され，堅緻な仕上がりである。

③　３類土器

第25図193はやや張った胴部を持ち，頸部付近から直行する口縁部である。口唇部は平坦面を持ち，口縁部外端を肥厚させて斜位の凹線を施す。その下には横位の浅い凹線を施す。外面はケズリ後にナデ，内面はナデにより器面調整され，内面には指オサエが多く残る。194はやや張った胴部を持ち，頸部からわずかに外反する口縁部である。口縁部外端から口縁部下3.5㎝程を肥厚させて文様帯とし，文様帯には横位の凹線を施す。胴部の横位のケズリ調整で器壁を薄く仕上げることで，文様帯を強調している。195はやや張った胴部をもち，口縁部は直行する。凹線で区切って文様帯とし，く字状または横位の凹線や凹点を施す。内外面ともにケズリ後ナデにより器面調整しており，外面は胴部最大径付近までは横位，それより下部は斜位の調整が見られる。第26図196は胴部がやや張り，頸部から口縁部にかけて緩くくびれて口縁部へ至る。口唇部を平坦に作り，口唇部及び口縁部外端に交互に凹点を施す部分と口縁部の外端及び内端に交互に凹点を施す部分がある。胴部の最大径付近を肥厚させて文様帯とし，肥厚部分には一定の間隔を空けて凹点を施す。文様帯には逆Ｓ字状・３字状・横位の凹線及び凹点を施す。

④　４類土器

第27図197・198はやや外反する口縁部で，２点は同一個体の可能性が高い。口唇部に平坦面を持ち，口縁部を内外面ともに肥厚させる。肥厚帯は丁寧なナデで器面調整し，その上に非常に浅い沈線を施す。外面はケズリ後にナデ，内面は丁寧なナデで器面調整される。胎土に金雲母を多く含む。199は頸部でわずかに外反し，直行して立ち上がる口縁部である。口唇部は平坦面を持ち，部分的に粘土を貼り付けて突帯を作る。突帯上には等間隔で凹点を施す。口縁部を肥厚させて文様帯とし，斜位の浅い沈線を施す。内外面ともにミガキ及びナデで丁寧に器面調整される。200は頸部の内面で稜をもってやや外反し，直行して口縁部へ至る。口唇部は平坦面を持ち，部分的に粘土紐を撚る形で突帯をつくる。口縁部を肥厚させ，断続的な２本の沈線を横位に施す。外面はナデ調整され，輪積みの痕が残る。内面は丁寧なナデにより器面調整される。201はやや内湾する口縁部で，山形の突帯を有する。口縁部を２段階に肥厚させ，文様帯としている。口縁部に沿うように横位の沈線を３条施し，突帯の下には縦位または斜位の短い沈線を施文する。202は頸部で屈曲してやや外反する口縁部で，口唇部は平坦面をもつ。口縁部から頸部下にかけて肥厚させて沈線で矩形文を施すが，対称的な施文になると思われる。左右対称になる文様は200・201・204などに見られる。203はやや張った胴部を持ち，頸部で屈曲する破片である。屈曲部の上部には横位の沈線と刺突文が観察できる。このような沈線の下に刺突文を施す文様は，河口が報告した第17図99や第20図141に類似する。外面はナデ，内面は丁寧なナデと工具ナデで器面調整しており，器壁が薄く堅緻な仕上がりである。土器底部の第32図238の胎土及び器面調整と類似しており，同一個体の可能性がある。204は頸部から緩く屈曲してやや外反する口縁部で，口唇部を平坦に作る。口縁部を肥厚させ，肥厚帯に縦位の短い沈線とその両端に横位の沈線を２条施す。肥厚帯の

下には斜位の沈線を施す。内外面ともにナデにより器面調整される。205は頸部で大きく屈曲して外反し，直行して口縁部へ至る。口縁部には幅広の突帯を二叉に分かれるように貼り付け，一方は口縁部上の突帯となる。突帯上には２条の沈線を施す。突帯下には格子状の沈線を施文し，右下へ向けての斜位の沈線を施文したあと左下へ向けての斜位の沈線を施している。

⑤　５類土器

206は頸部が明瞭な稜をもって屈曲し，外反する口縁部である。口唇部は平坦面を持つ。口縁部外端と屈曲部に横位の刻目突帯を貼り付け，その間に斜位の浅い沈線を施す。内面は丁寧なナデ調整である。207は突帯や沈線を多用して装飾された口縁部である。口唇部は基本的にナデ調整されて平坦面を持つと考えられるが，部分的に接合痕が明瞭に残る。口縁部の内面から外面にかけて２本の粘土紐を跨がせ，突帯を作る。この突帯を中心に左右対称の文様を展開させており，刻目突帯や沈線をＸ字状に施して装飾する。内面は丁寧なナデにより器面調整される。208は外反する口縁部で，突帯に凹点を施した刻目突帯で装飾する。口縁部には台形と考えられる突起を持ち，その突起の内面から跨ぐ刻目突帯２本を外面で交差させると考えられる。また，口縁部外端と屈曲部分に横位の刻目突帯を貼り付ける。内外面ともに丁寧なナデ調整を施し，内面の突帯付近には木製の工具によるものと考えられる条痕が残る。

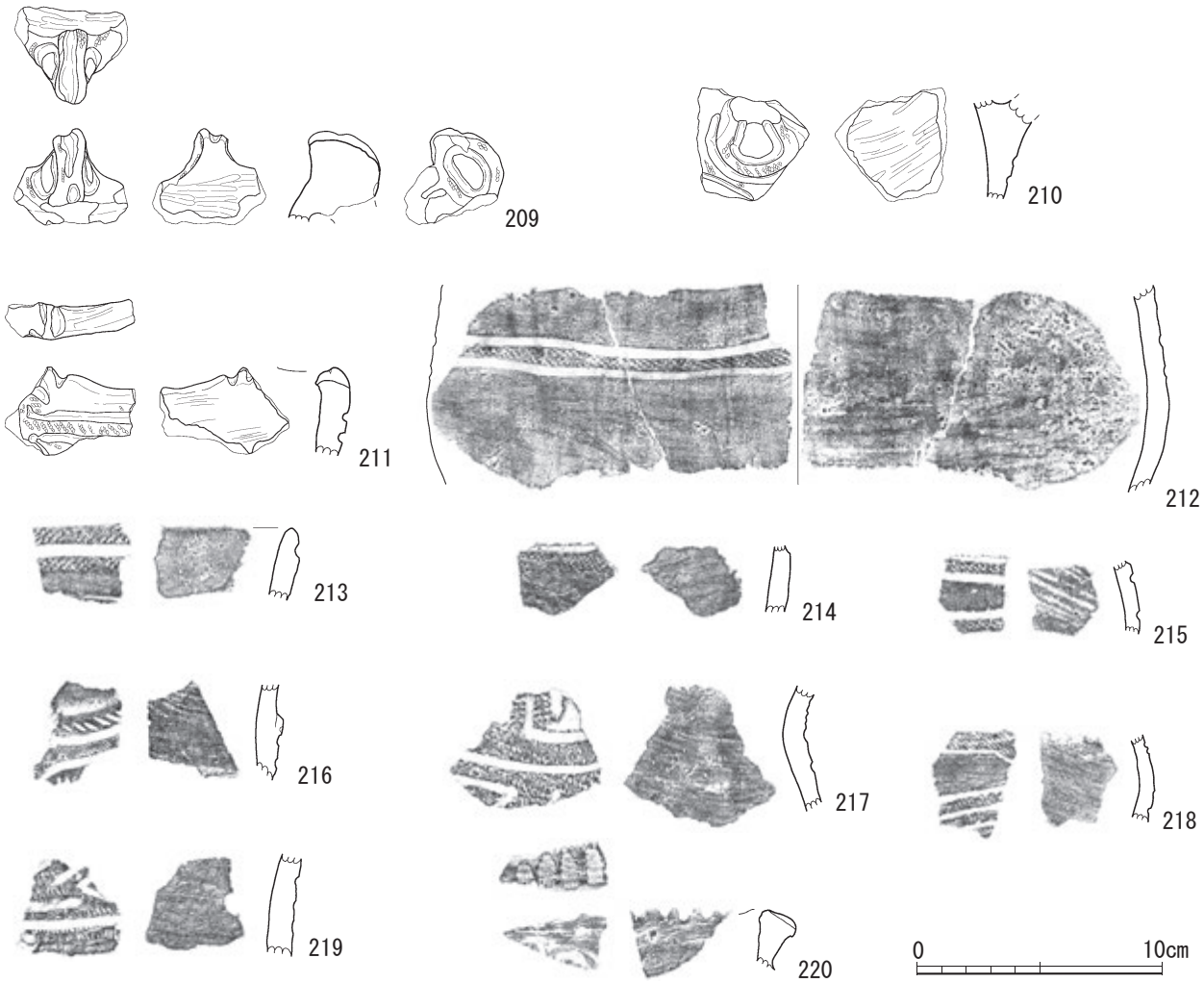
⑥　６類土器

当分類に該当する土器片は小片が多く，213～220は傾きや上下が不明である。

209は内外面に張り出す楕円状の突起であり，胴部へ続く橋状把手の一部と考えられる。突起の上面には，内面から外面にかけて凹線を施す。把手が付くと考えられる破損部分付近には凹点が見られるが，凹線が途切れている可能性もある。突起の左右の面には突起の形に沿うように楕円状の沈線を施し，その周辺及び突起に縄文を施文する。内面はミガキにより器面調整される。210は丸みを帯びた胴部に付く橋状把手の一部と思われ，209と同一個体の可能性がある。把手の付け根に弧を描くように２本の沈線を施し，その間及び胴部に縄文を施す。胴部にも沈線が見られるが，文様形態は不明である。内面はミガキ及びナデにより器面調整される。211は内湾する口縁部で，口唇部に凹点を施す突起があると考えられるが破損のため正確な形は不明である。横位の沈線を施し，その間に縄文を施文する。212はやや張る胴部で，横位の沈線を２条施し，その間に縄文を施す。沈線→縄文の順で施文したと考えられる。外面はミガキ，内面はナデにより器面調整される。213は口縁部に横位の沈線を施し，その上下に沈線とほぼ等間隔で縄文を施文する。縄文の下は丁寧なナデにより器壁がやや薄くなり，横位の沈線が見られる。214は横位の沈線の下に縄文を施しているが，縄文を一定の幅で残し下部はナデ消されている。内面の胎土は赤色を呈す。215は２条の沈線の間に縄文を施す。外面はミガキ，ナデにより器面調整され，内面は貝殻条痕が残る。216は斜位の刻目を施した突帯の下に横位の沈線を施し，二枚貝の殻頂部分を押圧し貝殻背圧痕文を施文する。内外面ともにミガキにより器面調整される。217は屈曲する頸部で，矩形及び横位の沈線を施文した後に全面に縄文を施す。218は押引くようにして沈線を施しており，線の内部に等間隔で刺突文が見られる。数条の沈線を跨いで縄文を施すが，貝殻を利用した疑似縄文であると考えられる。219は沈線を横位に施した後，巻き貝を回転させ疑似縄文を施す。内面には木製の工具によるものと考えられる条痕が残る。220は口唇部に広い平坦面を作り，巻貝の殻表を押し当てて圧痕文を施文する。胴部文様は不明だが，一部沈線が観察できる。

⑦　無文土器

第30図221はやや外反する口縁部で，口唇部に凹点を施し波状口縁を作り出す。粘土の貼り付け及び器面調整で胴部を薄く作り出すことによって口縁部を肥厚させ，肥厚帯には指オサエが残る。222は胴部が張り頸部から直行して口縁部へ至る。粘土の貼り付け及び器面調整により口縁部に肥厚帯を作り，肥厚帯はナデ調整される。口縁部端部から肥厚帯を跨ぐように幅広の橋状把手をつける。胴部外面はケズリ，内面はナデ調整だが部分的に貝殻条痕が残る。223は大きく張った胴部から頸部に至り，やや内反して口縁部へ至る。口縁部を肥厚させ，肥厚帯及び胴部は横位にミガキに近い強いナデを施す。内面はナデ調整で，部分的に接合痕が残る。224は丸く張った胴部から口縁部にかけ内湾する。口縁部内端は丸く調整し，口縁部外端は直行する。外面はナデにより器面調整され，内面は横位の貝殻条痕文が明瞭に残る。225はやや外反する口縁部で，細い粘土紐を交差させるように捻って突帯を作る。口縁部の狭い範囲を肥厚させる。外面はケズリ及びナデ，内面はミガキにより器面調整される。226は大型の深鉢で，わずかに張る胴部から頸部にいたり，やや外反する口縁部である。口唇部は平坦面を持ち，等間隔で凹点を施す。口縁部の外端及び口縁部を二重に肥厚させ，肥厚帯には指オサエが明瞭に残る。227・228は，胎土や器面調整から同一個体である可能性があるが，器壁の厚さや頸部の屈曲が均一でないことから念のため個別に実測した。いずれも張った胴部を持ち，頸部で屈曲して口縁部がやや外反する。227は捻った粘土紐で突帯を作る。内外面ともに荒いミガキにより器面調整される。229はやや外反する口縁部で，捻った粘土紐で突帯を作る。外面はナデ，内面はナデ及び工具ナデにより器面調整される。230はわずかに張った胴部

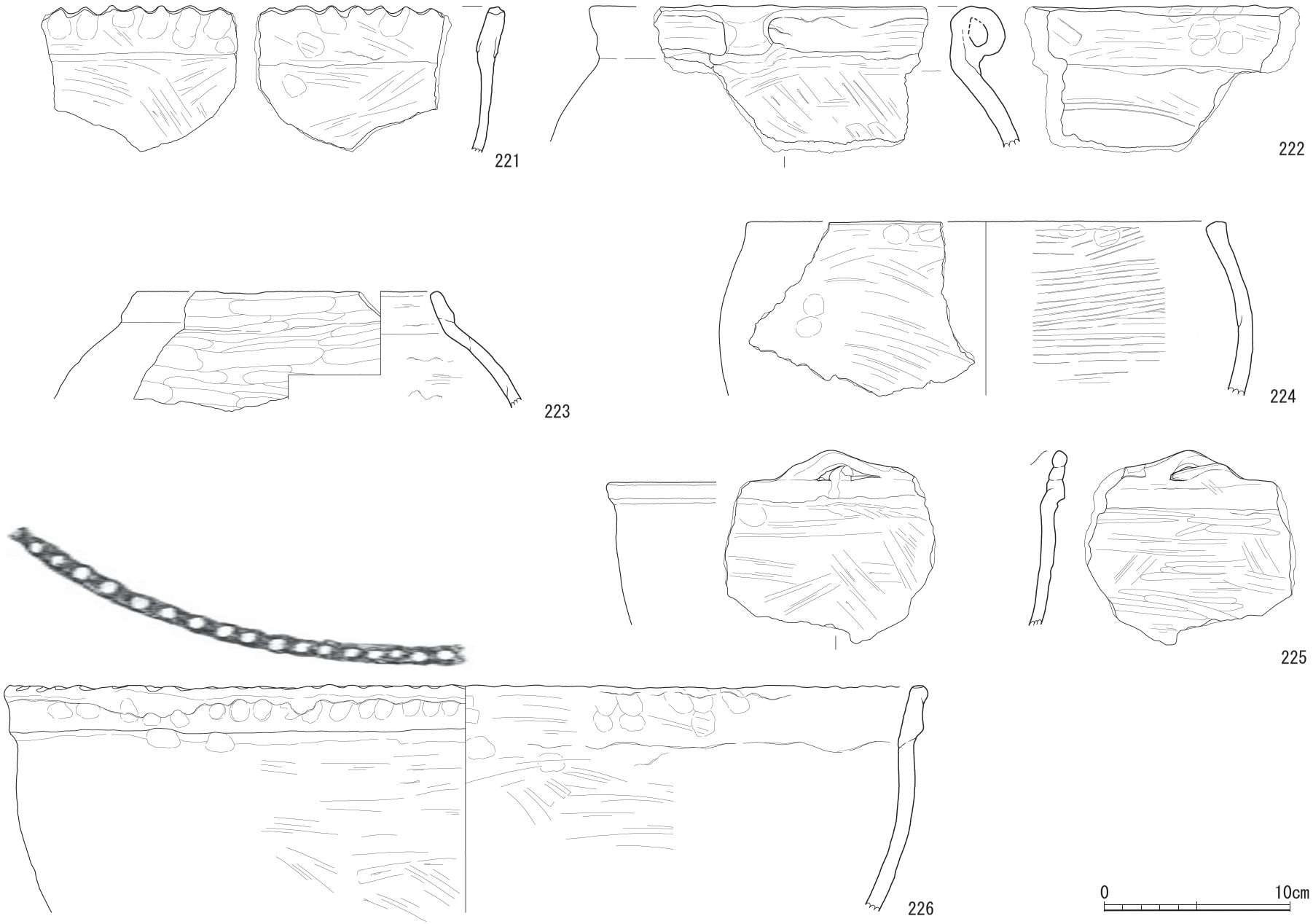


第29図　未報告分土器⑥

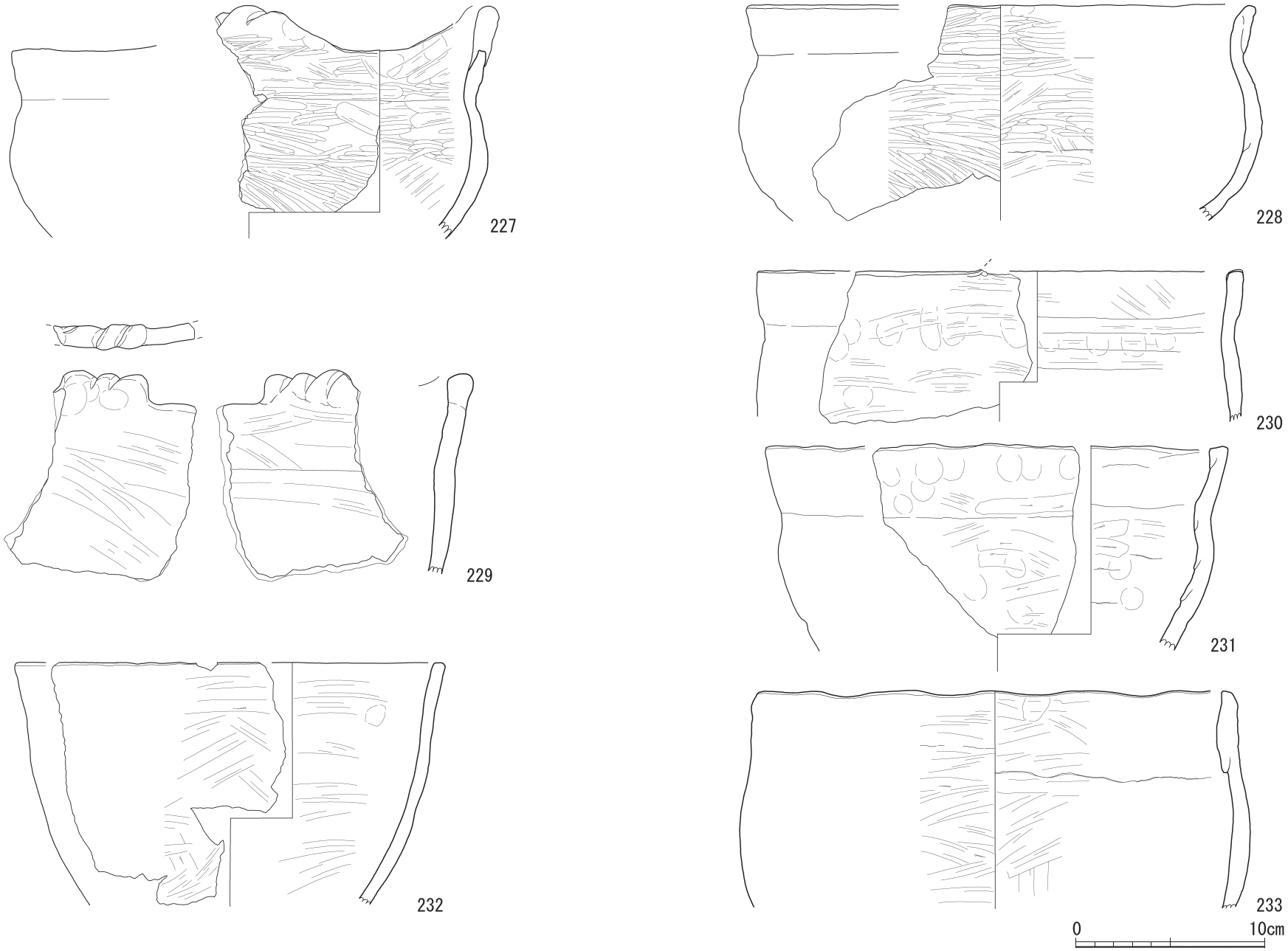
から頸部に至り，直行して口縁部に至る。口唇部は平坦面をもち，突起がついていたと考えられる。大部分が破損しているため突起の形は不明である。内外面ともにナデにより器面調整され，指オサエが多く残る。231はやや張った胴部を持ち，頸部で屈曲して直立しながら口縁部に至る。口唇部は平坦面を持つが，口縁部の一部がつままれて平坦面がなくなる所もある。外面はケズリ後ナデ，内面はナデ，ケズリにより器面調整される。232は胴部から口縁部にかけて開き，頸部でわずかに屈曲する。233はやや張った胴部を持ち，頸部から直行して口縁部へ至る。内面に肥厚帯が明瞭に残る。

⑧　底部・脚部（第32図）

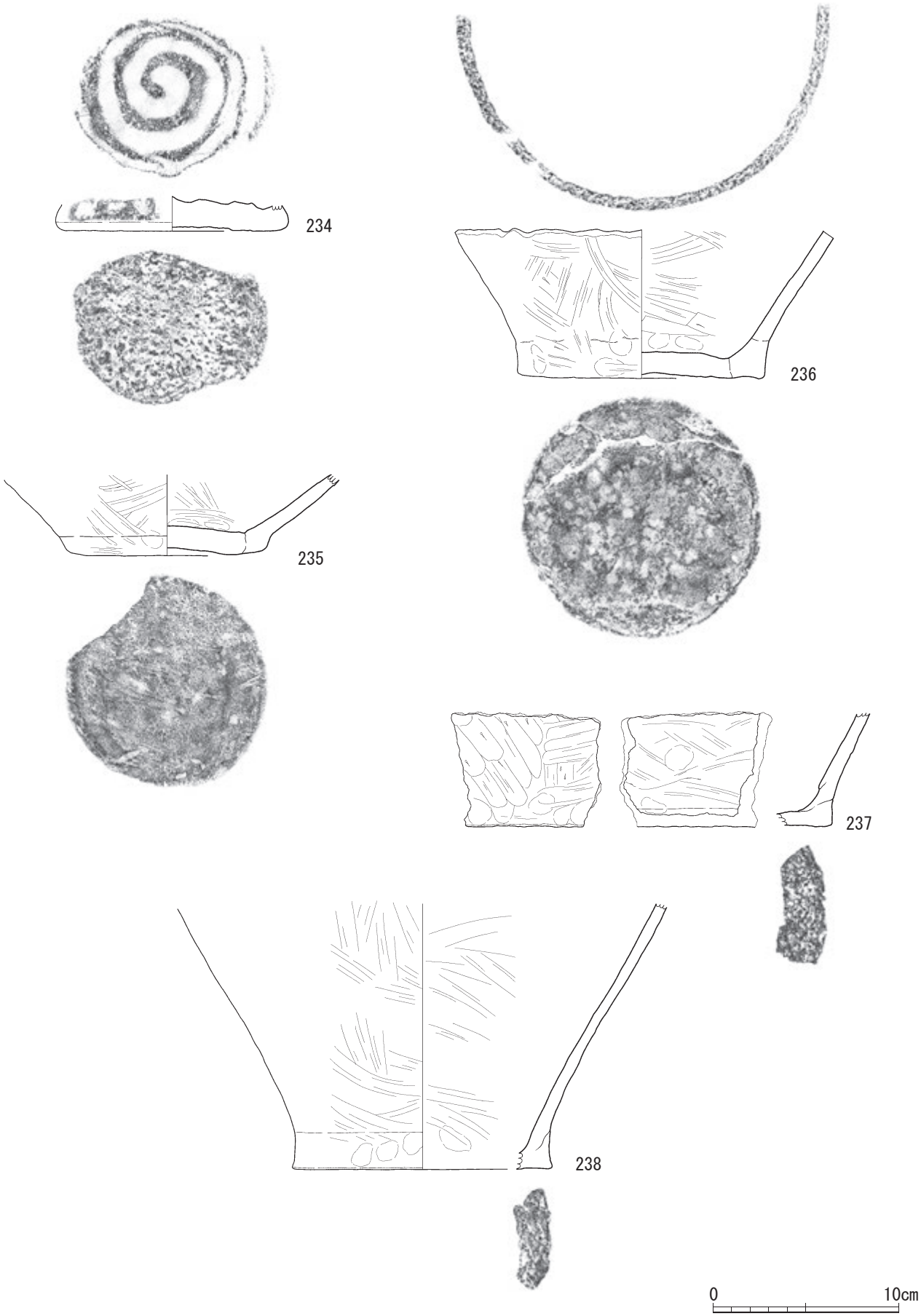
234は底部内面に太い凹線で右回りの渦巻き文を描き，外面には鯨の脊椎骨と考えられる痕跡が残る。底部端部が部分的に残存し，指オサエが観察できる。235は底部端部が丸みを持ち，胴部にかけて器形が大きく開く。底部の中心がわずかに上がり，底部外面はケズリ及びナデにより調整される。胴部下端から底部端部にかけての器面調整は基本的にナデであるが，部分的にミガキに近い調整が見られる。236は底部端部から胴部にかけて器形が大きく開く。胴部の割れの高さがほぼ均一であり，胴部を意図的に打ち欠いて器高を低くした可能性が高い。底部外面は鯨の脊椎骨と思われる痕跡が付いた後にナデ調整される。237は底部端部から胴部にかけて器形が大きく開く。外面は底部端部付近はケズリ後に指オサエ・ナデ調整が施されるが，胴部はケズリが明瞭に残る。238は底部端部が張り出し，胴部にかけて器形が大きく開く。内外面ともにナデにより器面調整される。237・238はいずれも底部の大半が破損しているが，底部外面に細かい凹凸がみられるため鯨の脊椎骨の痕跡があった可能性がある。239は底部端部から胴部にかけて器形が開き，底部外面・胴部内外面はナデにより器面調整される。240は底部外端から胴部にかけて器形が開き，底部外面はナデ及びケズリにより器面調整される。241は底部端部が丸みを持ち，胴部下部が屈曲して胴部にかけて器形が大きく開く。器壁が厚く，底部外面及び胴部内外



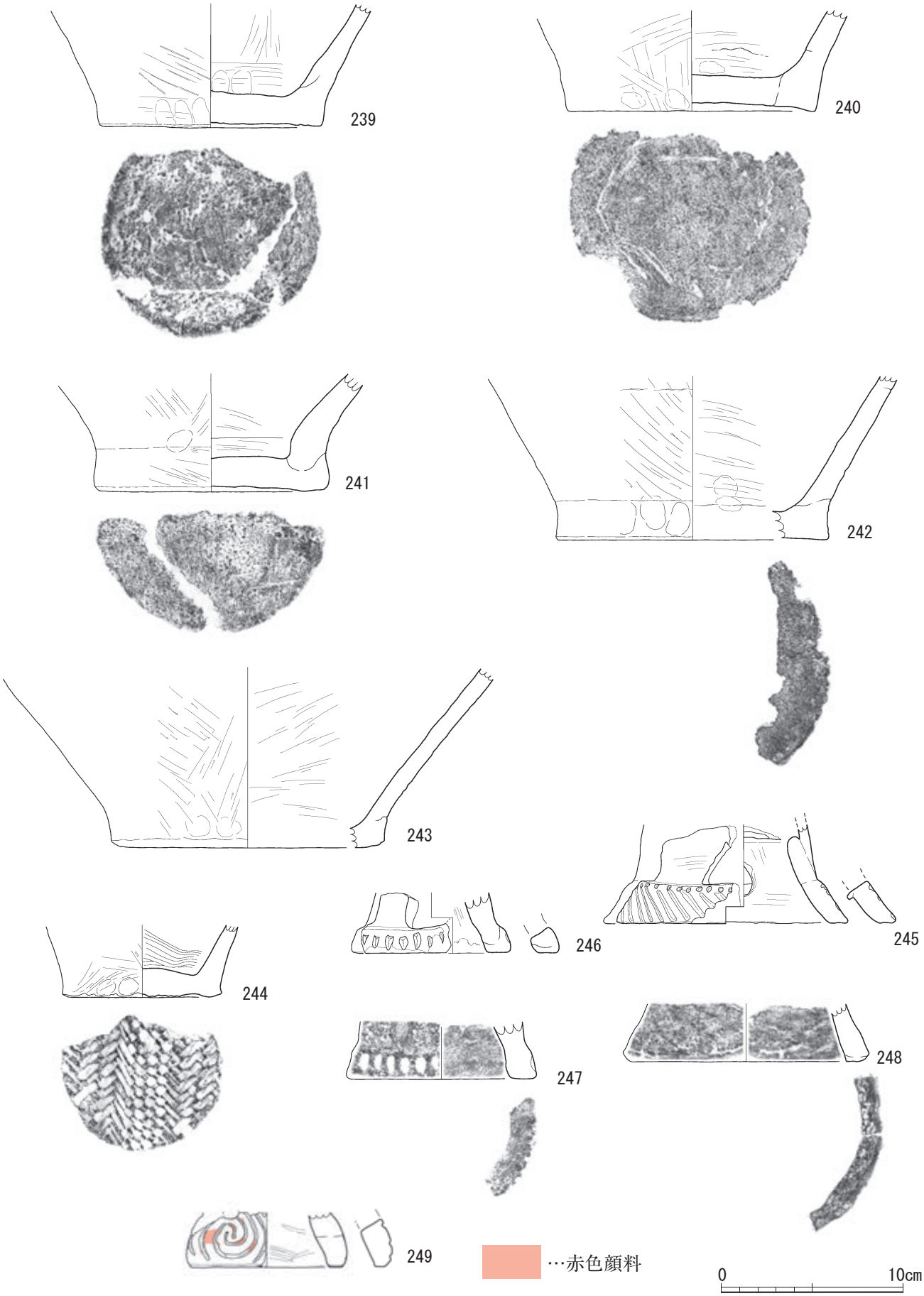
第30図　未報告分土器⑦



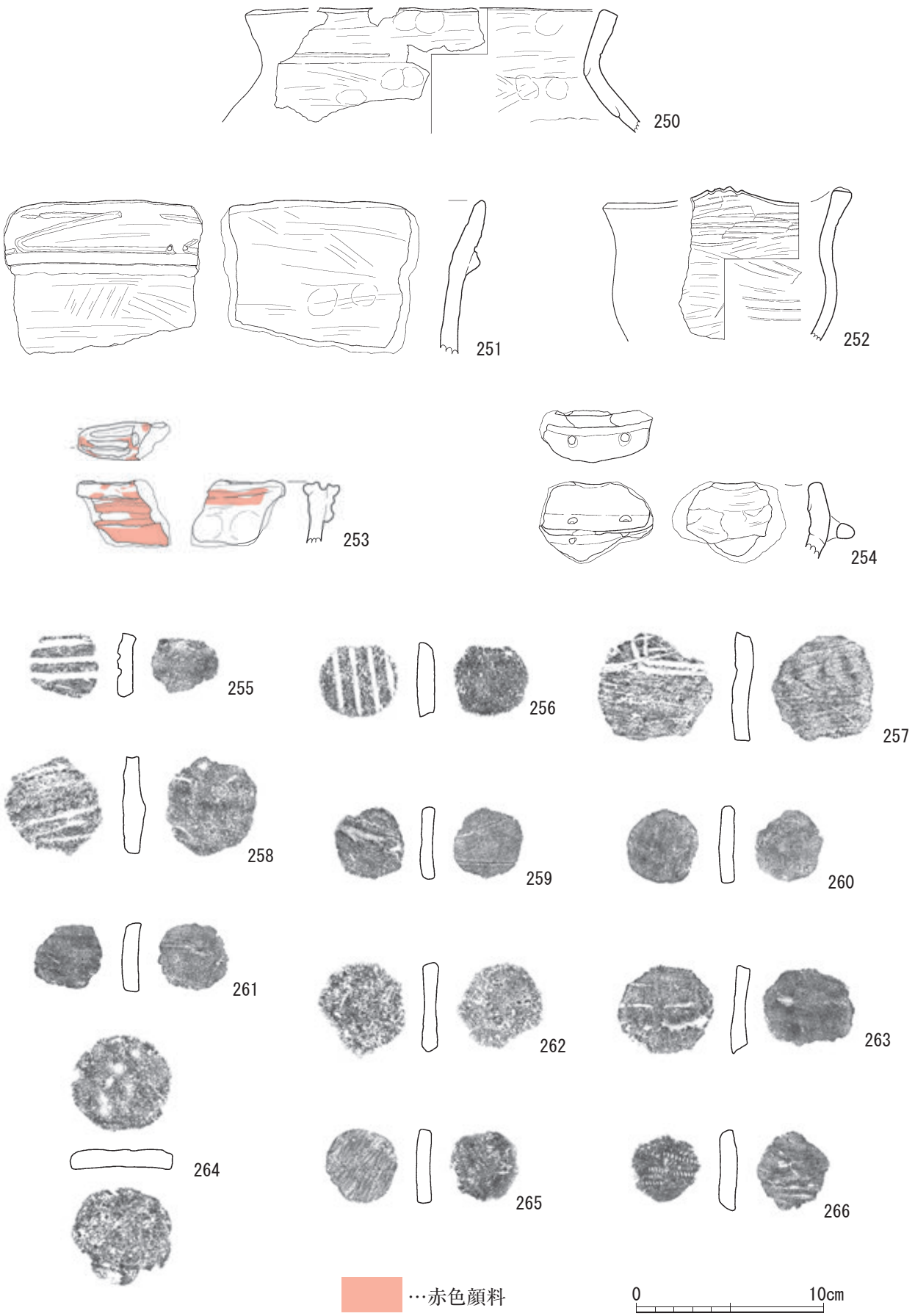
第31図　未報告分土器⑧



第32図　未報告分土器⑨



第33図　未報告分土器⑩



第34図　未報告分土器⑪

面はナデにより器面調整される。242は底部端部がやや張り出し，稜をもって屈曲して胴部にかけて大きく開く。外面は斜め上方向のケズリ，内面はナデにより器面調整され，屈曲部付近には指オサエが明瞭に残る。底部は丁寧なナデにより平坦に調整される。243は底部外端が丸みをもって持ち上がり，胴部にかけて器形が大きく開く。外面は斜め上方向へのケズリ，内面はナデにより器面調整される。244は底部外端がわずかに張り出し胴部にかけて器形が開く。底部外面に編物圧痕が残り，平編みと綾編みを組み合わせたものであると考えられる。外面はナデにより器面調整され，内面は条痕が残る。

245・246は大きな透かしを有する脚台である。いずれも脚部を形成してから透かしを開けたのではなく，底部をドーナツ形に作った後に支柱を付けるようにして形成されたと考えられる。245は円形の刺突文と斜位の沈線を，246は大きめの刺突文を横位に施す。内外面ともにナデにより器面調整される。247は脚部端部を肥厚させ，肥厚帯に大きめの刺突文を横位に施す。248は底部外面に細かい凹凸が部分的に残り，鯨の脊椎骨の痕跡と考えられる。内外面ともにナデにより器面調整される。249は丸みを帯びた脚台で，外面に細い沈線で左回りの渦巻き文を施す。赤色顔料が部分的に残り，脚台全体に塗布されていたと思われる。内外面ともにミガキが施され堅緻な仕上がりである。

⑨　その他の土器

250は頸部で屈曲しやや外反して口縁部へ至る。屈曲部に途中で途切れる横位の沈線が１条施される。内外面ともにナデにより器面調整され，指オサエが顕著に残る。胎土は明赤褐色を呈する。251は外反する口縁部で，断面が三角形状の突帯を貼り付ける。突帯よりも上部を文様帯とし，沈線を施す。252は小型の深鉢で，やや張った胴部をもち頸部で屈曲して口縁部へ至る。緩やかな山形口縁で，山形部分の口唇部には凹点を施す。内外面ともに貝殻条痕文が残るが，外面は口縁部付近のみ条痕をそのまま残し胴部はナデ消している。253は小片のため傾きが不明である。口唇部は平坦面を持ち，横位の沈線や凹点を施す。口縁部外端及びその下部1.5㎝程を肥厚させ，肥厚帯に横位の凹線を施す。赤色顔料が塗布されており，外面には全体的に，口唇部にはわずかにみられる。254は口縁部付近の外耳と考えられ，外耳と胴部の接合部付近に直径５㎜程の２つの孔が穿たれる。胎土は赤褐色を呈する。

⑩　円盤形土製品

胎土・文様・調整等からいずれも３類土器・４類土器を利用したものと考えられる。

255は横位，256は縦位の沈線が施され，口縁部付近を利用している。257・258は内面に屈曲部が見られ，頸部付近を利用している。259～265はナデ調整や条痕等の調整のみが観察でき，文様や屈曲部がないため胴部の一部を利用していると考えられる。266は外面に疑似縄文と思われる巻き貝の回転文，内面にミガキ調整が施され，磨消縄文系の土器であると思われる。大きさは直径４㎝弱から６㎝にわたるが，直径４㎝前後のものがほとんどである。これらの円盤形土製品は通称メンコと呼ばれているが，用途については不明である。

1920年調査でも，直径一寸から三寸の円盤状の土製品が20数点出土したと報告されている。その内の２点は中央に孔を穿っている。

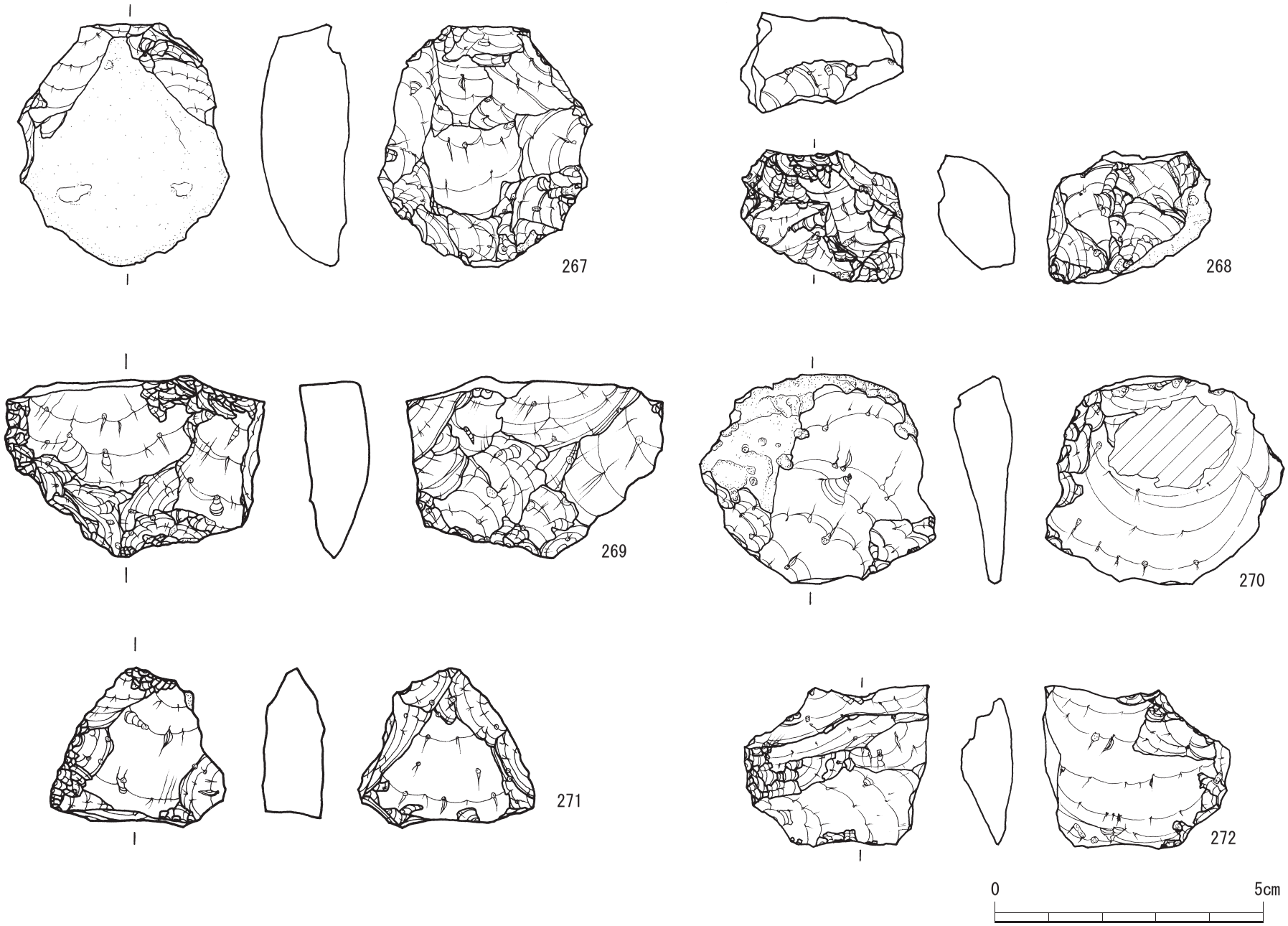
２　石器・石製品（第35図～第39図）

河口は本貝塚の石器について，「その数は極めて少なく，今回の発掘においても，第Ⅰトレンチ１区の混土貝層中において砂岩質の石斧破片１箇と，第Ⅴトレンチにおいて，たゝき石を発見したにすぎない。」と報告している。これらの石器については写真で報告されておらず，注記からの照合を試みたものの埋文センター保管分ではどちらの石器も確認できなかった。未報告の石器・石製品が確認できたので実測して掲載する。石製の垂飾品については写真で報告されており，今回実測を行って掲載した（第39図285）。また，『出水郷土誌』には出水貝塚出土の石斧３点が掲載されている。この３点について追跡調査を行った結果，埋文センターが保管している遺物の中には確認できなかった。１点のみ，出水歴史資料館に類似する石斧が１点展示されているが，出自がはっきりしないため今回は図化していない。残り２点の石斧は埋文センター保管分にも確認できなかった。

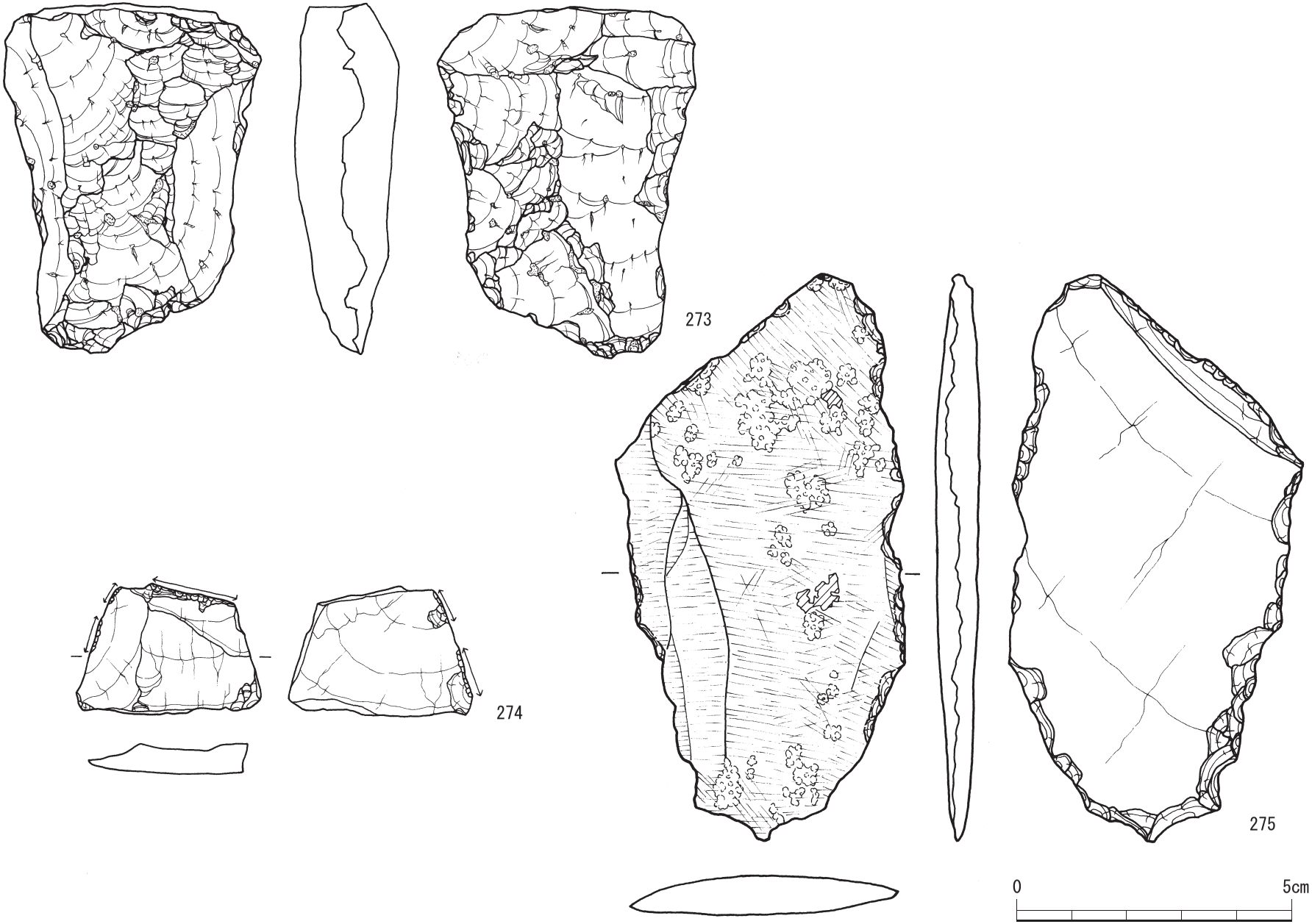
（１）石核・剥片（第35図，第36図）

267～273は黒曜石を素材とする石核・剥片である。埋文センター保管分には黒曜石が中心に集められたパンケースが２箱確認できた。主に日東系黒曜石だが，腰岳産黒曜石の剥片もわずかに見られるほか，チャート・頁岩など黒曜石以外の石材の剥片等もわずかに含まれていた。石器としての完成品はほとんどなく，使用痕や加工痕のある剥片や石核が見られた。その中から９点選別して図化した。

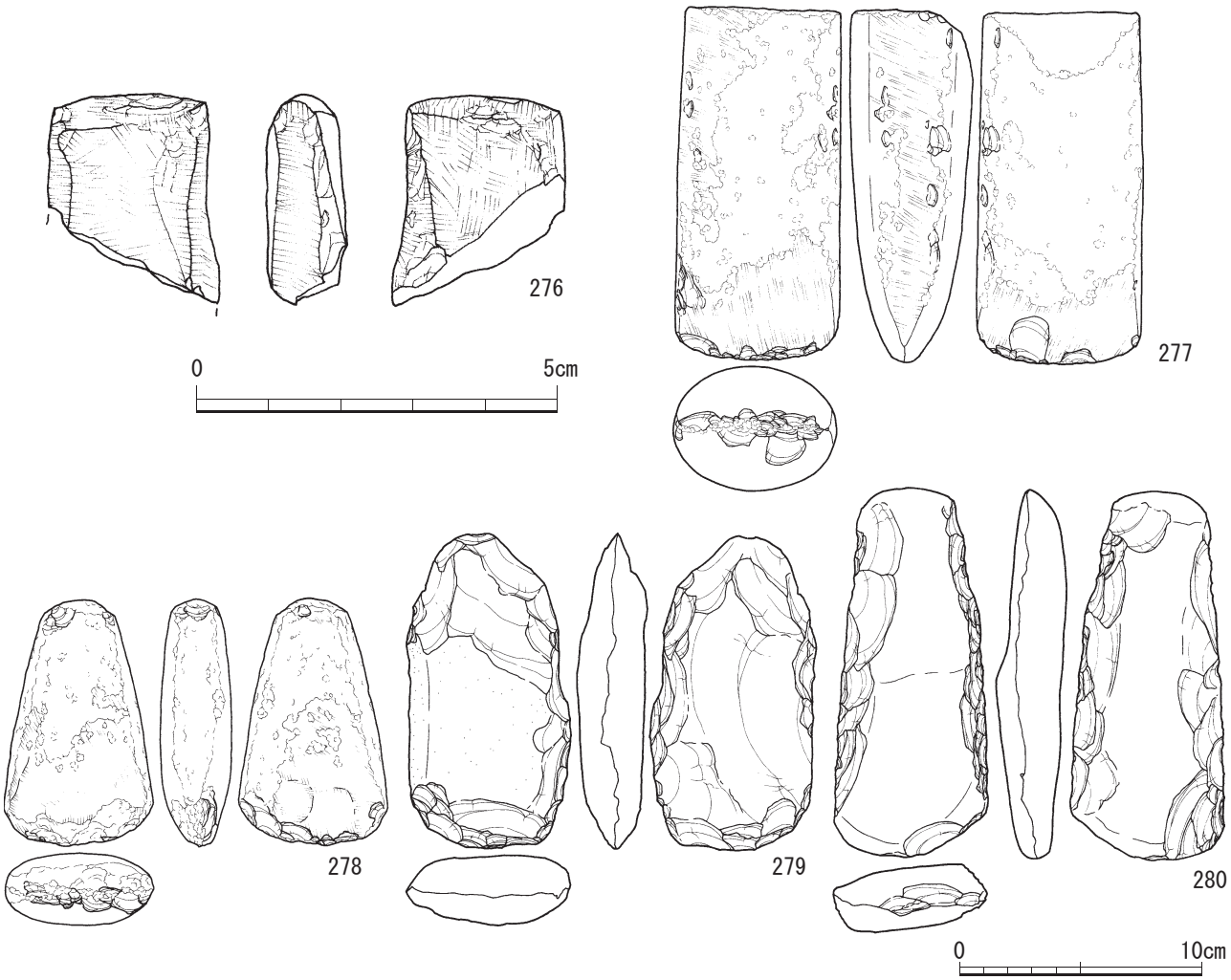
267～269は石核である。267は背面に自然面が多く残る。背面上部及び腹面の周縁部に剥離痕が見られる。268は下部に自然面が残る。背面には自然面を打面とする先行する剥離痕が見られ，更に複数回の剥離が加えられ階段状を呈する。269は上面を打面として剥片剥離が見られる。下辺に腹面側から調整剥離を加え，スクレイパーに転用していると考えられる。270～272は加工痕のある剥片である。270は背面の一部と上部に自然面を残す。側縁が部分的に折れ，腹面から背面にむけて調整したと考えられる。271は左側縁及び上部に細かい剥離が見られる。272は左側縁と下部に細かい剥離とつぶれが見られる。273はスクレイパーで，両側辺にわずかにく



第35図　石器①



第36図　石器②



第37図　石器③

びれを持つように打ち欠いて整形している。形態はサイドスクレイパーだが，両側辺につぶれがみられることからエンドスクレイパーのように対象物を掻くなどして使用した可能性がある。267～273は日東系の黒曜石を使用している。

274は使用痕のある剥片で，左側辺及び上部に微細剥離痕が認められる。チャートを使用している。

275は頁岩製の剥片である。外面はよく磨かれており，部分的に敲打痕も確認できる。もとは磨製石斧であったと考えられるが，偶発的に剥片が剥出されたのち左右側辺に二次的な剥離を加える。比較的荒い調整であるが，刃部として利用した可能性がある。

（２）石斧（第37図）

埋文センター保管分ではパンケース５箱の石器が確認でき，石斧６点と石斧の基部が１点確認できた。そのうち石斧４点と基部１点を実測し，掲載する。

276は蛇紋岩製のノミ状石斧の基部であると考えられる。ややくびれて身部へ至ると思われ，全面が丁寧に研磨されている。

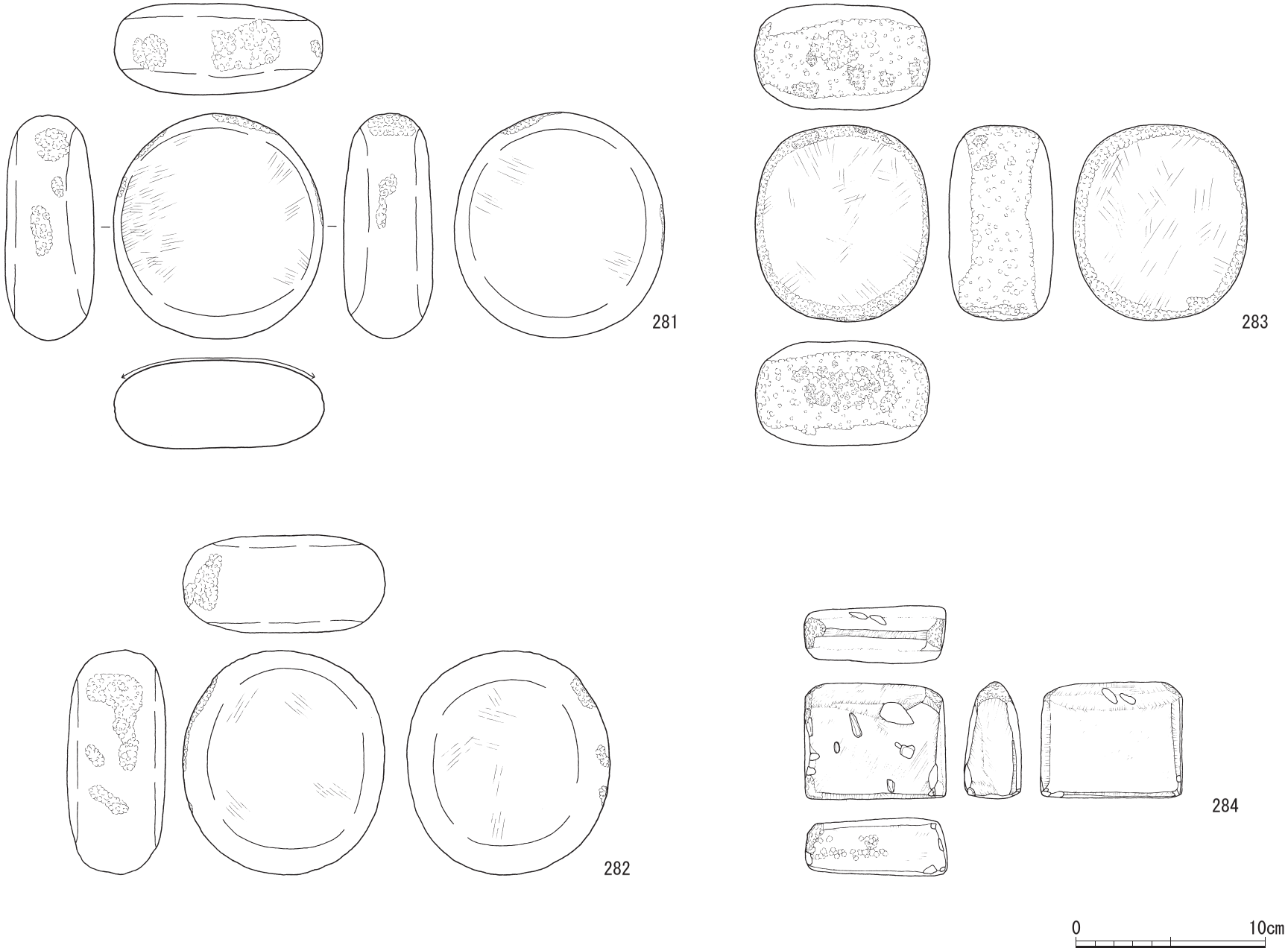
277・278は磨製石斧である。277は砂岩製で，断面が楕円形を呈する。身部は敲打調整後に両側辺に研磨を施す。刃部は丁寧に研磨され，刃部には使用による剥離及びつぶれが見られる。注記が「出水」のみで出土地点は不明である。278は安山岩製の身部を敲打調整し，刃部のみ研磨している。刃部に使用による剥離及びつぶれが見られる。Ｉトレンチより出土している。

279・280は打製石斧である。いずれもホルンフェルス製で周縁を打ち欠いて整形し，基部付近にわずかに抉りが見られる。刃部には使用によるものと思われる剥離が見られる。279はＶトレンチ２区，280はＶトレンチ０区から出土している。

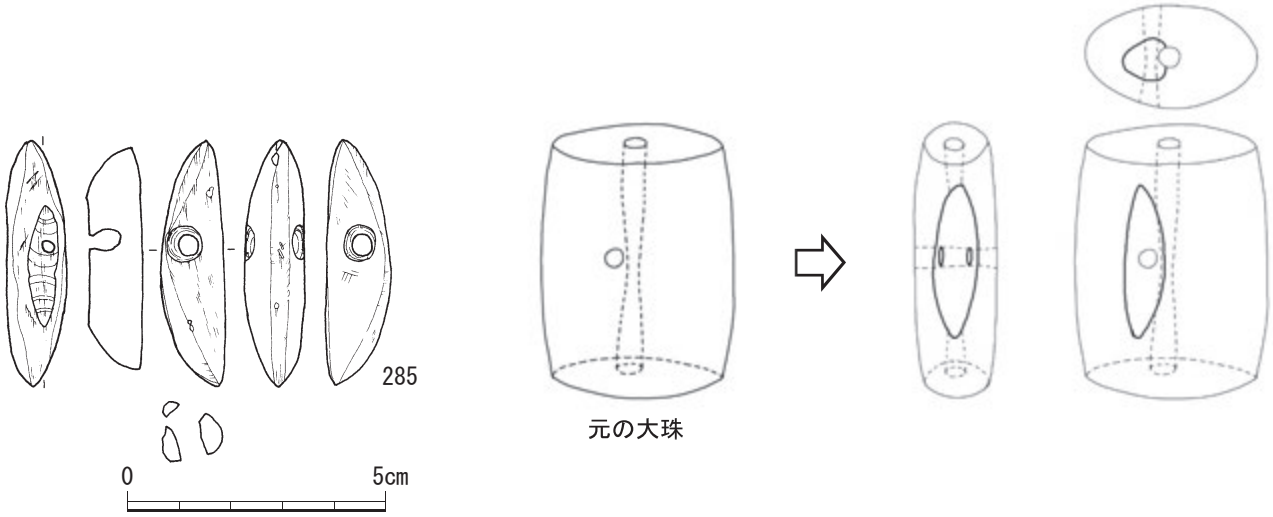
（３）磨・敲石（第38図281～283）

破片も含めおよそ20点出土している。その中の完形品３点を追加資料として図化した。

281・282は側面に部分的に敲打痕がみられる。281の片面は磨痕が顕著にみられ，281のもう片面と282はわず



第38図　石器④・石製品



第39図　石製垂飾品及び転用模式図

かに磨痕が観察できる。283は周辺に満遍なく敲打痕が残るが，整形時の敲打であると考えられる。下部には強い敲打によるつぶれが観察でき，両面には磨痕が残る。

（４）石製品（第38図284，第39図285）

三角柱形の砂岩製石製品が１点出土している。三角錐形を呈し，各辺部は丁寧に面取りがしてあり，曲面をなす。底部に敲打痕と考えられる長径２㎜，短径１㎜程度の浅い凹みが列点状に見られる。また，上辺端部にも敲打痕が確認できるが，整形時のものか対象物を敲打した結果のものかは不明である。注記はされていないが，「Ⅵ－１　赤土」と書かれたラベルとともに保管されており，Ⅵトレンチ１区の赤土層から出土したと考えられる。

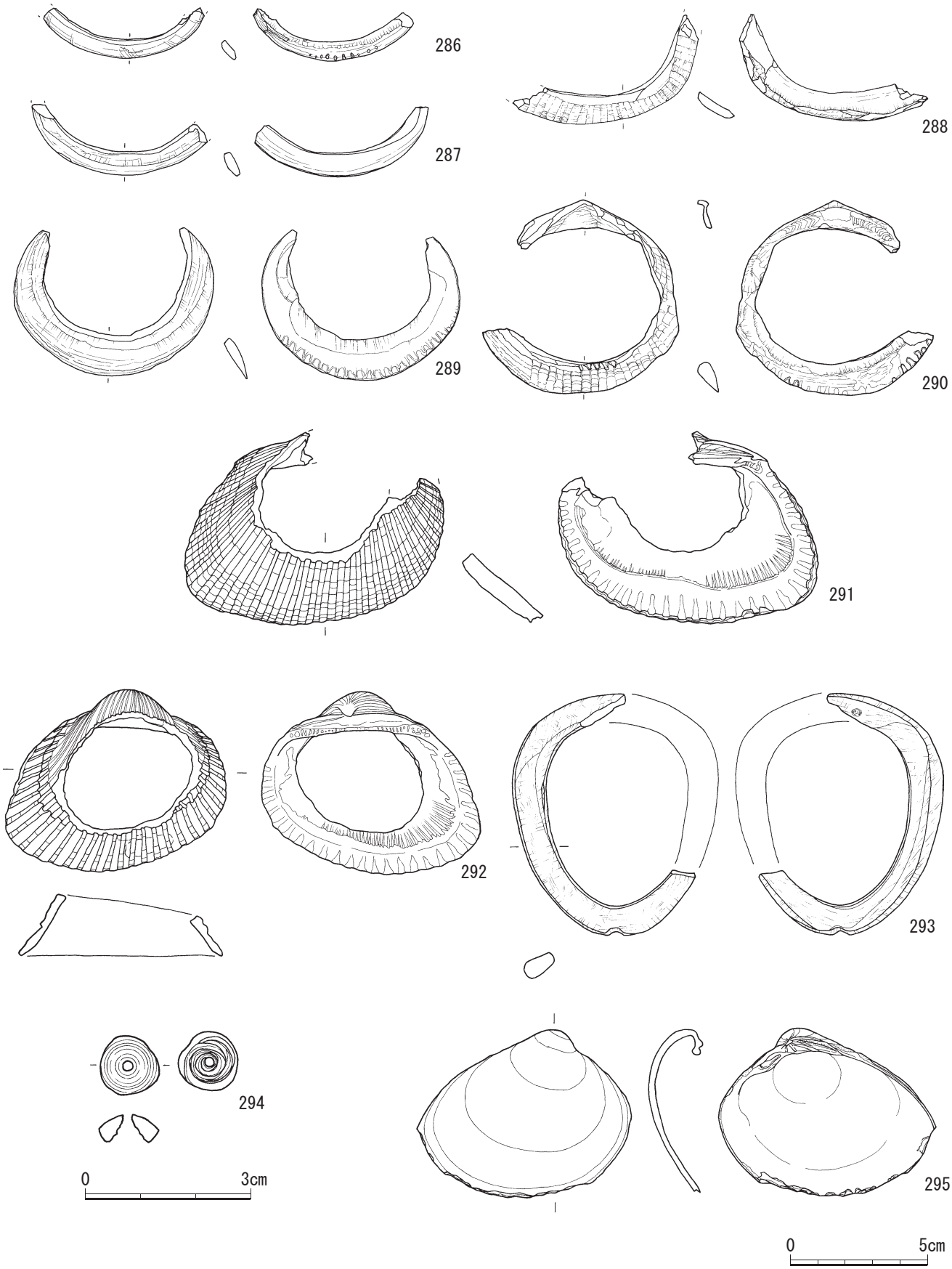
第39図285は石製の垂飾品である。色調は不透明な乳白色で，滑石もしくは石膏の可能性がある[2]。成分分析については第Ⅳ章を参照していただきたい。細長い半月形を呈し，中央寄りに直径６㎜程の孔が貫通している。この孔の上部は摩滅しており，紐を通して吊るしていた可能性が高い。また，側面には浅い溝を有し中央の孔に通じる直径２㎜の孔が空いているが，形が整っていないことから調整途中で部分的に破損したものと思われる。側面の溝は両側からの回転穿孔の痕があり，溝の中央付近がくびれていることから両側穿孔がぶつかった部分であると考えられる。この溝の特徴から285は緒締形大珠の転用品であると判断したため，転用の模式図もともに示す（第39図右）。元になった大珠の横位の孔はそのまま利用し，縦位に貫通していた孔は垂飾品の側面にやや掛かり溝となっている。石製装身具は形態や石材調達の面からみても再加工に注意を払う必要があり，この垂飾品は貴重な例である[3]。

３　貝製品（第40図）

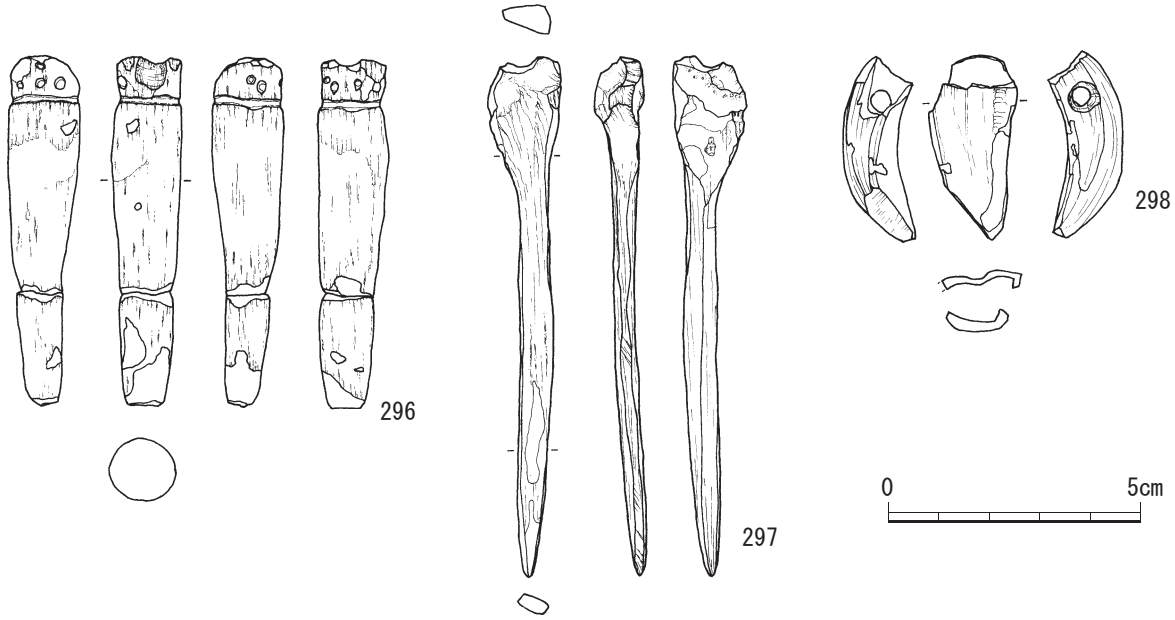
河口が報告した貝製品は貝輪５点（第40図286～290）であるが，写真のみの報告であったため，実測して掲載する。埋文センター保管分の出水貝塚出土の貝製品・貝類はパンケース７箱分が確認できた。本貝塚の貝輪は「出水貝塚出土貝輪」と記されたパンケースにおよそ15点保管されており，このパンケースの中に骨角器も確認できた。この中から新たに貝輪３点とその他貝製品２点を抽出し，河口が報告した貝輪５点も合わせて実測を行った。

第40図286～290は河口により写真で報告された貝輪である。286・287は完成品の貝輪の破片である。全体が丁寧に研磨されており同定が困難だが，いずれもタマキガイかベンケイガイと考えられる。288は完成品の貝輪の破片で，螺肋まで丁寧な研磨を施す。フネガイ科の右殻を使用している。289は未製品の貝輪の破片で，打割成形段階で破損し破棄したと考えられる。タマキガイ科の右殻を使用している。290は風化が激しく研磨の観察が困難だが，打割整形が終わった段階と考えられる。タマキガイ科の左殻を使用している。

291は未製品の貝輪の破片であり，打割整形段階で破損し破棄したものと考えられる。サルボウガイの右殻を使用している。292は未製品の貝輪で，打割整形途中で部分的に研磨したが途中で廃棄したものと考えられる。サルボウガイの右殻を使用している。293は全体を丁寧に研磨した完成品の背面貝輪の破片である。ゴホウラガイを使用している。貝輪の下部側面に抉りを入れ，上部には補修孔と考えられる未貫通の孔が穿たれる。全面を丁寧に研磨しており，螺塔の構造も研磨によって消している。この293に関して，裏面までの全面研磨，補修孔の穿孔を途中でやめて欠損部分の再加工もないこと，抉り付近全周の磨痕から，貝輪ではなく当初から垂飾品として作られ，欠損後再加工を試みるも廃棄されたもので



第40図　貝製品



第41図　骨角器

第42図　南西諸島産貝類写真

ある可能性がある[4]。293は注記がなく，保管されていた袋にも「出水」と書かれているのみで，層位的な検討が不可能である。

294はイモガイの殻頂を用いた小玉である。中央に直径２㎜の孔を穿つ。295は貝刃と考えられるハマグリの加工品である。端部を押圧剥離しており，刃部として使用した可能性がある。

この他，埋文センター保管分の貝類にはカキ・ハマグリ・ウミニナ科・テングニシ科等が見られ貝類の中にヤコウガイとチョウセンサザエが確認できたため，写真で掲載する（第42図）。第42図左のヤコウガイは，残存している殻長・殻径はそれぞれ17.8㎝，12.2㎝，重さ622ｇである。体層部分は製品を作るために大きく打ち欠いたと考えられる。第42図右上のヤコウガイの破片は左のヤコウガイの原体から打ち欠いた破片の一部であると考えられる。第42図右下はチョウセンサザエで，九州西南諸島以南に生息する貝である。殻長8.9㎝，殻径7.0㎝，重さ146ｇである。いずれも出水貝塚の貝として保管されていたが，注記がなく出土層などが不明であるため，注意が必要である。

４　骨角器（第41図）

河口が報告した骨製品は１点である（第41図296）。埋文センター保管分では骨類はパンケース２箱分が確認できたが，全て未加工の動物遺体であり，骨角器は貝製品のパンケースとともに保管されていた。その中から牙製垂飾品１点，骨製簪１点を抽出し，河口が報告していた骨角器も合わせた計３点を実測して掲載する。

第41図296は垂飾品と思われる獣骨製の加工品である。欠損しているため上部構造は不明であるが，中央部に穿孔を施していたと思われる。穿孔の下に沈線を巡らし，沈線上部に径２㎜程度の列点を巡らしている。297は骨製簪である。関節部をそのまま利用し，頂部の装飾はなく棒状に仕上げ，先端は尖っている。298は獣の牙を素材とした垂飾品である。上端が欠損し，中は空洞になっている。直径４㎜の孔を穿って貫通させているが，片面は欠損している。

その他，動物遺体としては主にイノシシ・鹿・鳥類・小型の哺乳類の骨が確認できた。

第４節　遺物出土状況図（第43図・第44図）

埋文センター保管分の図面では，第２節で述べた人骨関係図面，報告済みの周辺地形図・土層断面図等の原図が確認できた。更に，河口により記録されたと考えられる遺物出土状況図も確認でき，これに関しては未報告であると考えられるため，掲載する。

トレーシングペーパーにトレースしたものが２枚保管されており，いずれも1954年調査時のものである。河口は出土した土器群ごとに任意でアルファベットを付けており，注記にも使用している。アルファベットの詳細は第Ⅴ章で後述する。

第43図は「Ⅰ．３及び２土器群」と書かれ，Ⅰトレンチ２区・３区の遺物出土状況を記録したものである。２区は「No.1人骨，Q' 土器群（押型文）（黒土層）」，３区は「l，b，ｋ土器群（貝層）」と記されているが，土器片の他に1954-1号人骨（第２節参照），垂飾品（第39図285）や貝類，礫も図示されている。

第44図は「第Ⅲトレンチ Q・ｔ・ｕ土器群」と書かれており，赤土層や貝層出土の土器片・礫の出土状況を記録したものである。本報告書で図化した土器のうち，この出土状況実測図の土器片と形が類似し注記に「Q」が入る土器片が確認できたため，合わせて土器実測図も配置した。

【註】

（１）鹿児島女子短期大学竹中正巳氏による。

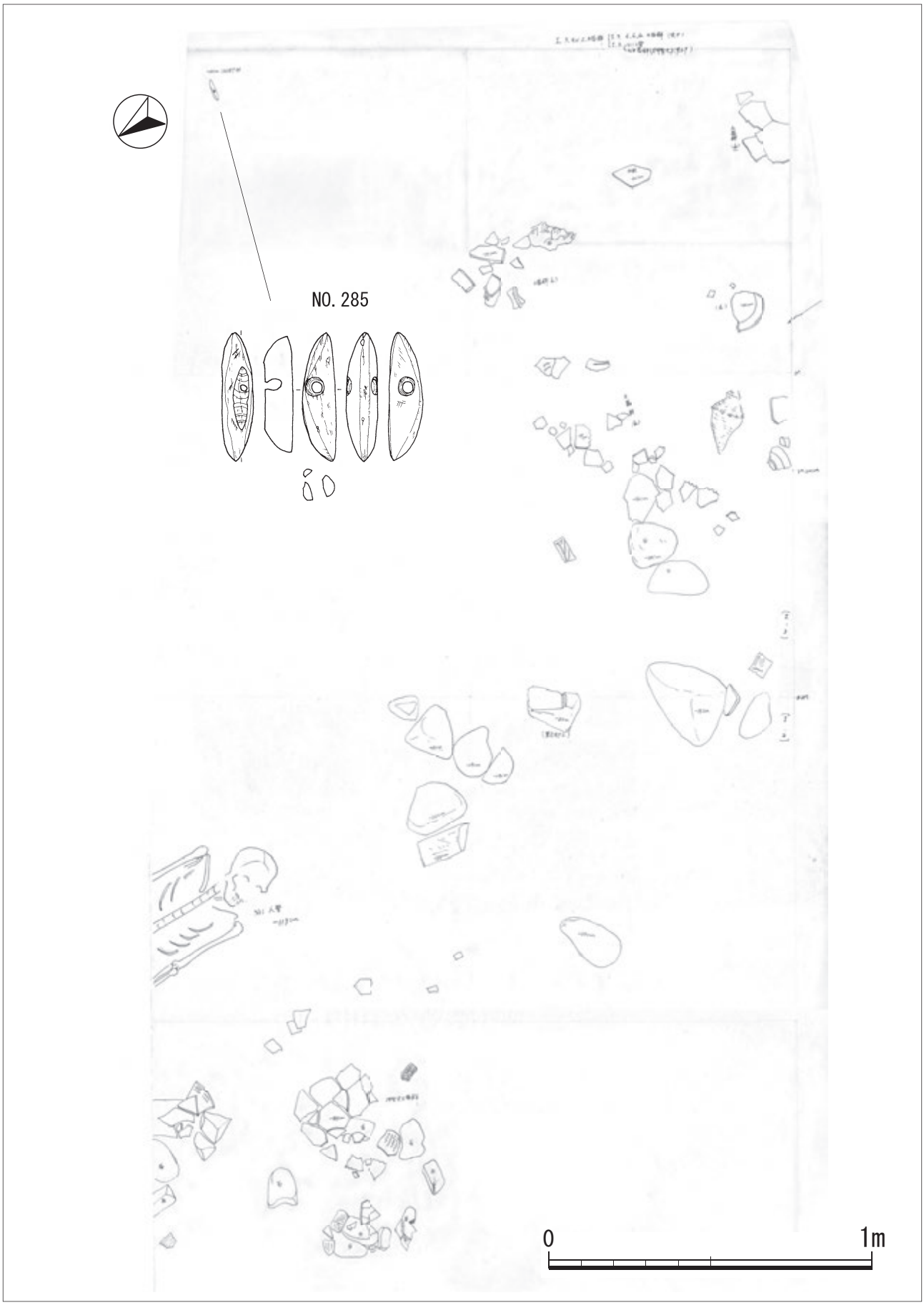
（２）垂飾品の報告は林田重幸（鹿児島大学農学部）が担当したようであるが，石材については記されていない。当時の鹿児島大学文理学部地質学教室による石質の鑑定結果は「硬度…2.0～2.5　6N-HNo3及6N-Hcl に対して不溶（加熱）屈折率…1.5704～1.5810」（河口1958a）と記されている。鹿児島大学理学部に確認したところ，当時の記録はなく結果の正確性にも欠ける可能性があるとのことであった。

（３）熊本大学大坪志子氏のご教示による。

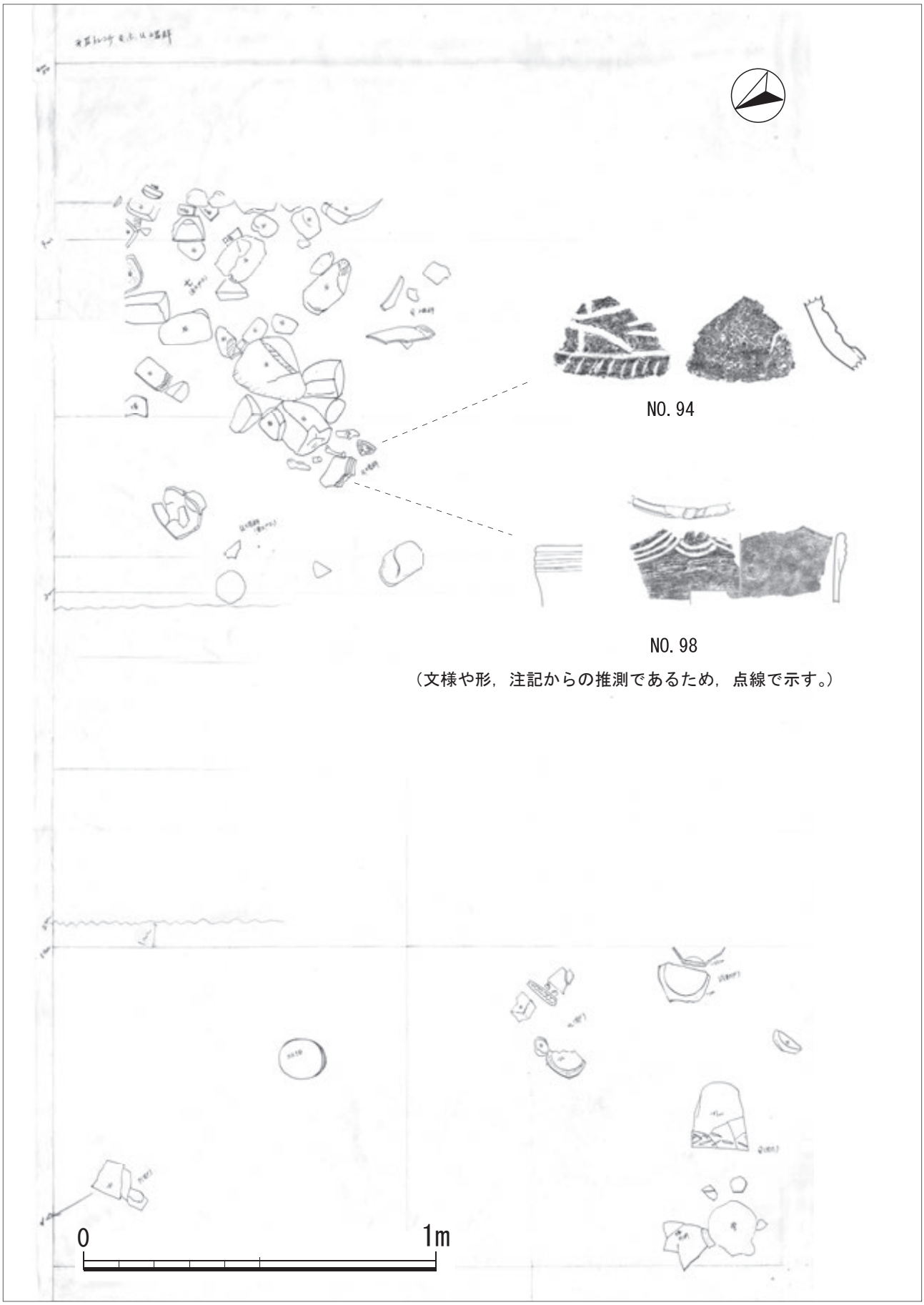
（４）同志社大学水ノ江和同氏のご教示による。

【引用・参考文献】※第Ⅱ章掲載済の文献を除く

吉良哲明 1996『原色日本貝類図鑑 増補改訂版』保育社



第43図　1954年調査時遺物出土状況図（Ⅰトレンチ）



第44図　1954年調査時遺物出土状況図（Ⅲトレンチ）

第３表　出水貝塚出土土器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
7	1	脚台付深鉢	凸帯文	5	完形	イⅠ32f	14.7	6.8	19.4	刻目突帯, 貝殻条痕, ナデ	丁寧なナデ, 指オサエ	○	○					○	灰赤	にぶい赤褐		河口1958a　P180　a
	2	台付鉢	無文土器	(3～4)	完形	イⅢ24u	13.6	7.5	11.05	ケズリ,ナデ,指オサエ	指オサエ,ケズリ,工具ナデ,ナデ		○					○	明赤褐	明赤褐		河口1958a　P180　b
8	3	深鉢	押型文	-	口縁~胴部	イⅦ23d	-	-	-	押型文(楕円)	押型文(楕円), ナデ, 指オサエ	○	○			○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P181　a3
	4	深鉢	押型文	-	口縁~胴部	イⅦ23d	-	-	-	押型文(楕円)	押型文(楕円), ナデ, 指オサエ	○	○			○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P181　a4
	5	深鉢	押型文	-	口縁~胴部	イⅠ23C, イ146	32.2	-	-	押型文(山形)	押型文(山形), ナデ	○	○					○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P181　b
9	6	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ケズリ,ナデ,指オサエ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a6
	7	深鉢	押型文	-	胴部	イⅡXCC	-	-	-	押型文(山形)	ケズリ, ナデ	○	○	○	○			○	にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P182　a7
	8	深鉢	押型文	-	口縁	イⅤX12	-	-	-	押型文(山形)	押型文(山形), ケズリ	○	○			○		○	にぶい褐	にぶい橙		河口1958a　P182　a8
	9	深鉢	押型文	-	口縁	イⅤ±d	-	-	-	押型文(山形)	押型文(山形), ナデ		○	○	○			○	にぶい橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a9
	10	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい褐	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a10
	11	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ14	-	-	-	押型文(山形)	ケズリ	○	○			○		○	にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P182　a11
	12	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○			○		○	にぶい橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a12
	13	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a13
	14	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ32	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○	○		○	にぶい褐	にぶい橙		河口1958a　P182　a14
	15	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ14	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい橙	灰黄	２～３㎜小礫	河口1958a　P182　a15
	16	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○			○	にぶい赤褐	明赤褐		河口1958a　P182　a16
	17	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ12	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○			○	橙	にぶい黄橙	２～４㎜小礫	河口1958a　P182　a17
	18	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ14	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○	○		○	にぶい橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　a18
	19	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ14	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	灰白		河口1958a　P182　b19
	20	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠb4	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい橙	黒		河口1958a　P182　b20
	21	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(楕円)	ケズリ,ナデ,指オサエ	○	○		○	○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b21
	22	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(楕円)	ケズリ, ナデ		○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b22
	23	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２～４㎜小礫	河口1958a　P182　b23
	24	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ65	-	-	-	押型文(連珠), 丁寧なナデ	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b24
10	25	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ41	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○		○			○	にぶい橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b25
	26	深鉢	押型文	-	口縁	イⅠ74	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄	灰黄		河口1958a　P182　b26
	27	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○		○	○		○	にぶい赤褐	明赤褐		河口1958a　P182　b27
	28	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b28
	29	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ25	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○		○			○	にぶい橙	暗灰黄		河口1958a　P182　b29
	30	深鉢	押型文	-	底部	イⅠ25	-	4.6	-	押型文(連珠), 丁寧なナデ	ナデ, 指オサエ	○	○	○	○			○	橙	橙		河口1958a　P182　b30

第４表　出水貝塚出土土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
10	31	深鉢	押型文	-	胴部	不明	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○	○	○			○	明赤褐	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b33
	32	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ25dd	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b34
	33	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ14	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ, 指オサエ	○	○					○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b35
	34	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ85	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○	○	○			○	橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b36
	35	深鉢	押型文	-	口縁	イⅠ64	-	-	-	押型文(楕円)	押型文(楕円)	○	○					○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P182　b37
	36	深鉢	押型文	-	胴部	イⅠ?	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ		○		○			○	にぶい黄橙	にぶい黄	２～３㎜小礫	河口1958a　P182　b38
	37	深鉢	押型文	-	口縁	イⅦ13	-	-	-	押型文(楕円)	押型文(楕円), ナデ		○	○	○			○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P183　a39
	38	深鉢	押型文	-	胴部	イⅦ13	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○				にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P183　a42
	39	深鉢	押型文	-	胴部	イⅦ	-	-	-	押型文(山形)	ナデ, 指オサエ	○	○		○				にぶい黄橙	黒		河口1958a　P183　a43
	40	深鉢	押型文	-	胴部	イⅦ23	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○		○	○		○	橙	灰黄		河口1958a　P183　a44
	41	深鉢	押型文	-	胴部	イⅥ21	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい橙	灰黄	２～４㎜小礫	河口1958a　P183　a45
	42	深鉢	押型文	-	胴部	イⅥ23d	-	-	-	押型文(山形), 条痕文	ナデ, 指オサエ	○	○	○	○			○	橙	にぶい黄橙		河口1958a　P183　a46
	43	深鉢	押型文	-	底部	イⅦ23	-	6.8	-	押型文(山形), 丁寧なナデ	丁寧なナデ, 指オサエ	○	○	○	○			○	橙	灰褐	モミ痕有り　2～4㎜小礫	河口1958a　P183　a48
	44	深鉢	押型文	-	胴部	イⅦ?3	-	-	-	押型文(山形)	丁寧なナデ, 指オサエ	○	○	○	○			○	橙	黒		河口1958a　P183　a52
	45	深鉢	押型文	-	底部	イⅤ14(4)	-	-	-	押型文(山形)	ナデ, 指オサエ	○	○	○	○			○	にぶい黄橙	灰黄		河口1958a　P183　b56
	46	深鉢	押型文	-	胴部	イⅦ13	-	-	-	押型文(山形)	ナデ	○	○	○	○			○	橙	淡黄	２～３㎜小礫	河口1958a　P183　a53
	47	深鉢	押型文	-	底部付近	イⅤ14	-	-	-	ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○		○	○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P183　b54
	48	深鉢	押型文	-	底部付近	イⅤ12	-	-	-	押型文(連珠)	ナデ	○	○					○	橙	にぶい黄褐		河口1958a　P183　b55
11	49	深鉢	押型文	-	底部	イⅤ14(7)	-	7.6	-	押型文(山形)	ナデ	○	○		○	○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P183　b57
	50	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ14	-	-	-	押型文(山形)	丁寧なナデ	○	○			○		○	にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P183　b58
	51	深鉢	押型文	-	底部	イⅣ?D	-	-	-	押型文(楕円)	ナデ	○	○					○	にぶい黄橙	灰黄褐		河口1958a　P183　b60
	52	深鉢	押型文	(撚糸文?)	底部付近	イⅤ14	-	-	-	ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○			○		○	にぶい橙	にぶい褐		河口1958a　P183　b59
	53	深鉢	押型文	(撚糸文)	底部付近	-	-	-	-	撚糸文	ナデ	○	○	○	○			○	にぶい赤褐	褐灰		河口1958a　P183　b61
	54	深鉢	押型文	(撚糸文)	胴部	イⅤ0C	-	-	-	撚糸文	ナデ	○	○	○	○	○		○	にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P183　b62
	55	深鉢	押型文	(撚糸文)	胴部	イⅥ62C	-	-	-	撚糸文	丁寧なナデ		○	○	○			○	にぶい黄橙	灰黄褐		河口1958a　P183　b64
	56	深鉢	押型文	(条痕文)	口縁	イⅤ12	-	-	-	条痕文	ナデ, 櫛状文	○	○		○	○		○	にぶい黄橙	にぶい橙		河口1958a　P183　b65
	57	深鉢	押型文	(撚糸文)	胴部	イⅤ0CC	-	-	-	撚糸文	ナデ	○	○	○	○			○	橙	浅黄		河口1958a　P183　b66
	58	深鉢	押型文	(撚糸文)	胴部	イⅤ32	-	-	-	撚糸文	ナデ	○	○			○		○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		河口1958a　P183　b67
12	59	深鉢	並木式	-	口縁～胴部	イⅥ12W(4コ)	32.8	-	-	刻目突帯, 押引文(爪形), ナデ, ケズリ	ケズリ,ナデ,指オサエ		○	○	○		○	○	暗灰	橙		河口1958a　P184　a70
	60	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ13	-	-	-	押引文(連点), 凹線, ナデ	ケズリ		○		○		○	○	にぶい黄橙	褐灰		河口1958a　P184　a68

第５表　出水貝塚出土土器観察表③

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
12	61	深鉢	並木式	-	口縁	イⅥX2C(10)	-	-	-	押引文(爪形),凹線,ナデ	ケズリ,ナデ		○		○		○	○	にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P184　a 69
	62	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ12W	-	-	-	連続刺突文,凹線,ナデ	ケズリ,ナデ				○			○	褐灰	灰黄褐		河口1958a　P184　a 71
	63	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ13w,12	-	-	-	連続刺突文,凹線,ナデ	ケズリ,ナデ				○			○	黒褐	にぶい褐		河口1958a P184 a72･a76
	64	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ12	-	-	-	連続刺突文,凹線,ナデ	ケズリ,ナデ				○			○	黒褐	にぶい黄褐		河口1958a　P184　a 78
	65	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ12W	-	-	-	押引文(爪形),凹線,,ケズリ,ナデ	ケズリ,ナデ		○			○	○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P184　a 73
	66	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ13W	-	-	-	押引文(爪形),凹線,ナデ?	ケズリ,ナデ		○			○	○	○	暗灰	灰黄褐		河口1958a　P184　a 74
	67	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥX2b	-	-	-	連続刺突文,ナデ	ナデ		○	○	○		○	○	暗灰	灰褐		河口1958a　P184　a 75
	68	深鉢	並木式	-	胴部	イⅥ13W	-	-	-	押引文(爪形),ナデ	ナデ		○				○	○	にぶい赤褐	にぶい褐		河口1958a　P184　a 77
13	69	鉢	阿高式	1	口縁~胴部	イⅠ24	25.6	-	-	凹線,凹点,ケズリ,ナデ	ケズリ,ナデ		○				○	○	明赤褐	にぶい黄橙	穿孔有り	河口1958a　P184　b80
	70	深鉢	阿高式	1	口縁	イⅠ32K	-	-	-	凹線,凹点,ナデ	ケズリ,ナデ	○	○		○			○	灰褐	灰褐		河口1958a　P184　b79
	71	鉢	阿高式	1	口縁	イⅡ+0b	20.9	-	-	凹線,凹点,ナデ,指オサエ	ナデ	○	○		○			○	にぶい黄橙	黒褐		河口1958a　P185　a84
	72	深鉢	阿高式	1	口縁	イⅡ+1b	-	-	-	凹点,凹線,ナデ	ナデ,指オサエ	○		○	○			○	灰	灰黄褐		河口1958a　P185　a83
	73	深鉢	阿高式	1	口縁	イⅠ-36C	-	-	-	凹線,凹点,ケズリ,ナデ	ナデ,指オサエ		○		○		○	○	褐灰	にぶい黄橙		河口1958a　P184　b81
	74	浅鉢	阿高式	3	口縁	イⅡ13	22	-	-	凹点,凹線,刻目,ナデ	凹点,ナデ,指オサエ		○		○	○		○	にぶい赤褐	にぶい橙		河口1958a　P185　a85
	75	深鉢	阿高式	1	口縁	イⅡ1	-	-	-	凹線,凹点,ナデ	ケズリ,ナデ,指オサエ		○		○	○		○	褐灰	褐		河口1958a　P185　a86
	76	鉢	阿高式	1	口縁	イⅡ13	-	-	-	凹線,凹点,ナデ	ナデ				○		○	○	褐灰	にぶい褐		河口1958a　P185　a87
14	77	深鉢？	阿高式	1	口縁	イⅡ24	-	-	-	凹線,凹点,ナデ	ケズリ,ナデ	○	○		○			○	にぶい赤褐	灰黄褐		河口1958a　P185　a90
	78	深鉢	阿高式	1	口縁	イⅡ25	-	-	-	凹線,凹点,ケズリ,ナデ	ケズリ,ナデ		○			○		○	明赤褐	灰黄褐		河口1958a　P185　a88
	79	浅鉢	阿高式	3	口縁~胴部	イⅡ14	21.6	-	-	凹線,丁寧なナデ	丁寧なナデ,指オサエ				○			○	明赤褐	にぶい黄橙		河口1958a P185 a89･a91, P186 b112
15	80	深鉢	南福寺式	3	口縁	イⅥ2c(15)	-	-	-	凹線,ケズリ,ナデ	ナデ					○		○	明赤褐	明赤褐		河口1958a　P185　b94
	81	深鉢	南福寺式	3	口縁	イⅢ2c	-	-	-	凹線,凹点,ケズリ,ナデ	条痕,ナデ	○		○	○			○	灰褐	暗赤灰		河口1958a　P185　b93
	82	深鉢	南福寺式	4	口縁	イⅥ2c	-	-	-	凹線,ケズリ,ナデ	工具ナデ,ナデ				○			○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P185　b95
	83	深鉢	南福寺式	3	口縁	Ⅵ3Yb	-	-	-	凹線,凹点,ケズリ,ナデ	ナデ				○			○	灰褐	にぶい赤褐		河口1958a　P185　b97
	84	深鉢	南福寺式	3	口縁~胴部	イⅥ23d	-	-	-	凹点,凹線,丁寧なナデ	ナデ					○		○	にぶい赤褐	橙		河口1958a　P185　b96
16	85	深鉢	凸帯文	その他	口縁	イⅠ22b	35.2	-	-	凹線,ケズリ,ナデ	ナデ,指オサエ		○		○	○		○	黒褐	橙		河口1958a　P186　a99
	86	深鉢	凸帯文	3	口縁	イⅠ83	-	-	-	ナデ,指オサエ	ナデ,指オサエ		○	○	○		○	○	暗褐	橙		河口1958a　P186　a100
	87	深鉢？	凸帯文	3？	胴部	イⅠ11-13	-	-	-	凹線,ナデ	ナデ,指オサエ		○		○		○	○	にぶい赤褐	灰黄褐		河口1958a　P186　a101
	88	深鉢	凸帯文其の他	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	突帯,沈線,ナデ	ナデ				○			○	黒褐	にぶい褐		河口1958a　P186　b104
	89	深鉢？	凸帯文其の他	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	突帯,沈線,条痕,ナデ	ナデ,指オサエ		○					○	黒褐	にぶい赤褐		河口1958a　P186　b103
	90	深鉢？	凸帯文其の他	5	口縁	イⅢX2C	-	-	-	沈線,刻目突帯文,ナデ	ナデ,指オサエ							○	明赤褐	明赤褐		河口1958a　P186　b106

第６表　出水貝塚出土土器観察表④

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
16	91	深鉢？	凸帯文其の他	4?	口縁	イⅢ+16	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	褐灰	灰白	穿孔有り	河口1958a　P186　b105
	92	深鉢？	凸帯文其の他	2?	口縁	イⅢ12	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ		○			○		○	暗灰	灰白		河口1958a　P186　b107
	93	-	凸帯文其の他	その他	口縁	イⅢ24?	-	-	-	突帯文,ナデ	ナデ		○		○			○	褐灰	灰黄褐		河口1958a　P186　b108
	94	鉢？	凸帯文其の他	その他	胴部	イⅢ23Q	-	-	-	沈線, 刻目突帯, ナデ	ナデ	○	○		○			○	明赤褐	にぶい黄橙		河口1958a　P186　b109
	95	鉢	凸帯文其の他	その他	口縁	イⅢ24S	20.5	-	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P186　b110
	96	深鉢	凸帯文其の他	1	口縁	イⅢ25	-	-	-	凹線, 凹点, ナデ	ナデ, 指オサエ		○			○		○	明赤褐	明赤褐		河口1958a　P186　b111
17	97	深鉢	波状隆起文	4	口縁~胴部	イⅢ23Q	32	-	-	沈線, ケズリ後ナデ,指オサエ	ナデ		○						灰褐	にぶい赤褐		河口1958a　P187　a113
	98	深鉢	波状隆起文	4	口縁	イⅢ23Q	34.2	-	-	沈線, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○		○				明赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P187　a114
	99	深鉢	凸帯文	4	口縁	イⅡ22?	-	-	-	沈線, 刺突連点文, ナデ	ナデ		○	○				○	にぶい赤褐	橙		河口1958a　P187　b116
	100	深鉢	凸帯文	4	胴部	イⅡ22	-	-	-	沈線, 突帯, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	暗灰	褐		河口1958a　P187　b118
	101	深鉢	凸帯文	4	口縁	イⅡ22S	-	-	-	短沈線, 沈線, 条痕, ナデ	ナデ		○					○	にぶい赤褐	灰黄褐		河口1958a　P187　b117
	102	深鉢	凸帯文	5	口縁	イⅡ12y	-	-	-	凹線, 刻目突帯, ケズリ, ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○	○			○	褐	にぶい赤褐		河口1958a　P187　b119
	103	深鉢	凸帯文	4	口縁	イⅡ+1b	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	黒褐	橙		河口1958a　P187　b120
	104	深鉢	凸帯文	3	口縁	イⅡ22S	20.1	-	-	凹線, 丁寧なナデ	ナデ, 工具ナデ, 指オサエ		○					○	赤褐	にぶい黄橙		河口1958a　P187　b121
18	105	深鉢？	凸帯文	(3～4)	脚部	イⅡ22e	-	-	-	凹点, 刻目突帯, ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○		○			○	灰黄	にぶい黄褐	鯨骨圧痕	河口1958a　P187　b122
	106	深鉢	凸帯文	(3～4)	脚部	イⅡ12y	-	12	-	沈線, ナデ, 指オサエ	ナデ		○					○	にぶい黄	にぶい黄		河口1958a　P187　b123
	107	鉢？	凸帯文	6?	胴部	イⅡ12a	-	-	-	沈線, 丁寧なナデ	条痕		○						にぶい赤褐	暗赤褐		河口1958a　P187　b124
19	108	鉢	出水式	4	口縁	イⅢX11	18.1	-	-	短沈線, ナデ, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○	○	○			○	にぶい赤褐	にぶい黄褐		河口1958a　P188　a125
	109	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ+13	-	-	-	短沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○				にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P188　a129
	110	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	短沈線, 刺突文, ナデ	ナデ		○					○	暗灰	にぶい褐		河口1958a　P188　a126
	111	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	短沈線, 刺突文, 貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	赤褐		河口1958a　P188　a127
	112	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢX2C	-	-	-	沈線, 短沈線, 刻目, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	黒褐	灰褐		河口1958a　P188　a128
	113	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ-2b	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ	ナデ		○		○			○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P188　a130
	114	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	刻目, 短沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ					○		○	灰	にぶい黄橙		河口1958a　P188　a131
	115	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ12	-	-	-	刺突文, ナデ	ナデ, 指オサエ		○						明赤褐	暗灰黄		河口1958a　P188　a132
	116	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	短沈線, ケズリ, ナデ	ケズリ,ナデ,指オサエ		○		○			○	灰褐	褐灰		河口1958a　P188　a133
	117	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ-2a	-	-	-	短凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○		○			○	にぶい橙	橙		河口1958a　P188　b134
	118	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24t	-	-	-	沈線, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○					○	灰褐	にぶい赤褐		河口1958a　P188　b135
	119	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢX1b	-	-	-	沈線, 刺突文, 条痕, ナデ	工具ナデ, ナデ		○					○	灰褐	黒褐		河口1958a　P188　b136
	120	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢXb	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	にぶい赤褐	灰褐		河口1958a　P188　b137

第７表　出水貝塚出土土器観察表⑤

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
19	121	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ12	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	橙	暗灰黄		河口1958a　P188　b138
	122	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	短沈線, ナデ	ナデ		○			○		○	灰褐	暗灰黄		河口1958a　P188　b139
	123	深鉢	出水式	4	口縁	-	-	-	-	沈線, 条痕, ナデ	丁寧なナデ		○						灰褐	黒褐		河口1958a　P188　b140
	124	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23N	-	-	-	沈線, ナデ	丁寧なナデ		○					○	赤灰	にぶい黄橙		河口1958a　P188　b141
20	125	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ27D	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ		○					○	赤灰	灰黄		河口1958a　P188　b142
	126	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	黒褐	灰褐		河口1958a　P188　b143
	127	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢX11	-	-	-	短沈線, ナデ	ナデ		○		○			○	にぶい橙	にぶい黄橙		河口1958a　P188　b144
	128	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢXウ	-	-	-	短沈線, 沈線, 刺突文, ナデ, 指オサエ	工具ナデ, 丁寧なナデ		○		○	○		○	黒褐	にぶい赤褐		河口1958a　P189　a145
	129	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢXb	-	-	-	ミガキ, 沈線, 刺突文, ナデ	丁寧なナデ, 指オサエ, ミガキ		○		○			○	暗赤灰	にぶい褐		河口1958a　P189　a146
	130	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	沈線, ナデ	工具ナデ, ナデ		○					○	にぶい黄	暗褐		河口1958a　P189　a147
	131	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ	-	-	-	沈線, 刺突文, 条痕, ナデ	ナデ		○						褐灰	黒		河口1958a　P189　a148
	132	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢX11	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	黒褐	にぶい橙	２～３㎜小礫	河口1958a　P189　a149
	133	鉢？	出水式	4	口縁	イⅢ24N	-	-	-	沈線, 短沈線, ナデ	ナデ		○					○	にぶい赤褐	赤褐		河口1958a　P189　a151
	134	深鉢	出水式	4	口縁付近	イⅢ23S	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ	強い指ナデ, 指オサエ		○		○			○	にぶい褐	にぶい黄	穿孔有り	河口1958a　P189　a150
	135	深鉢	出水式	4	口縁	イ?C	-	-	-	刺突文, 沈線, ナデ	丁寧なナデ, 指オサエ		○					○	灰褐	黒褐		河口1958a　P189　a152
	136	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	灰黄褐		河口1958a　P189　a153
	137	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ-16	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○					○	灰黄褐	褐		河口1958a　P189　b154
	138	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23N	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ	丁寧なナデ		○		○			○	灰褐	黒		河口1958a　P189　b155
	139	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢX1	-	-	-	短沈線, 沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	黒褐	にぶい褐		河口1958a　P189　b156
	140	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ-2C	-	-	-	刺突文, 沈線, ナデ	ナデ		○					○	明赤褐	暗褐		河口1958a　P189　b157
	141	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23N	-	-	-	沈線, 刺突文, 条痕, ナデ	工具ナデ, ナデ, 指オサエ		○					○	暗褐	にぶい褐		河口1958a　P189　b158
	142	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ	丁寧なナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	黒褐		河口1958a　P189　b159
	143	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24S	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	にぶい橙	暗灰黄		河口1958a　P189　b160
	144	深鉢？	出水式	4	口縁	イⅢ23N	-	-	-	沈線, 刺突文, 条痕, ナデ	ナデ		○					○	褐灰	赤褐		河口1958a　P189　b161
	145	深鉢	出水式	4	口縁	イⅢ24N	-	-	-	沈線, 刺突文, ケズリ, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	暗灰黄		河口1958a　P189　b162
21	146	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ51	-	-	-	刻目, 刻目突帯, 沈線, ナデ	ナデ		○		○			○	灰褐	にぶい赤褐		河口1958a　P190　a163
	147	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ51	-	-	-	沈線, 刻目, 丁寧なナデ	丁寧なナデ		○					○	にぶい橙	にぶい黄		河口1958a　P190　a164
	148	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ12	-	-	-	貝殻刺突文, ナデ	ハデナミガキ, ナデ, 貝殻条痕		○		○			○	灰褐	黒褐	１～２㎜小礫	河口1958a　P190　a165
	149	深鉢	市来式	-	口縁	-	-	-	-	貝殻刺突文, 沈線, 条痕, ナデ	ナデ		○		○			○	にぶい赤褐	灰黄	５㎜小礫	河口1958a　P190　a166
	150	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ42	-	-	-	貝殻刺突文, 条痕, ナデ	条痕, ナデ		○	○		○		○	明赤褐	暗褐		河口1958a　P190　a167

第８表　出水貝塚出土土器観察表⑥

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
21	151	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ12	-	-	-	貝殻刺突文, 貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ		○					○	橙	灰黄褐		河口1958a　P190　a168
	152	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ23	-	-	-	貝殻刺突文, ケズリ, ナデ, 貝殻条痕	ケズリ,ナデ,貝殻条痕,指オサエ		○		○			○	褐	にぶい赤褐		河口1958a　P190　a169
	153	深鉢	市来式	-	胴部	イⅠ92	-	-	-	刻目突帯, 沈線, 丁寧なナデ	丁寧なナデ		○					○	明赤褐	にぶい黄褐		河口1958a　P190　a170
	154	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ12	-	-	-	貝殻刺突文, ナデ	ナデ		○	○	○				にぶい橙	にぶい橙		河口1958a　P190　a171
	155	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ92	19.1	-	-	貝殻刺突文, 丁寧なナデ	条痕, ナデ		○	○	○			○	灰黄	灰褐		河口1958a　P190　a172
	156	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ12	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○		○			○	にぶい赤褐	にぶい褐		河口1958a　P190　a174
	157	深鉢	市来式	-	口縁	イⅠ62	-	-	-	貝殻押引文, ナデ	ナデ		○					○	灰褐	にぶい褐	（貝片）	河口1958a　P190　a173
	158	-	市来式	-	脚部	イⅠ12	-	-	-	貝殻刺突文, 刻目, ナデ	ナデ		○		○			○	明赤褐	明赤褐		河口1958a　P190　a175
	159	鉢	研磨土器	6	胴部	イⅠ3C	-	-	-	縄文, 沈線, ミガキ	ミガキ		○					○	赤黒	明赤褐	出水教育委員会所蔵	河口1958a　P190　b176
	160	鉢	研磨土器	6	口縁	イⅠ32	-	-	-	刻目, ミガキ, ナデ	ミガキ		○					○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		河口1958a　P190　b177
	161	鉢	研磨土器	6	胴部	イⅠ32	-	-	-	刻目, 沈線, ミガキ	ナデ		○					○	にぶい赤褐	明赤褐		河口1958a　P190　b178
	162	鉢	研磨土器	6	胴部	イⅠ32	-	-	-	刻目, 沈線, 縄文, ミガキ	ナデ		○						暗赤褐	明赤褐		河口1958a　P190　b179
	163	深鉢？	研磨土器	6	胴部	イⅠ32	-	-	-	沈線, ミガキ	ミガキ		○					○	にぶい赤褐	赤褐	出水教育委員会所蔵	河口1958a　P190　b183
22	164	鉢	縄文土器当土器	6	口縁	イⅠ23,イⅠC? No2A,石棺	18.5	-	-	縄文, ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ		○		○			○	暗灰黄	暗灰		河口1958a P191 a186･a187･a190
	165	鉢	縄文土器当土器	6	口縁	イⅠ42(19), イⅠ62	18.5	-	-	縄文, ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ		○		○			○	暗灰黄	暗灰		河口1958a P191 a188･a189
	166	鉢	研磨土器	6	口縁～胴部	イⅢXb	22	-	-	沈線, 磨消縄文, ミガキ, ナデ	ナデ		○		○	○		○	にぶい赤褐	橙		河口1958a　P191　b191
	167	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ-2b	-	12.3	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ				○			○	灰黄	にぶい赤褐		河口1958a　P192　b202
	168	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ+1b	-	12	-	沈線, ナデ	ナデ		○					○	灰黄	灰黄		河口1958a　P192　b203
	169	深鉢	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ24t	-	10.2	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○						灰褐	赤褐	鯨骨圧痕?	河口1958a　P192　b204
	170	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ-24N	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ		○		○				暗灰黄	にぶい黄褐		河口1958a　P192　b205
	171	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ24t	-	6	-	刺突連点文, 短沈線, ナデ	ナデ		○					○	にぶい赤褐	暗灰黄		河口1958a　P192　b206
	172	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ-2b	-	-	-	沈線, ナデ	ナデ		○					○	橙	にぶい褐		河口1958a　P192　b207
	173	深鉢	土器底部	(3～4)	脚部	イⅥ2o	-	10	-	ナデ, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○			○		○	灰黄	灰褐	鯨骨圧痕	河口1958a　P192　b208
	174	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢXbb	-	12	-	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	灰オリーブ	灰オリーブ		河口1958a　P192　b209
	175	深鉢？	土器底部	(3～4)	脚部	イⅢ+12	-	12.4	-	指オサエ, 刺突文, ナデ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	にぶい黄	暗灰黄		河口1958a　P192　b211
23	176	深鉢	押型文	-	胴部	イⅤ32	-	-	-	押型文（格子目）	ナデ	○	○	○	○				橙	灰黄		『出水郷土誌』　P62　7
	177	深鉢	貝殻条痕文	（早期）	口縁	イⅥ24	-	-	-	貝殻条痕, ナデ	ナデ, 指オサエ	○	○	○	○				にぶい黄橙	にぶい黄橙		『出水郷土誌』　P62　8
	178	深鉢	阿高式	1	口縁	-	30.1	-	-	凹線, 凹点, ナデ	ナデ, ケズリ, 指オサエ	○			○			○	灰褐	灰褐		『出水郷土誌』　P62　1
	179	深鉢	阿高式	3	口縁	-	-	-	-	凹線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	灰オリーブ		『出水郷土誌』　P62　2
	180	深鉢	並木式	その他	口縁	イⅡ22b, イⅡ11b	33.6	-	-	刻目, 沈線文, 刺突文, ケズリ, ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○				○	にぶい褐	にぶい橙		『出水郷土誌』　P62　4

第９表　出水貝塚出土土器観察表⑦

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
24	181	深鉢	-	(早期)	胴部	イⅡ02	-	-	-	貝殻条痕文, 貝殻刺突文	ケズリ, ナデ		○	○				○	にぶい黄橙	にぶい黄橙		
	182	深鉢	-	(早期)	胴部	イⅢ25C	-	-	-	縄文, ナデ	ナデ, ケズリ		○		○			○	灰褐	にぶい橙	２～５㎜小礫	
	183	深鉢	-	1	口縁	Ⅰ・A・貝3	29.6	-	-	凹線, 凹点, ナデ	ナデ, 指オサエ				○	○		○	暗青灰	にぶい赤褐		
	184	深鉢	-	1	口縁	イⅡ41b	31.6	-	-	凹線, 凹点, ナデ	条痕, ナデ		○		○	○		○	灰褐	にぶい褐		
	185	深鉢	-	1	口縁~胴部	イⅡ+1b	33.2	-	-	凹線, 凹点, 指オサエ, ナデ	条痕, ナデ	○	○					○	灰赤	にぶい赤褐		
	186	深鉢	-	1	口縁	イⅠ92	-	-	-	凹線, 凹点, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○			○		○	にぶい赤褐	明赤褐		
	187	深鉢	-	1	口縁	イⅠ32, イⅠ33	-	-	-	凹線, 凹点, 指オサエ, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ		○			○	○		暗赤褐	黄灰		
	188	深鉢	-	1	胴部	イⅠ32f	-	-	-	凹線, ナデ	条痕, 指オサエ		○		○		○	○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
25	189	小型深鉢	-	2	口縁	Ⅰ・A・貝・3	19.5	-	-	凹線, 凹点, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ				○			○	暗赤褐	暗青灰		
	190	鉢	-	2	口縁	ⅠA貝3	16.4	-	-	刺突文, 沈線, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○			○		○	橙	にぶい黄橙		
	191	深鉢	-	2	口縁	イⅠ83	-	-	-	凹点, ナデ	ナデ, 指オサエ		○			○			にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	192	深鉢	-	2	口縁	イⅤ31	-	-	-	凹点, 丁寧なナデ	指オサエ, ナデ, 丁寧なナデ	○	○						灰赤	灰赤		
	193	深鉢	-	3	口縁	-	26	-	-	凹線, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ		○					○	暗赤褐	にぶい褐		
	194	深鉢	-	3	口縁	イⅥ2C	-	-	-	凹線, ケズリ, ナデ	指オサエ, ナデ	○	○					○	灰褐	灰褐		
	195	深鉢	-	3	口縁~胴部	イⅢ12Q(4コ)	28.1	-	-	凹点, 凹線, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ, ケズリ		○	○				○	橙	にぶい赤褐		
26	196	深鉢	-	3	口縁~胴部	イⅡ13	44.8	-	-	凹線, 凹点, ナデ, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○		○	○		○	にぶい赤褐	にぶい黄		
27	197	深鉢	-	4	口縁~胴部	イⅥ1+bb	-	-	-	沈線, 丁寧なナデ, ケズリ	指オサエ, 丁寧なナデ	○				○		○	にぶい赤褐	橙		
	198	深鉢	-	4	口縁	イⅥ1+bb	-	-	-	沈線, 丁寧なナデ, ケズリ	指オサエ, 丁寧なナデ	○	○			○	○	○	にぶい赤褐	明赤褐		
	199	深鉢	-	4	口縁	イⅠ62	-	-	-	凹点, 沈線, ミガキ, ナデ	指オサエ, ミガキ, ナデ		○					○	黒褐	にぶい赤褐		
	200	深鉢	-	4	口縁	イⅢ-2b	25.8	-	-	沈線, ナデ, 指オサエ	丁寧なナデ	○	○	○	○				橙	にぶい黄橙		
	201	深鉢	-	4	口縁	イⅥ22	-	-	-	沈線, 短沈線, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○		○	○		○	灰褐	灰黄		
	202	深鉢	-	4	口縁	イⅢ23S	-	-	-	沈線, ナデ	指オサエ, ケズリ, ナデ		○		○				褐	にぶい橙		
	203	深鉢	-	4	胴部	-	-	-	-	沈線, 刺突文, ナデ, 指オサエ	指オサエ, 丁寧なナデ, 工具ナデ		○						にぶい赤褐	暗青灰		
	204	深鉢	-	4	口縁~胴部	イⅡ12y(2コ)	28.8	-	-	短沈線, 沈線, 指オサエ, ナデ	ナデ		○		○				灰褐	にぶい褐		
	205	深鉢	-	4	口縁	イⅥ41	-	-	-	突帯, 沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	黒褐	灰黄褐		
28	206	深鉢	-	5	口縁	イⅠ32	-	-	-	刻目突帯, 沈線, ナデ	丁寧なナデ		○		○			○	灰黄	橙		
	207	深鉢？	-	5	口縁	イⅥ42	-	-	-	刻目突帯, 貼付突帯, 短沈線, ナデ	丁寧なナデ	○			○			○	灰黄	にぶい橙		
	208	深鉢	-	5	口縁	イⅤ02	-	-	-	刻目突帯, 丁寧なナデ	条痕, 丁寧なナデ	○	○					○	明赤褐	明赤褐		
29	209	鉢？	-	6	口縁	イⅤ11	-	-	-	凹線, 凹点, 沈線, 磨消縄文, ナデ	ミガキ		○		○			○	にぶい赤褐	明赤褐		
	210	鉢？	-	6	胴部	イⅢ+22	-	-	-	沈線, 縄文, ナデ	ミガキ, ナデ		○					○	橙	橙		

第10表　出水貝塚出土土器観察表⑧

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
29	211	鉢？	-	6	口縁	イⅤ31	-	-	-	凹点, 縄文, 沈線, ナデ	ナデ		○		○				にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	212	深鉢	-	6	胴部	イⅤ11	-	-	-	沈線, 縄文, ミガキ, ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	にぶい赤褐	明赤褐		
	213	深鉢？	-	6	口縁	イⅢ27	-	-	-	沈線, 磨消縄文, ナデ	ナデ, 指オサエ		○			○			灰黄	にぶい黄橙		
	214	深鉢？	-	6	胴部	イⅤ11	-	-	-	沈線, 磨消縄文, ナデ	ナデ		○					○	赤	にぶい褐		
	215	鉢？	-	6	胴部	イⅤ11	-	-	-	沈線, 磨消縄文, ナデ, ミガキ	条痕		○					○	にぶい黄橙	灰黄褐		
	216	深鉢？	-	6	頸部付近?	イⅢ11	-	-	-	刻目, 貝殻背圧痕, 沈線, ミガキ, ナデ	ミガキ		○					○	暗赤灰	暗赤		
	217	深鉢	-	6	頸部	イⅠ22	-	-	-	沈線, 縄文, ナデ	条痕, ナデ, 指オサエ		○					○	褐	にぶい赤褐		
	218	鉢？	-	6	胴部	イⅢ+12	-	-	-	疑似縄文, 刺突文, 沈線, ミガキ	ナデ		○					○	黒	青黒		
	219	深鉢？	-	6	頸部付近?	イⅠ32f	-	-	-	沈線, 擬似縄文, ナデ	条痕, ナデ		○						褐灰	灰褐		
	220	深鉢？	-	6	口縁	イⅥ33C	-	-	-	マキガイ圧痕文, 沈線, ナデ	ナデ		○					○	橙	にぶい赤褐		
30	221	深鉢	-	(3～4)	口縁	イⅠ42	-	-	-	凹点, 指オサエ, ケズリ, ナデ	指オサエ, ナデ		○					○	褐	にぶい赤褐	1～2㎜小礫	
	222	鉢	-	(3～4)	口縁	イⅥ12W	21.2	-	-	ナデ, ケズリ	条痕, 指オサエ, ナデ		○		○			○	赤	明赤褐	2～3㎜小礫	
	223	鉢	-	(3～4)	口縁	イⅥ2bb, イⅥ2C	16.4	-	-	強い指ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○	○			○	にぶい赤褐	にぶい橙		
	224	鉢	-	(3～4)	口縁	イⅠ92	26	-	-	ナデ, 指オサエ	条痕, 指オサエ, ナデ	○		○	○			○	にぶい褐	にぶい赤褐		
	225	深鉢	-	(3～4)	口縁	イⅢ-2b	25	-	-	ナデ, ケズリ	ナデ, ミガキ		○	○				○	灰赤	灰褐		
	226	深鉢	-	(3～4)	口縁	イⅥ2±b	50	-	-	凹点, 指オサエ, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ	○	○		○	○		○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		
31	227	鉢	-	(3～4)	口縁～胴部	イⅤ01	25.4	-	-	指オサエ, ミガキ, ナデ	指オサエ, ミガキ, ナデ	○	○						黒褐	にぶい赤褐		
	228	鉢	-	(3～4)	口縁～胴部	イⅤ01, イⅤ0B	27.2	-	-	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	○	○						にぶい赤褐	にぶい赤褐		
	229	深鉢	-	(3～4)	口縁	イⅢ-24S	-	-	-	指オサエ, ナデ	ナデ, 工具ナデ		○					○	灰褐	にぶい橙		
	230	深鉢	-	(3～4)	口縁～胴部	イⅤ2?	26	-	-	ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ	○	○					○	灰オリーブ	橙		
	231	深鉢	-	(3～4)	口縁	イⅢXb	24.8	-	-	ケズリ, ナデ, 指オサエ	ナデ, ケズリ, 指オサエ, 条痕		○		○			○	褐灰	灰黄		
	232	深鉢	-	(3～4)	口縁～胴部	イⅡ12X(4コ)	23	-	-	ナデ, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○		○				褐灰	にぶい褐		
	233	深鉢	-	(3～4)	口縁～胴部	イⅡ22X(3コ)	26	-	-	ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ		○		○			○	灰褐	橙		
32	234	深鉢？	-	1	底部	ⅠB貝層2	-	12.6	-	指オサエ, ナデ	凹線, ナデ		○		○			○	にぶい黄橙	灰黄	鯨骨圧痕	
	235	深鉢	-	(3～4)	底部	ⅠB貝層2	-	10.4	-	指オサエ, ケズリ, ミガキ, ナデ	指オサエ, ナデ				○			○	灰褐	灰		
	236	深鉢	-	(3～4)	胴部～底部	出水ⅠA貝4	-	13.4	-	ケズリ, ナデ, 指オサエ	条痕, ケズリ, ナデ, 指オサエ				○	○		○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	鯨骨圧痕?	
	237	深鉢	-	(3～4)	胴部～底部	イⅡ+Ob	-	-	-	ケズリ, ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○					○	明赤褐	にぶい黄褐	鯨骨圧痕?	
	238	深鉢	-	(3～4)	底部	ⅠA貝層4(2コ)	-	13.8	-	ナデ, 指オサエ	ナデ, 指オサエ		○		○			○	にぶい赤褐	にぶい褐	鯨骨圧痕?	
33	239	深鉢	-	(3～4)	底部	イⅥ41'	-	12.1	-	指オサエ, ナデ	指オサエ, ナデ	○			○	○		○	灰黄	灰黄		
	240	深鉢	-	(3～4)	底部	イⅦ12	-	13.6	-	ナデ, 指オサエ, ケズリ	ナデ, 指オサエ		○			○		○	にぶい赤褐	にぶい赤褐		

第11表　出水貝塚出土土器観察表⑨

挿図番号	掲載番号	器種	河口分類	未報告分類	部位	注記	法量(cm)			文様・調整		胎土							色調		備考	旧報告番号
							口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	石英	長石	角閃石	金雲母	滑石	砂礫	外面	内面		
33	241	深鉢	-	(3～4)	底部	イⅢ12(2コ)	-	12.6	-	ナデ, 指オサエ	ナデ		○	○	○			○	灰黄褐	灰黄褐		
	242	深鉢	-	(3～4)	底部	イⅡ04(3コ)	-	14.8	-	指オサエ, ナデ, ケズリ	指オサエ, ナデ		○	○	○		○	○	にぶい赤褐	明赤褐		
	243	深鉢	-	(3～4)	底部	イⅡ13	-	14.4	-	指オサエ, 丁寧なナデ, ケズリ	ナデ		○					○	にぶい赤褐	灰黄		
	244	深鉢	-	(3～4)	底部	-	-	8.8	-	指オサエ, ナデ	条痕		○		○			○	にぶい赤褐	にぶい赤褐	編物圧痕	
	245	深鉢？	-	(3～4)	脚部	イⅢ24N	-	13.6	-	刺突文, 沈線文, ナデ	ナデ		○		○			○	灰黄褐	にぶい黄橙		
	246	深鉢？	-	(3～4)	脚部	-	-	8.8	-	刺突文, ナデ	ナデ		○		○			○	灰黄	灰黄		
	247	深鉢？	-	(3～4)	脚部	イⅢ11	-	10	-	刺突文, ナデ, 指オサエ	ナデ	○	○		○			○	灰白	にぶい黄橙		
	248	深鉢？	-	(3～4)	脚部	イⅥ33C	-	12.8	-	ナデ, 指オサエ	ナデ		○		○	○		○	にぶい黄橙	橙	鯨骨圧痕	
	249	鉢？	-	6	脚部	イⅠ11	-	8.8	-	沈線, ミガキ	ミガキ	○	○			○		○	灰褐	黒褐	赤色顔料付着	
34	250	鉢	-	その他	口縁	イⅥ21	20	-	-	沈線, 指オサエ, ナデ	指オサエ, ナデ		○		○			○	明赤褐	にぶい橙		
	251	深鉢	-	その他	口縁	-	-	-	-	突帯, 沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○	○	○		○	にぶい黄褐	橙		
	252	小型深鉢	-	その他	□縁~胴部	イⅢ11	13	-	-	凹点, 貝殻条痕, ナデ	貝殻条痕, ナデ				○			○	灰黄	にぶい黄		
	253	深鉢？	-	その他	口縁	イⅢXb	-	-	-	凹線, 凹点, 沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○	○				明赤褐	にぶい黄橙	赤色顔料付着	
	254	深鉢？	-	その他	外耳	ⅠA貝層3	-	-	-	ナデ	ナデ	○	○	○	○			○	赤褐	にぶい赤褐	穿孔有り	
	255	-	-	4	口縁	イⅥ21	-	-	3.4	沈線, ナデ	ナデ		○		○			○	橙	黄灰	円盤形土製品	
	256	-	-	4	胴部	注記不明	-	-	4	沈線, ナデ	ナデ	○	○					○	にぶい褐	灰黄	円盤形土製品	
	257	-	-	4	胴部	イⅤ01	-	-	5.9	沈線, ケズリ, ナデ	ナデ		○					○	明赤褐	にぶい褐	円盤形土製品	
	258	-	-	4	胴部	イⅤ21	-	-	5.2	沈線, ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○				○	暗赤褐	にぶい褐	円盤形土製品	
	259	-	-	(3～4)	胴部	イⅢ24N	-	-	3.8	ナデ	工具ナデ, ナデ		○		○				灰黄	にぶい褐	円盤形土製品	
	260	-	-	(3～4)	胴部	イⅢ?12	-	-	4.1	ナデ	ナデ		○						灰黄褐	灰黄褐	円盤形土製品	
	261	-	-	(3～4)	胴部	???N	-	-	3.7	ナデ	ナデ		○		○			○	褐	赤褐	円盤形土製品	
	262	-	-	(3～4)	胴部	イⅢ3?	-	-	4.7	ナデ	ナデ		○	○				○	にぶい黄橙	にぶい黄橙	円盤形土製品	
	263	-	-	(3～4)	胴部	イⅢX16	-	-	4.8	ナデ	ナデ, 指オサエ		○					○	黒褐	黒褐	円盤形土製品	
	264	-	-	(3～4)	底部	イⅠ51	-	-	5.5	ナデ	ナデ, 指オサエ		○	○	○			○	明赤褐	明赤褐	円盤形土製品	
	265	-	-	(3～4)	胴部	?Ⅲ+12	-	-	3.9	条痕, ナデ	ナデ		○						灰褐	明赤褐	円盤形土製品	
	266	-	-	6?	胴部	??+b	-	-	4.4	擬似縄文, ナデ	ミガキ				○			○	橙	橙	円盤形土製品	

※旧報告番号のページは,『河口貞徳先生―古稀記念著作集 上巻―』(1981)所収時の掲載ページである。
※掲載番号255～266の器高は,円盤形土製品の長さである。

第12表　出水貝塚出土石器・石製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	注記	法量(cm)			重量(g)	石材	備考	旧報告番号
				長さ	幅	厚さ				
35	267	石核	-	4.50	4.00	1.60	29.00	日東系黒曜石		
	268	石核	-	2.40	3.00	1.40	11.00	日東系黒曜石		
	269	石核	-	3.30	4.80	1.30	22.00	日東系黒曜石		
	270	剥片	-	3.90	4.40	1.10	14.00	日東系黒曜石	二次加工	
	271	剥片	-	2.90	3.20	1.10	11.00	日東系黒曜石	二次加工	
	272	剥片	Ⅵ8.2貝	3.00	3.40	0.90	8.00	日東系黒曜石	二次加工	
36	273	スクレイパー	-	6.30	4.60	1.90	52.00	日東系黒曜石		
	274	剥片石器	-	2.30	3.20	0.50	5.00	チャート		
	275	剥片石器	-	10.20	5.20	0.80	49.00	頁岩		
37	276	石斧基部	-	2.90	2.40	1.10	10.00	蛇紋岩		
	277	磨製石斧	出水	145.30	67.90	50.90	858.38	砂岩		
	278	磨製石斧	イⅠb	101.20	61.00	29.50	264.50	安山岩		
	279	打製石斧	イⅤ２１b出水	129.00	67.50	28.90	319.46	ホルンフェルス		
	280	打製石斧	イⅤOC	151.90	62.90	28.30	300.39	ホルンフェルス		
38	281	磨石	イⅠ３３	12.00	11.10	4.80	1045.00	安山岩		
	282	磨石	イⅢ１２	11.90	10.80	5.30	1035.00	凝灰岩		
	283	磨石	イⅢ±２？	10.40	9.20	5.60	933.00	砂岩		
	284	石製品	-	6.20	7.50	3.10	234.00	砂岩		
39	285	垂飾品	-	4.80	1.20	1.20	8.31	滑石？	大珠転用品か	河口1958a　P179　b１

第13表　出水貝塚出土貝製品・骨角器観察表

い	掲載番号	器種	注記	法量(cm)			重量(g)	備考	旧報告番号
				長さ	幅	厚さ			
40	286	貝輪	Ⅴ２１	-	-	0.30	2.25		河口1958a　P179　a３
	287	貝輪	イⅥ２４	-	-	0.35	4.59		河口1958a　P179　a１
	288	貝輪	Ⅴ２．１	-	-	0.30	9.08	フネガイ科	河口1958a　P179　a２
	289	貝輪	出水	-	7.30	0.40	12.54	タマキガイ科	河口1958a　P179　a４
	290	貝輪	-	6.60	-	0.55	12.24	タマキガイ科	河口1958a　P179　a５
	291	貝輪	出水12区A	-	9.50	0.70	67.00	サルボウガイ	
	292	貝輪	出水９	6.60	8.00	0.40	31.00	サルボウガイ	
	293	貝輪	不明	8.80	-	0.70	21.00	ゴホウラガイ	
	294	小玉	-	1.10	1.10	0.30	0.60	イモガイ殻頂	
	295	貝刃？	イⅡ-Ⅲ	6.10	7.80	0.30	24.00	ハマグリ	
41	296	骨製加工品	Ⅴ２１	6.90	1.35	1.20	7.17	獣骨	河口1958a　P179　b２
	297	かんざし	出水	10.20	1.40	0.60	4.48	獣骨	
	298	垂飾品	出水	3.70	1.70	1.20	3.97	牙	

※旧報告番号のページは,『河口貞徳先生―古稀記念著作集 上巻―』(1981)所収時の掲載ページである。

第Ⅳ章　自然科学分析

本遺跡出土の土器と垂飾品について，次のとおり双眼実体顕微鏡と走査電子顕微鏡による形状観察及びエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による成分分析を行った。

第１節　試料

土器表面に塗布または付着していた赤色及び白色粒子
土器５点，垂飾品１点　計６点

第２節　観察・分析方法

１　形状観察

以下の機器を使用して，形状を観察し撮影を行った。

ア　双眼実体顕微鏡（ニコン製 SMZ1000）による８～60倍観察

イ　走査電子顕微鏡（日本電子製 JCM-6000Plus）による1000～2000倍観察

２　成分分析

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000，Ｘ線管球ターゲット：ロジウム，Ｘ線照射径100㎛）を使用し，次の条件により分析を行った。

Ｘ線管電圧：15/50kV　電流：自動設定
測定時間：200秒　Ｘ線フィルタ：なし
試料セル：なし　パルス処理時間：P3
定量補正法：スタンダードレス

赤色粒子及び白色粒子について，付着している部分と付着していない部分の分析を行い，比較した。

第３節　結果

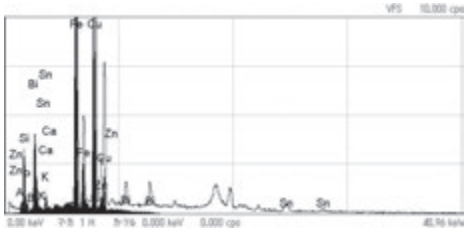
試料の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート（成分分析）と FPM 定量結果，双眼実体顕微鏡及び走査電子顕微鏡による形状観察結果の１例である。

第４節　考察

蛍光Ｘ線分析の結果から，赤色粒子がある土器（試料（１），（２）の２点）は，鉄のピークが見られる。赤色粒子の付着の有無で比較すると，付着有の部分の方がわずかではあるが鉄の濃度が高い。鉄の成分をもつ赤色顔料（ベンガラ）といえる。また，走査電子顕微鏡の画像より，針状結晶は見られなかったので，パイプ状ベンガラではなく，鉱物（赤鉄鉱）由来のベンガラと考えられる。他の白色粒子がある土器（試料（３）～（５）の３点）は，従来の白色顔料の白土（アルミニウムの含水ケイ酸塩）ではなく，同種の白亜（炭酸カルシウム）も考えられるが，貝塚から出土したことを考慮し，周辺の炭酸カルシウム付着が相当である。試料（６）については，滑石の可能性もあるが，周辺遺跡の資料や分子構造を解析する赤外分光法 FT-IR を考慮する必要がある。

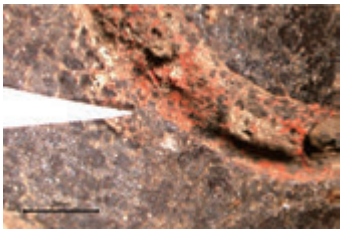
（１）試料　土器 No. 249

スペクトルチャート

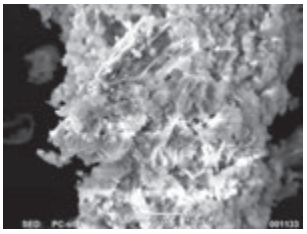


FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	5.30	7.15
けい素	K	41.45	23.87
りん	K	6.23	1.96
カリウム	K	2.69	0.45
カルシウム	K	11.27	1.51
鉄	K	1212.28	19.46
銅	K	1707.31	34.95
亜鉛	K	96.09	1.77
すず	K	27.67	4.49
ビスマス	L	49.85	4.39



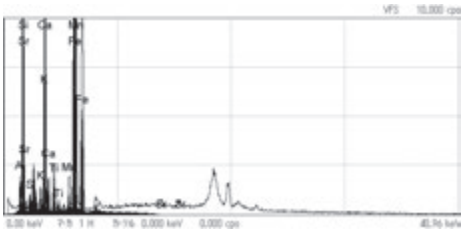
形状観察結果（双眼実体顕微鏡）



形状観察結果（走査電子顕微鏡）

（２）試料　土器 No. 253

スペクトルチャート

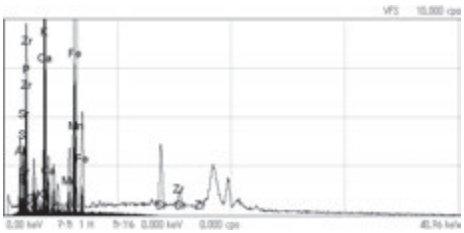


FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	20.86	11.15
ケイ素	K	151.17	40.53
硫黄	K	10.57	0.89
カリウム	K	16.62	1.58
カルシウム	K	162.23	13.00
チタン	K	67.67	1.66
マンガン	K	51.17	0.72
鉄	K	2556.63	30.37
ストロンチウム	K	13.16	0.10

（３）試料　土器 No. 203

スペクトルチャート

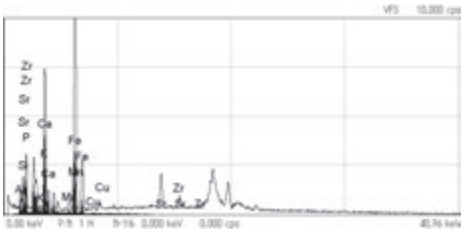


FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	28.51	22.10
けい素	K	27.27	13.04
りん	K	84.23	21.80
硫黄	K	2.57	0.38
カリウム	K	4.94	0.84
カルシウム	K	171.79	25.73
マンガン	K	58.75	1.61
鉄	K	608.38	13.45
ストロンチウム	K	85.96	0.95
ジルコニウム	K	9.02	0.09

（４）試料　土器 No. 75

スペクトルチャート

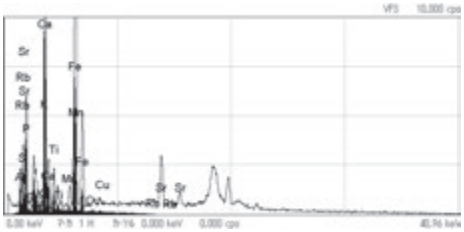


FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	6.29	16.47
けい素	K	11.76	17.06
りん	K	21.48	18.00
カリウム	K	2.26	1.19
カルシウム	K	57.76	27.15
マンガン	K	9.02	0.80
鉄	K	243.30	17.59
銅	K	2.30	0.15
ストロンチウム	K	35.52	1.37
ジルコニウム	K	6.81	0.23

（５）試料　土器 No. 76

スペクトルチャート

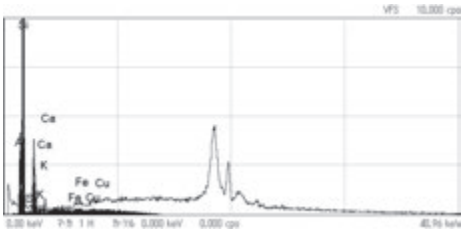


FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	14.98	17.76
けい素	K	23.96	16.10
りん	K	44.53	16.92
硫黄	K	2.39	0.49
カリウム	K	5.34	1.27
カルシウム	K	130.36	30.18
マンガン	K	26.78	0.71
鉄	K	448.80	15.44
銅	K	4.46	0.13
ルビジウム	K	4.47	0.08
ストロンチウム	K	53.11	0.92

（６）試料　垂飾品 No. 285

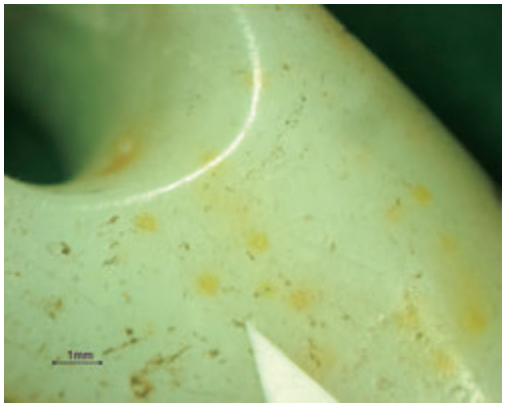
スペクトルチャート



FPM定量結果

元素	ライン	強度(cps/mA)	質量濃度(%)
アルミニウム	K	36.44	19.50
けい素	K	177.24	77.63
硫黄	K	1.59	0.34
カリウム	K	4.66	1.11
カルシウム	K	6.85	1.28
鉄	K	5.63	0.09
銅	K	3.90	0.11

形状観察結果（全体）



形状観察結果（双眼実体顕微鏡）

第Ⅴ章　総括

出水貝塚における1953・1954年の発掘調査成果について，他年度の出水貝塚の調査及び他遺跡の事例も踏まえた考察と再評価を行い，総括としたい。

第１節　埋葬について

まず，出水貝塚出土の縄文中期から後期初頭の埋葬人骨を中心に，九州中南部の遺跡の出土事例を参考にしながら当時の埋葬方法について述べる（第14表）。出水貝塚の1954人骨の性別は出水市教育委員会報告書の峰和治らの分析に基づいた性別を掲載した（峰・竹中・小片2000）。熊本県宇土市轟貝塚は1919年にも人骨18体が出土しているが，墓坑の検出層位が不明で時期が確定できないため，掲載していない。1966年出土人骨は，縄文時代人骨６体のみを掲載した（宇土市教育委員会2008）。

１　掘り込み（土坑）について

第Ⅲ章第２節での検討から，1997人骨以外は掘り込みがある可能性が高い。1997人骨は攪乱土坑で上半身が失われていたと報告されており，後世のコンクリート製擁壁の工事で土坑が失われた可能性もある。他５体の状況を考えると掘り込みがあったと考えられる。

垂水市柊原貝塚の４体の人骨（後期から晩期），麦之浦貝塚（後期）や上焼田遺跡（晩期中葉）の人骨でも掘り込みが確認されている。轟貝塚（前期）は，1966年の調査で出土した縄文時代人骨６体については掘り込みを伴っている（宇土市教育委員会2008）。

２　被覆礫について

出水貝塚では，1953人骨や1954-2号・3号・4号人骨の４体に礫があり，特に1954-2号人骨は石に覆われたような状態と報告されている。3号・4号人骨についても，報告書（河口1958a）の第４図からは被覆礫があったと推定される。

轟貝塚の報告書では人骨周辺の礫についての報告はなされていないが，実測図と写真から見る限りでは，上半身を囲むように土坑に沿って礫が検出されている（宇土市教育委員会2008）。市来貝塚でも４個の礫が2号人骨に沿って配置されている（河口1991）。柊原貝塚では，土坑だけで礫は確認されていない（垂水市教育委員会1996・1999・2006）。

３　埋葬姿勢について

1954-3号人骨は頭骨以外の残存状況が良くないため，屈葬か伸展葬かは判断できない。その他の人骨は，1954-2号人骨以外下肢は折り曲げられた仰臥屈葬である。屈葬でも，大腿骨を肩の方へ強く折り曲げ，膝を反対方向へ折り曲げる強屈葬もあれば，膝を立てた状態でそのまま右に倒れた屈葬もある。1954-2号だけが伸展葬であるが，屈葬か伸展葬かの違いの意味は不明である。市来貝塚でも１体伸展葬の人骨が出土しているが，ほとんどは屈葬である。

全国的にも後期までは屈葬が主で，晩期あたりから伸展葬が多くなるという報告がある（小野・春成・小田1992）。また，長野県の北村遺跡（中期～後期の遺跡）で300体の人骨が出土し，埋葬状況が分かる105体について調べた報告がある（(財)長野県埋蔵文化財センター1993）。その結果では，人骨の77.8パーセントが何らか

第14表　九州中南部における縄文時代の人骨出土遺跡と埋葬の状況

番号	遺跡名	時期	埋葬状態	性別	頭位	備考	土器	文献
1	出水貝塚	中期	53年　不完全な屈葬	男	北西	体の両側に礫４個，頭部に土器底部	阿高式	河口1963
			54-1号　仰臥屈葬	男	南	下肢折り曲げ立てた状態	阿高式	出水市教育委員会2000 河口1958a
			54-2号　仰臥伸展葬	女	南	人骨上及び周囲に石塊	阿高式	
			54-3号　不明	男	南東	体上に石塊被覆	阿高式	
			54-4号　仰臥屈葬	女	西	頭骨周辺に若干の石	阿高式	
		後期初頭	97年　仰臥半屈葬	男	北	腰骨以下の下肢骨	南福寺式	出水市教育委員会2000
2	麦之浦貝塚	後期	土坑形状より屈葬？	女	南東	土坑内より頭骨	―	川内市土地開発公社1987
3	市来貝塚	後期	61-1号　仰臥屈葬	女	南	下肢付近軽石製円盤	市来式	河口1991 市来町郷土誌編集委員会1982 垂水市教育委員会1999
			61-2号　仰臥屈葬	女	南東	４個の礫と足下に礫	市来式	
			61-3号　仰臥伸展葬	男	南	巨岩の除､骨格が大	出水式	
4	上焼田遺跡	晩期中葉	77-1号　仰臥屈葬	男	北西	土坑	―	鹿児島県教育委員会1977･2006
5	柊原貝塚	後期･晩期	95-2号　仰臥屈葬	男	北西	土坑	上加世田式	垂水市教育委員会1996･2005
			97-3号　側臥屈葬	女	南	土坑	黒色磨研期	垂水市教育委員会1999･2006･2005
			97-4号　仰臥屈葬	男	西北西	土坑	市来式	
6	轟貝塚	前期～中期？	66-1号　仰臥屈葬	女	南東	土坑　貝輪装着　周囲に礫	轟式？	宇土市教育委員会2008
			66-2号　仰臥屈葬	女	西	土坑　貝製首飾り	轟式？	
		不明	66-3号　仰臥屈葬	不明	北西	土坑	―	
		後期	66-5号　横臥屈葬	不明	北西	土坑	北久根山式	
		前期～中期？	66-7号　横臥屈葬	不明	西	土坑	轟式？	
		後期	66-8号　仰臥屈葬	女	北西	土坑	北久根山式	

※頭位･性別などの詳細が不明で，情報の少ない人骨は記載していない。

の形で足が曲げられていた屈葬姿勢であった。足の曲げ方については，曲げた膝が立っているもの，左または右方向に倒れているもの等，千差万別であったと報告されている。

出水貝塚の1954-2号の伸展葬人骨は，他の人骨と同じ阿高式土器を伴っており，上述の事例等からも時期の違いによる葬法の違いではない。やはり千差万別の埋葬法だったと考えられる。

4　頭位について

頭位については第14表で示したとおり，出水貝塚内で統一性はなく，性別による差も見られない。死者の頭を北側に向ける所謂「北枕」の観念はない。千葉県市川市の姥山遺跡では，頭位の方向が中央部で正反対を向く２群に分かれる遺跡の事例もある（小野・春成・小田1992）。これは出自の違いによるものらしい。

県内の他遺跡で頭位を見てみると，市来貝塚は南方向に統一され，「集落への遺体の視線を避けるように配慮」したものと報告されている（河口1991）。その他の遺跡では，男性が北西方向で女性が南・南東方向に多い。性別による使い分けも考えられるが，一遺跡あたりの個体数が少ないため可能性の範疇に留める。熊本県轟貝塚は北西や西が多い傾向にある。

以上のことから，出水貝塚では，屈葬を主としながらも埋葬姿勢や頭位については人骨毎にばらばらで，県内の縄文人骨出土遺跡や轟貝塚と比べると統一性や規則性がないようである。基本的には，土坑を掘り，屈葬ないし伸展葬で上から礫と土で被覆した葬法だったと考えられる。貝輪，簪，垂飾品の装飾品が出土しているが，埋葬に伴う副葬品としては確認されていない。

ただし，特徴的な埋葬として，1953人骨は頭部に接して深鉢の下部が出土している（河口1986）。埋葬当時頭に土器を被せた可能性もある。このように土器で顔を覆う甕被り葬は先述した北村遺跡からも確認されている。また，出水貝塚は体上に礫を置く人骨が多い。この礫は，被覆礫のほか胸に石を抱かせる抱石葬を行った可能性もある。甕被り葬や抱石葬は，霊魂がさまよい出ることを恐れたものではないかという報告がある（長野県立歴史館1996）。市来貝塚における膝下の置き石や巨岩の陰への埋葬も，遺体の活動を封じるものとして報告されている（河口1991）。

第45図　縄文人骨出土遺跡位置図

第２節　土器について

本貝塚では，押型文・並木式・阿高式・南福寺式・出水式・磨消縄文系土器などの土器が出土している。これまで出水貝塚の発掘調査における土器の出土様相，出水式土器の検討，評価について述べる。

１　土器の出土様相について

本貝塚は出水式土器の標式遺跡であり，河口の調査に加え，古くは濱田耕作らの1920年調査，近年では1996～1998（平成８～10）年の出水市教育委員会による調査も実施され，これまでに多くの土器が出土している。

1920年調査で出土した土器については，『伊木力遺跡』（川崎1990）に実測図が掲載されているため，写真と合わせて資料として掲載する（資料11～21）。京都大学総合博物館が所蔵している1920年調査資料を実見したところ，土器は出水式が主体を占め，南福寺式・市来式・磨消縄文系土器も見られた。南福寺式・出水式の時期であると考えられる無文土器や底部・脚部も多く確認できた。一方で並木式は確認できず，阿高式に分類されている土器（京都大学文学部1960）は，現在の南福寺式の範疇であると考えられる。以上のように，実見により把握できた土器型式と，当時の調査で貝層より下は遺物無しと結論付けている（第Ⅱ章第１節参照）ことから，1920年調査では貝層以上から多くの南福寺式・出水式・市来式・磨消縄文が出土していることになる。ただし，報告書（濱田・島田1921）の写真（圖版第11下段，圖版第15下段など）に押型文土器の破片が写っていたことから，河口は「南九州では押型文土器は縄文時代後期まで残存するとの説が流布する原因となった」（河口2005）としている。

河口が主体となった1953年・1954年調査では，貝層下の赤土層（アカホヤ層）と黒色土層まで調査を行い，土器の出土状況から並木式→阿高式→南福寺式→出水式→市来式という変遷をたどることができたことが大きな成果の一つとされている（第15表）。南福寺式・出水式・市来式が基本的に貝層以上から出土しているという結果は，1920年調査の遺物からみても齟齬はない。押型文土器については，河口の野帳の記述から赤土層（赤褐色層）及び黒土層からまとまって出土していることが分かる。

1996～1998年調査では，これまでの調査成果の再確認及び再検討を視野に入れた調査が行われた。貝層の下から阿高式，貝層ブロックの下からは南福寺式，上からは出水式が出土することから，これまでの調査の出土状況と一致しており，かつ貝塚が南福寺式～出水式の時期に形成されたことが分かっている。「縄文時代中期末から後期前葉の貝塚」（出水市教育委員会2000）としているが，現在南福寺式は縄文後期初頭に位置づける編年が一般的になっており（水ノ江2008，水ノ江・前迫2010，真邊2011），後期初頭～前葉の貝塚とするのが妥当であると考えられる。また，押型文の大型化・粗雑化があることから時間幅があることが考えられることや，出水式の細分・編年についても触れている。出水式については第Ⅱ章第２節を参照していただきたい。

本報告で対象とした河口の1953年・1954年調査時の土器は，河口の土器分類に加え，未報告分土器に適用した本報告での分類を河口報告分土器にも当てはめた（第３表～第11表参照）。２類土器は河口の報告では見られなかったが，文様の特徴から阿高式の終末期～南福寺式初期にかかる土器群であると考えられる。基本的に河口の分類と本報告での分類は合致するが，阿高式と報告されていた第13図74や第14図79等は，浅鉢形の器形や文様などを考慮して南福寺式（３類土器）の範疇と捉える方が妥当であると考えられる。また，「波状隆起文」（第17図97・98）は出水式（４類土器）の範疇であると考えられ，「凸帯文」と報告されていた土器については，後期土器の型式が混在しているが出水式が多数を占めていると考えられる。底部は胎土や調整から南福寺式～出水式期，脚部は文様の種類，肥厚帯に施文するという口縁部との共通性から，出水式の可能性が高いものが多い。磨消縄文系（６類土器）も出土しているが，基本的に搬入品ではなく在地化したものであり，出水式の一要素として考えるべきものである[1]。また，鐘崎式も報告されているが，埋文センター所蔵分に照合が取れる土器片を確認することはできなかった。「押型文」と報告された土器の中には撚糸文・条痕文が混ざっていることが判明した。押型文は口縁部付近が縦位，胴部付近が斜位や横位に施文するという方法は一貫しているが，押型文の大きさにかなり差がみられることから，出水市調査時の指摘通り，押型文の中でも時間幅が存在する可能性がある。

ところで，出水貝塚出土の押型文土器については，「出水下層式」という型式名を用いる場合が多い（八木澤2003，山下2009など）。出水下層式は従来ヤトコロ式併行とされてきたが，水ノ江がヤトコロ式は田村式に組み込まれるべきであると主張した（水ノ江1998）ことも踏まえ，岡本東三は「出水下層式（南部）－無田原式・沈目式（中部）－田村式（北部）を同一の併行型式として位置づけることができる」（岡本2017）とした。出水下層式という型式名について，江坂輝弥による編年表（江坂1959）が初出と考えられる（水ノ江1998）が，正確な設定時期や定義が曖昧である。仮に「出水貝塚出土の押型文土器」と定義しているとすれば，前述した通り押型文土器の中でも時期差がある可能性が高いため，出水下層式の定義の明確化が必要であると考えられる。

２　出水式土器について

出水式に関する詳しい研究史は第Ⅱ章第２節を参照していただきたい。ここでは出水貝塚出土の出水式土器に焦点を当て，層位や他遺跡の出土事例との比較検討を行

う。

（１）層位の検討について

河口は，出水貝塚の出土土器，出土トレンチ及び層位の関係を表にまとめている（第15表）。本報告で追加した土器群も含め，層位及びその層位のどの位置から出土したのかが重要な鍵となる。そこで，河口が設定したと考えられる注記及び野帳の記録から，出土地点や層位の復元を試みた。

まず，1953年調査時の出土土器の注記は「ＩＡ貝層４」という表記方法である。1953年調査ではトレンチをＩＡ・ＩＢと設定しており（第Ⅱ章第１節参照），注記ではトレンチ名と出土層を記している。最後のアラビア数字は貝層を深さによりＩ～Ⅳに分けた際の数字だと考えられる（第Ⅱ章第１節参照）。

次に，1954年調査時の出土土器の注記で最も多いのは「イⅡ１３」という表記方法である。遺物に同封されているラベルと注記との関係を見ると，出水貝塚を表す「イ」，トレンチ名を表すローマ数字（Ⅰ～Ⅶ），トレンチ内の区を表すアラビア数字（０～），その地点で何回目に取り上げたのかを表すアラビア数字で構成されているようである。取り上げた順番と該当層の一部については，河口による野帳の記録を整理したものを第16表に掲載した。また，注記にアルファベットを記したものが多いが，これは河口が土器群や遺物のまとまり毎に任意でつけたものだと考えられる。アルファベットとその内容に関して，野帳から読み取れたものを第17表に示す。

ただし，第16表から分かるように取り上げ順と該当層の定義が分からないトレンチや層も多い。注記の中には上記の法則に則らず，アラビア数字の数が多いもの，＋・－・±等の記号があるもの等も多く見られ，これらは遺物に同封されているラベルや野帳の記録と照らし合わせても注記の意味が解明できなかった。また，土器の注記と同封されているラベルの記述が合わないもの，アルファベットが定義通りに付けられていないものも見受けられ，注記そのもの及び保管状況に不明な点や齟齬がある場合が多いことが判明した。

以上のことから，検討に使える資料が少なく，注記やラベルをもとにした土器の正確な層位的検討は難しいと判断した。

（２）出水貝塚と熊本大学構内遺跡との比較検討

出水式は出土例の増加に伴い様々な研究がされてきたが，川崎による京都大学所蔵資料の分類（川崎1990）は，出水貝塚の出水式を用いた分類案として注目すべきものであると考える。また，最新の成果として熊本大学構内遺跡の土器の出土様相は重要である（熊本大学埋蔵文化財調査センター2019）。出水式であるＩ類土器は，「波状口縁や平口縁の深鉢を主体とし，口縁はやや外反しながら立ち上がるか，文様施文部がわずかに厚みをもって緩く外反する」こと，「頸部にくびれを持つものが多い」ことを指摘している。口縁部付近の施文によってＩａ類

第15表　土器の型式別出土状況（河口1958aより転載）

出水貝塚の土器と地層との関係	トレンチ別 / 層別	Ⅵ	Ⅴ	Ⅶ	Ⅰ1 Ⅰ3	Ⅱ Ⅲ	
	表　層						
	貝　層	出水Ⅵ			市来 市来？出水 阿高	出水（Ⅲ） 阿高	市来（Ⅰ） 出水（ⅡⅢ） 南福寺（Ⅴ）
	赤褐色土層	並木式 押型文	南福寺下層	南福寺下層	阿高 阿高	阿高	南福寺（ⅢⅢ） 阿高 並木（Ⅵ）
	黒色土層			押型文	押型文 押型文		押型文 （ⅠⅤⅥⅦ）
	砂礫層						

第16表　トレンチ毎の取り上げ順と該当層（1954年調査）

トレンチ・区 / 層位	Ⅰ			Ⅱ		Ⅲ		Ⅵ
	１区	２区	３区	１区	２区	１区	２区	２区
表土	第１回	第１回		第１回	第１回	第１回	第１回	
混土貝層	第２回	第２回	第３回	第２回(25cm迄) 第３回(25cm以下)	第２回（３区では南西角は純貝層、区別して採集） 第３回（赤土に接するところまで）	第２回	第２回(やや不純・少量) 第３回(南北２分して採集) 第４回(南北２分下層)	第１回（貝層８cm迄）
赤褐色土層	第３回		第５回			第３回		
黒色土層			第６回					
砂礫層								

※Ⅰトレンチ４～８区及びⅤ・Ⅶトレンチ、空白部分は記録無し。Ⅳトレンチは攪乱のため調査を貝層までに留め、河口による報告もなされていない。

第17表　注記使用アルファベットとその定義（1954年調査）

アルファベット	トレンチ	区	内容
a	Ⅱ	1	土器群 北部角より150cmの点より西部へかけて出土す 深さ19cm－25cm 無文土器及び出水式土器
b	Ⅱ	1	土器群 北部角より280cmの点より西部へかけて出土す 出水式
c	Ⅱ	1	土器群 南角より１m(南西角)に出土 －28cm 大きな貝、土器、底部、石等出土
d	Ⅱ	1	土器群 30～37cm 北角より130cmより南へかけて出土 阿高式出土
e	Ⅱ	2	土器群 北部
f	Ⅰ	3	土器群 北角部土器群
g	Ⅰ	3	硬玉 南東角
h	Ⅱ	2	土器群 石群 獣骨
i	Ⅱ	2	南部 石群 獣骨
j	Ⅱ	2	獣骨 セ骨肋骨つき
k	Ⅰ	3	土器群
l	Ⅰ	3	南西角 土器群
m	Ⅰ	2	２回目 石群
n	Ⅲ	1	土器 獣骨
o	Ⅲ	1	土器 くじらの脊椎
p	Ⅲ	1	土器群
q	Ⅲ	2	土器群
r	Ⅱ	1	赤土層土器及礫層獣骨(1.34m) くじら
s	Ⅲ	1	貝層下赤土層上 獣骨 くじら
t	Ⅲ	2	土器 石の群 東角
u	Ⅲ	2	土器 完全 中央東より
v	Ⅲ？	２？	土器 押型及無文－１m 赤土層中心より底部出土す
w	Ⅵ	1	土器群

（沈線文を主体とする）及びＩｂ類（刺突文と刻目突帯文が施される）とに分類している。この熊本大学構内遺跡の出土事例及び出水貝塚出土土器を対象とした川崎の分類案と比較しながら，本報告の出水式について概観する。

出水貝塚の出水式について見てみると，河口報告分・未報告分及び1920年出土遺物（資料11～資料21）ともに，やや張った胴部をもち頸部で屈曲して口縁部が外反もしくは直行する深鉢，頸部で屈曲せず直行もしくはやや内湾して口縁部へ至る深鉢がみられる。数量としては前者が多く，熊本大学構内遺跡の出水式の器形と共通する。熊本大学構内遺跡の出水式との相違点として，出水貝塚は①口縁部の文様帯の肥厚が顕著なものが多いこと，②上げ底の脚台が多く見られることが挙げられる。①については，文様パターンに大きな差はなく，地域性の可能性が考えられる。②について，熊本大学構内遺跡の報告書で確認できたものは２点のみであったが，出水貝塚では透かしが入ったもの，口縁部と類似した肥厚帯や文様をもつものなどが多数みられた（第22図167～175，第33図246～248，資料20，21）。この脚台の出土量の差が地域差によるものなのか，出水式の中での時期差なのかは今後の課題としたい。

さて，本報告では河口調査時の出水式に限り，刻目突帯の有無を基準に４類土器と５類土器に分類したが，出水式の文様パターンの多様さからこの２分類のみでは片付けられない。出水式のバリエーションの多さや時間的な細分の可能性についてはこれまでも指摘があり（水ノ江・前迫2010），特に４類土器は更なる細分が可能であると考えられる。出水貝塚の出水式と考えられる土器の中で，共通性が高い土器片が一定数確認できる文様パターンとして，

Ａ：口縁部に限定した施文で，数条の横位の沈線と縦位の刺突文・短い沈線を組み合わせたもの（第19図120・123，第20図138・139・140など）
Ｂ：口縁部に限定した施文で，斜位の短沈線もしくは短沈線を複数組み合わせたもの（第19図117，第20図126・127，第27図197～199，資料12・13など）
Ｃ：口縁部文様帯の下から頸部付近にかけ，斜位や格子状の沈線・刺突文を施すもの（第20図128・129・135，第27図204，資料14～資料15など）
Ｄ：幅広の突帯に沈線や刺突文を施し，口縁部付近に貼付するもの（第16図88・89，第17図100，第19図113，第27図205，資料16の120・122・124など）
Ｅ：３本の沈線を口縁部に沿って施文するもので，二叉に分かれる山形突起を持つものが多い（第17図97・98・99，資料16の119など）
Ｆ：刻目突帯を口縁部付近に貼付するもの（第28図，資料16の110～115・117など）
Ｇ：刺突文に近い短い沈線を縦位に施すもの（第19図108・109・115など）

が挙げられる。しかし，出水貝塚の全ての土器片を検討することが出来なかったため，今回提示した文様パターンは全てを網羅出来るものではない。

Ａ・Ｂ・Ｃはそれぞれ川崎の第１群・第２群・第４群に該当する。Ａ・Ｂの文様及び文様構成は南福寺式の施文形態（第15図80など）や逆「く」字状沈線と類似し，川崎も南福寺式との類似性を主張している（川崎1990）。ＣはＡ・Ｂの文様パターンをもちつつ施文範囲が広がるが，頸部までの施文は南福寺式に祖形が認められないことが指摘されている（川崎1990）。Ｄは，文様パターンの共通性から主にＢの口縁部文様帯の顕著な肥厚が変化したものと考えられるが，Ｃの要素を併せ持つ土器もある（第17図100，第27図205など）。Ｅの文様パターンについて，川崎は「三本沈線は福田ＫⅡ式の特徴とも言うべきものであり，…南福寺式の系統を引いているとは考えにくい」（川崎1991）と述べている。Ａの横位の沈線が変化した可能性もあるが，山形突起下や横位の沈線間に弧状もしくは三角形状に沈線を施す土器があることは注意しなければならない。Ｆは本報告で５類土器に分類したものであり，出水市調査時のｃ類（刻目隆帯文土器），熊本大学構内遺跡のＩｂ類の中の一部と同様の土器である。この刻目突帯は，南福寺式からの踏襲とは考えられず福田ＫⅡ式からの影響とする説（西脇1990）と，口縁部の肥厚帯からの変化の可能性（出水市教育委員会2000），出水式新出の要素とされ瀬戸内地方で見られる刻目突帯の起源とする意見（幸泉1999）がある。出水式の範疇に含めてはいるが，未だにその系譜が解明されていないのが現状である。Ｇは熊本大学構内遺跡のＩｂ類に文様が類似しており，頸部の屈曲がなくなるものがあることから御手洗Ａ式古段階に近い土器である可能性がある。

以上の先行研究を踏まえたＡ～Ｆの文様パターンの現段階での評価を，以下のように提示しておきたい。

Ａ及びＢ……南福寺式から文様の系譜を辿れると考えられる。
Ｃ……口縁部付近の文様はＡ・Ｂを踏襲するが，頸部までの施文という新要素が現れる。
Ｄ……Ａ・Ｂの肥厚帯からの系譜が考えられ，Ｃの要素も含む土器がある。
Ｅ……磨消縄文系土器（福田ＫⅡ式か）からの影響の可能性が考えられる。
Ｆ……出水式の中の一群の可能性が高いが系譜が不明。
Ｇ……出水式の中でも御手洗Ａ式に近い段階の可能性が

ある。

施文部位や施文方法からみても，出水式は阿高式系土器の系譜だけで考えられるものではなく，福田ＫⅡ式を中心とした磨消縄文系土器からの影響も大きいと考えられる。この文様パターンの違いには時期差や地域差も考えられるが，今回は編年にまでは至らなかった。また，他遺跡との充分な比較検討が出来ていないことも今後の課題である。

第３節　出水貝塚の再評価

今回の報告で，出水貝塚出土人骨６体の位置関係，埋葬形態について検討を行った。縄文時代人骨の出土数と残存状態からみても，当時の縄文人の形質や埋葬を検討する上での貴重な事例である。

土器・石器は資料化を行い，土器については1920年調査時の出土土器も含めて出水式の口縁部付近文様による分類を行った。前述したとおり，出水式はこれまでも定義の曖昧さやバリエーションの多さが指摘され，本報告でも充分な分類や検討ができず課題を残すところが多いが，今後の出水式の細分・編年の資料となれば幸いである。石器は，河口の報告では文面でもほとんど報告されていなかったが，一定数の黒曜石剥片や石核，石斧，磨・敲石があることが判明した。また，河口が報告していた石製垂飾品は純粋な貝層からの出土とその形態から，縄文後期の大珠再利用の好例として非常に重要なものであることが分かった(2)。貝輪・貝製品・骨製品についても追加資料を提示したが，南西諸島産貝類については保管時に混ざり込んだ可能性も含めて注意が必要である。

出水貝塚は1920年から断続的に組織的な発掘調査が行われ，特に河口の調査では当時は一般的でなかったアカホヤ層以下の調査も行った。更に，土器の出土状況は縄文中期末～後期前葉の土器編年の層位的な根拠となり，押型文土器が早期であることや押型文土器の層が残存する遺跡であるという証明にもなった(3)。発掘調査方法及び人骨，土器の出土様相において，本貝塚は考古学史的に極めて重要な遺跡であるといえる。

【註】

（１）水ノ江和同氏のご教示による。

（２）水ノ江和同氏，大坪志子氏のご教示による。

（３）当時の記録やメモは資料５上段右参照。

【引用・参考文献】※第Ⅱ章掲載済の文献を除く

市来町郷土誌編集委員会 1982「第一章 先史時代」『市来町郷土誌』

宇土市教育委員会 2008『轟貝塚―慶応義塾大学資料再整理報告―』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集

江坂輝弥 1959「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」『世界考古学大系』第１巻 平凡社

岡本東三 2017「第８章 九州島の押型紋土器　4 大分編年後半期の再編成」『縄紋時代早期 押型紋土器の広域編年研究』雄山閣

小野昭・春成秀爾・小田静夫編 1992『図解・日本の人類遺跡』日本第四期学会

鹿児島県教育委員会 1977『上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（５）

鹿児島県教育委員会 2006『先史・古代の鹿児島』（通史編）

河口貞徳 1991「市来貝塚―昭和36年の発掘について―」『鹿児島考古』第25号 鹿児島県考古学会

京都大学文学部 1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録第１部』

(財)長野県埋蔵文化財センター 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 北村遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告 14

川内市土地開発公社 1987『麦之浦貝塚』

垂水市教育委員会 1996『柊原貝塚（平成７年度調査)』垂水市埋蔵文化財調査報告書（１）

垂水市教育委員会 1999『柊原貝塚（平成９・10年度調査)』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

垂水市教育委員会 2005『柊原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告（８）

垂水市教育委員会 2006『柊原貝塚Ⅱ』垂水市埋蔵文化財調査報告書（９）

長野県立歴史館 1996『縄文人の一生―北村遺跡に生きた人びと』平成８年度夏季企画展図録

水ノ江和同 1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器―論攷編―』九州縄文研究会

水ノ江和同 2008「九州磨消縄文系土器」小林達雄編『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

峰和治・竹中正巳・小片丘彦 2000「第３節 出水貝塚（平成９年出土）の縄文時代人骨について」『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）

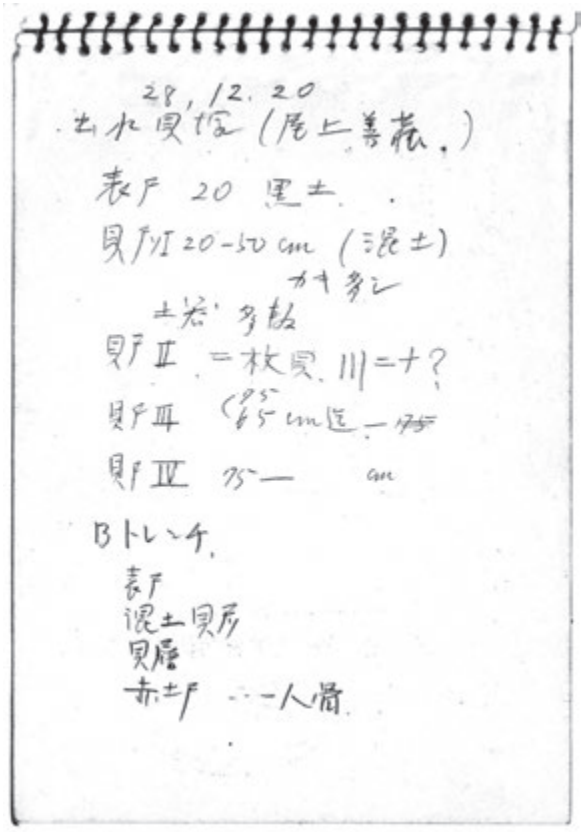
八木澤一郎 2003「堂込秀人「南九州における押型文土器文化の存在」を読んで―縄文早期中葉期における南九州回転施文系土器の系譜と様相の確立に向けて（予察）―」『利根川』24・25 利根川同人

山下大輔 2009「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考（上)』南九州縄文研究会

資　料

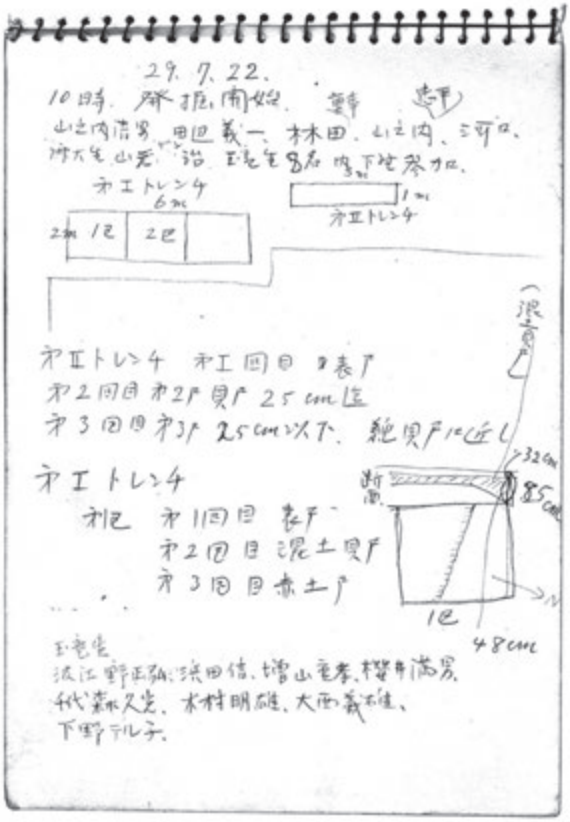
・河口調査時野帳，人骨検出状況記録野帳
・1920年調査時遺跡位置図，トレンチ配置図
（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊
（濱田・島田1921）より転載）
・京都大学総合博物館蔵 出水貝塚1920年発掘土器
（実測図は『伊木力遺跡』（川崎1990）より転載）

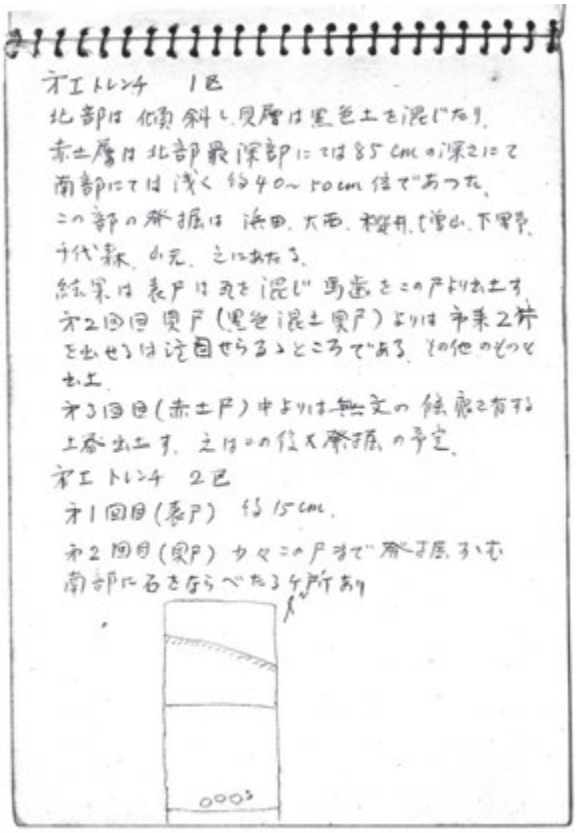
28.12.20



28.12.21

29.7.22



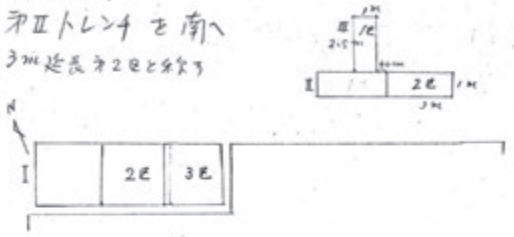


資料１　河口調査時野帳①

29. 7. 23

第Ⅱトレンチ
全部を1区とする。
発掘者 渡江電子、木村、山之内(忠)。
第Ⅰ回目 表戸 出水式出土す
第2回目 貝戸 25cm迄
a 土器群 北部角より150cmの点より西部へかけて出土す。深さ19cm－25cm。無文土器及び出水式土器
b. 土器群 北部角より280cmの点より西部へかけて出土す。出水式
第3回目 貝戸 25cm以下
c 土器群、南角より1m（南西角）にあり
－28cm、大きな貝、土器、磨製、石、骨出土。
d. 土器群 30～37cm 北角より130cmより南へかけて出土。阿高式出土。
・赤土戸迄出土したり。
南部端部に石が連続に並ぶ小石ある場所あり

29. 7. 23.
9時半開始
第Ⅱトレンチを南へ
3m延長第2区と終る



発掘者、前日発掘者、
河野治雄氏 参加（12時）
高尾野村 鎌田俊也氏 参加。

.2区3区 … 第1回 表戸 第2回 貝戸
3区 … 第2回 南西角は貝戸純であったので区別して採集す。
3区 南東角に硬そうなものの出土す。－19cm 純貝層より。
発掘者
千代森、増山、大西、下野、浜田、山元。
後、下野は セルロイドカリ及び土器洗を行う
土器実測中 全員土器洗を行う（この日）

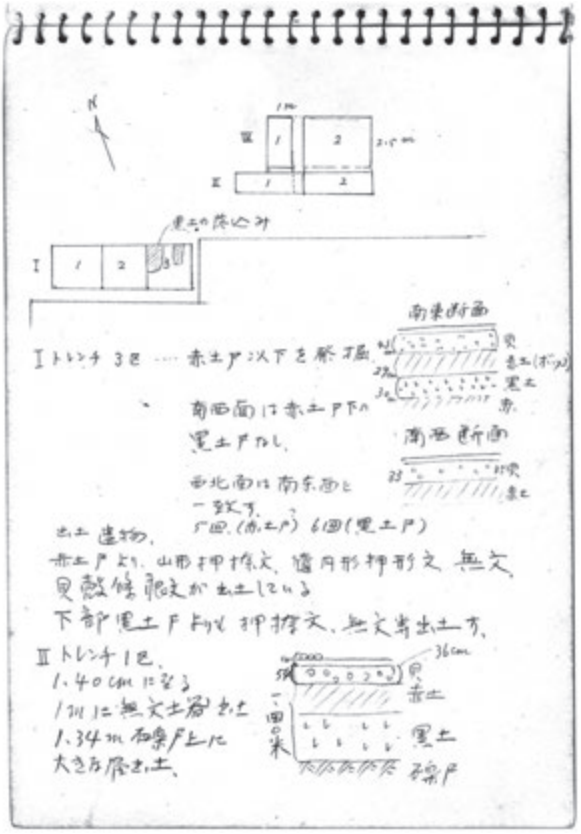
29. 7. 24

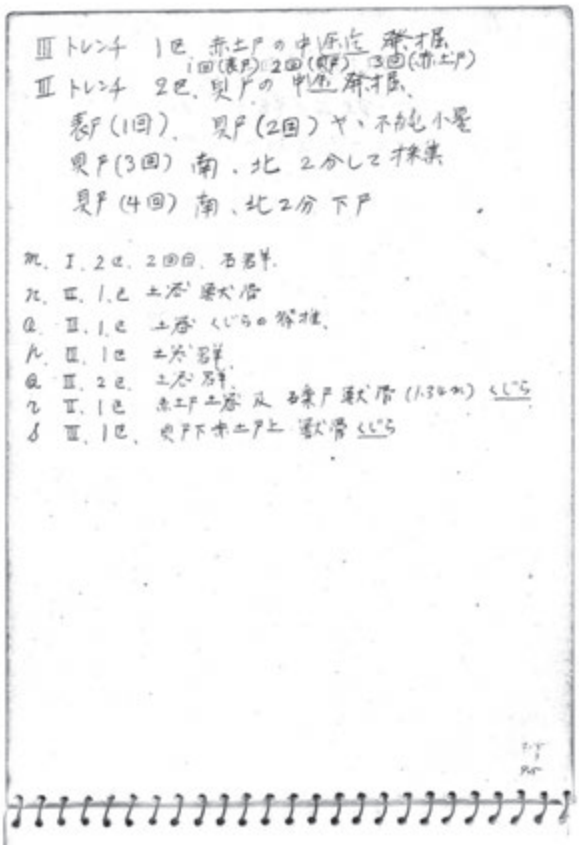
Ⅱトレンチ 2区
第1回 表戸、第2回 貝戸 第3回下部貝戸にて赤土に接するところまで
発掘者、木村、渡江氏、櫻井、山之内（忠）
後、鎌田氏、河野氏この事に入る。
e 土器群Ⅱ.2区 北部。
f 土器群Ⅰ.3区、北角部土器群。
g 硬そう Ⅰ.3区、南東角。
h. Ⅱ 2区、土器群 石群 遺物層
i. Ⅱ 2区 南部 石群 遺物層
j Ⅱ. 2区 遺物層 七層 肋骨つき。
k. Ⅰ 3区、土器群
l. Ⅰ 3区 南西角土器群。

Ⅱトレンチ2区終了後、
Ⅰトレンチの土器洗のあと女性土器洗にかかる
午後、Ⅱトレンチ東部に隣接して第Ⅲとめんうで
1m×2.5mに発掘し、Ⅱトレンチの土器洗中のその上にあれる
櫻井、渡江氏、出水高校生、河野、山之内、林田
上にある。

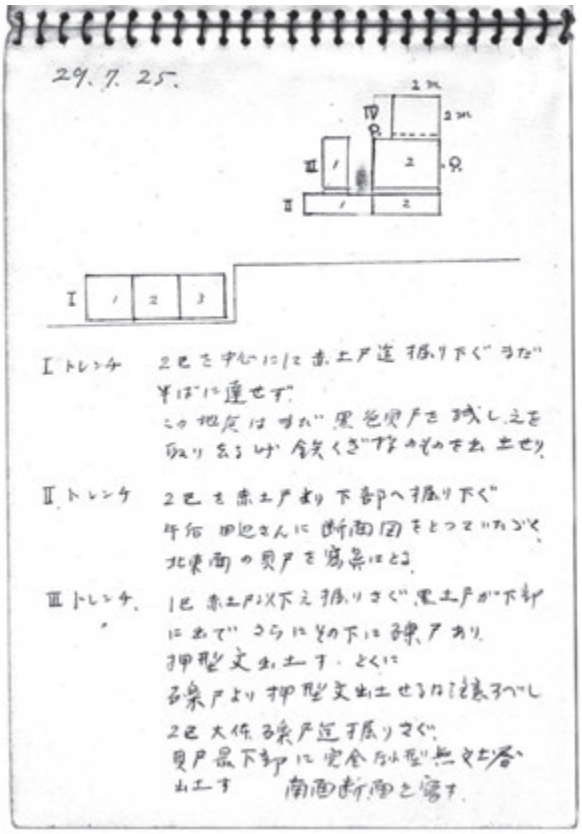
29. 7. 24.
9時開始 －6m半終了
・Ⅰトレンチ 第3区 第3回目 赤土戸中より押捺文及貝殻腹縁文土器出土。（－60cm）
第Ⅲトレンチ表戸 2区～3区 浜田、山之内忠、木村、櫻井。
第Ⅱトレンチ 赤土戸 大西、山元。
第Ⅰトレンチ 赤土戸 千代森 七曽山、渡江氏（七反下義典 出水高校3年）
第Ⅲ区 n 出土（貝戸 赤土上）
m 大きな石。
第Ⅱトレンチ 1区
1.29m 赤土戸下に黒土戸ありさらにその下に（1.29m）に石集戸出つ
Ⅰ.3. 千代森、七曽山、浜田、大西、渡江氏、河野。
Ⅱ.1. 山元、大西。
Ⅲ.1. 渡江氏、大西、木村、七曽山。
Ⅲ.2. 山之内忠、七反下、浜田、櫻井、鎌田。

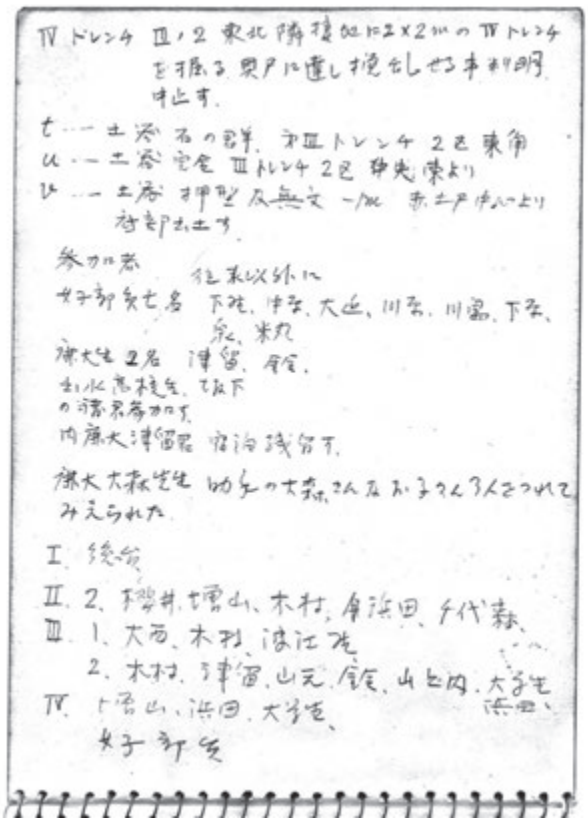
資料２　河口調査時野帳②





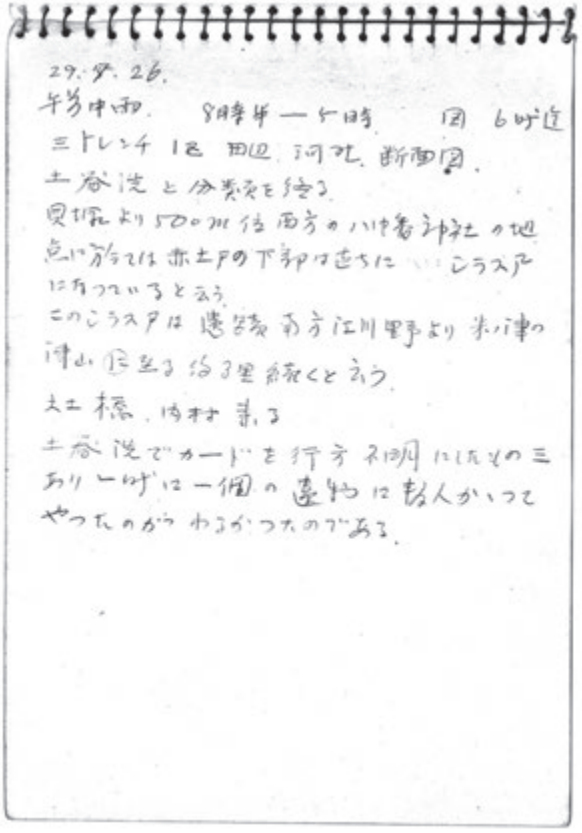
29.7.25



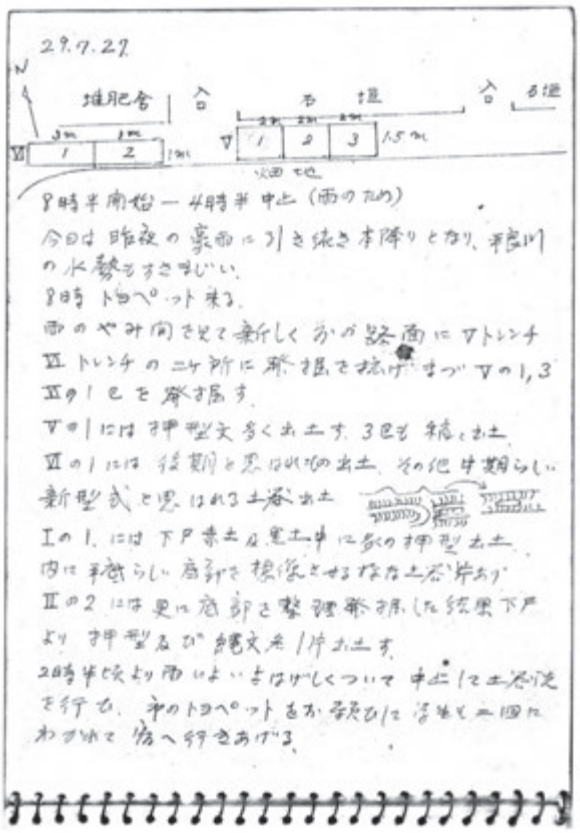


資料３　河口調査時野帳③

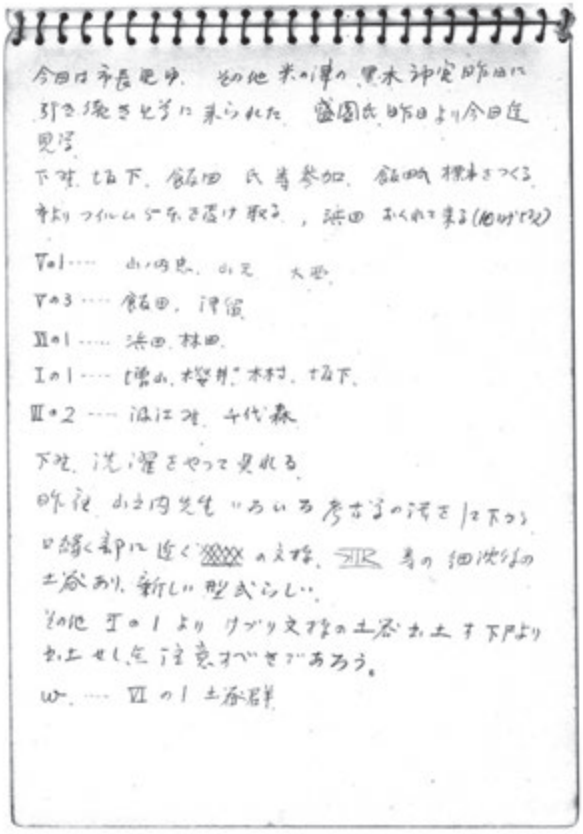
29.7.26



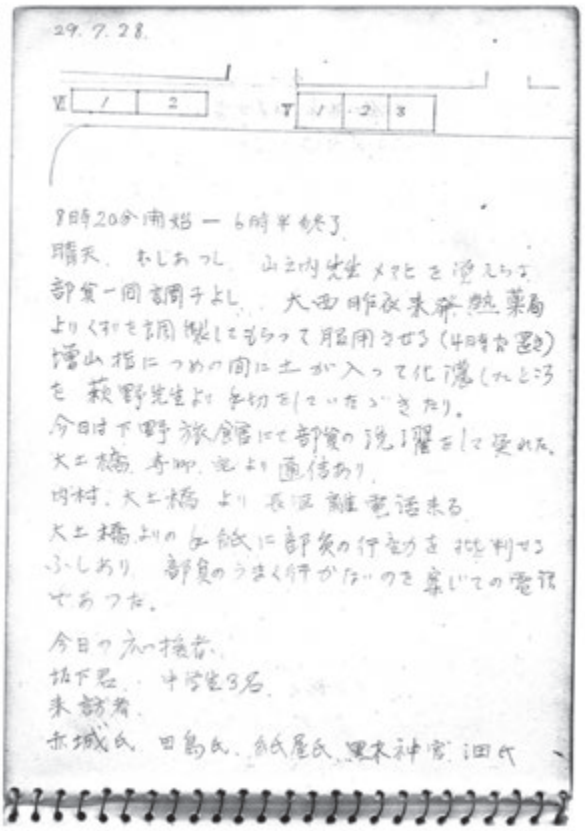
29.7.27



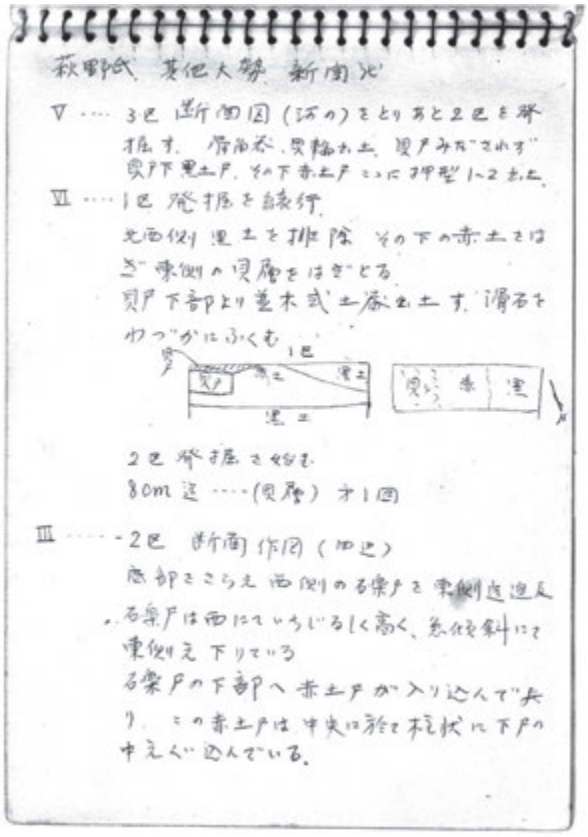
29.7.28



29.7.28



資料４　河口調査時野帳④



萩野氏 其他大勝 新聞社

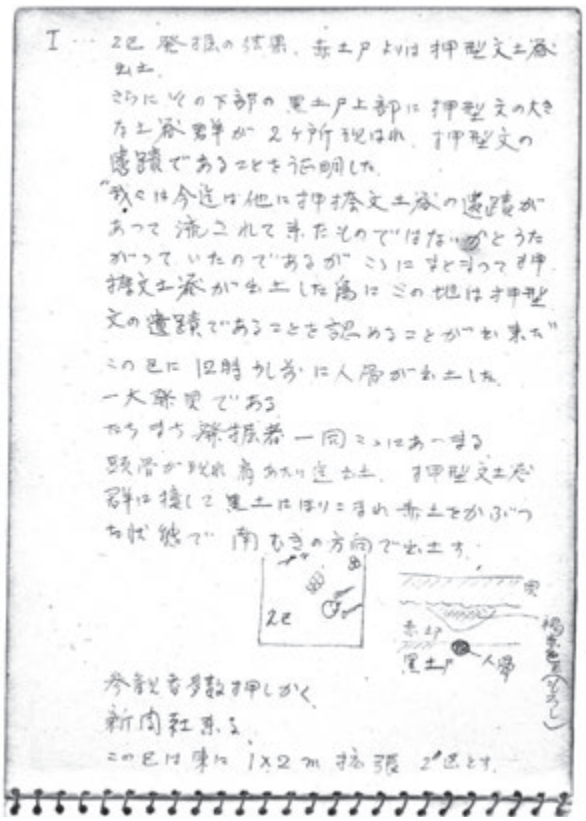
V …… 3区 断面図（ボの）をとりあと2区を発掘す。層角岩、貝輪出土、貝戸みだされず
貝戸下黒土戸、その下赤土戸ここに押型1〜2出土。

VI …… 1区 発掘を続行
北西側 黒土を排除 その下の赤土をはぎ東側の貝層をはぎとる
貝戸下部より並木式土器出土す。滑石を切つぎにふくむ

2区 発掘さ始む
80m迄 ……（貝層）オ1図

III …… 2区 断面作図（加辺）
底部さらえ 西側の石棄戸を東側迄追及
石棄戸は西にていちじるしく高く、急傾斜にて東側え下りている
石棄戸の下部へ赤土戸が入り込んでおり。この赤土戸は中央に於て柱状に下戸の中えぐ込んでいる。

29.7.30



I …… 2区 発掘の結果、赤土戸よりは押型文土器出土。
さらにその下部の黒土戸上部に押型文の大きな土器群が2ケ所現はれ、押型文の遺蹟であることを証明した。
"我々は今迄は他に押捺文土器の遺蹟があつて流れて来たものではないかとうたがつていたのであるが、ここにまとまつて押捺文土器が出土した為にこの地は押型文の遺蹟であることを認めることが出来た"
この区に但時少数に人骨が出土した。
一大発見である
だから早速発掘者一同ここにあつまる
既層が現れ為あり迄出土。押型文土器群は接して黒土にほりこまれ赤土をかぶつた状態で南ひきの方向で出土す。

参観者多数押しかく
新聞社来る
この区は東に1×2m拡張 2"区とす。

29.7.31

29.7.30.
雨、 8.30 — 5.30.
午前中 雨の為土器選
午後、若作業を続行

I …… 2' 2" 区 作業を続行 右の一部を取りのぞいたものを元に復した。
III …… 2区 断面製図 作業をすすむ
V …… 1区 底をさらえる
押型の底部出土 平底
無文の尖底らしきもの出土

VI …… 2区 黒土層迄さげる。
北南部に石をしきつめた場所現はる。
午後1時より3時半迄 公民館にて 講演会
山本内先生 …… 縄文の日本に於ける一般的な様、法九州、南九州と比べる
河口 …… 出水貝塚の発掘理論
林田 …… 鳥について
千代延氏 助役等出席
聴衆 130名。

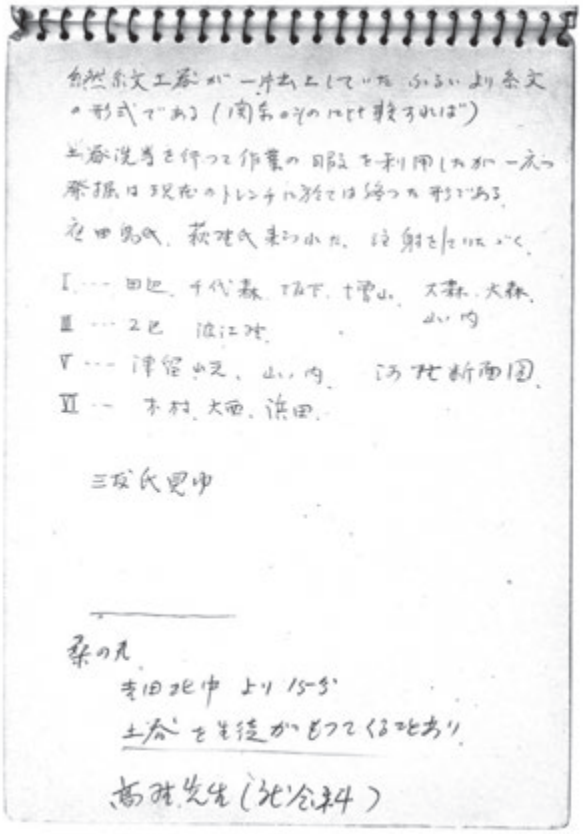
29.7.31.
要、 8.30 — 6.時。
I …… 2" 区の発掘と 測図を行う。
人骨を完全にあす。 2号人骨と称す。
III …… 2区 測図さ行う。
V …… 測図と 1区 2区の 境をとる。
VI …… 朝の作業を続行し更に底の土を上げる
丸底の 押型文土器片が 3〜4片 V の1 より出土していたことをたしかめた。
2時半過ぎ 西出張に出かけ 氏着。
土器の様子を山内先生かされた。

上縁 左図の様に土器上縁に点をオツて波線を引どこしたものあり之は岡山では中期に出るとの事。

右図の如きものは岡山のものと異はる

左図の如く磨消縄文で中間に波線が入つているものあり、之は後期のおいところである（岡山に於て）

資料５　河口調査時野帳⑤



然系文工器が一番古くていたふるい方系文の形式である（関西のそのほうに較すれば）

土器洗考を行って作業の順序を利用しかし一方で発掘は現在のトレンチに於ては終つた形である

夜田島氏、荻野氏来られた。注射をしていただく。

Ⅰ…田辺、千代森、塚下、十曽山、大森、大森、山内

Ⅱ…2号　波江野

Ⅴ…津留岳夫、山内　巧花断面図

Ⅵ…木村、大西、浜田

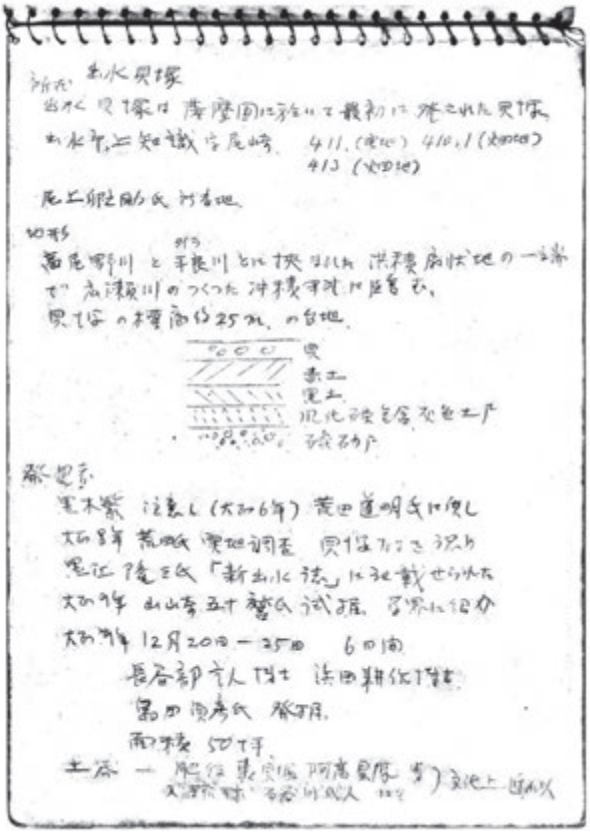
三谷氏見中

柔の丸

吉田北中より15分

土器をもって来てくるとあり

高橋先生（北谷科）



所在　出水貝塚

出水貝塚は薩摩国に於いて最初に発掘された貝塚

出水市上知識字尾崎　411.（東北）410.1（鹿児島）
413（鹿児島）

尾上船助氏所有地

地形

高尾野川と平良川とに挟まれ洪積層台地の一部で高尾野川のつくった沖積平野に臨む。

貝塚の標高約25m、の台地。

発掘史

黒木繁　注意し（大正6年）黄田道明氏に渡し

大正8年　荒木敏　黄田道明氏　貝塚なること認り

鹿江隆氏「新出水誌」に記載せられた

大正9年　山崎五十麿氏　試掘。学界に紹介

大正9年12月20日－25日　6日間

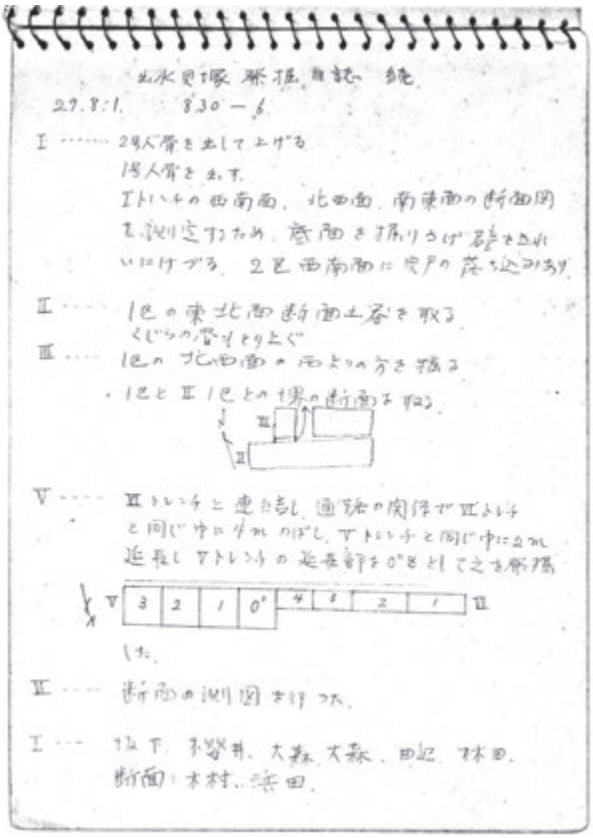
長谷部文人博士　浜田耕作博士

黒田源次氏　発掘

面積　50坪

土器－肥後　東貝塚　阿高貝塚　等）　文化上　重要

29.8.1



出水貝塚　発掘日誌　続

29.8.1.　8.30－6

Ⅰ……2号人骨を出して上げる

1号人骨を出す。

Ⅰトレンチの西南面、北西面、南東面の断面図を測定するため、底面を掘りさげ写真をとれいいにけづる。2号西南面に貝殻の落ち込みあり。

Ⅱ……1号の東北面断面土器を取る

くじらの骨をとり上げ

Ⅲ……1号の北西面の面よりの方を掘る

・1号とⅡ1号との間の断面を取る。

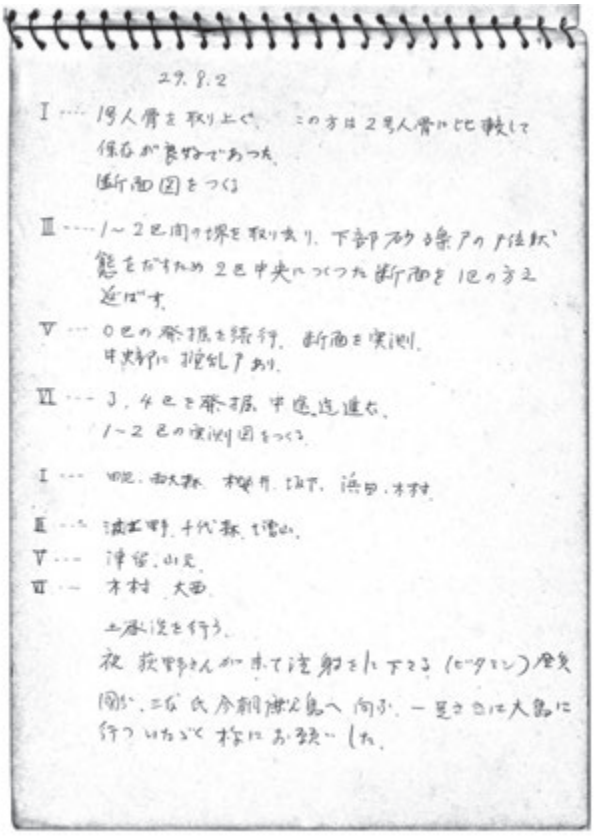
Ⅴ……Ⅲトレンチと連絡し、通路の関係でⅢより4m延長し、Ⅴトレンチと同じ中に2m延長し、Ⅴトレンチの延長部を0°として之を発掘した。

Ⅵ……断面の測図まけつた。

Ⅰ…塚下、木野井、大森、大森、田辺、木田、

断面：木村、浜田。

29.8.2



29.8.2

Ⅰ……1号人骨を取り上げ。この方は2号人骨に比較して保存が良好であつた。

断面図をつくる

Ⅲ……1～2号間の堀を取り去り、下部の遺構の性態をたしかめ2号中央につつた断面を1号の方へ延ばす。

Ⅴ……0号の発掘を続行。断面を実測。

中央部に埋甕あり。

Ⅵ……3、4号を発掘中。遺構進む。

1～2号の実測図をつくる

Ⅰ……田辺、西大森、木野井、塚下、浜田、木村

Ⅱ……波江野、千代森、十曽山

Ⅴ……津留、山内

Ⅵ……木村、大西

土器洗を行う。

夜荻野さんが来て注射をしてくれる（ビタミン）

明日、三谷氏今朝諫早島へ向う。一足さきに大島に行ってください様にお願いした。

資料６　河口調査時野帳⑥

29.8.3

Ⅱ…Ⅲトレンチとの境を取る。
Ⅲ…内部砂礫層の断面図を取る。
　　Ⅲトレンチとの境を発掘。
Ⅳ…3.4区を発掘。断面図を取る

Ⅰ…切下、千代森、大西、櫻井、
Ⅱ…一、沼江、木村、堀内
Ⅲ…清宮、山元、多山内
土器洗…浜田、切下、

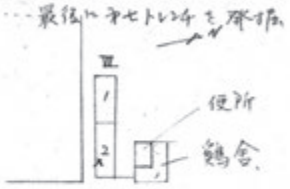
29.8.4

29.8.4.
Ⅰ…人骨上げ　断面測図
Ⅱ…北西之延長　0区とす。
Ⅲ…各面壁をこわし土器さがす。
Ⅳ…
Ⅴ…
Ⅵ…　　土器洗。

Ⅰ…櫻井、切下
Ⅱ…切下、沼江の、

29.8.5

29.8.5.
Ⅰ…断面測図　0区
Ⅶ…最後にネセトレンチを発掘。

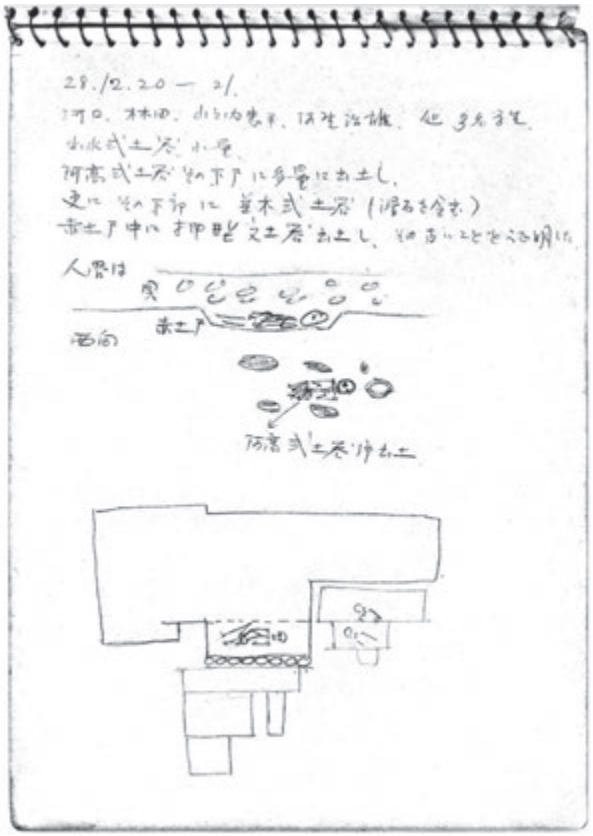


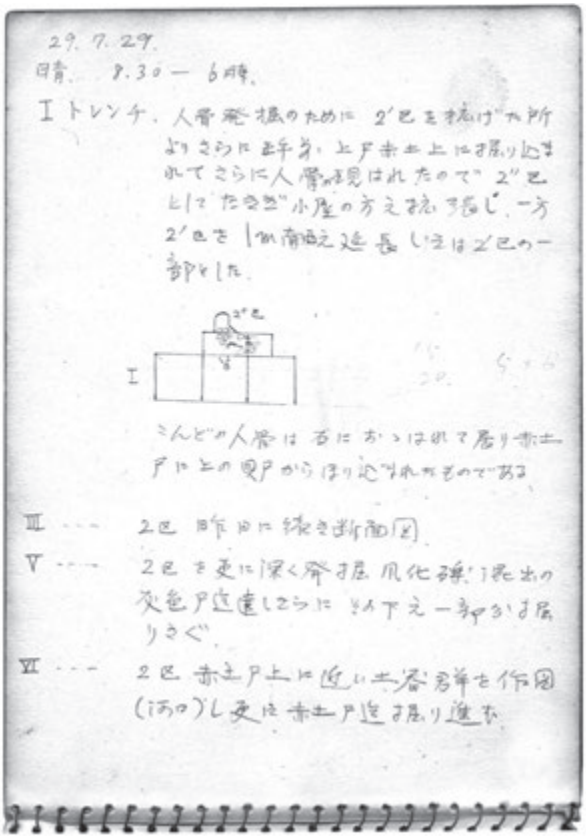
表土にはほとんど貝殖なくごく薄い貝層を見るのみである。
その下に（第2層）赤土層があり
赤土層の下（第3層）には黒土層があった
黒土層上部には押型文の土器がまとまってあり（2区×部）その他　種類の押型がかなりあった。
その他にもこの黒土層より押型の破片がかなりでてこの層が包含層であることを示している。
Ⅱ…千代森、沼江の、
Ⅲ…金炎
・午前にて打ち切り午後　4.50　ふれあい駅より

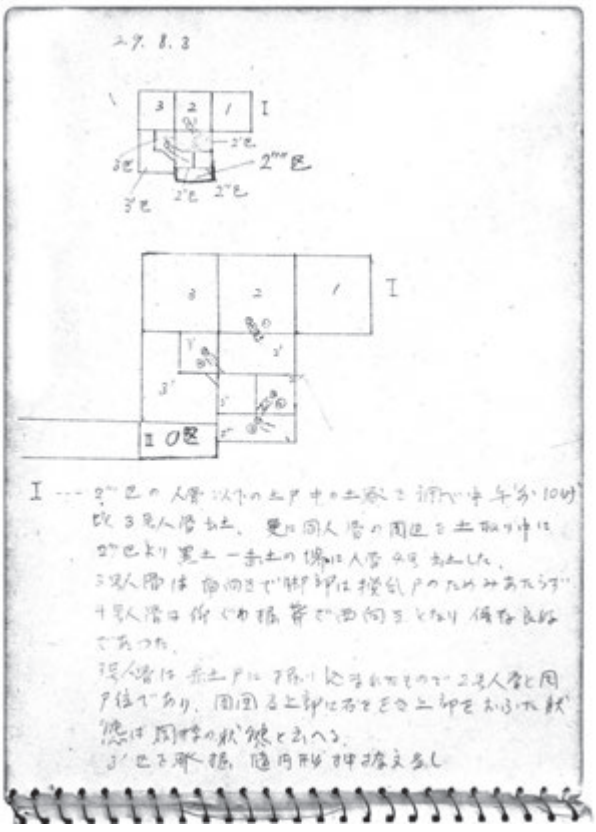
金炎遺跡へ引揚げ　（遺物）
たびし、山元内、山田、河口　等名付土器
縄文のかあとに残る。

7月22日より、8月5日に至る　15日間にわたる発掘も今日で無事に終了した。
夜　3人で　萩原先生をたずねた。自宅で
帰る途中　萩原先生とあつかのでお引きかえし
葉よしでビールのけい　馳走になった。
にけ　ないつく。

資料７　河口調査時野帳⑦

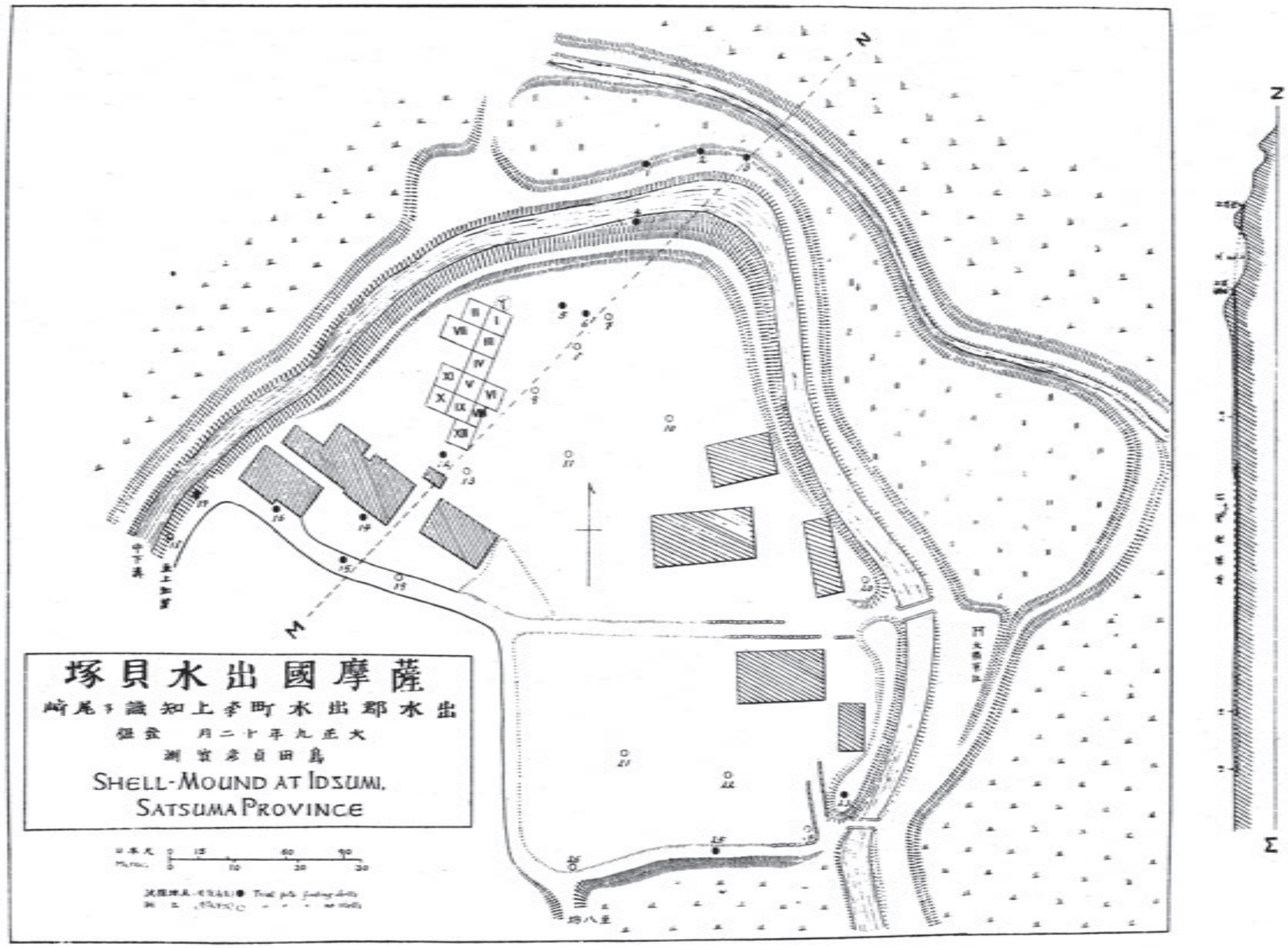




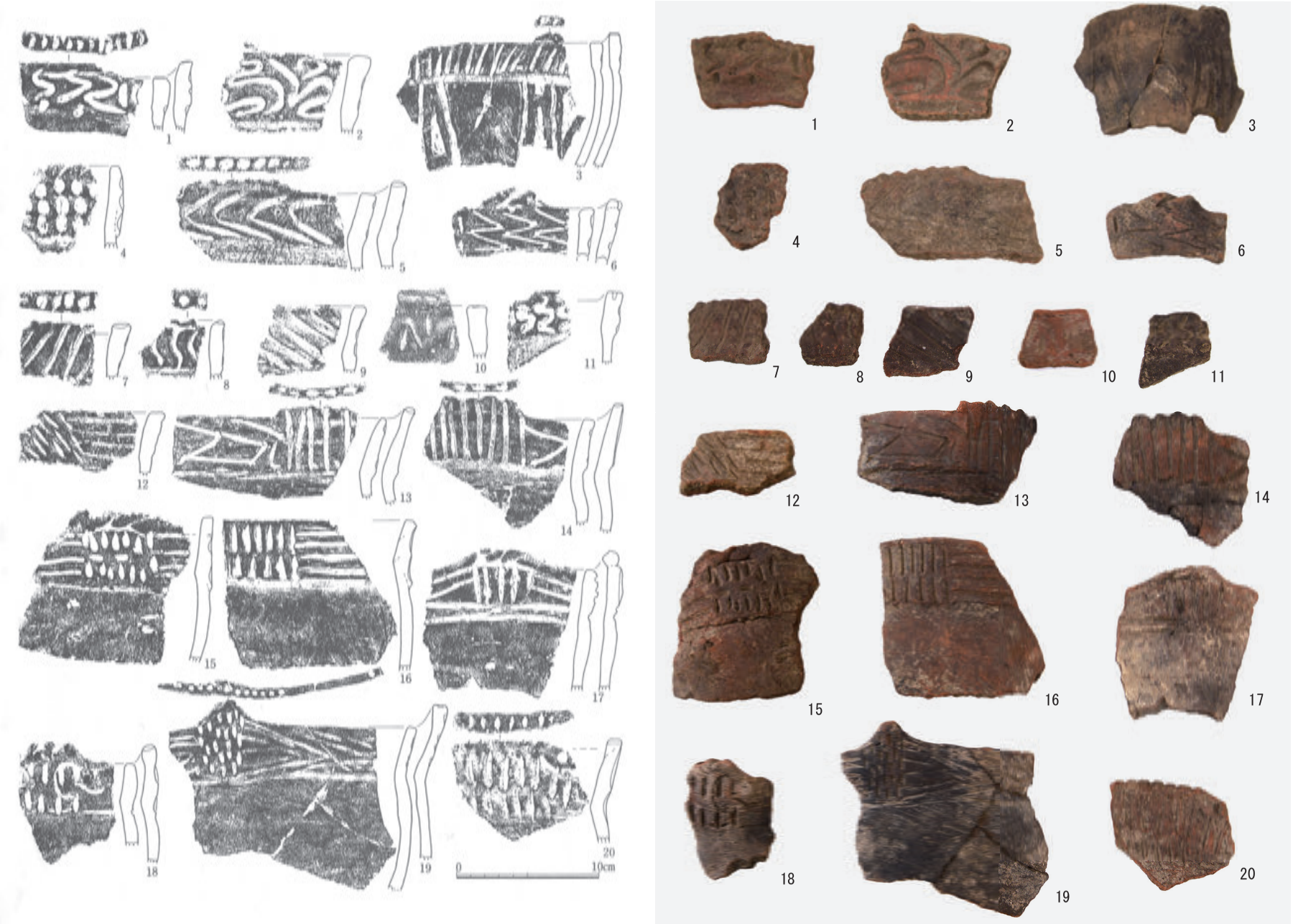


資料８　人骨検出状況記録野帳

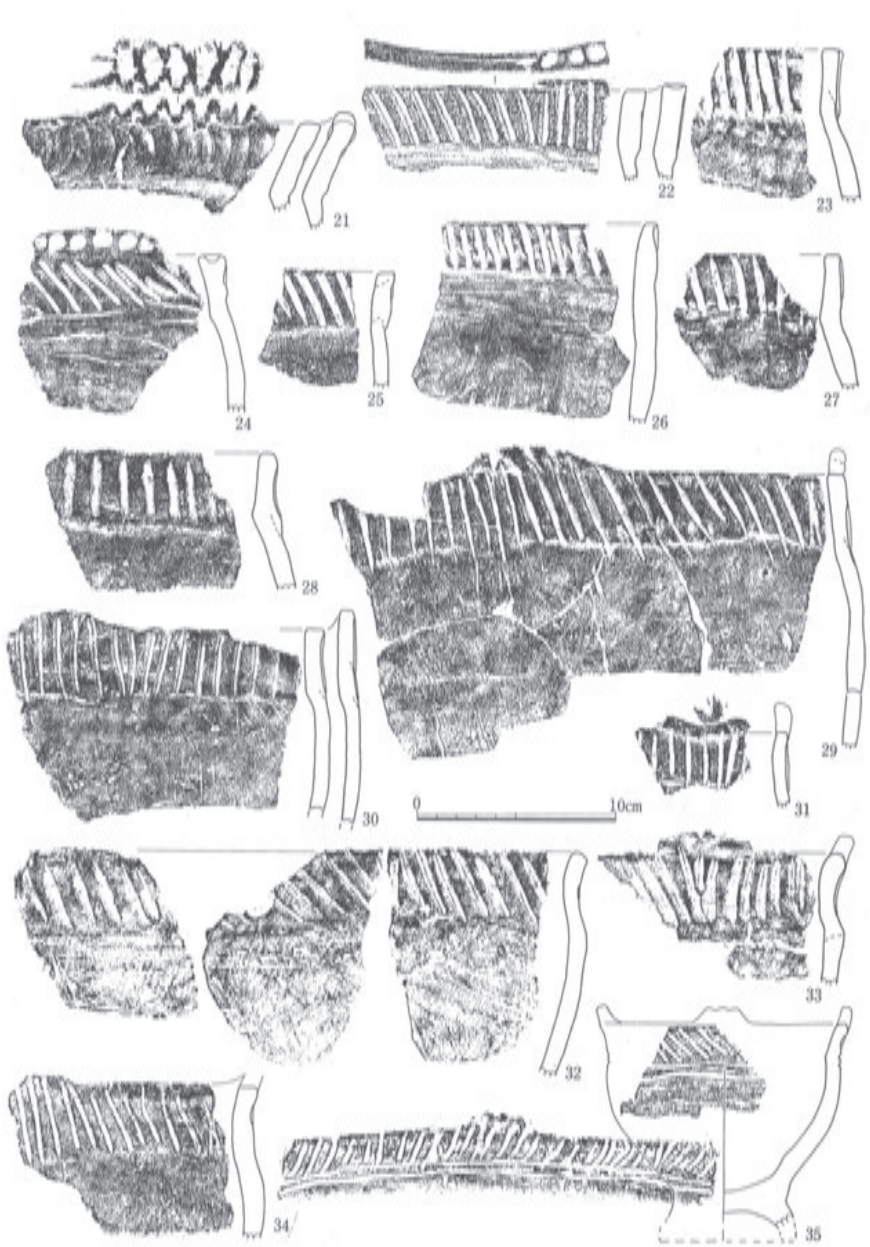
資料９　1920年調査報告出水貝塚位置図



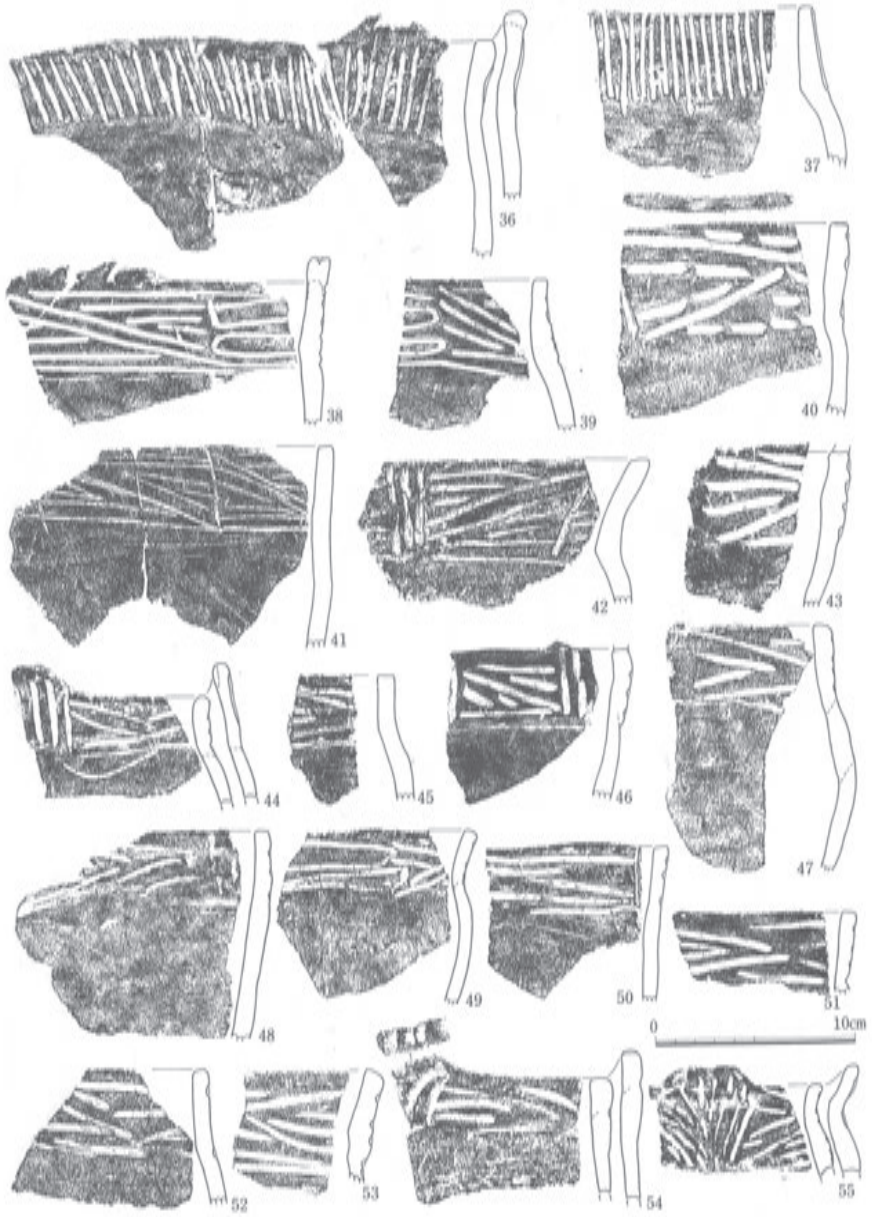
資料10　1920年調査報告トレンチ配置図



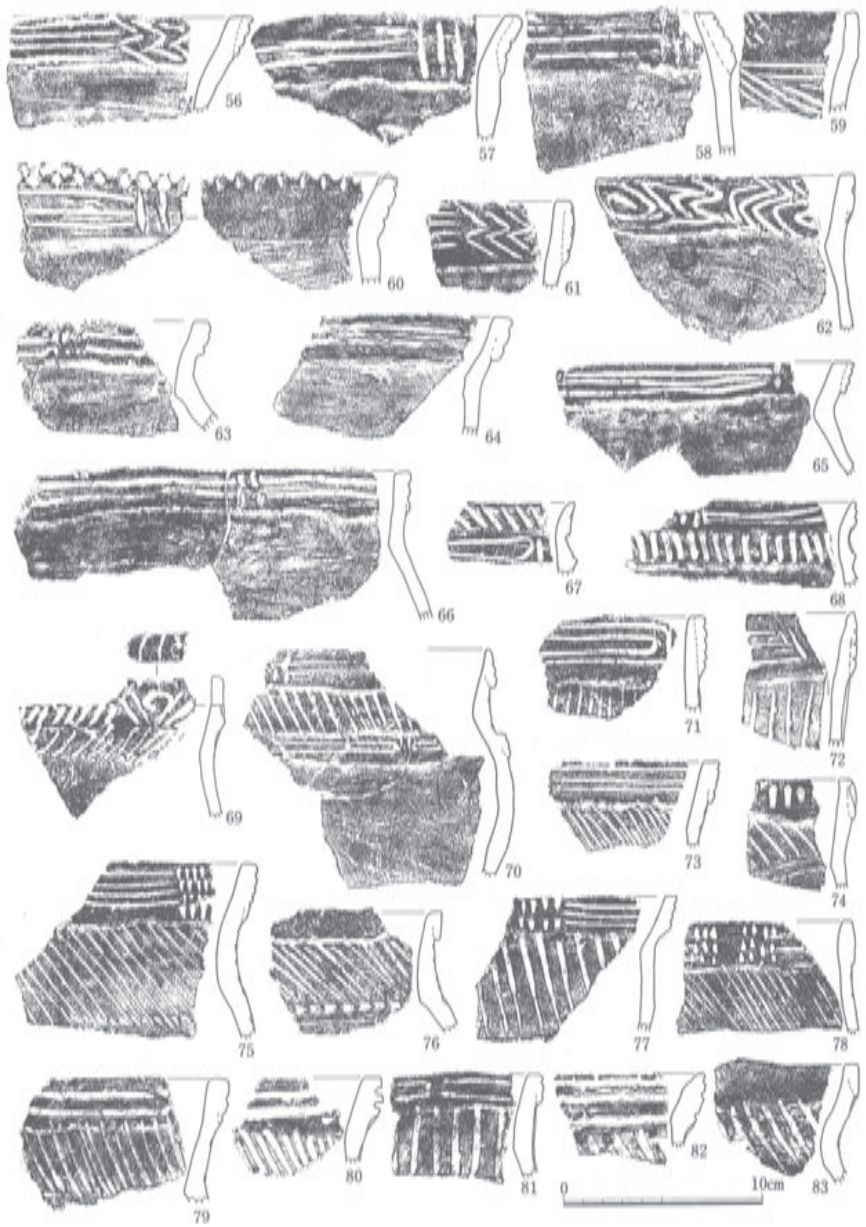
資料11　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器①

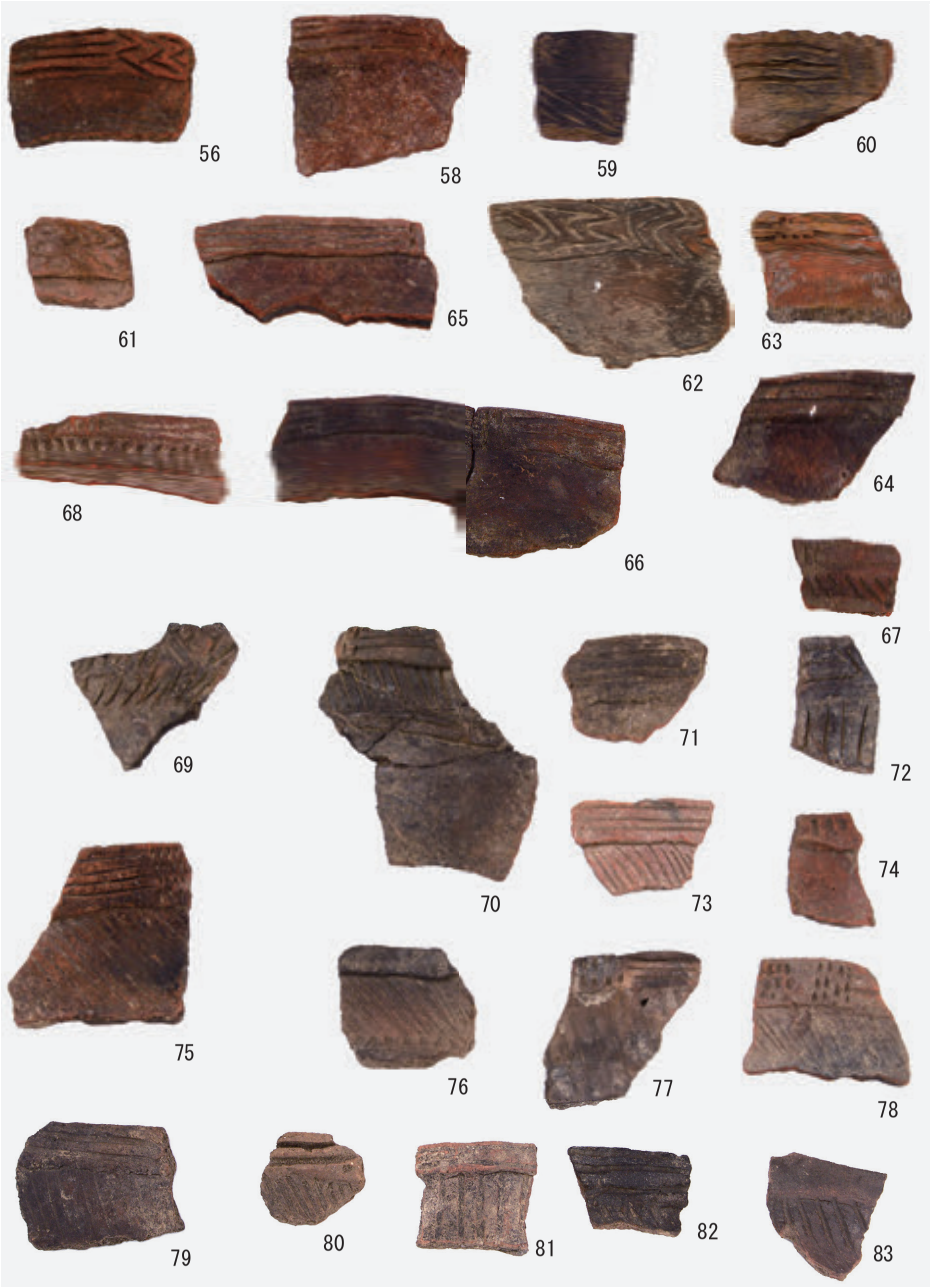


資料12　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器②

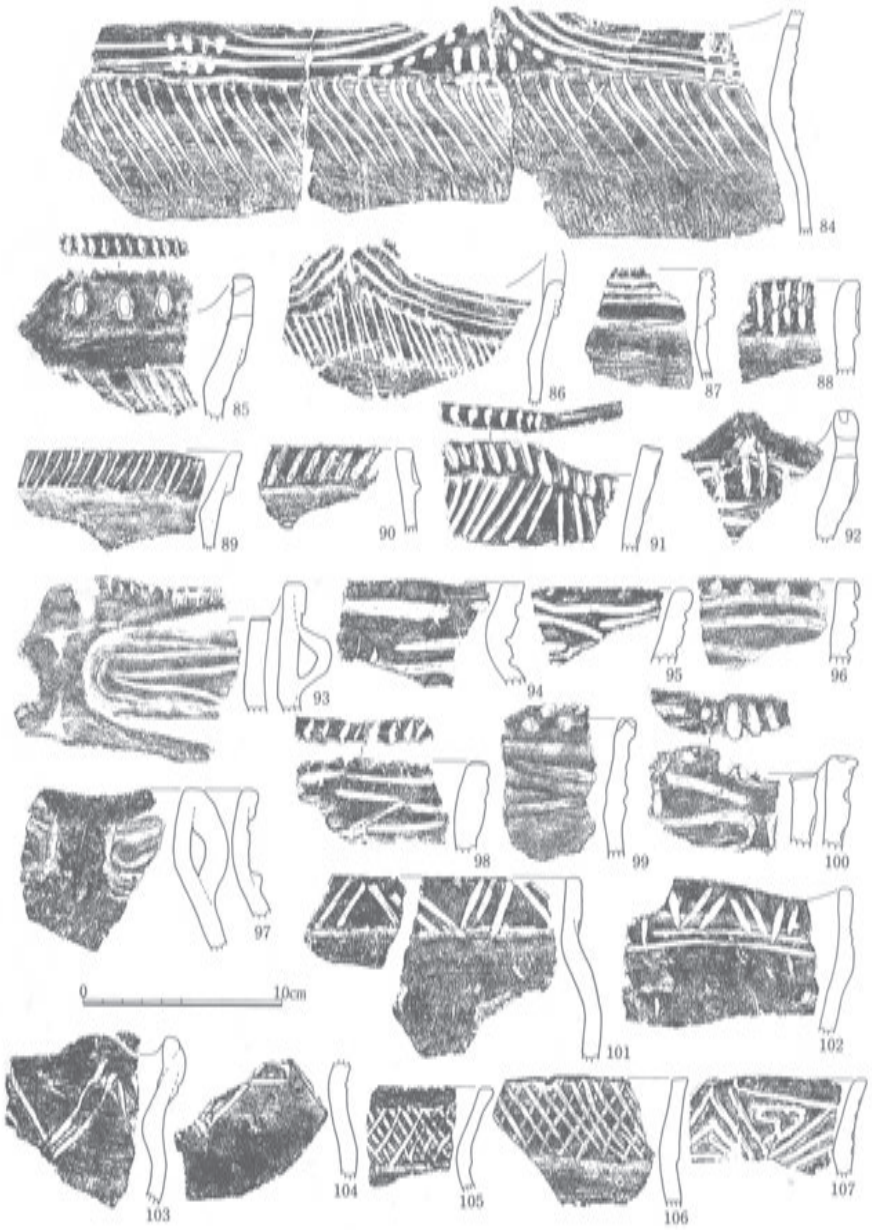


資料13　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器③

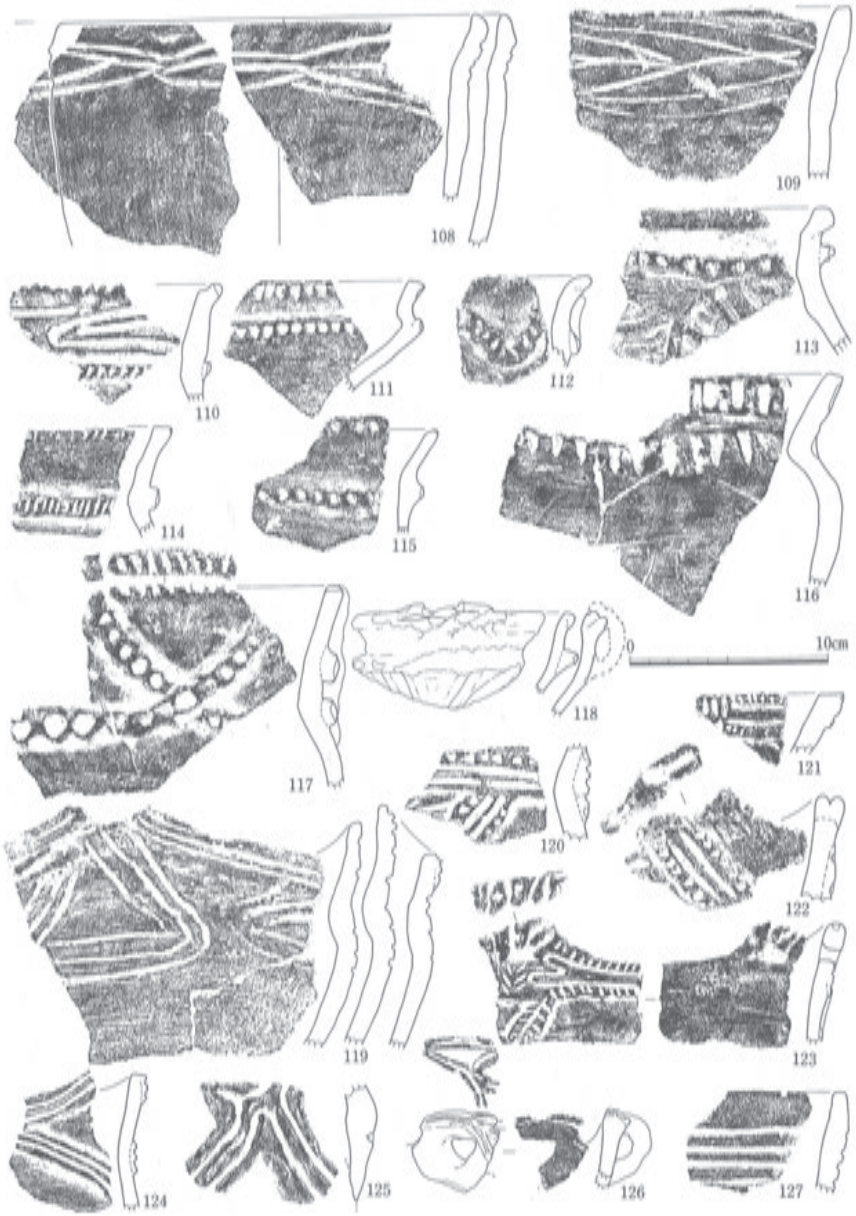




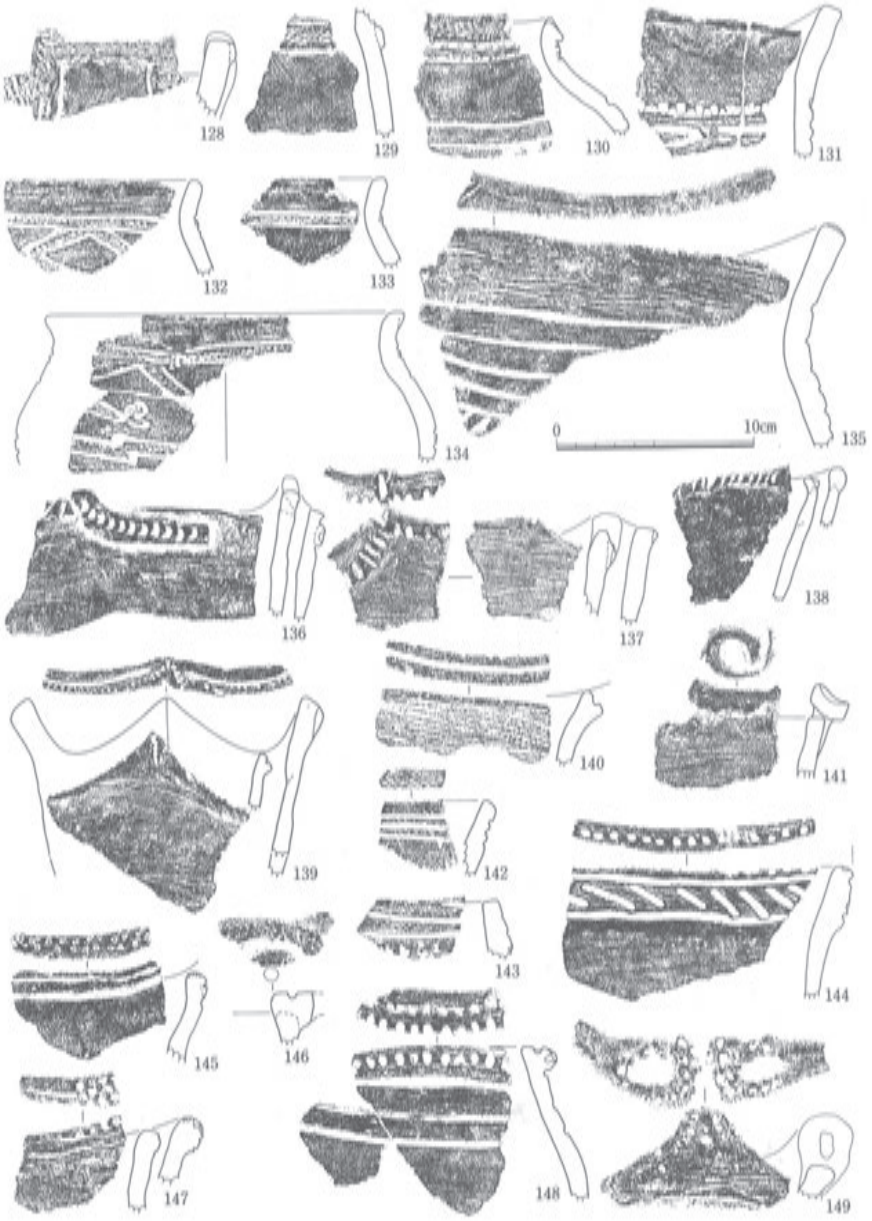
資料14　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器④

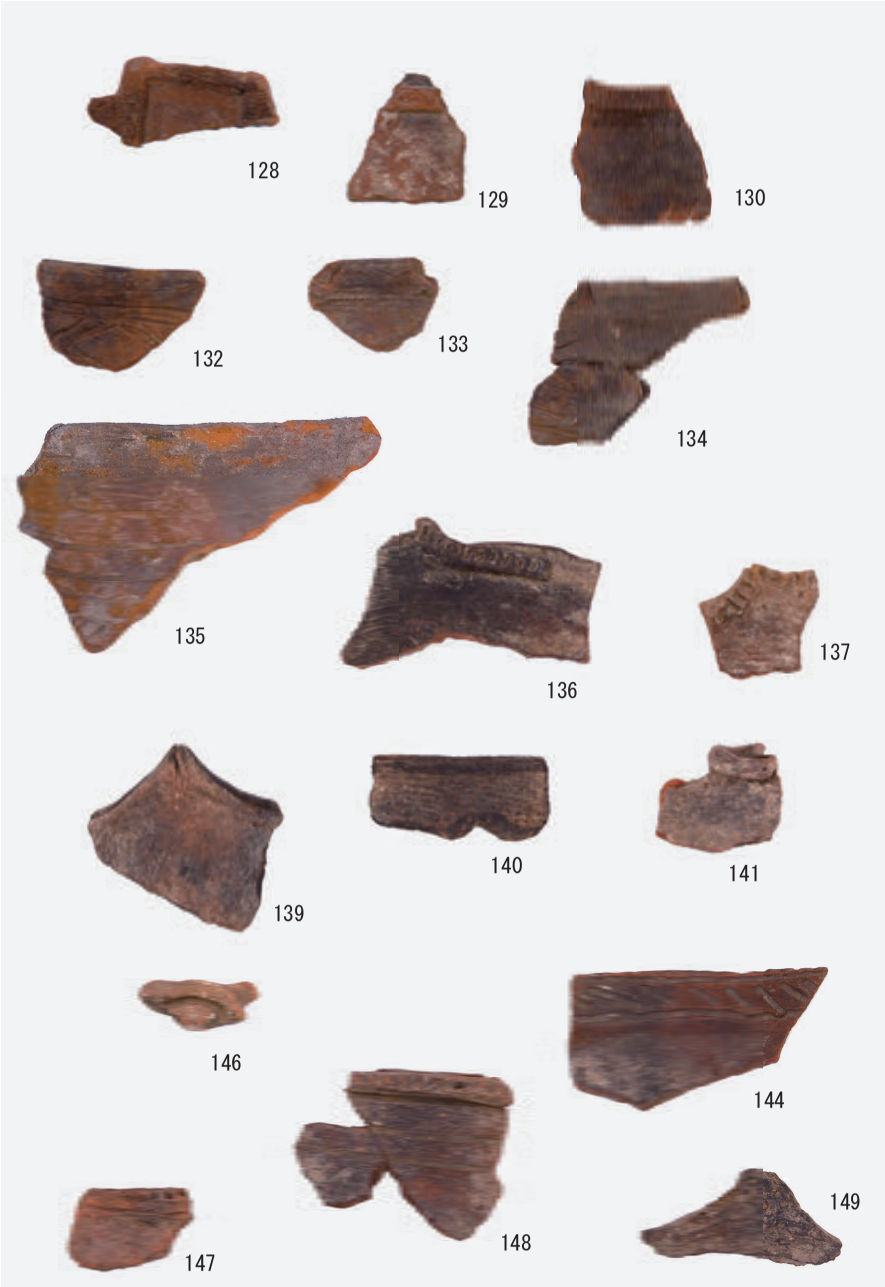


資料15　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑤

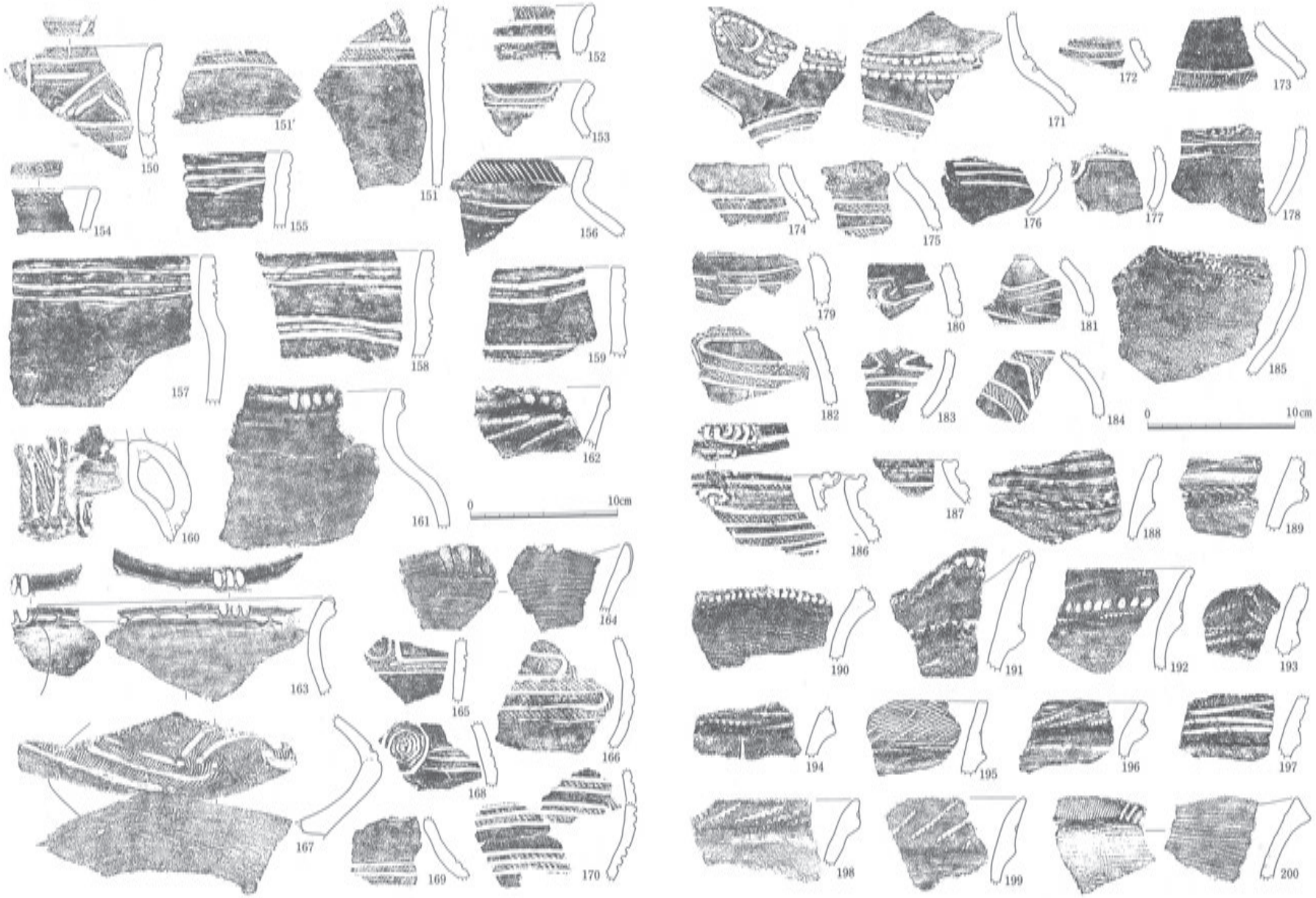


資料16　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑥

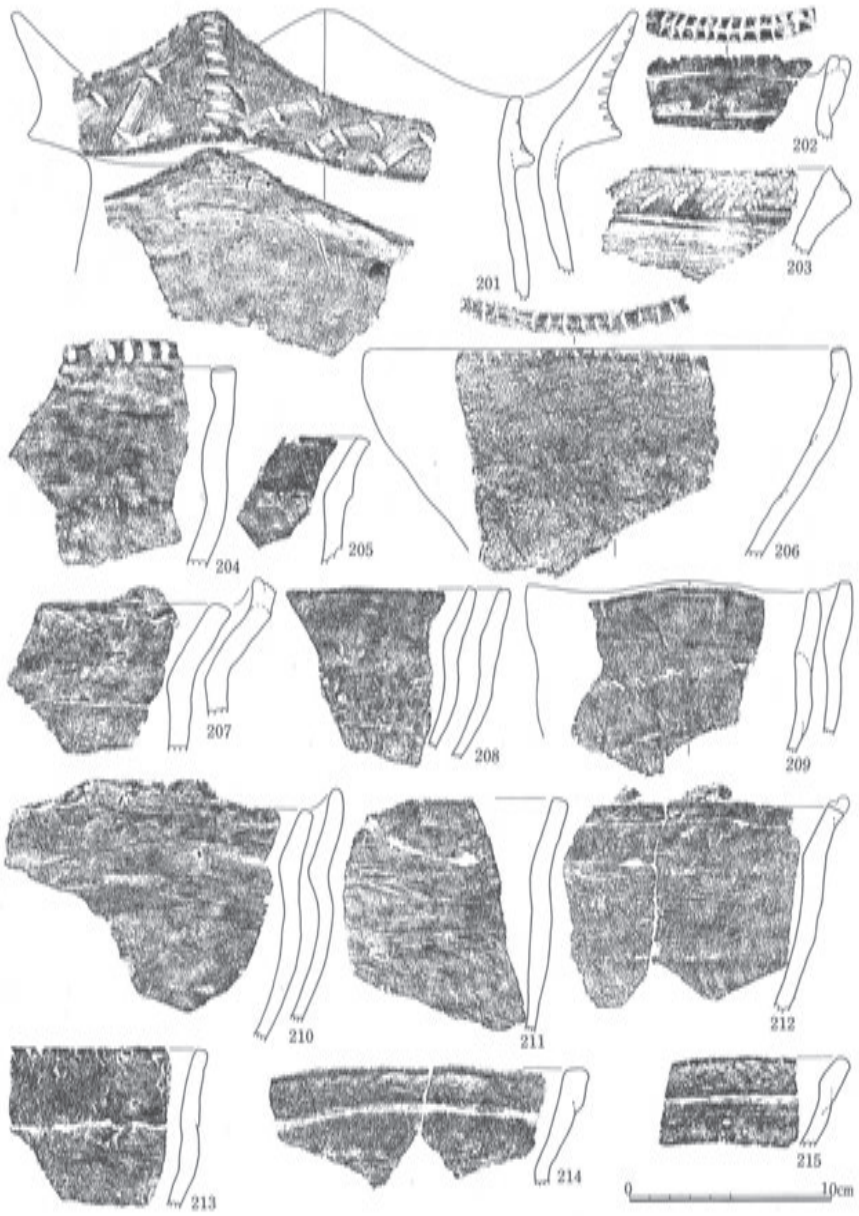




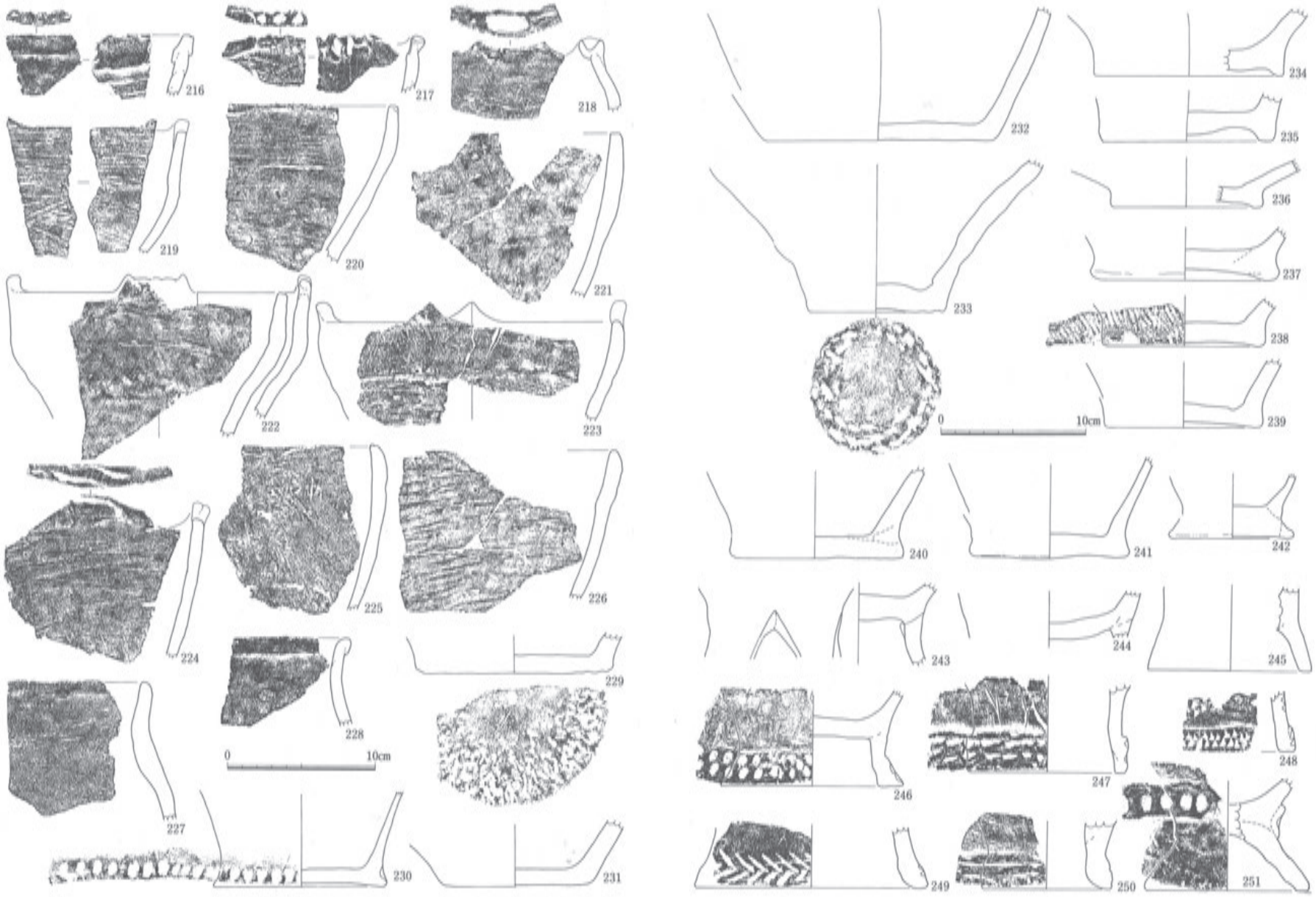
資料17　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑦



資料18　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑧



資料19　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑨



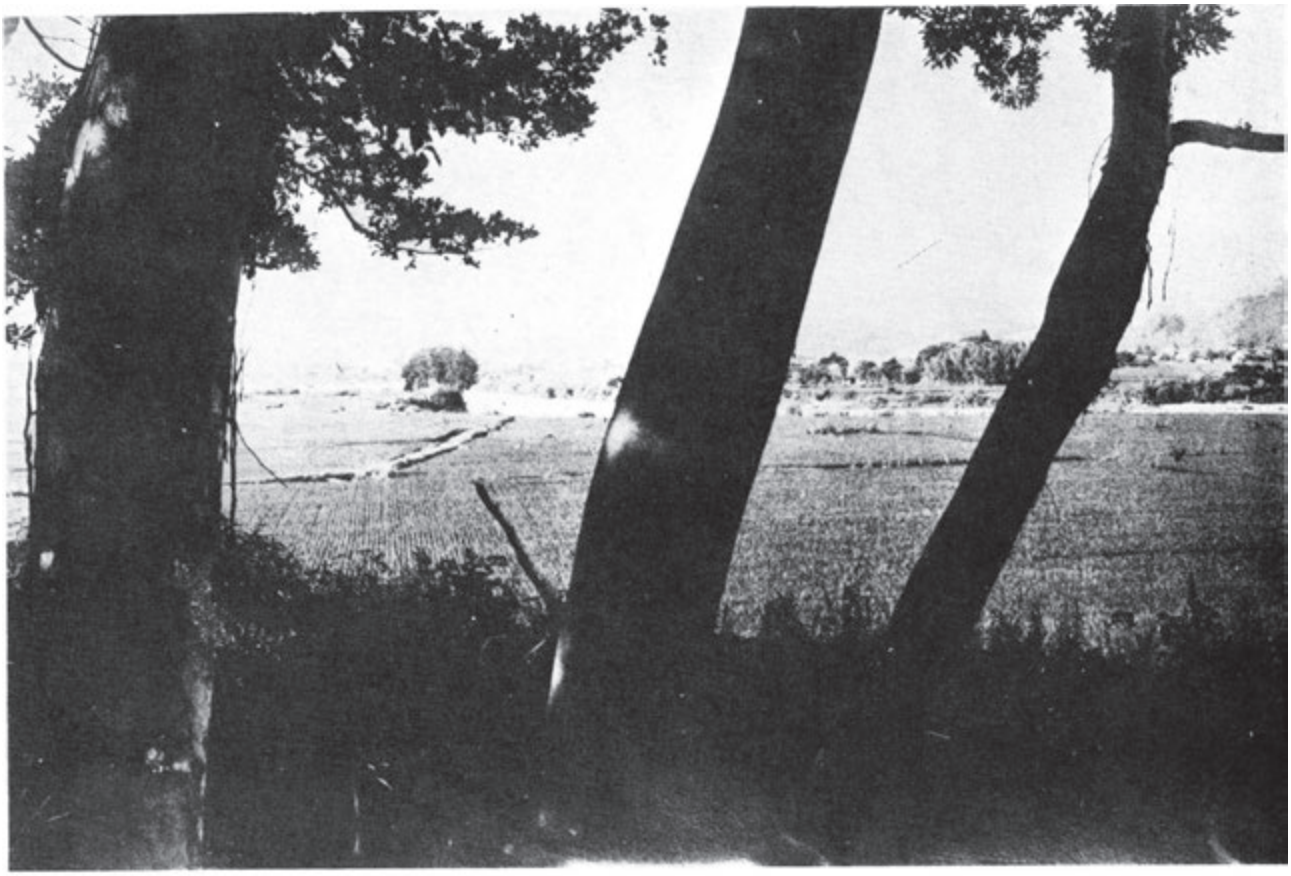
資料20　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑩

資料21　京都大学総合博物館蔵1920年調査発掘土器⑪

資料22　京都大学総合博物館蔵資料収納状況・資料調査風景

図　版

図版1　出水貝塚写真（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊　より転載）



望遠原平川津米りよ上塚貝水出　(1)

（む望りよ方南東）塚貝水出　(2)

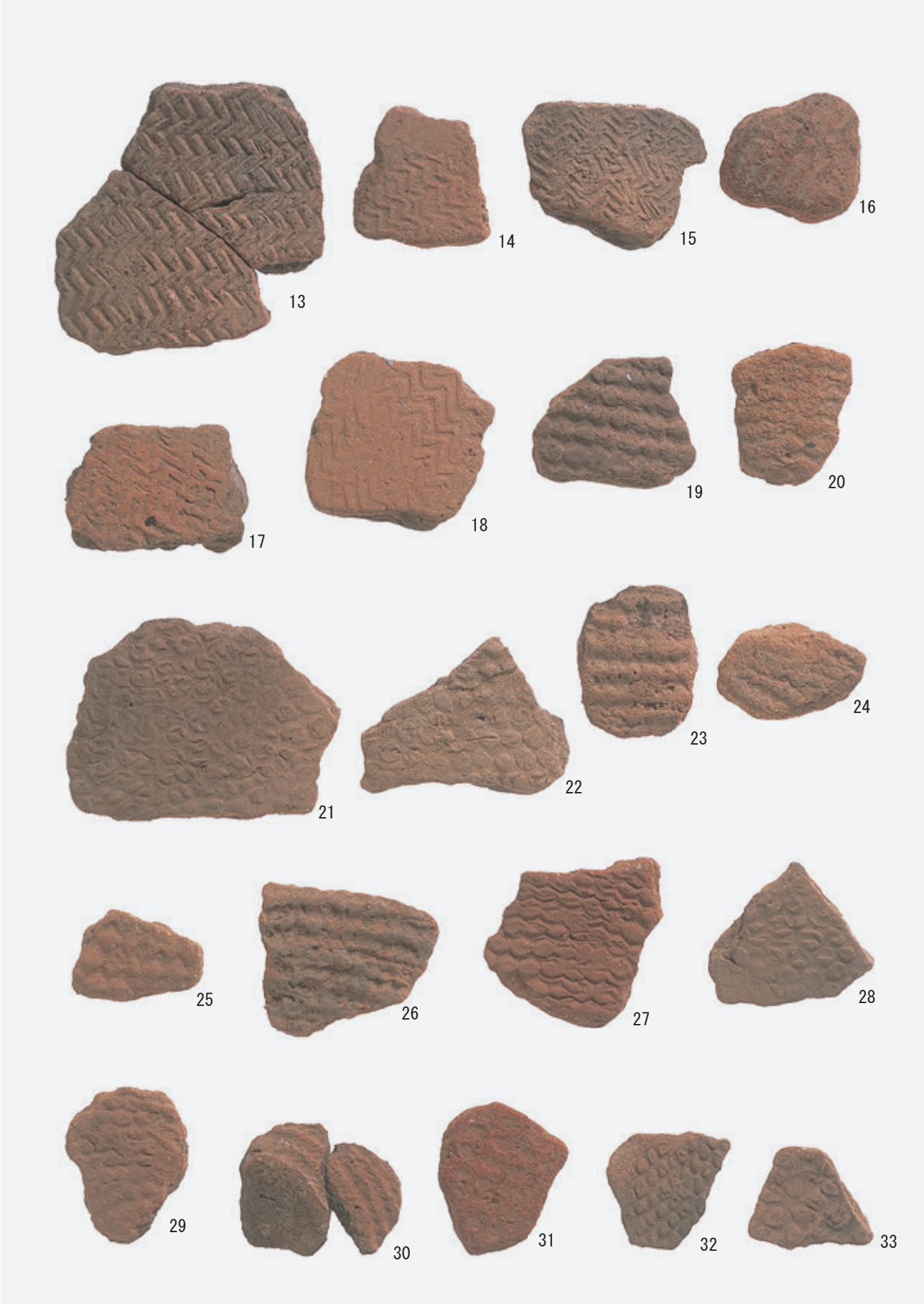
図版2　出水貝塚遠景

①昭和40年代　②現況（南東から）

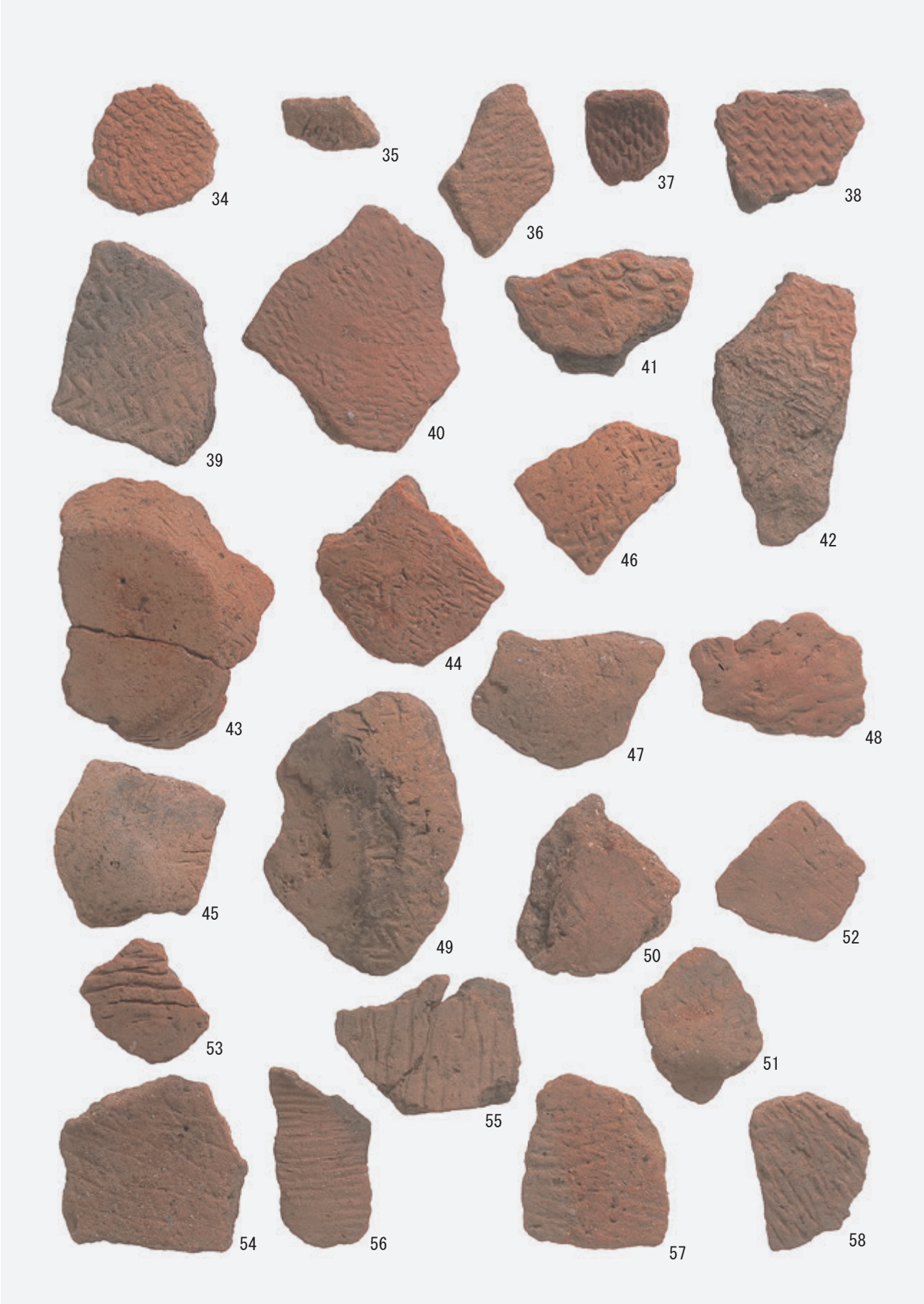
図版３　出水貝塚出土遺物①（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

図版4　出水貝塚出土遺物②（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

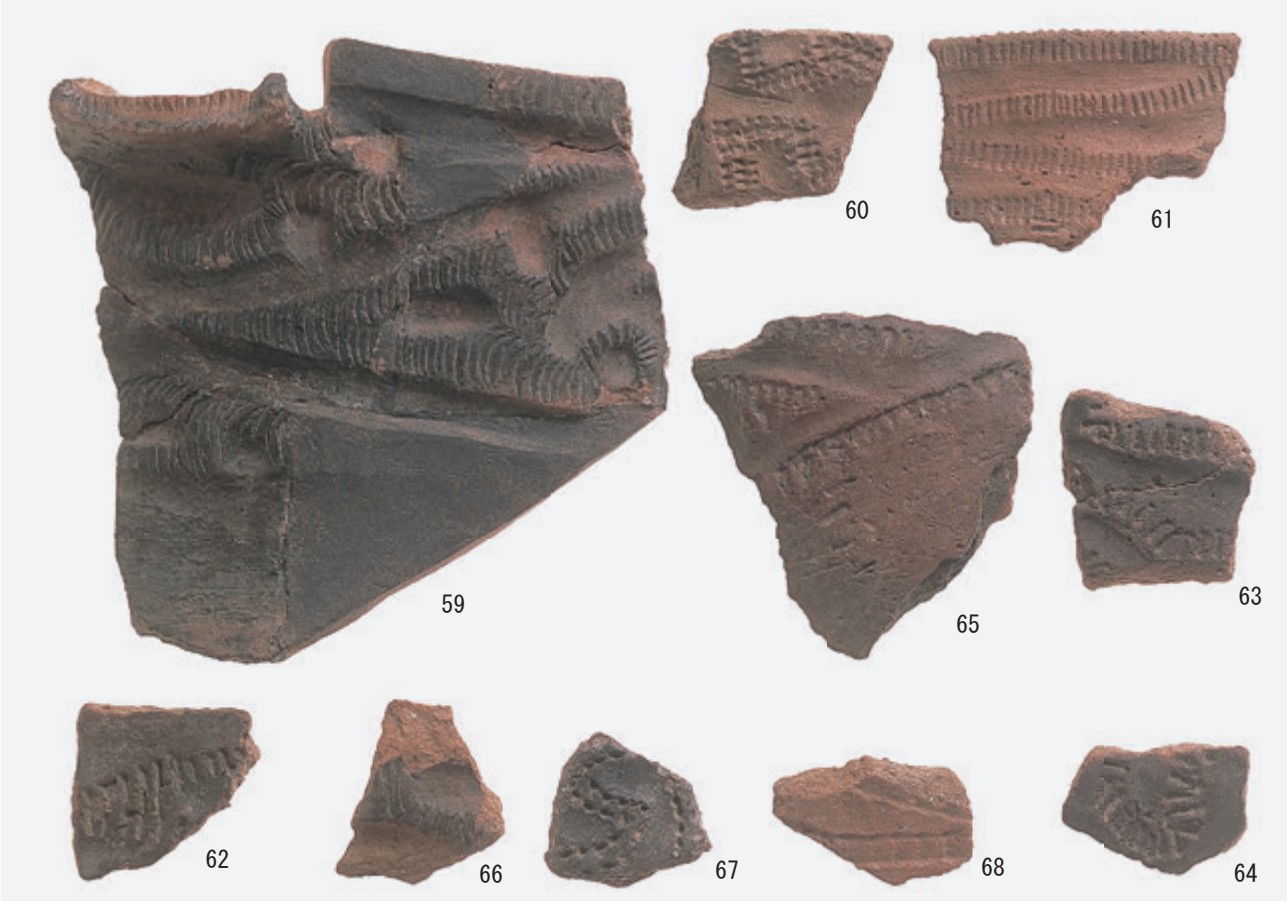
図版５　出水貝塚出土遺物③（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）



図版６　出水貝塚出土遺物④（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）



図版7　出水貝塚出土遺物⑤（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）



図版８　出水貝塚出土遺物⑥（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

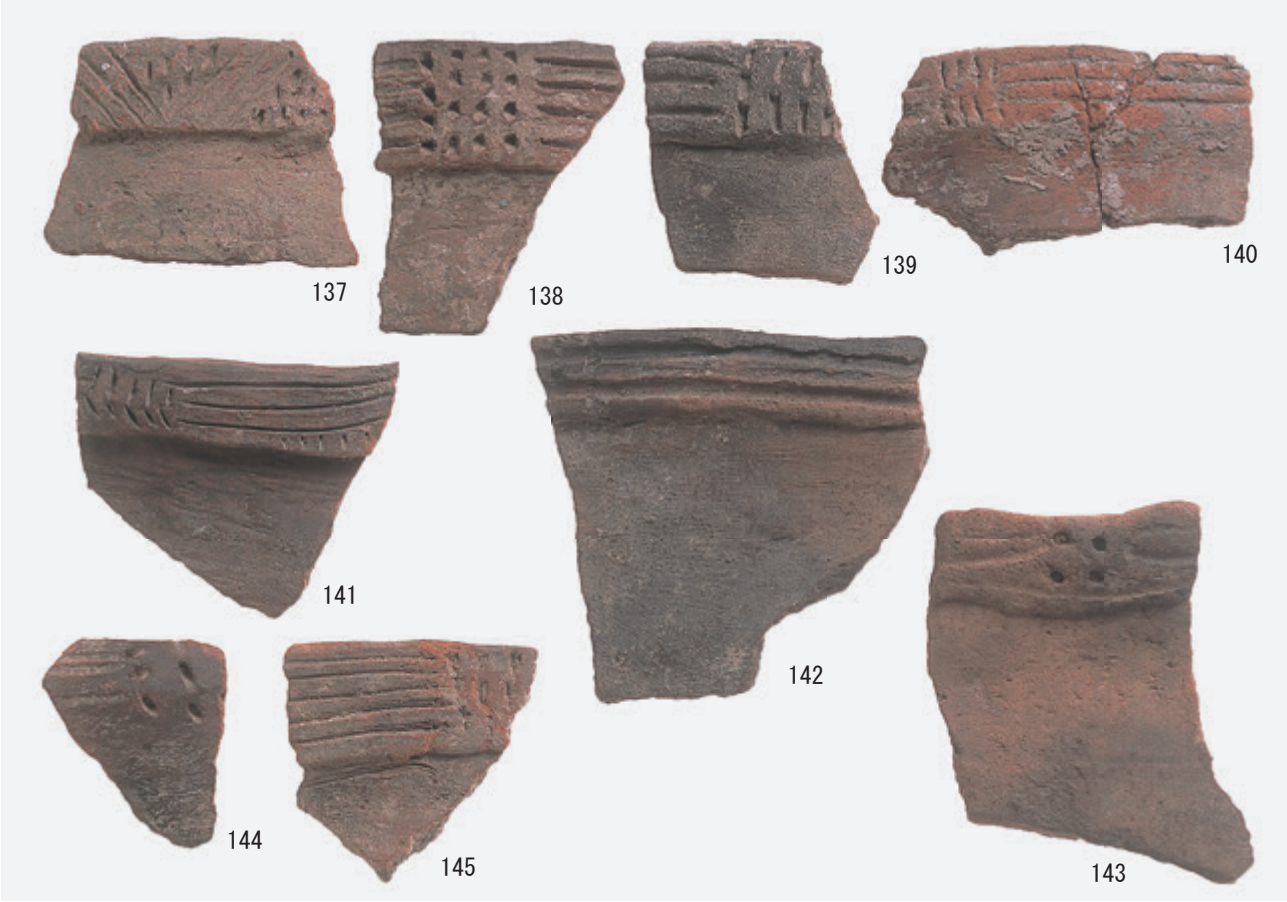
図版９　出水貝塚出土遺物⑦（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

図版10　出水貝塚出土遺物⑧（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

図版11　出水貝塚出土遺物⑨（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

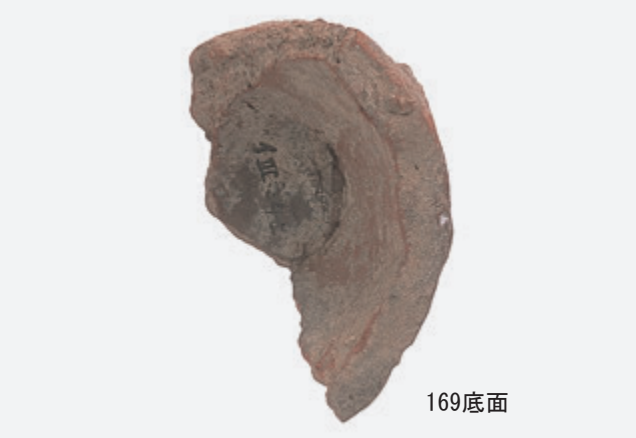
図版12　出水貝塚出土遺物⑩（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

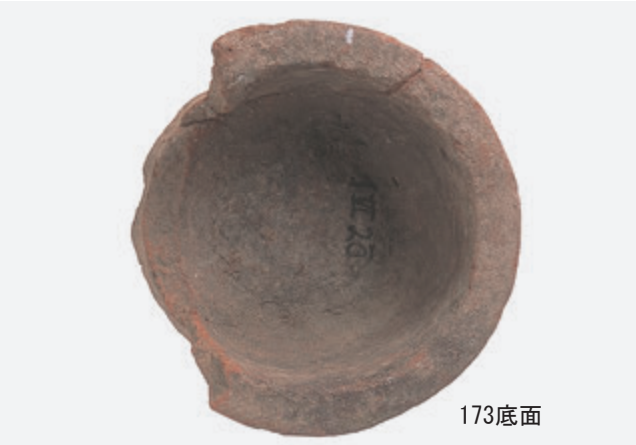
図版13　出水貝塚出土遺物⑪（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）



図版14　出水貝塚出土遺物⑫（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）

図版15　出水貝塚出土遺物⑬（『鹿児島県文化財調査報告書』第五輯）





図版16　出水貝塚出土遺物⑭（『出水郷土誌』）

178

176

177

179

180

図版17　出水貝塚出土遺物⑮（未報告分）

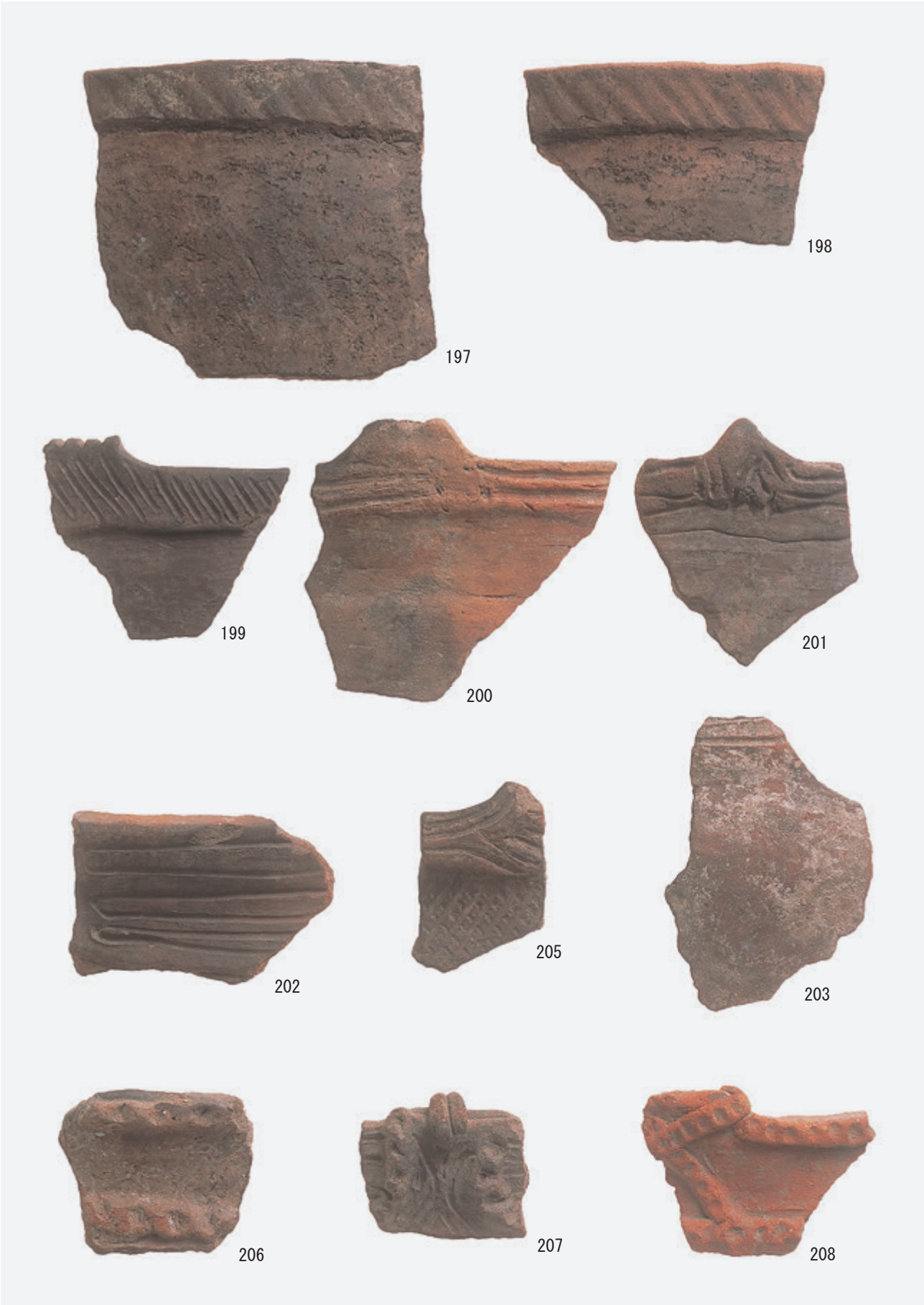
図版18　出水貝塚出土遺物⑯（未報告分）

図版19　出水貝塚出土遺物⑰（未報告分）

196

204

図版20　出水貝塚出土遺物⑱（未報告分）



図版21　出水貝塚出土遺物⑲（未報告分）

図版22　出水貝塚出土遺物⑳（未報告分）

図版23　出水貝塚出土遺物㉑（未報告分）

233

230

223

232

231

図版24　出水貝塚出土遺物㉒（未報告分）

234外底

234内底

236

236外底

235

235外底

239

239外底

240

240外底

241

241外底

242

242外底

図版26　出水貝塚出土遺物㉔（未報告分）

243

237

247

244

246

245

249

244外底

248

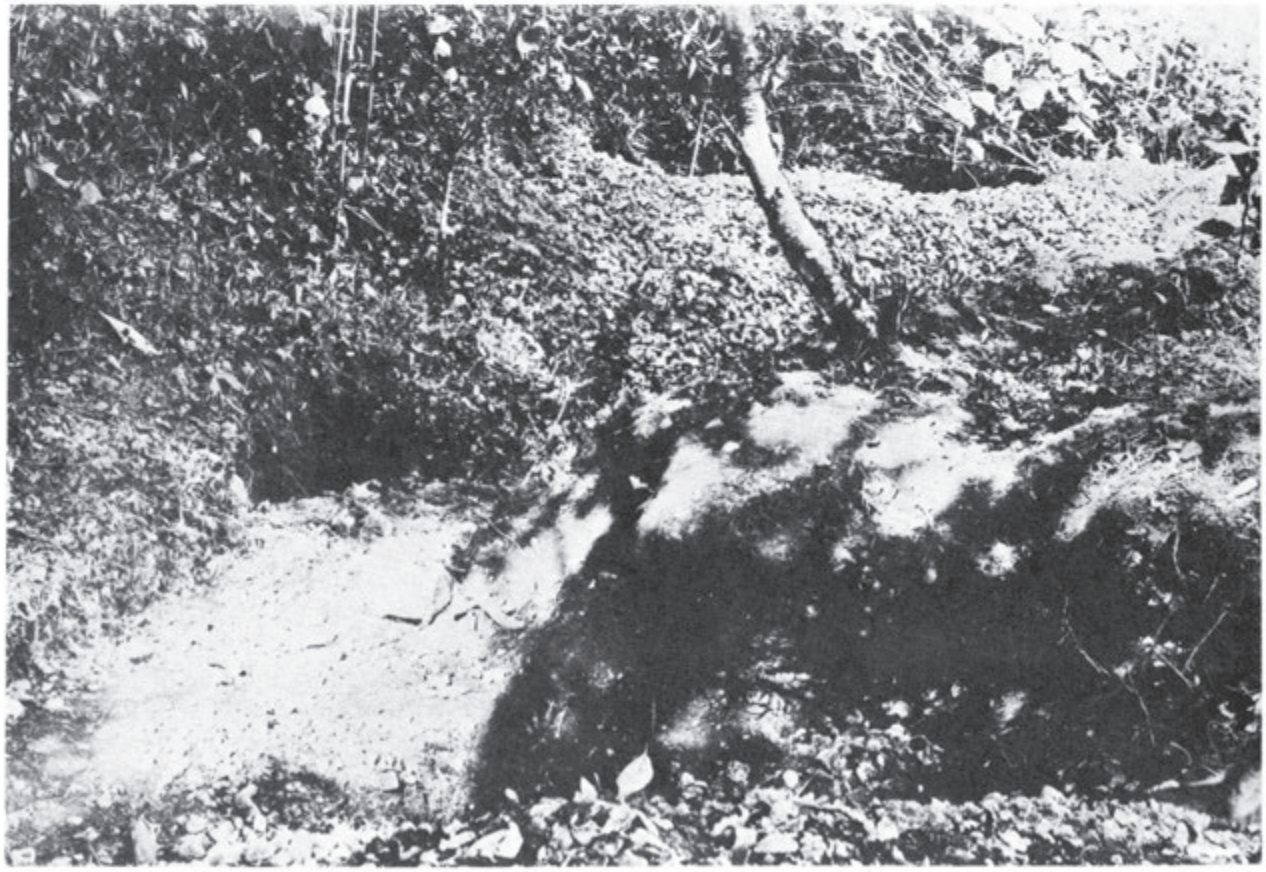
図版27　出水貝塚出土遺物㉕（未報告分）

図版28　出水貝塚出土遺物㉖（未報告分）

図版29　出水貝塚出土遺物㉗（未報告分）

図版30　出水貝塚作業風景・現場写真（『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第六冊　より転載）

掘發塚貝水出　(1)



（掘發氏崎山）殼貝層貝上同　(2)

図版31　出水貝塚作業風景①

①Ｉトレンチ２・３区北東断面　②1954-1号人骨出土状況　③石製垂飾品（285）出土状況

図版32　出水貝塚作業風景②

①～⑥発掘調査風景（Ｉトレンチ付近）

図版33　出水貝塚作業風景③

①発掘調査風景　②土器洗い風景　③深鉢（196）出土状況　④深鉢（204？）出土状況　⑤Ⅲトレンチ遺物の出土状況
⑥遺物出土状況（トレンチ不明）

図版34　出水貝塚作業風景④

①出土遺物実見風景　②学生向け講座風景（山内清男氏）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（201）

出水貝塚

－県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口貞徳コレクション発掘調査報告書(3)－

発 行 年 月　2020年３月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811　FAX 0995-48-5812
印　　刷　斯文堂株式会社
〒891-0122
鹿児島市南栄２丁目12－６
TEL 099-268-8211　FAX 099-269-5198

鹿児島県